

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1964・8



8月号

昭和三十九年七月二十日印刷 昭和三十九年八月一日発行 八月分第十八巻第八号(毎月一回)一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大局特別換承認証第一二二号

奇譚クラス

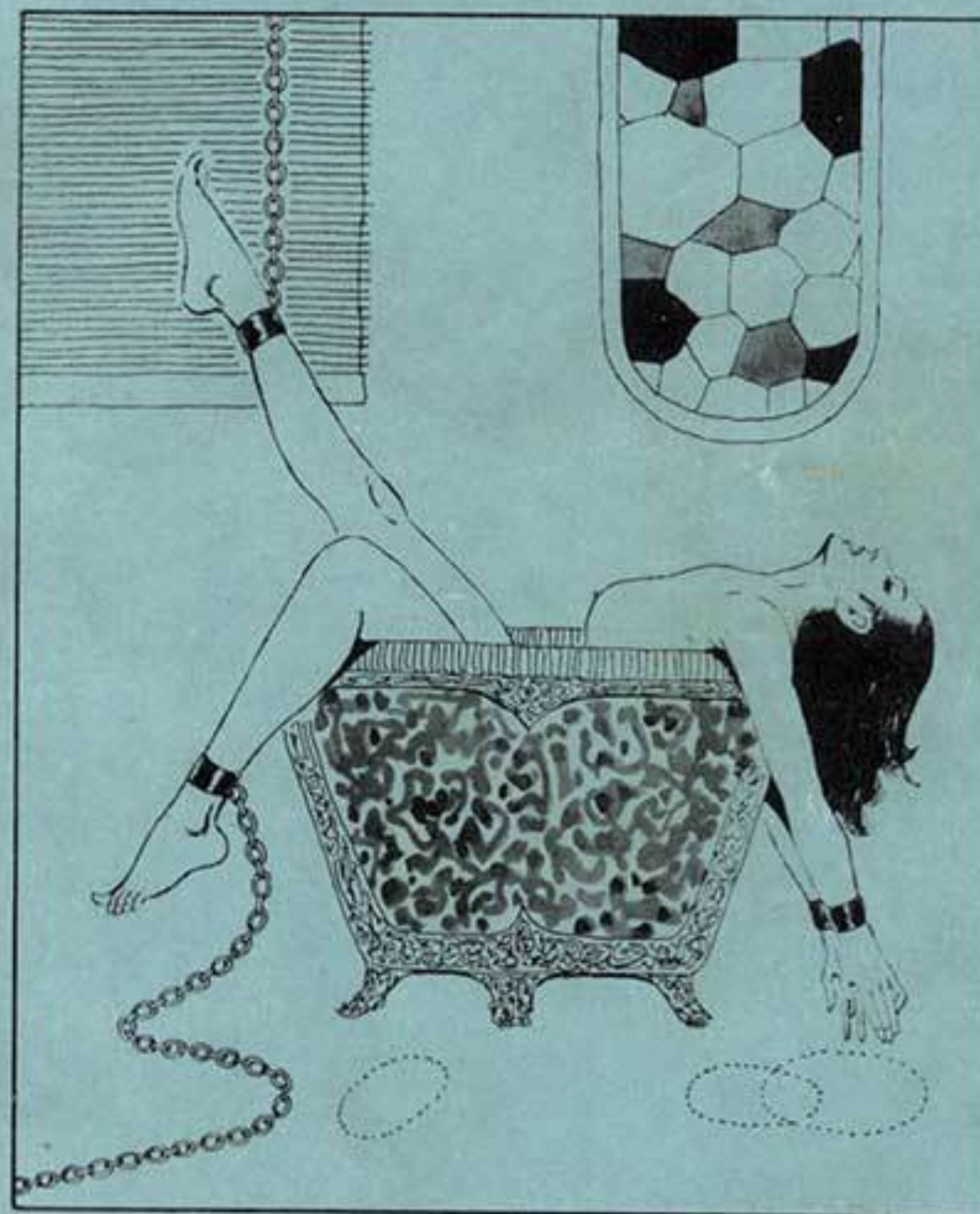
8月号

定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



8月号

¥300

臨月腹妊婦フोट

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フアンの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフオトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真といふことがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にち)

産み月のお腹は、只でさえ動くのにも苦しいのに、後手高小手に縛りあげられて、その裸身を力メラの前に晒した可憐な初産婦。

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号(にし)

もっとも普通の状態の臨月腹を、ごらんになりたいという方々のために、べんべんと膨れ上がったお腹を衣服をめぐって突き出したところを、いろいろなポーズでもってお目にかけます。オーソドックスな妊婦の生態写真。

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号(にり)

臨月の大きなお腹を大いばりでぐいと突き出して、皆さまの目の前に、その全貌をあらさまに、ごらんにいれるフオト。

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にす)

張り切ったお腹の中央に、むくれ上ったお臍が、出産を目前にした腹部の膨大さを物語っているのです。立ち上った妊婦のお腹だけが異様に目立ちます。いろいろの角度からごらん下さい。

柱縛りの妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にや)

これは珍しい、床柱に後手の縄を縛りつけられたフオトです。妊婦嗜好ばかりでなく、女体緊縛マニヤの方々にも、一見をおすすめしたいコレクションです。

臨月のヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にわ)

妊娠は女性を最も動物的な姿態に変えさせるといいます。着衣の上から見ると、異常に大きな腹部には、何か奇異な連想を起させるのですが、ここに全裸ヌードのフオトによって、妊婦の神秘のベールを剥いてみせます。

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にた)

神々しいばかりに美しい臨月妊婦の裸身。初めて妊娠した二十二才の女性の身体的変化は、ヌードの立像によって、ごらんになる皆様の目の前に、かくすところなく提供されるのです。はちきれんばかりの若さが、健康的な妊婦の特徴を内包して、輝くような美しさを発揮しています。

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号(にる)

臨月腹をつき出して、後手に縛られた妊婦。両手の自由がきかないので、膨れた腹部がこれみよがしにさらけ出され、一片の布さえ纏わしてもらえぬ裸身が、美しい妊婦のペーソスを、しみじみと醸しだしている。

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にお)

このように若々しい臨月腹を手にとるように、近々と眺めることが出来るだろうか。妊婦線もあざやかな西瓜のような腹部が、触って下さいといわんばかりに、鮮鋭なレンズの目によって、はっきりとキャッチされています。

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にぬ)

自由のびのびと、自然のままのポーズで腰をおろした妊婦のヌードが、気どらない普通の状態でカメラに全身を晒しています。愛らしい妊婦の表情です。

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号(にい)

出産を旬日に控えて、もうこれ以上は大きくならないという位、突き出た腹部をもて余して、中腰になつて、休息したところをシャッター・チャンスと狙ってキャッチしました。

○提供者の御希望により、口絵には発表しませんから、直接お申込みの方にはお分けます。○お申込みは略号にて、お願います。○勝手ながら一枚宛の分割はいたしかねます。

女相撲と女斗美

女相撲ファン並に女斗美ファンの待望久しい女相撲写真、女斗美写真、禪裸女組打ち写真の第一作をここに提供いたします。

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

雲斎の相撲フンドシを本格的に締め込んだ若々しい裸女二人。お互いに相手のマワシを上手、下手しっかと握りあって、組み合ったもろもろのポーズ。これから技を掛けようと全身に力をこめたところ、前ミツの取りあい、吊りあい

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

同じく本格的な相撲マワシを締め込んだ二人の裸女。互いに全身に力をみなぎらせて、内掛け、外掛け、下手投げ、吊り、腰投げとさまざまな技を見せて、相争う女相撲の美しさ。いずれも若々しい女体を相持たせる女相撲マニヤ待望のフォト。

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

白晒の六尺フンドシをいなせにきりりと締めた二人の裸女の女斗場面写真。プロレスまがいの技を用いて、互いに相手の最後の止めをさそうとして相争う、女体相搏つ女臭ぶんぶんたるフォト。

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

激しい争いの結果、一方が勝っていたのか、逞ましい臀の下に相手を組み敷いて、誇らしげに馬乗りになったポーズ。組み敷かれた女は必死になって反撃に転じ、組

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

魅力的な臀部に、きりりと締め込んだ白晒六尺フンドシ一本の漂々しい姿になった二人の裸女が、互いに相手のフンドシをとりあい自分の意のままに屈伏させようと全身の筋肉を躍動させる見事な美しさ。禪一本の裸女の魅力と肉体美を最大限に発揮させた素晴らしいフォト。

四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判 (13×19 糰) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円
略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写した女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に両

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながらも、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポーズをとるという、医療という目的のために、やむにやまれぬ受縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るく)

首縄後手高小手にきびしく固められた裸身を縄尻をとられて、引廻される美女の哀れさと、前手縛り目かくしのまま、放置されて晒される裸身の心もとなさ。

引廻しと晒

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(るに)

前を僅かに掩う越中禪一本の美女が嚴重に後手高小手に縛しめられて目かくしをされた上、首吊りの刑にされようとしている。

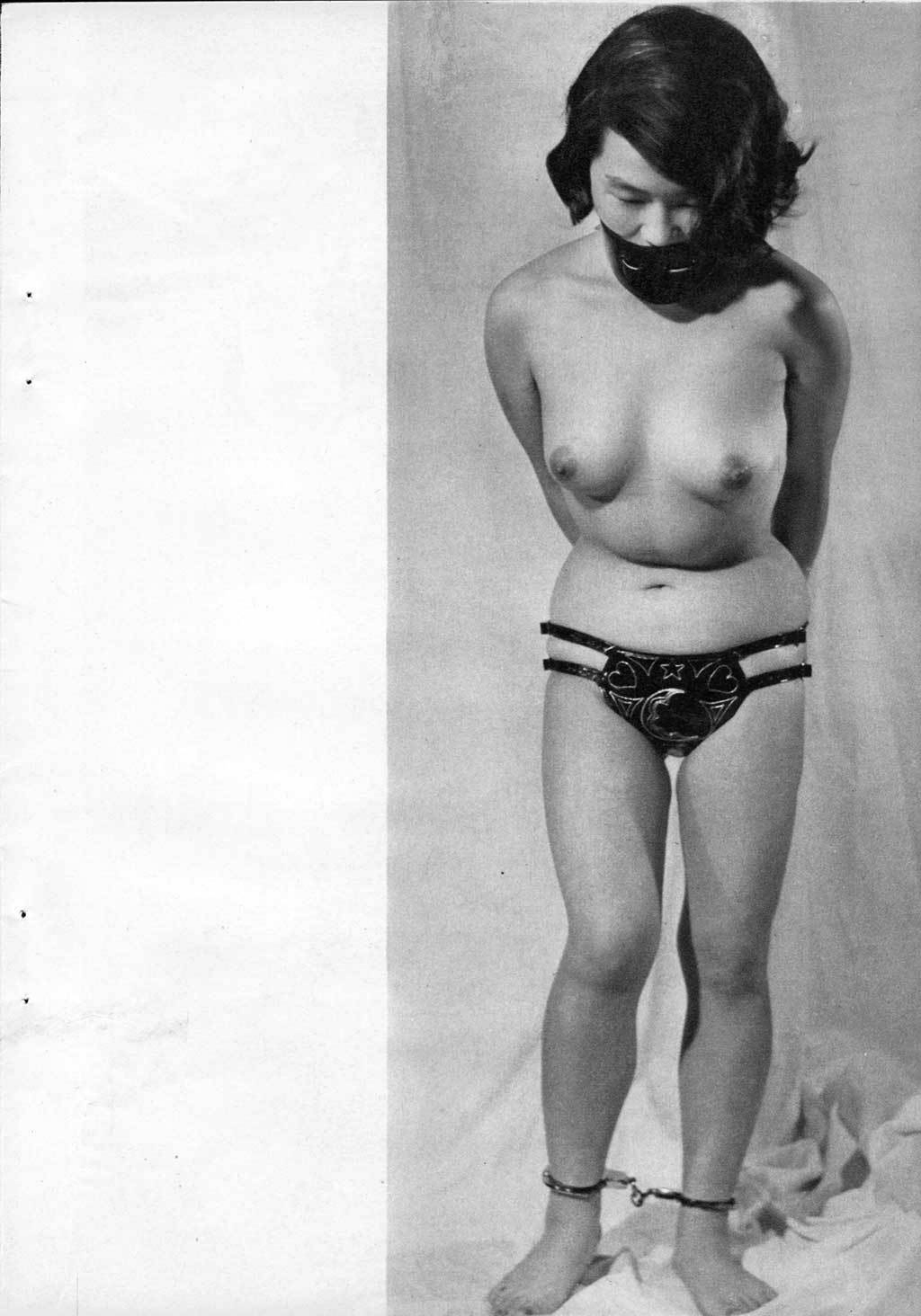


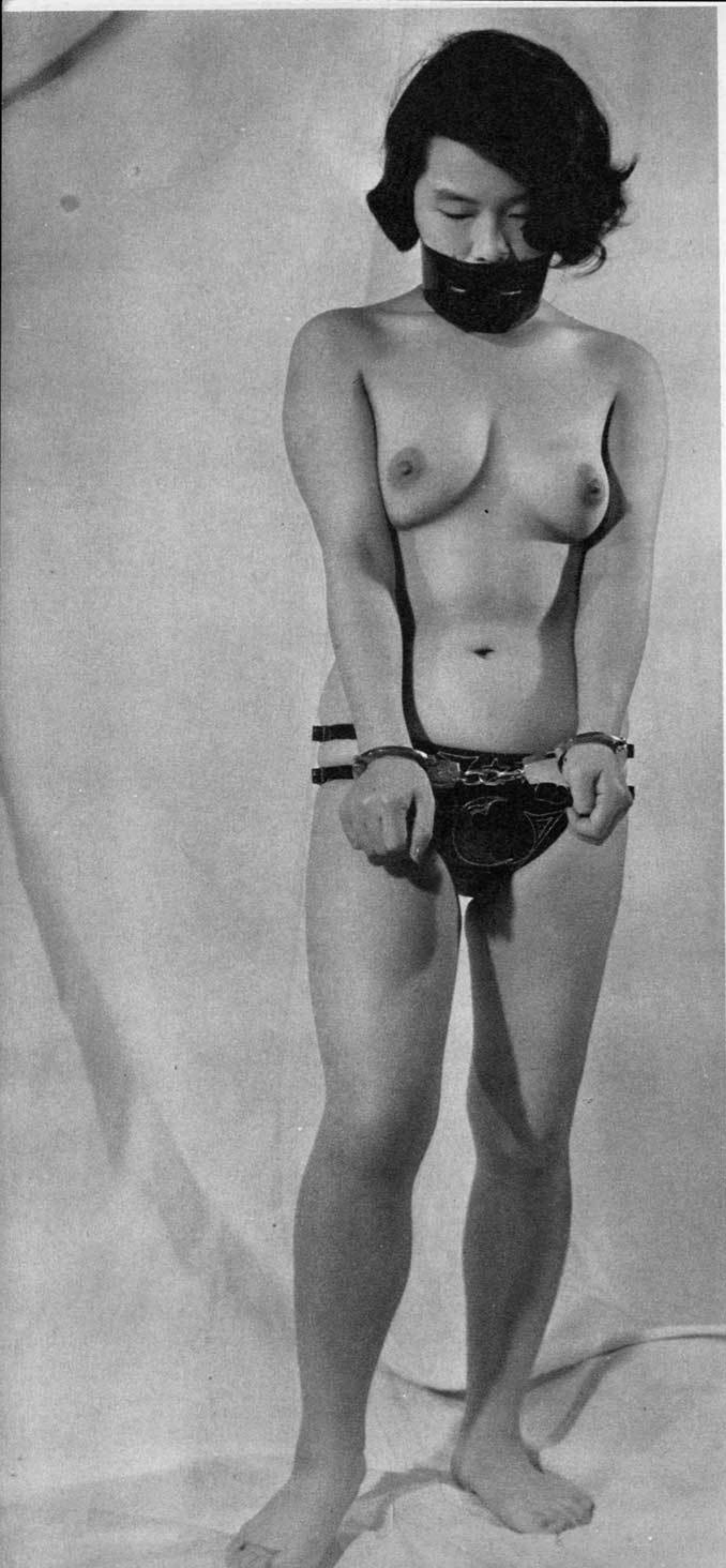


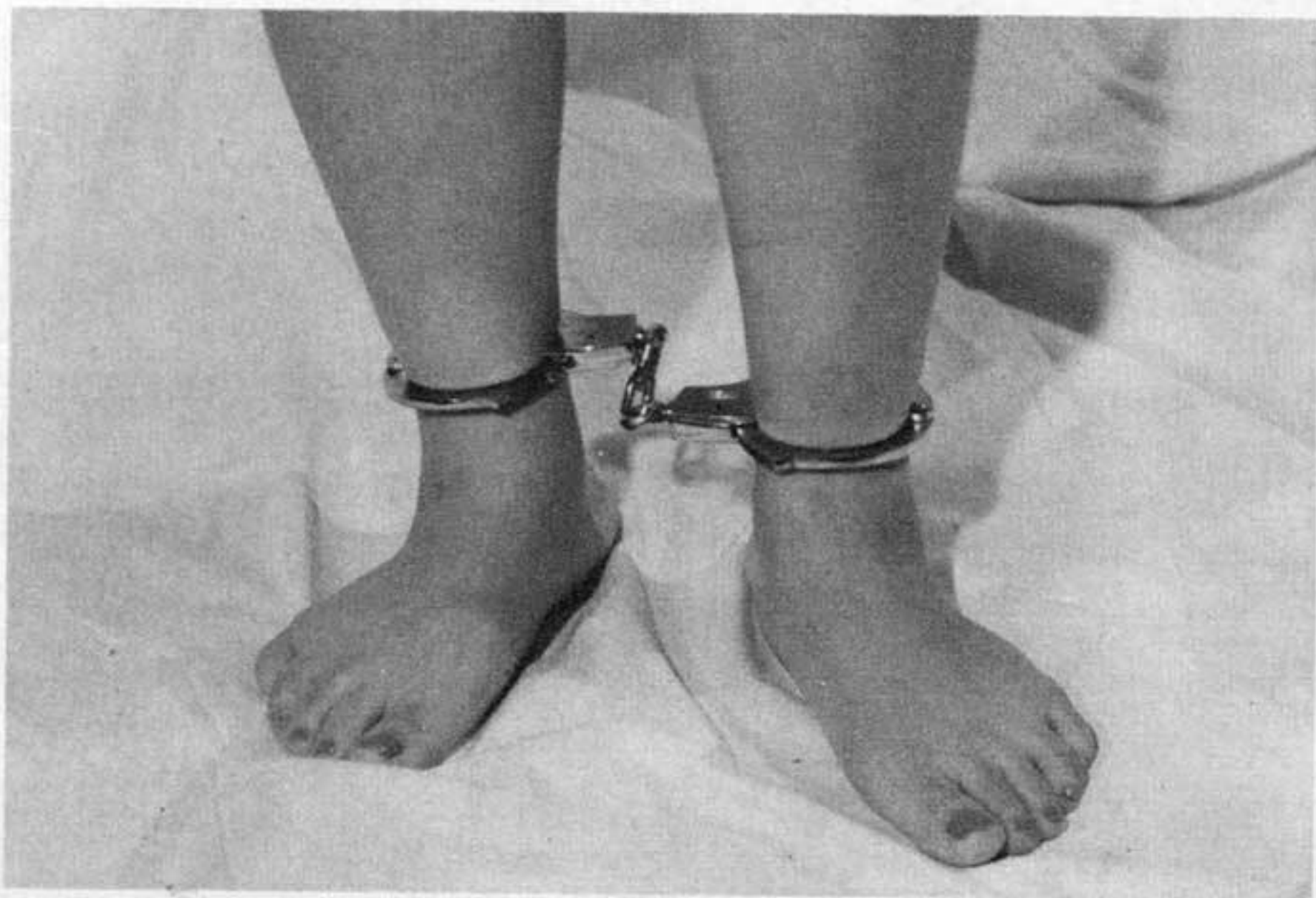
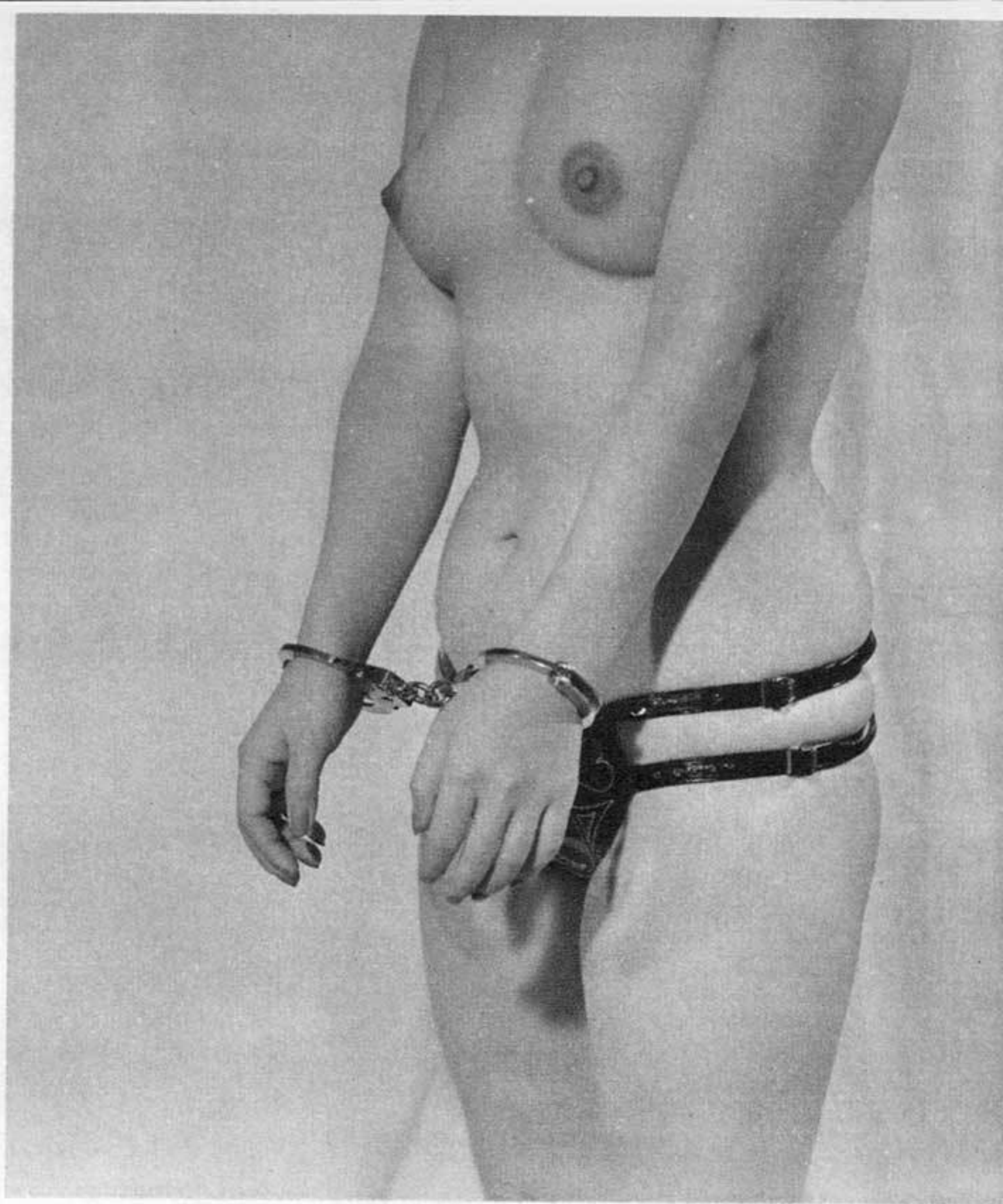






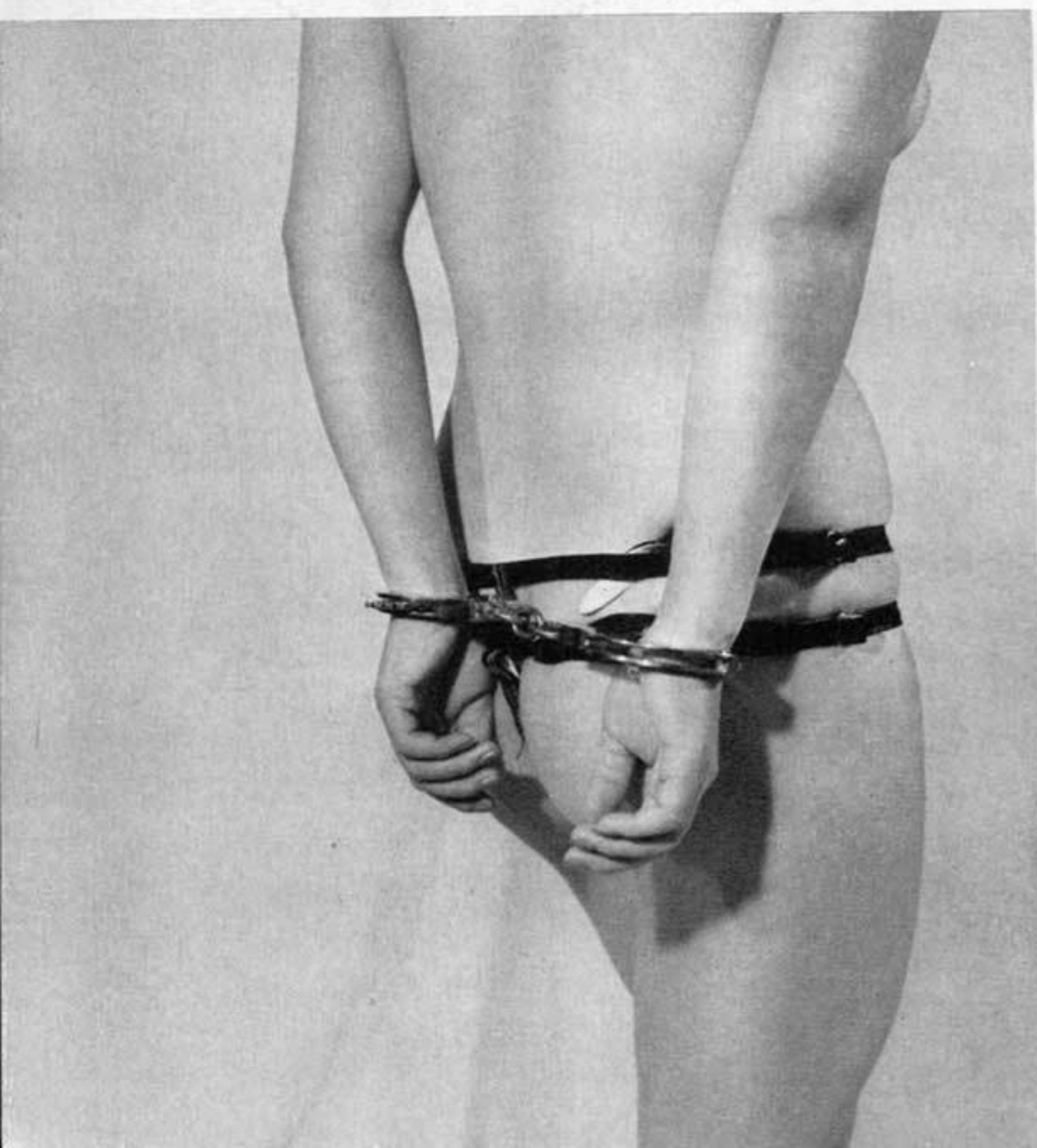




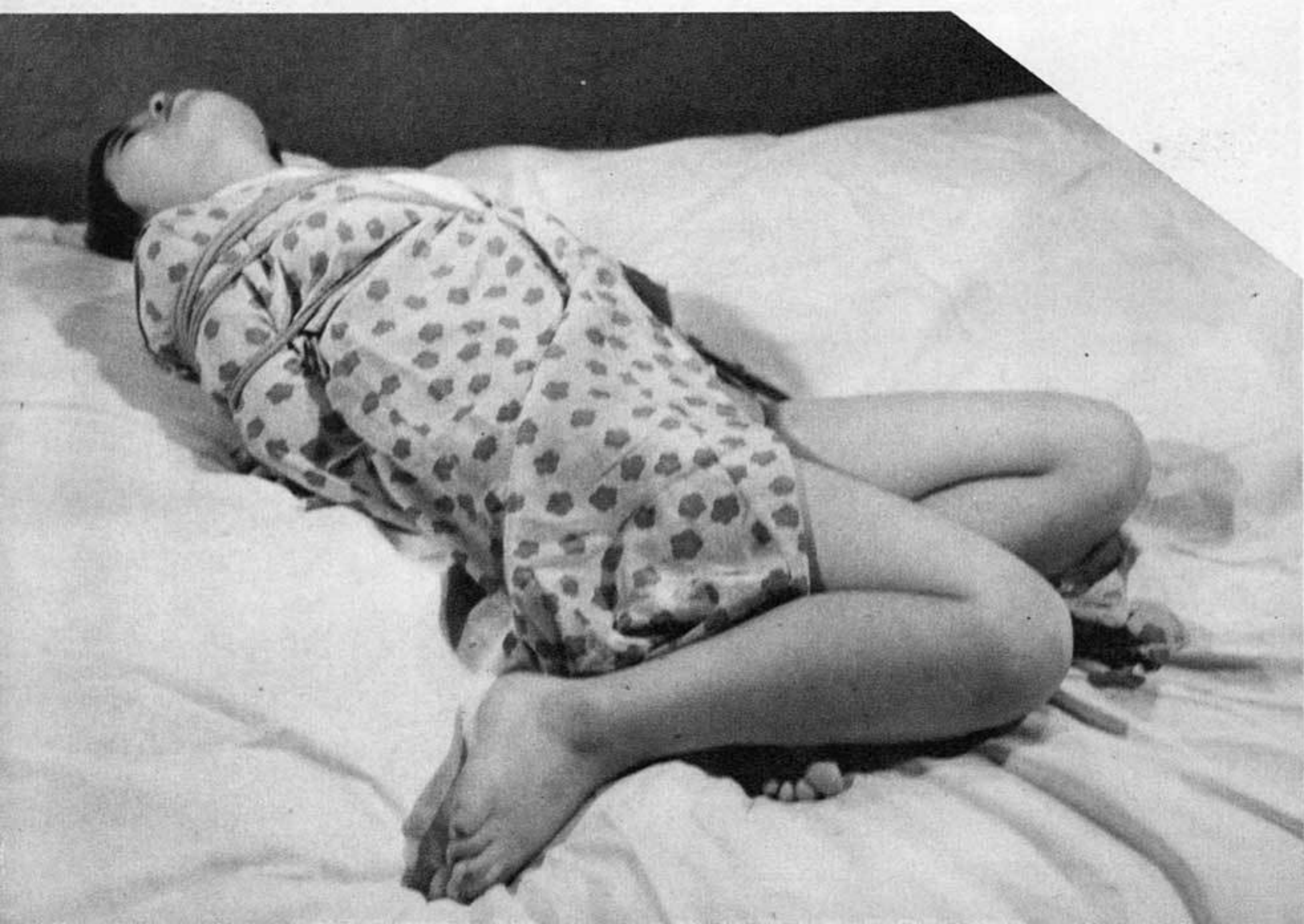




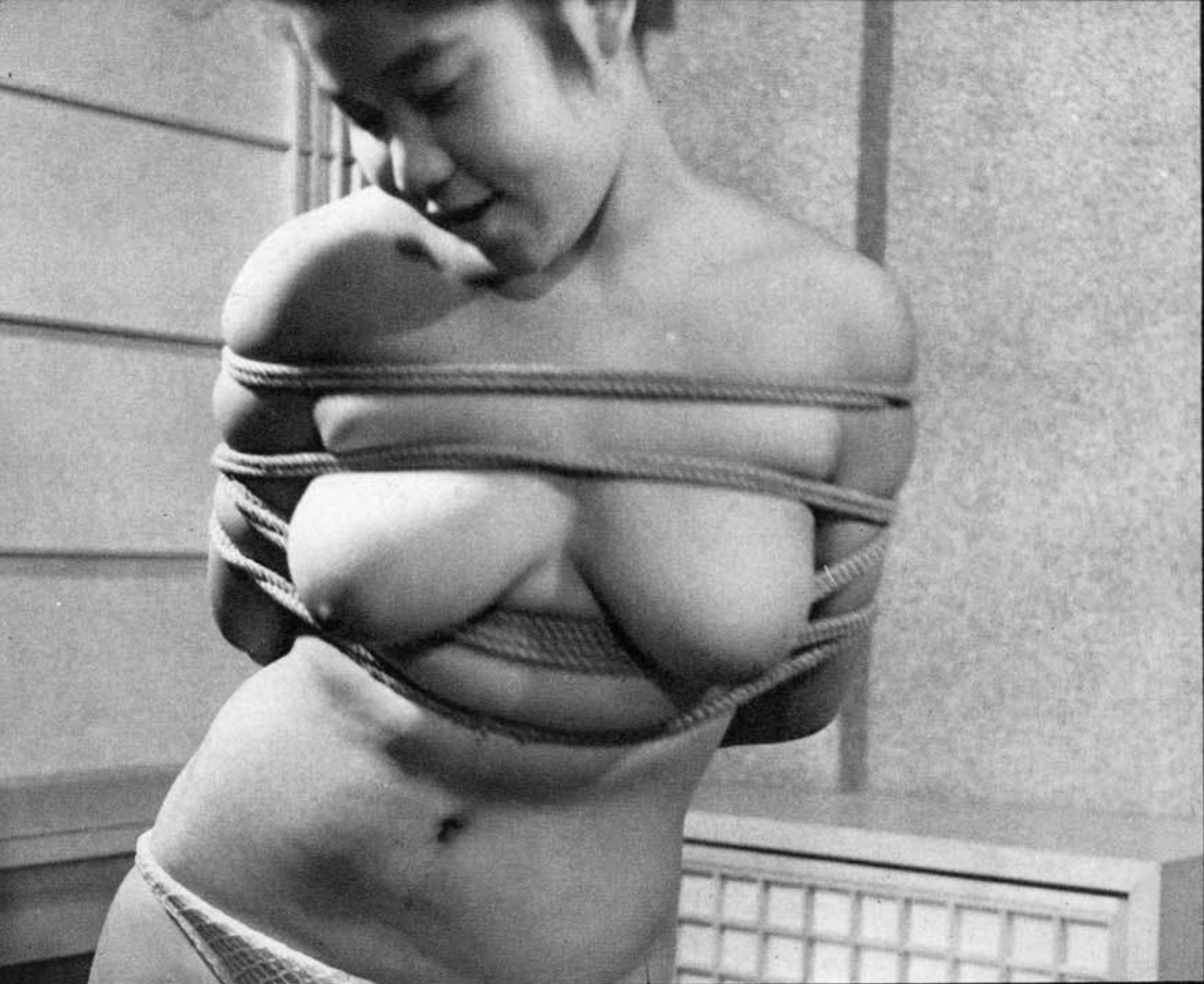














熱気責めの着想

四馬孝・画





針の山戦術



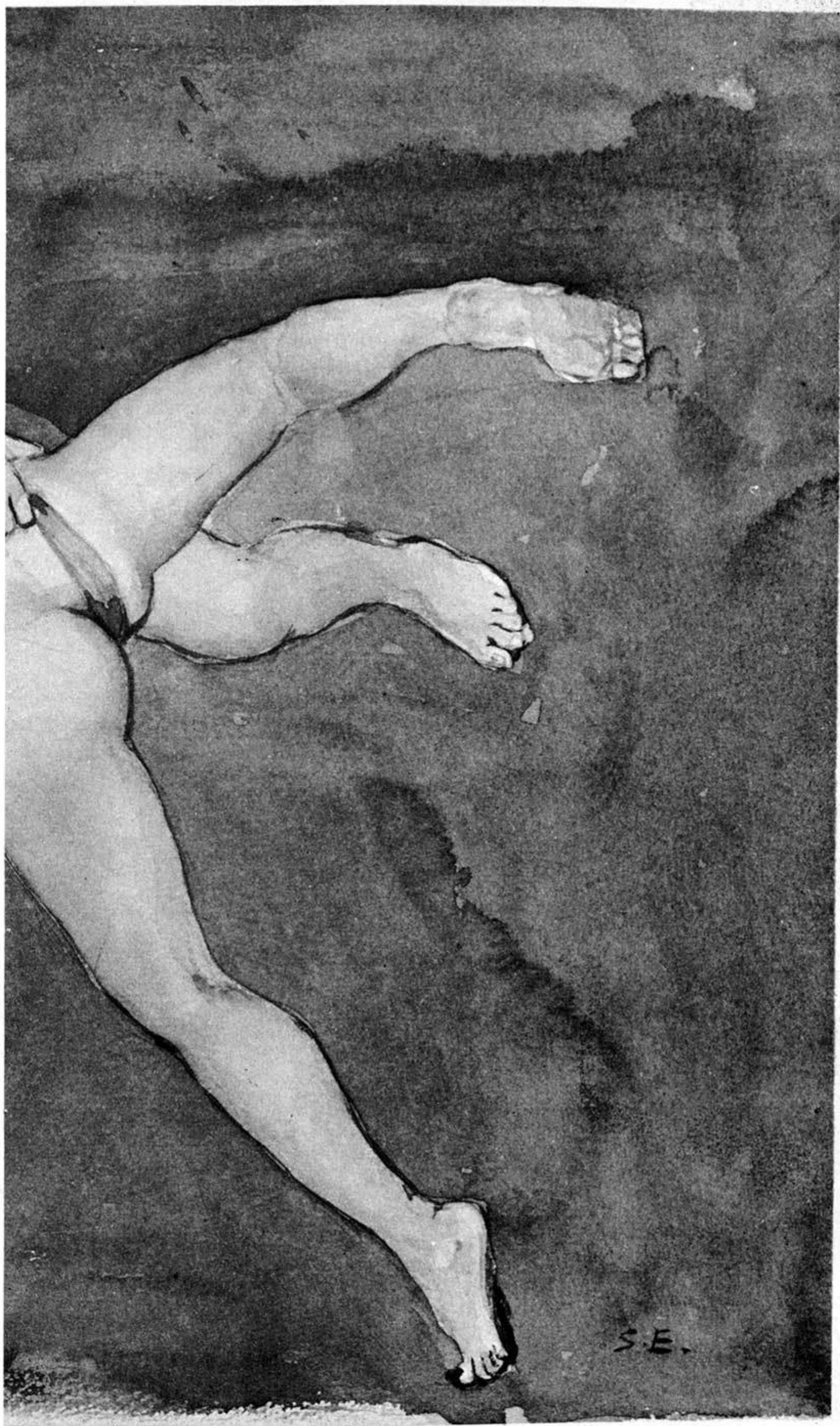
屈辱の半歩行進

女相撲

禁じ手五題の内

(雪崎京人提供)

一、立禪を取ることは差支えないが、立禪を取って投げを打ってはならない。



S.E.





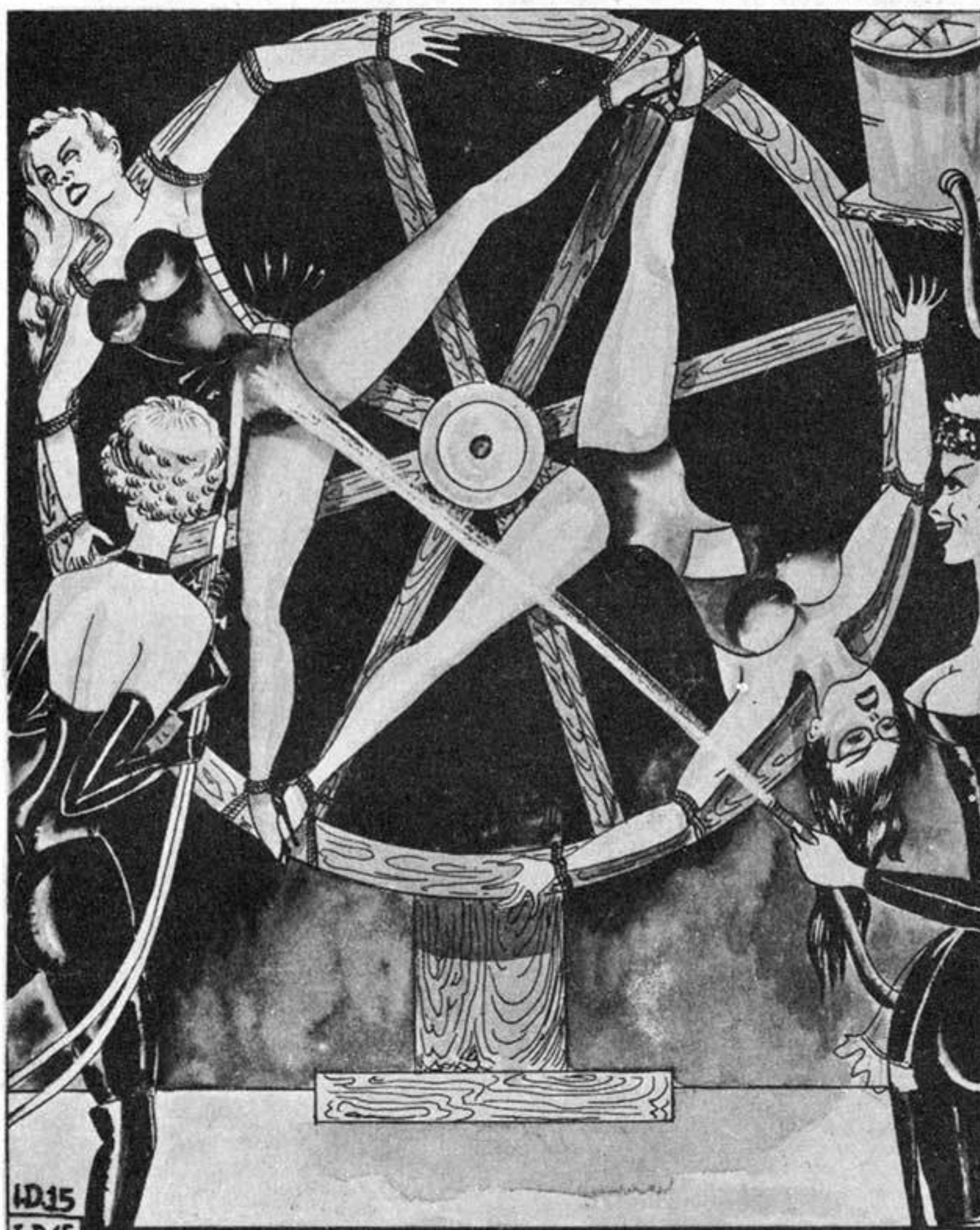
蒸気責めの構想



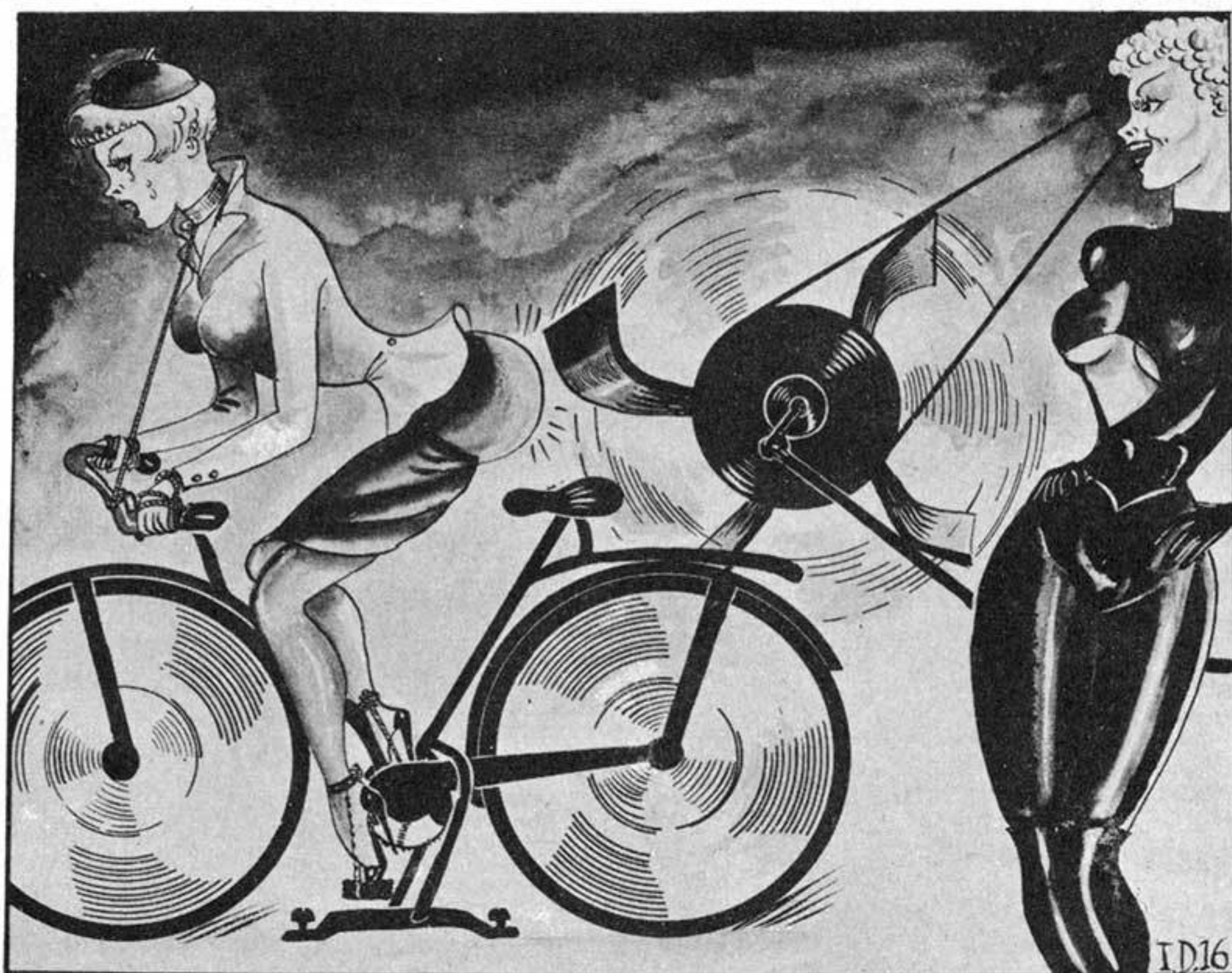
オシメ・カバーの活用

ドミナとスレイブの部屋

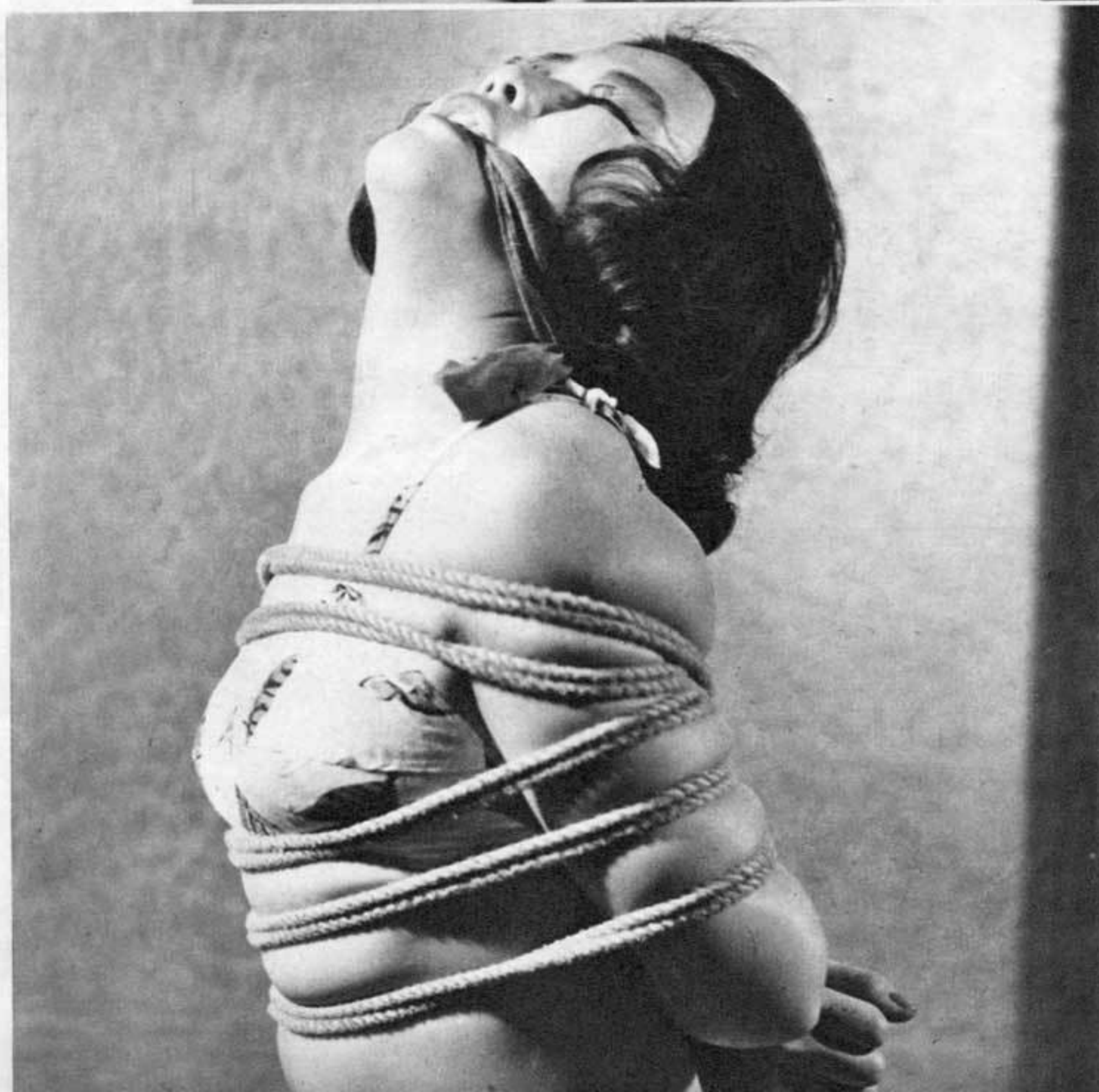
(15) 回転式女体責機



(16) 連続尻打ち機





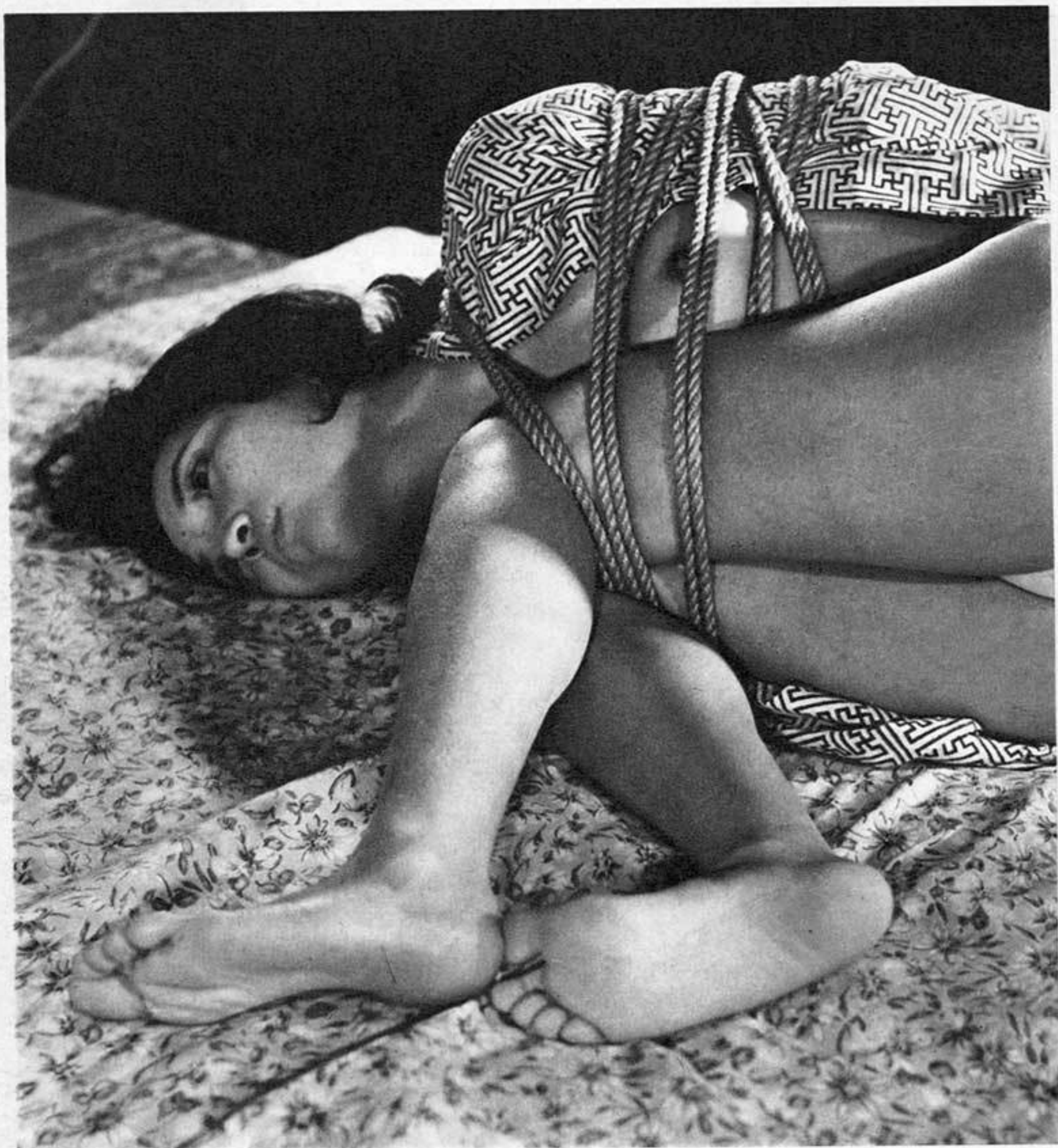














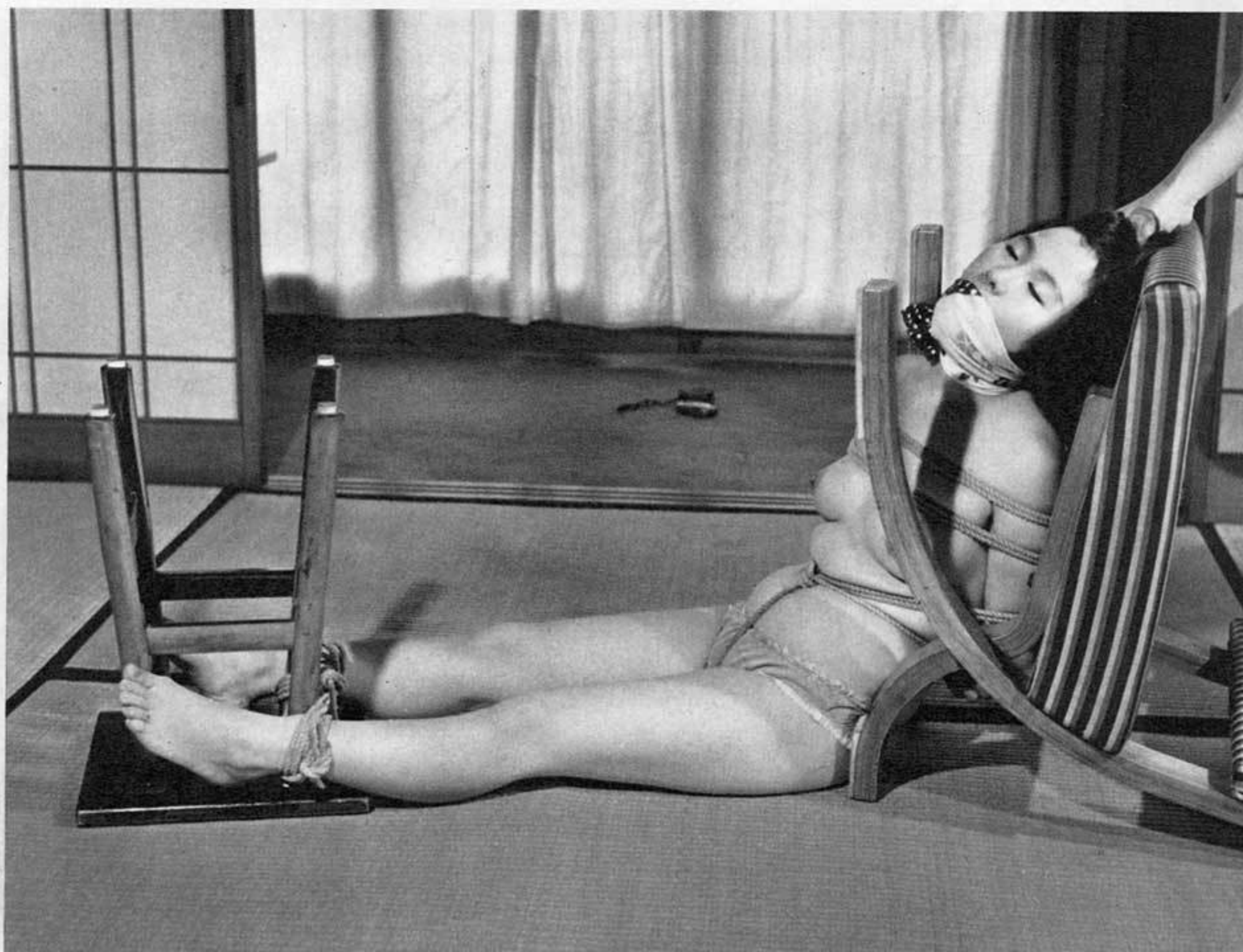


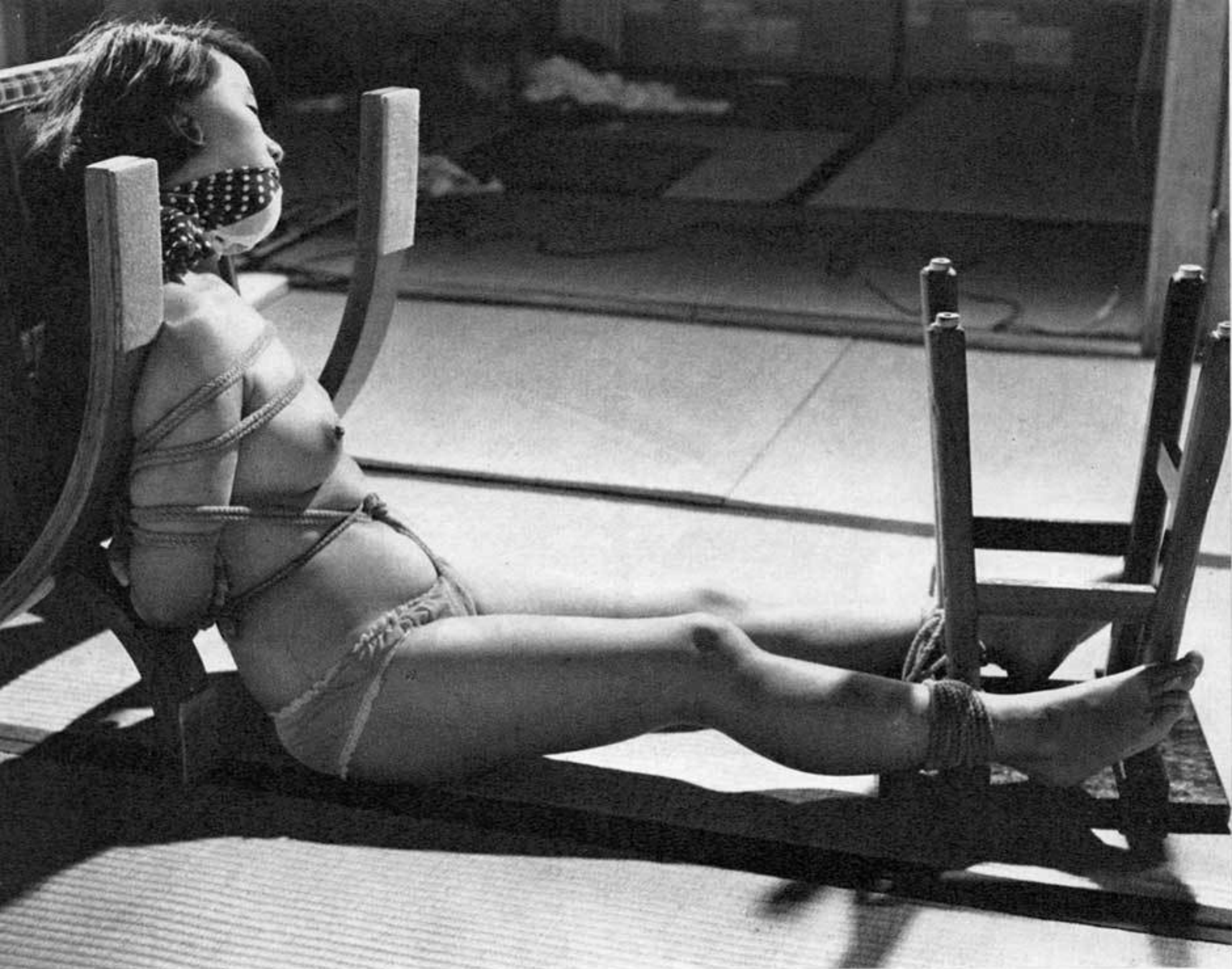
















昭和17年夏、日本が全世界の強国を相手にして太平洋戦争を戦い続けていた頃、南方の占領地で軍政要員としてPRの新聞を発行したことがあった。

暗号電報で受けとった片仮名ばかりの文章を漢字まじりの日本文に直し、それを中国話と馬來語の文章に翻訳した上で、三国語が同時に載った新聞にするのである。

戦況がよい最初の頃は、勝った勝ったで景気がよかったが、そのうち戦い日々利あらずして、嘗て連戦連勝だった日本軍も、撤退また撤退という有様で、私達の占領地も遂にはB24の爆撃を蒙ることになった。

鉄壁の守りである筈の日本の占領地域へ何故敵機が襲ってくるのか、という現地住民の素朴な疑問に対して、網の中の魚も時には跳

ねて外へ飛び出すという苦しい説明をしたことを覚えている。

そのうち、敵産の用紙も底をつき、頼みの発電所をやられて印刷工場が動かなくなると、ガリ版刷りで細々と発行を続けるより仕方がなかった。もうそうになると瘦我慢の強がりを書く必要もなくなつたが、便所へ行くのにも日馬辞典を持ってゆくといった苦勞を重ねて、炎暑の僻地で発行を続けた新聞が、こういう末路を辿るということには一抹の寂しさを禁じ得なかった。

しかし、その頃になると、好むと好まざるに拘らず、平和だった

赤道直下の常夏の国も、硝煙うずまく血臭い戦場と化してしまふ外なかった。連合軍の無差別爆撃と銃撃、それに敗戦に自暴自棄となった日本軍の傷ついた猪のような相手構わぬ殺戮とによって、如何に多くの非戦闘員たる無辜の現住民が蛆虫をひねり潰すように惨殺されていったことだろう。

激しい戦いの行われたあとの、あの死屍累々たる戦場の悲惨な有様を眺めたことのある者なら、きつと戦争の恐ろしさと酷らしさに二度とこのような過ちを冒してならないと痛感することだろう。

昭和二十年六月のある日、私達の占領している街を連合軍の急降下爆撃機二十数機が五十軒から百軒の中型爆弾を以って絨毯爆撃を行った。この攻撃で街は壊滅に類し、数十人の婦女子を含む現地住民が惨死したが、日本人は防空壕で直撃弾を受けた一名の死亡者を出したに過ぎなかった。

このため日本人は敵機の来襲を事前に知っておりながら、現地住

民には知らせなかったのではないか、という非難を蒙ったものである。戦意昂揚のためには、あれほど誇大な宣伝をくりかえしておきながら、肝腎のときにおいても住民を最後まで欺いていた。という怨嗟は、家を失い肉親を殺された者にとっては当然吐かるべきであつたろう。

やがて日本は降伏した。数日前までは為政者として君臨していた私達は武装解除されて、敗惨の姿を、現住民の前に現した。

戦争犯罪の容疑者として、ジープで飛行艇の碇泊する海岸まで護送される私の背に「オラン・ジュポン・パンダイ・チャカップ・ボホン」(日本人は嘘をつくのが上手だ)という罵倒が浴びせかけられた。この言葉には一言の弁解の余地もなかった。

穴へでも入りたい気持ちでダックと呼ぶ水陸両用の上陸用舟艇に乗り込む私に「トアン！」といって走り寄った男があった。「ジャンガン・カラ・ジュポン」(日本よ敗けるな)そう声援してくれたが日本は既に敗けていた。

淳朴な彼等を欺し続けていたことに、限らない慚愧の念を拭い去ることが出来ない。

紙の弾丸

編集子



「夫婦SMプレイの実際」

【三隅良信】

御誌の五月号読者通信に私の拙文を発表して戴きました所、早速大阪の山本氏ご夫婦、京都の岡本氏ご夫婦をご紹介下され有難うございました。山本、岡本両氏に直ちにご連絡申上げました上、それぞれお目にかかり、いろいろの夫婦プレイについてお話を交歓しました。

山本氏は主に猿轡と乳房責めに興味をもたれ、猿轡は実際に口中にいろいろの汚穢的なものをつめられ、息苦しくなる事に興味を覚えられ乳房責めに対しては仲々造詣深く、東京の下着会社のニュースを集められて、その会社の乳房責めの用具も秘かに購入されておられます。また、岡本氏は現在フ

御誌の五月号読者通信に私の拙文を発表して戴きました所、早速大阪の山本氏ご夫婦、京都の岡本氏ご夫婦をご紹介下され有難うございました。山本、岡本両氏に直ちにご連絡申上げました上、それぞれお目にかかり、いろいろの夫婦プレイについてお話を交歓しました。

ようと思えば、肉が癒着するまで数日間、通しておかないと駄目だそうです。

関氏の仰有る今一つの穿孔も同じ事だと思います。お互いに家内同志は初対面（勿論私も山本、岡本両氏とは初対面でしたが）では、第三者を交えてのSMプレイは急には実行出来なようです。しかし、お互いが相手をよく知って理解し合えたら、数カ月後にはきっと、愉しいSMプレイが出来ると確信します。ご夫婦でSM同好の方、どうぞご連絡をお待ち致します。

私は家内とのSMプレイのフォトは、全部自分でD・P・E致しておりますので、家内も安心して撮らせてくれます。

一度ガイドクラブの女性を口説いて、緊縛フォトを撮りましたが時間の制約があつて、縛り方がどうしても簡単になつたり、緊縛に手加減せざるを得ません。その点家内ですと、何枚とるという制約もありませんので、プレイの緊縛にうんと時間をかけて縛りますので、かなり強烈な緊縛フォトが出来ます。

私はどちらかというと、奇巧のグラビア式の綺麗なものより、亡くなられた伊藤晴雨さんのお撮りになつた様な、残酷味を発揮したものに興味をそそられます。東京の某誌には、伊藤さんの昔のものがよく掲載されていますが、編集部から塚本氏、辻村氏にお願いして、残酷味満喫したものをフォトにご発表願えないでしょうか。猿轡も形式だけでなく、本当に口中のものをつめた、真実味溢れるものを是非お願いします。



煙管をくわえる女

× × ×



TVより

直腸鏡検査

安部 明

五月二十四日、十二チャンネルテレビ夜十時三十五分からの医学専門講座『人間をのぞく』（直腸鏡）は、近頃ショッキングな番組で、我々ANUSファンにとって素晴らしいものだった。

三、四十センチ位の太い直腸鏡

に油を塗り、四つん這いの膝立て姿勢の患者の肛門に挿し込んでゆく。「痛いですか？ 痛かったらいつて下さい」という看護婦らしい人の声に、「痛い！ イタ……痛い！」という女の声がかすかに聞える。腸の曲り角では、空気を注入しながら奥へ挿入する、などという解説がつく。

長い直腸鏡がしまいには、殆ど全部入ってしまった。直腸壁の患部がアップで写し出される。

カイヨウ、ポリープ、痔核等。

医師が鏡管に何かを挿したり抜いたり、覗いたり、何ともぞくぞくするシーンが続く。その合間に肩を押さえられた若い女の患者の痛そうな顔が写ったりする。

最後には、鏡管にカメラをとりつけ、グリグリと回しながら、テレビに腸内を写し出し、大勢の医師や学生が見ている。患者の小鼻がヒクヒクしている。

腸内検査ということは、前から聞いていたが、こんな凄いものは、このテレビで始めて知った。序に思い出したのは、沢山の女優たちが、その澄ました顔にも似ず痔や直腸の病気だという話や、手術したという話である。週刊誌やスポーツ新聞によく出ている。

思い出すだけでも、(一)原節子は直腸ガンの手術をして、今でも人工肛門である。(二)高峰三枝子は痔の手術をした。(三)昭電事件の日野原氏の奥さんになった沢村昌子も痔の手術をした。四南田洋子は、直腸ポリープの手術をした。(五)倍賞千恵子の話「少し痔が悪いっていったら、お父さんの知り合いの人で、名人がいるからって、強引に連れていかれて、いきなり、お尻のアナにお灸をすえられちゃった。アツいのアツいの……。ヒーヒー泣いちゃったワ」(六)山本富士子、白川由美の「慢性盲腸炎」という話は、両方とも痔だという説。尤も白川は五月二十日にととう手術した。

これらは皆、活字になって新聞や雑誌に出ていた話である。このうち何人かは、あの物凄い恰好で直腸鏡検査を受けた筈である。テレビも時には、好いものを作る。

美しい女性が、直腸鏡検査を受けたら、浣腸されたりしていると、いうことを想像するだけでも、異常な興味を抱く。新聞雑誌、テレビ、ラジオなんかから、そういう材料を集めたいと思う。

腕と脚

布施あきら

この頃婦人の間では、ノースリーブの洋服が流行しているのは私達には喜ばしい。若いお嬢さんは勿論のこと、相当年輩のご婦人でも大胆に肉づきのよい腕を肩口まであらわしているのは、どんな綺麗な花を見るよりも素晴らしい。

元来私は、若い女性のピチピチとした脛に対して異常なまでの関心と執着とを持っていた。スカートの下から、すらりと伸びている二本の脚線美に、こよなく心をひかれていた。しかし最近になって脛と同様に、若い婦人の二の腕から肩口に対してとかく目が吸い寄せられるようになってきたのは、ノー・スリーブの影響だろうか。

とにかく、男性に対して極めて魅惑的であるからこそ、若い女性もそれを意識して、腕の露出を試みているのだろう。痴漢の予防として、こういった服装を排撃する人もあるが、それは逆に、このスタイルの魅力を裏書きしているようにも思える。



コント・オブ・コント

あるアパートの出来事

中野三郎

ここは高台にあるデラックス・アパート。L字形七階建のビル。二組の夫婦がこのアパートの三階に隣合せて住んでいる。A室の高野夫妻は、夫が大学講師、妻が高校教諭という職業柄、典型的な女上位型の生活態度である。これに対しB室の山田夫婦は典型的な亭主関白。夫は商社会社の課長で妻は田舎出の糟糠の妻、中学校しか出ていない。

もし、この二組の夫婦が別々のアパートに住んでいたとしたら、山田夫妻は末永く平和に過したであろう。隣に高野夫妻が引越して来たために事情は一変する。つまり山田利夫が高野静江に魅了されてしまったのである。

ある夏の夕方、山田利夫と高野

静江は駅でバツリ顔を合せた。それぞれ職場からの帰途である。

「いや全く高野さんは、幸福ですナ。奥さんのような美しい方を細君に持っているんですから……」

「あらあら、そんなことをいったら奥さんに叱られますよ」

「なあに、うちの奴なんか田舎者で、うすバカときてるんだから、奥さんと比べたら月とスッポンです」

「うふふ、奥さん、どこの学校出てらっしゃるんですか？」

「中学校しか出てないんですよ。親のために仕方なく一緒になったんですが全く一生の不作ですわ」

「それはお気の毒さま」

肩を並べて歩く二人の前方に彼らのアパートが見えてきた。

「ねえ、奥さんに一つお願いがあるんですが……」

「なんですか？」

「私に英会話を教えて頂けませんか。この頃は外人と接触が多くて英会話も少し位は出来ない困るんです」

「あら、そうです。お教えしてあげてもいいですけど、月謝高いです。先生がこんなに美人なので、うふふ」

「ええ、それはもう奥さんに教えて頂けるんです。だって、どんなに高くても結構です。週二回で月五万円では如何でしょう？」

「ええ、いいわ。流石に大会社の課長さん、物分りがいいわね」

このようにして、早速、山田課長は高野静江先生の生徒となりました。水曜の夜と土曜の午後、授業が行われます。女子大英文科出身の静江は、英語教育に自信がありました。六帖の洋室で、生徒を坐らせ自分が椅子に腰掛けて授業を初めようとして、妙なことになるてしまいました。

山田生徒の目の前に、組まれた真白い静江先生の脚があった。ふっくらとつきたての餅のように白くて柔かい指。山田課長は我を忘れて叫んでいました。

トルコの個室で――

芳野眉美

「飲ませてくれてっていうから」

「飲ませたの？」

「飲ませちゃった」

「直接？」

「まさか――」

「どうやって？」

「おトイレに行って、ビールの空瓶に詰めたのよ」

「なるほど」

「そのお客さんの首をかかえてビール瓶を口に突っ込んだじやった」

「むせちゃうよ、それじゃ」

「むせた、面白いぐらい」

「で、どうした？」

「きれいに飲んじやったわ、その人」

「どんな味がしたろうね」

「しよっぱいって」

「そりやそうだ」

「そうなの」

「知らないよ」

「うそばかり」

「でも、よく飲ませたね」

「お金になるもの」

「首をかかえて飲ませたなんて憎いね」

「私のアイデア写真」

△晒し首▽フォト

水野 弘



「先生、この指をしやぶらせて下さい。お願いです」

さて、ある日、高野静江先生は両足を組んで椅子に腰かけています。その前に山田課長が床にじかに正坐しています。英会話の勉強は、いつもこうした姿勢で行われます。

「あの、先生、足がだるい時など

ないでしょうか？」

「あるわよ。学校じゃ、殆ど立ちっぱなしですもの」

「私に足をもませてくれませんか？」

「ええ、いいわ」

「先生の足は神のように美しい」

かくして静江先生の足を山田課長がおしただいて揉んだり指を

舐めたりしました。その中に山田課長は静江先生のお尻の下の方にもぐり込んできます。と、静江先生は椅子からひよいと腰を浮かすと山田課長の背中に、どっかと腰をおろします。人間椅子です。こうして二人の英会話の授業は一転してSMプレイの時間となっていました。

奇ク七月号、楽しく読ませて戴きました。新宮明夫氏の「夫婦SMプレイ・フォト」の「生首」と「磔」、それに剣持氏の奥さんの「生首写真」等、いずれも素晴らしい作品ばかりでした。私たち、処刑マニアにとっては、極めて満足の出来る七月号でした。

小生の「女の生首」写真も掲載され、ありがとうございます。妻が過日投稿したそうですが、あの文中にあります「斬首、獄門の刑」により斬り落された妻の「晒し首」フォトを追加送らせて戴きます。掲載下されば幸いに存じます。

今後、生首写真もアイデアを種々変えて撮影し、投稿したいと思っています。同封の「晒し首」フォトについて諸兄弟のご高評を賜れば幸甚です。

「だって、手と足は縛ってあるんだもん」

「えッ」

「縛ってくれていうから」

「へえ、勇気のある奴だな」

「へんな客」

「それから、どうした？」

「なぐってくれていうから」

「そんなことまでいったの？」

「図う図うしいわね」

「あきれた」

「たのむって参拝九拝よ」

「なんでなぐった？」

「スリッパ」

「ははあ」

「汚れているから、洗おうとしたら――」

「そのままでもいいって、いった

んだらう？」

「そうなの」

「そんなところだ」

「それからね、足で踏んづけて

くれて、きかないの」

「誰でも同じだ」

「なあに？」

「いや、別に」

「足の裏を舐めさせろっていうの……」

「注文がうるさいね」

「へんな気持」

「そうでしょう」

「S子の撮った私」

松 永 景 子



この前には、私の撮ったS子のフोटをお送りしましたが、今日は思い切って私の緊縛のフोटをお送りします。余り美しくありませんので恥かしかったのですが、S子の撮り方が下手だったせいかも知れませんわね。

私はどちらかというと縛られるより、縛る方が好きなのですが、私の愛するS子になら、何か私のすべてを投げ出してみたい気持ちかられたのです。自分ながら妙な心理ですわね。

S子はその二、三度縛りましたが、ただ縛るだけでは、何となく恰好がつきにくくなって、お仕置を考えました。それも至極単純なことからからです。例えばご

飯を焚いてお焦げをつくった時とか、おつゆが辛過ぎたとか、帰るときに頼んでおいた買物を忘れたとかそんなごく些細なことです。私達二人の間で、お仕置の方法や縛り方を色々に分類しまして、それに各号をつけ、おこげをつくる、と、第六号に違反したとかなんとかで、お仕置するのです。毎日でもありませんが、お仕置は二つ、三つかためて行うのですが、カメラで撮る時もあり、お仕置プレイだけ愉しむ時もあります。そのフィルムも今で三本とりだめてありますが、そのうち現像の方を纏めてお願いしたく思っています。

S子も段々なれてくると、私に大分対等に口をきく様になり、自分一人いつもお仕置を受けるのは不公平だから、お姉さまもお仕置を受けなくちゃ嫌だなんて、駄々をこね出しましたの。お縛りのいい口実をつくって、S子を縛ってききましたものの、いつかはそんな事をいうかも知れないとは思っておりましたが……。

結局、私の言分が負けて、私もS子にお仕置をうける羽目になりました。最初のお仕置の時、S子は奇巧の表の写真の見よう見まねで、私をパンティ一枚にして、何とか縛りましたが、勿論そのお縛りは、ほんの初歩の簡単なものでした。少しもがくとすぐ解けそうですが、私はS子のなすが儘にじっとしていました。S子は茶目ツッ気を出して、私の顔をのぞきこみ（お姉さまどんな気持？ 一度撮ったげましょうか）なんて冷かし気味にいうのです。私は一寸怒った顔になって、わざとつんつんして、（ええ、撮ってもいいわよ。ああ気持——）っていつてやったら、S子は暫らく手持無沙汰にしていましたが、（よし、撮っちゃう——）といって立上り、カメラを構えました。それから、フト気付いて、ライトを二個つけて、いろいろの恰好でファイндаーを覗き込みます。私はわざと顔を伏せますと、（お姉さま、もっとお顔を挙げてよ）と、私のそばへ近附くと、私のあごをぐいと持上げます。（S子、ひどいめに合わしてやるから覚悟していてネ）とにらみつけると、S子は軽く首をすくめて舌を出しました。五、六枚撮ったうち、これといったフोटもなかったのですが、比較的マシな一枚です。ご掲載下さっても結構です。

サロソ楽我記

辻村 隆

仏映画の『悲しい奴』に七分間許り、サジスチックなシーンがあるというので見にいったが、女が全裸で、鎖で両手吊りにされ、鞭打ちをうけるシーンはかなり見たえがある。祖父が拷問道具を保存して、孫の代にその部屋で鞭打ちするのだが、残酷趣味の映画も堂々と罷り通り出した。仏伊合作映画『白い肌に狂う鞭』などサジスチックを表面に押し出した、そのものズバリの映画でもあろう。東映の六人の同心を主人公にした『黒い爪』にも、囚人の逆吊りシーンがあつて、拷問ものとして、かなり刺激が強い方だ。映画の場合、緊縛シーンに必然性があるかどうかによって、映倫の見方も違うから、脚本の緊縛必然性が、最もカットの少ないものになりそうに思う。どしどし面白い脚本を考えてほしいものである。

大阪の上六周辺に残酷宿のある事を、ある新聞で知り、一夕あち

こち歩き廻って見たが、到底一人では探しようもない。歩きくたびれて、飲屋街の一軒のスタンドバーに入ったが、ハイボール二、三杯のみながら、それとなくバーテンにきいたら、ニヤニヤしながらある旅館の名をそつと告げてくれた。自分にきいて来たといえまいと仰有る。訊ね訊ね行くと和風づくりの小さな宿である。バーテンに教えられた通り告げると、二階に案内してくれ、待つ間もなく中年の夫婦らしき二人が上ってきた。観覧料はかなり高いが、後学のためと思って払うと、男は女の衣服を剥ぎとり、風呂敷包みから二三条の縄をとり出して、いやがるしぐさの女(三十七、八才位)を後手に縛り上げ、自分のズボンのバンドを引き抜いて、パンパンと背や腰を打った。私がヒヤヒヤするくらい女は大声で悲鳴をあげる。責めのプレイの時間約八分。男は私のそばにより、お好みなら二人でセックスに移行してもよい

が代金は別という。私は断わって宿を出た。こんなショウがそろそろ大阪にも現われたが、馴合いらしく、女の悲鳴も大仰だった。何か欺された様な気もしたが、初歩の人が見れば、これも結構変っているかも知れない。ド根性の大阪人は次々、時流に合ったおかしな商法を考えつくものだ。残酷宿探求のお粗末の一幕――。

久し振りに釜ヶ崎山王町の、高原早苗さんを訪問したら、女装の先客一人があつた。かなりのご年

配だったが、ついフラフラと妙な気分になり、彼女を縛って猿轡をはめ、早苗さんに応援してもらって、数枚フォトをとったが、出来上って見ると、驚いたことに、女といつても差支えないほどの緊縛ポーズである。彼女? は自称山科富士子(山本富士子にあらず)と自己紹介したが、これから美容院に行くそうである。かつらを結んでもらう、その感触にたまらない自己陶醉を感じるらしいが、パーム屋も心得たもので、ちゃんと承知でセツトしてくれるらしい。



彼女？ 曰くに、奇クに例え一枚でも女装のフोटあれば買求めるが、一枚も掲載がないと買わないそうである。こんな女装ファンのために、彼女？ のおゆるしを得て、山科富士子さんのフोटを一枚発表することにした。奇クの編集部も、女装ファンのために、少

しは協力しなければいけないのではなからうか——。彼女？ と一、二時間お喋りしたが、この会談は、いずれ稿を改めてフोट探訪でまた発表するつもりである。誌上で高原早苗さんにご協力のほど厚く感謝致します。

浣腸と女

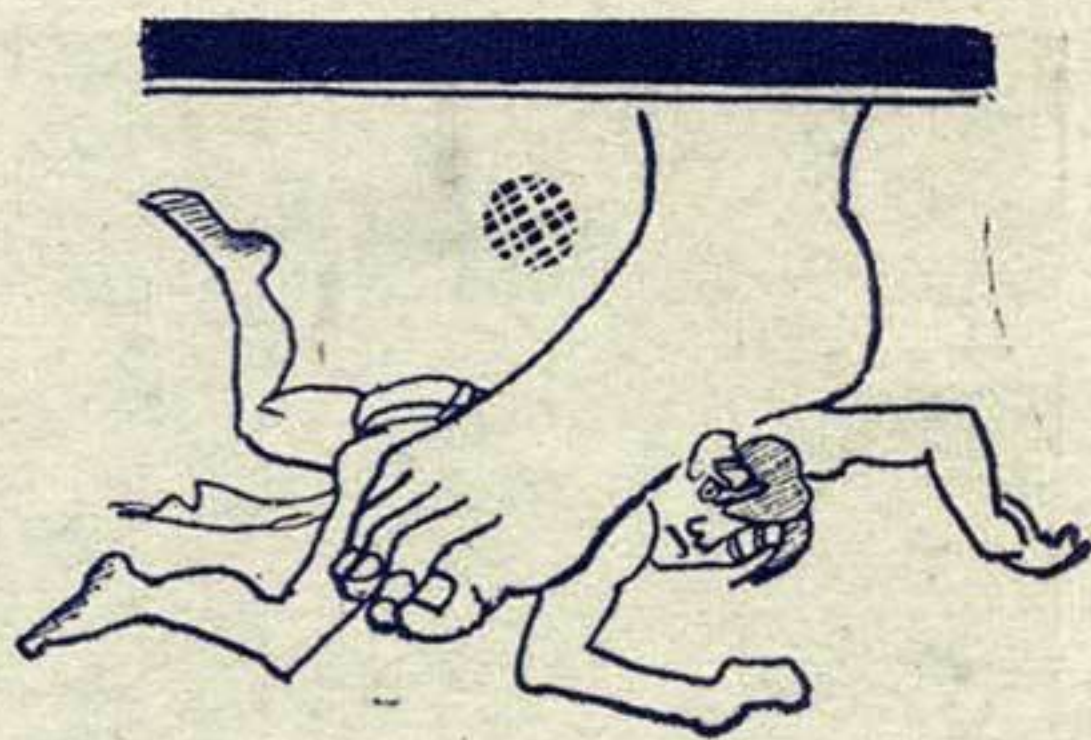
T・M生

○自ら浣腸をして楽しむとか、あるいは他人から浣腸を施してもらいたいと願うのは概して女性に多い。男性はこれに反して女性に浣腸をしたいと願う。

○女性の浣腸願望は、Mと露出癖の変型が、医療としての浣腸という行為に固定したものだと思う。だから、若い女性は病院における浣腸という治療に異常なまでの関心を持っている。○女性の浣腸愛好は、その誘発原因は多くは便秘に起因する。男性に比し女性に便秘常習者が多いのは、それだけ女性性の側に浣腸愛好者が多いということをも物語っている。



○女性の豊かな臀部は浣腸という医療行為に一つの美しさとしてプレイとしての夢を持たせることに大いに役立っている。ここに浣腸の醍醐味と魅力が胚胎しているといえよう。



奴隷志願

津田亜紀子様

奇ク誌に載った貴女の奴隷募集の記事を拝見致し、真に今迄長い間求めていた女性に出逢ったと感じ敢て応募する次第です。当方三十九才、未だ独身です。身体極めて強健ですが、女性に対し独特の好みがある為、未だ独身生活を続けている次第です。その好みとは、貴女には大体想像もつく筈ですが、要するに、サドとマゾを適度に組合わされた強烈な女性が私の理想なのです。

私のSM・プレイは、殆ど乗馬及び女性の長靴姿で満たされています。私のプレイ用品は専ら長靴で、革製長靴が二足、ゴム長が太股迄のもの二足、尺八長靴が一足で、それに革製コートと強いブランドが必要で。

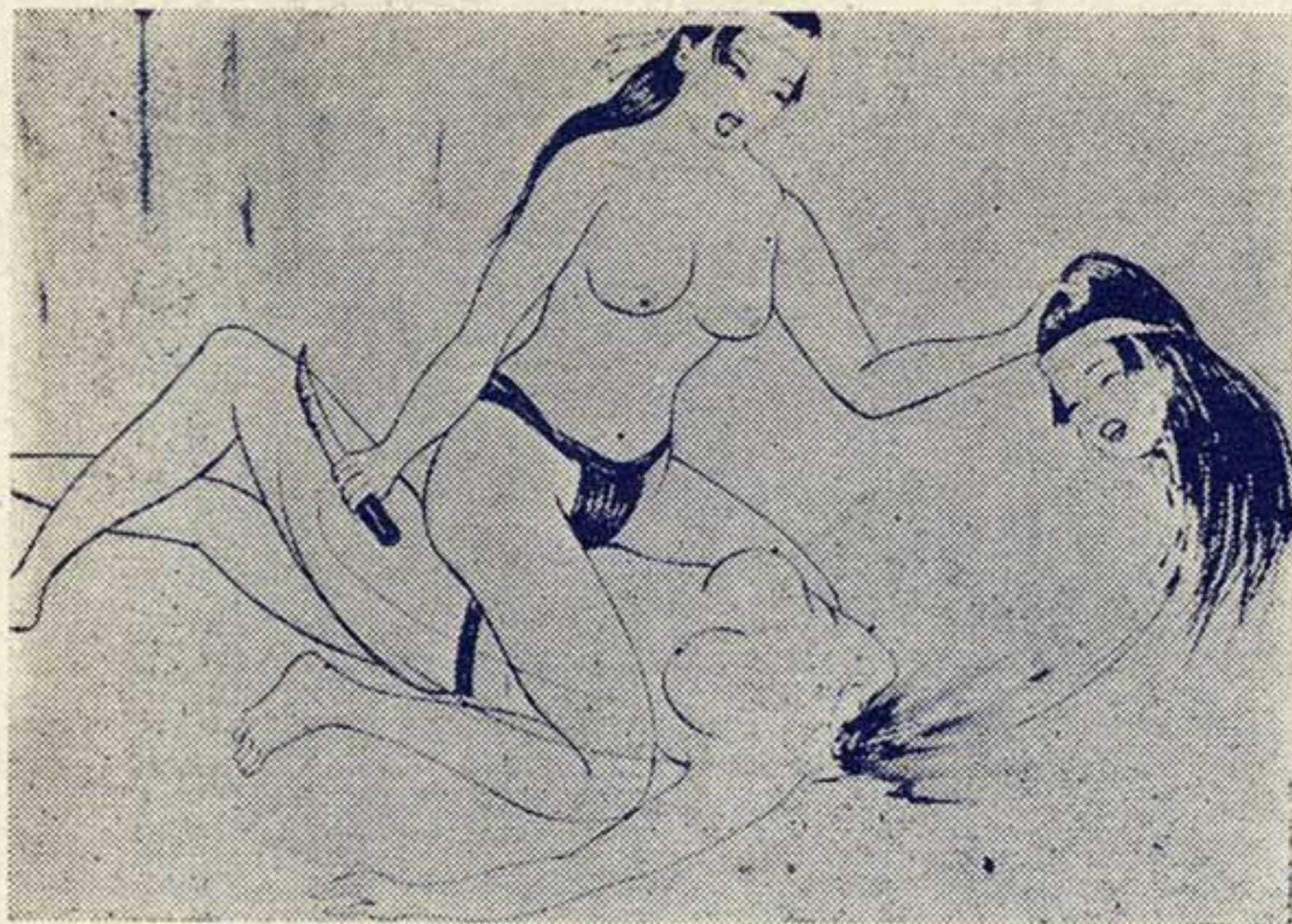
プレイ時間は一回が約二時間。それ以上のことは、何れ御目にかかった上で御話することとし、先ず何としても亜紀子様に御目にかかりたく存じます。

お眼にかかる場所としては、お互いに眼に立たぬ所として、日曜日の午後五時から五時半まで、吉祥寺井の頭公園の弁天様の周辺が如何かと存じます。あたりは旅館も多いので談合に都合がよいと存じます。

その時のあなた様の服装は、必ずレインコートを着用、革手袋をはめ、エナメルの高いヒールの靴をはいて下さい。私は革の上衣に乗馬長靴をはいて参ります。

(プレイ用具は、それから話合いで、お互いの家へ行って間に合わせることも可能ですので、強いて必要でもありません)但しこの姿で御目にかかれるのは、五月一杯ですから念の為。

東京都(虹野正八)



禪裸女の死闘

前川 成雄

禪一本のあられもない裸女が
いずれも短刀をふりかざして凄
惨な死闘をくりかえした末、力

つきた一方が、相手の短刀によっ
て首を掻き切られる場面です。
女の生首の素晴らしい写真を毎月

提供される新宮明夫氏水野弘氏
に呼応して寄せられた前川成雄
氏のフンドシ裸女血斗と生首を
テーマにした絵です。同好の方
々の御批評を賜れば幸いです。

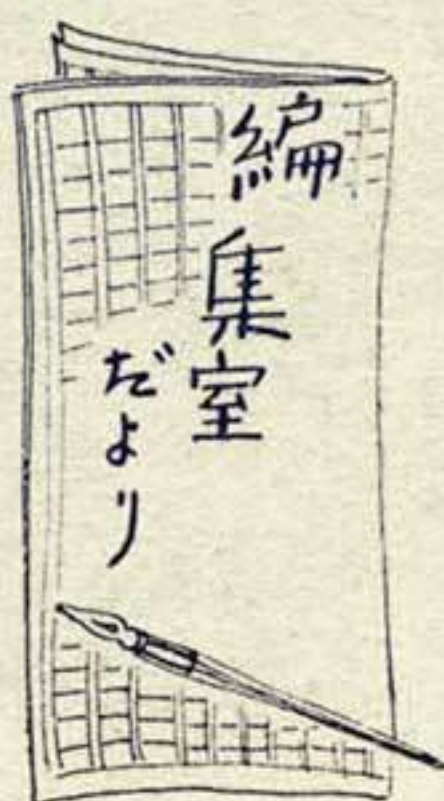


○「花と蛇」の特集号は幸いに好
評で、ファンの方々に大変喜ばれ
たことは嬉しい。引続いて限定版
第二号「豊満と清楚」が完成。き
っとマニヤの机上を飾ってくれる
ことでしょう。

○「花と蛇」については、団鬼六
先生が新しく続篇の構想を練って
おられますので、いずれ華々しい
汚辱絵巻が展開されることでは
う。御期待下さい。

○限定版のグラビア写真集につい
ては、第一号、第二号に引続いて
未発表の新人ばかりの緊縛写真集
を企画、目下写真の撮影中です。

○読者のクラブを兼ねた会館の設
立につき希望者が案外集まりまし
たので、今度土地の購入も完了、
近々着工の予定です。差し当り出
資者の間で利用しますが、そのう
ち読者の方々にも開放したいと考
えております。





緊縛願望の囚人

笹川 美一

悪筆を承知の上で遂に堪えきれず、お便り致します。

小生はKKの昭和30年以來の愛読者の一員ですが、小学校の四年生の頃より、少年雑誌の縛りの絵に興味を持ち、夜など一人床の中で縛り絵を飽かず眺めているうちにいつの間にか、自分自身が縛られて文中の主人公になっていました。

惨虐な責め折檻、拷問に苦しみ息もたえだえに狭い陰気な獄舎の中で縄つきのまま、ほうり込まれている主人公（被縛者）の姿を想像し、一人で手を後に回し帯の間

に交叉して突っ込み、人知れず泣いていました。

それも六年生の頃になると、子供なりに知恵も発達し、簡単な自縛を考え出し倉庫（物置兼用で荒縄も豊富）の二階や近所の空家に入り、全身ぐるぐる巻きにして転がりまわったり、正坐して膝の上に可成りの重量のものを載せて算盤責めの気持ちになったり、自分で自分のビンタを取ってみたり、尺八で尻や太股を叩いて、余りの痛さに思わず本当に涙が出たこともありました。

中学に入学する頃になると、当時は私的制裁が公然と行なわれていた頃なので、私の性癖にとって益々好都合で、好んで横着に行動し上級生から目をつけられ、事ある毎に多数の同級生の面前でビンタをとられ、それが嬉しくてたまらぬほどでした。

自縛の方も大分上達し、吊り責めも自分流に考案し、先ず二の腕脗を緊繫し天井の梁から吊した縄の端に近い部分に二重のワサを作り、先端を背部の縄に連絡し（自分分は用意してある踏台に上ってから連結）踏台を蹴り倒すと、爪先がやつとつく位の長さに前もって調節してあるので、不安定な状態

ながら、吊り責めの恰好になります。

ユラユラと揺れているので、次第にワサが締まって手首は千切れる様に痛みますが、冷汗脂汗を流しながら堪えられるだけは堪え、いよいよ堪えきれなくなると、今度は蹴倒した踏台をようやくの思いで足許に引き寄せ、その上に足を掛けて、しばらくは忘我放心の状態で気分を落ち着かせます。

さて、ワサをゆるめる段どりですが、思いきり体重がかかり、締まるだけ締まった縄は中々固く喰い込んで、これをゆるめるのに一苦労、又、時には踏台を蹴りすぎて遠くへとんでしまい、本当の吊し責めになってしまい本気で暴れて、やつと縄が切れて自由になった事もありました。

日曜日に、近くの山へ弁当と真田紐とを後生大事に抱えて出かけ一人心ゆくまで自縛を楽しんだのも、その頃のことです。現在でも時折山に登り、ひそかに自縛を試みることもあります。

だからだと私の性癖について書きました以上述べました点でお分りの通り、私は徹底した緊縛マゾです。内気なため人に打ち明けることも出来ず、一人苦しんで

ましたが、今度仕事で大阪に来たのを機会に、是非共年来の念願を実現したいと思っています。

私の特に好きなのは、高手小手首縄、股間縛り、海老責め、吊り責め、ムチ打ち（特に臀部）石引きの刑（一定の時間のノルマを決めて果しきれなかったら仕置）その他縛られたまま出て来る各種の作業等です。

女性から責められるのは、どうも好みに合いませんので、男性の方から責めて頂きたいのですが、大阪を中心にして近在の方で、私を責めて下さる方は、ごさいませんでしょうか。尚益々厚顔なお願ひですが、私は現在、経済的に困窮していて出稼ぎに來ているので月に最低二万から二万五千元送金せねばなりませんので、月三万円位で長期刑を希望します。金で買われたとなると、私としても罪の意識が深まり、罪人囚人としての各種の拷問責め、折檻に堪え、きびしい労役（勿論、縛られたまま）いやしい家畜以下の奴隷として奉仕したいと思っています。経済的余裕のあるS男性の方を御紹介下さる様是非お願い致します。私の考えている種々の責め折檻の構想など、ゆっくり話合った上で、こ



波多津女相撲土俵入り

まかい点は決めたいと思っ
ていま
尚、私を緊縛モデルとして使っ

て頂いても結構です。私は身長一
米六十三糎、体重五十斤のやせて
貧弱な色の黒い風采の上らぬつま

らぬ男です。年令は三十九
才ですが、それだけで罪人
囚人としてのムードは充分
だと思えます。私をモデル
として本縄をビシビシと掛
けたり、各種の残酷な拷問
折檻場面をカメラに収める
のも一興かと思えます。勿
論いかなる場合も全裸と後
手高手小手首縄、股間縛り
を出来る限り残酷なまでに
きびしくかけて戴きたいの
です。それから、猿轡の本
当の苦しみを味った事があ
りませんので、是非お願い
します。尚その折は出来る
だけ、多数の人々の目前で
縛り又は責めて下さい。そ
うすれば併せて念願の晒の
刑を味えますので、ますま
すうれしく思います。

ムチ打ちも多数の人から
是非受けたいと思えます。
泣いても喚いても、そんな
ことは意に介せず、どしど
し責め続けて頂いて結構で
す。長期刑も勿論ですが、
KK社での責めも是非実現
させて、私の悲願をかなえて下さ
る様伏してお願ひします。若し、
仮りに経済的余裕のある方がなけ
れば、次善の策として、KK社の
方でMSプレイの相手を求めてい
られる方々に、時間貸しを考えら
れないでしょうか。もし多数の同
好者の方が居られれば、倉庫の片
隅に三尺檻でも作って、全裸の私
を縄付の後手錠足錠で投げ込んで
おいて御用の折は引き出して頂く
のも、どうかと思えます。

どうぞ私の念願を実現させて下
さい。本状落手の上は一日も早く
御検討の上、是非御連絡下さい。
まだまだ書きたいのですが、余り
長くなるのでこの辺で止めます。
一日も早く御連絡下さい。もう考
えただけでも身体がしびれるよう
です。緊縛への期待で胸が躍りま
す。一人であれこれと自分の責め
られ泣き喚く有様を頭に描いて今
夜も又、たのしい責めの夢をみま
す。

私の夢は次のようです。場所は
倉庫か地下室（いずれも防音）午
前、午後通して一定の時間を定め
て責めと休息の繰り返し、そし
て夜は屋外でお願いします。十時
頃最後の責めを充分たっぷり有
難くお受けして、その後は翌朝ま
で屋外で杭でも打ってそれに縄尻
を止め、バラスを一杯盛った上
に、正坐させたまま放置して下さい。
い。

尚、四日乃至七日それ以上続け
て頂けるなら、顔の形の変る程の
ビンタ（平手打やスリッパ打）皮
膚が破れて血がにじむ程のムチ打
ちを遠慮なく願ひします。もし数日
続けて頂けるなら、山中での責め
や雨の日でもあれば、緊縛の上、
雨合羽、フードをかぶせ、合羽の
手は何か両方から二人で都合よ
く隠して頂き盛り場を歩くのもど
うでしょう。

本当に長くなりましたので止め
ますが、一日も通知の早からん事
を祈ります。尚返書は個人名で願
ひします。緊縛責めの期待に胸を躍
らせつつ筆を置きます。

緊縛被虐の罪人希望者より

△編集部記▽
希望により編集部より返信を出
しました。その結果、誌上に全
文を載せることにしました。大変
虫のよい念願なのですが、或るM
男性の偽らざる通信として参考の
ため掲載しました。
若し希望者がありましたら、御
連絡下さい。



(残酷ものいろいろ)

六月二十一日から洋画を併映することになった松竹では、その第一弾として長篇記録映画「世界の裏の裏」(監督ロベルト・ビアンキ・モンテロー)を公開する。

この映画は、おなじ「人間社会」ということばで総称される世界各国・民族の「ところ変れば品変わる」といったさまざまな風習、奇習を、ドイツ、デンマーク、タンガニカ、セイロン、ベトナム、香港、アメリカ、フランス、アラビア、ニュギニアなど、世界十一カ国にわたって長期ロケした作品で、原題は「馬鹿な世界」。

ジュゼッペ・ラ・トルの精巧な隠しカメラと望遠レンズに写し出

される現代社会の裏の裏は、その国の人々も知らなかったような猟奇と好色と変態に満ちている。小島正雄のナレーションでつづるこの作品は、イギリス女性の美容法、砂漠の国アラビアの売春婦の生態、全裸に近い美女を荒ナワでしぼり、苦しみもだえる女体を鑑賞させる香港のショー、ジャマイカの一婦多夫の家族風景、仮面ヌード美人の名当て遊び、スウェーデンのスカートまくりコンクリートなど、さまざまなエピソードが軽い笑いと共に続出し、みる者を「天国」と「地獄」に誘ってくれる。

銀座のガスホールで、五月十二日夜六時から第三回「ビザールの会」が行なわれた。これは伊・仏合作映画「ショック」の公開を前にして、映画の試写を兼ね大映とビザールの会が主催したもの。

「ビザール」とは、風変わりな……という意味だが、当夜の会もこの名にはじめ大混乱ぶり。舞台上でツイストを踊りながら、狂ったように接吻する男女。暗い客席の通路で、抱き合ったまま奇声を発する会員たちの「バカ騒ぎ」につめかけた観客はただ呆然とした表情。

いきなりヌードで幕が開いたこの会は、富田英三の司会で、浅川真樹のゴスペル・ソング「十二単衣」と題したアクション・ダンスなど、わけのわからぬ出し物ばかり。中でも圧巻は、第二部「ショック・コンテスト」で、一人の勇ましい女性が演じたスネーク・シヨ。ヘビをからだにまきつけながら、次々と衣服を脱ぎ棄てて全裸になる彼女のストリップテイーズに、客席からは「ああ、ショック……」の声がいきりに飛んだ。

また、このあと公開された映画「ショック」も変った作品で、フロイドのいわゆるセックスのナゾにメスを入れたもの。黒人の男と白人の女のブラック・ダンスや、中世のギロチン刑の再演、身の毛もよだつゴウモンの数々など、随所に異常なスリルに富むショックキングな場面の連続で、原題「禁じられた世界」を描き出しているがビザールの会の乱痴気騒ぎで、やや色あせたかっこうだった。

東宝と競作で話題となっている「肉体の門」(田村泰次郎原作)は日活の「セックス路線」の柱になるもので、鈴木清順監督は「五人の夜の女の生態を通して、終戦

当時のあのギリギリに迫いつめられた中で生きる人間の哀しい業を描いてみたい」と語っているが、なんといいっても話題は、この作品に登場する五人の女優の大胆な演技ぶりにある。

ボルネオ・マヤに野川由美子、関東小政に河西都子(さとこ)、ふうてんお六に石井富子、ジープのお美乃(松尾嘉代)、町子に富永美沙子といったオール・フリーの顔ぶれで日活女優は松尾だけというのも変っている。

この五人の女優は、それぞれ一度ずつ裸になるが、富永美沙子がそのトップをうけたまわり、全裸の演技を見せた。「タダでからだを売らない」という仲間のオキテを破った町子の富永が、彼女たち全員からリンチを受ける。他の四人もこうして次々と全裸になり、棒でたたかれたり、髪を切られるなど、すさまじいシーンの連続である。

鈴木監督は、「まず女優たちが裸になりやすいふん囲気から作っていた」と「苦心」を語っているが、彼女たちは、「監督さんの魔術にかかったようなものよ」と、監督の意のままに動いてい

乗馬に興ずる女性



るようだ。野川由美子の新人らしからぬ見事な演技、日活のシルバード・マンガローといわれる若葉めぐみ（バスト98・ウエスト58・ヒップ96）のはち切れそうな肢体など、若い五人の女優が発散する強烈なお色気に、セットは連日異様な空気につつまれている。

残酷、リンチ・シーンがこのところ映画界を風びしているが、松竹京都の「暗殺」（監督篠田正

浩）では岩下志麻が水責め、石抱きの拷問にあうなど、「女優残酷物語」の撮影がすすんでいる。篠田正浩が初めて時代劇にとり組むこの作品で、彼女の役は維新動乱のさなかに生きる薄幸の娘。清河八郎（丹波哲郎）と同居した彼女が、八郎を追う役人に捕えられ八郎の所在をつきとめられて拷問にあい、ついに若い命を落す……というシーン。

「男性的映画の中で紅一点という

私ですが大変やりがいのある役なのでおひき受けしました。でも凌辱シーンとか拷問シーンとかが多く、こんな役は初めての経験です」という岩下、いままで比較的清純な役どころが多かっただけに少々とまどい気味だ。そのヤマ場シーンの一つ、奉行所拷問室での場面で、失神状態にある彼女は、容しやなく水をぶっかけられ、髪もバラバラ。おまけに裾も乱れたかっこうで正座させられ、その上に拷問石が一つ、また一つと積み重ねられてゆくところでは、張子の石とはいえ、正座の彼女にのしかかる重味は相当なもの。

大映で撮影中の「犯罪教室」（監督瑞穂春海）は、大人の世界にあこがれ、町のチンピラと結びついて非行をはたらく札つきの高校生と、彼等に救いの手をのべる熱血教師の活躍をエネルギー的な手法で描こうというもの。

この映画では純情派を看板にしてきた三条江梨子が、風間圭二郎高見国一等の不良学生に次々と乱暴される高校三年生にふんするの

も話題のひとつ。
地面の上におおむけになったま
ま、ブラウスを胸もとまで引きさ

かれ、足もとを乱した彼女は、こ
うした役柄は初めてというだけあ
って、さすがにテレぎみ。

しかし、この種のアクションも
のでは定評のある瑞穂監督は、そ
うした彼女の困惑などおかまいな
しに、グイグイと荒っぽい演技を
つけていた。

武智鉄二氏が制作・演出する、
「白日夢」（原作谷崎潤一郎）。

この作品は歯科医に治療にきた青
年画家（石浜朗）が、ちょうどい
あわせたナイトクラブの歌手（路
加奈子）を愛するようになり、治
療中に夢のなかで医師（花川蝶十
郎）と歌手の異常な情事に悩まさ
れるというストーリー。

武智氏はこの映画で、セックス
を通して現代のゆがんだ社会機構
にメスを入れたいと「十年前から
映画化をねらっていた作品」だと
いう。

撮影は全部ロケ。

「青年と裸女の恋はいつも医者に
さまたげられるが、女は人間性、
医師は社会制度の悪を象徴する」
ということ。これは路だけが全裸
になり、石浜等他の出演者は絶対
服をぬがさない。

写真にならなかったモデル

浣腸の女神

塚本鉄三

河内市に住むという或る愛読者から通信を貰った。身長、体重、は勿論、ウエスト、バスト、ヒップ、それに肌の色に至るまで、自分の身体的特徴を細かく記してあるので、私はてっきりモデルの志願者であろうと思った。

自分の肌の色まで書いておきながら、不思議と年令は書いてなかった。忘れたのか或は故意に書かなかったのか、とにかく逢いたいということだったので、編集部へ来てもらった上で、近くの喫茶店に落ちついた。

午前中のこととて喫茶店には他に客はなかった。年令は二十四、五才ぐらいになるだろうか、落ち着いた感じである。奇クの愛読者であるということが、お互いに初対面から温い気持の通いあうものがあつたのか、話はスムーズに運んで、すぐ撮影についての打合せに入った。

ヌード・フォートの撮影からはじ

めて、軽い緊縛ポーズ。自分の肌の色まで手紙に書いてきただけあって、彼女はナルチシストとしての傾向を多分に持っていて、カメラの前に立つことを好むように見受けられた。郊外ヘドライブして山や川、海辺などでヌードになつてはカメラの前にポーズをとってくれた。時には、他の人が来るかもしれないというスリルを楽しんでいる風さえあつた。

彼女が浣腸マニヤであることを知つたのは大分経ってからであつた。殊更そういう話題には触れられなかつたので、私は気がつかないで、或るとき、浣腸フォートのことに話が及んだとき、私も一度撮ってもらおうかしら、と言つたことから、写真撮影というより、彼女の好む浣腸プレイになつてしまつた。

ここに掲載した写真は、自分の写真は発表してはいけないという彼女を口説き落して、顔をかくし

たこの一枚ということとで、やっと宥しを得た空気浣腸後の腹部の膨満したところの場面である。

羽村京子氏の高圧空気注入は、彼女の最も好むもののようであつた。このとき、エネマシリンジを用いて、彼女がもういいというまでシウウシウウと

空気を送り込んだが、ゴム球を握りしめるたびにぱんぱんに張りきつた彼女のお腹が目に見えて膨らんでくるのは、見事であつた。

彼女をモデルとした幾多の写真も彼女の許可が得られないまま誌上に発表することも出来ず、徒らに私の机の抽出の中で、ネガのまま眠ってしまうことになつた。

空気浣腸で妊婦のように膨らんだ大きなお腹。彼女は案外妊娠に憧れを抱いていたので

はあるまいか。赤い腰巻からこぼれるばかりに豊かに息づいた白い腹部。浣腸には、いささかも関心を持っていないなかつた私でさえ、風船玉が破れるまで、注入してみた。意欲にかられるときがあつた。彼女も写真にならなかったモデルの一人である。



△読者レポート▽

国電で下腹を搔切らる

(神崎一郎)

切腹マニヤの諸氏にお伝えしたい事件が発生した。国電大阪駅でラッシュ時に乗車間ぎわの娘さんがカミソリで変質者? に切られた事件である。なにもこれだけならさして気にとめる必要はないのであるが、場所が下腹部なのと、その被害結果が切腹のそれと同一なので珍しかった。完全に「他動

的切腹」である。朝日新聞西部本社版四月十二日朝刊の第三面から要所を抜粋してみよう。

「国電高槻発西明石行普通電車が大阪駅を発車して間もなく、同電車一輛目後部左側ドア附近に乗っていた尼崎市事務見習A子さん(20)が下腹部に痛みを感じ、うずくまった。まわりの乗客がA子さんのスカートにカミソリの刃がつかささり血がしたたっているのを見つけ……云々……」

「下腹部に長さ九・五センチ深さ

三・五センチの傷で全治二週間、傷には片刃カミソリが付きさつたままだった」

「A子さんの話によると大阪駅六番ホームから乗り込むとき、下腹部に傘の柄でこすられたような感じがしたが、人の波に押されてそのまま乗り込んだという。ところがしばらくして痛み出したので、見ると血が流れていた……云々……」

なおこの娘さんは今春短大を卒業して、某会社就職したばかりであった。



夫婦のSMプレイ

串刺しの首

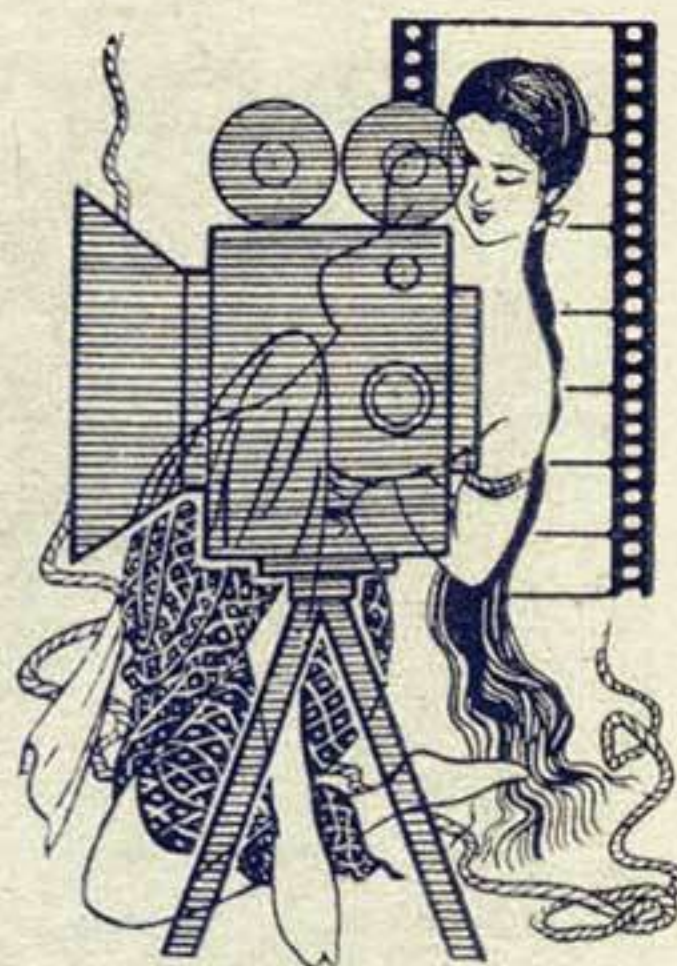
新宮明夫

竹槍の先に串刺しになった女の生首。べつとりと血のりのこびりついた竹。今や身と所を異にした晒し首。髪とバックの区別が印刷では判っきりしないかもしれない。

ここで第一に考えられるのであるが奥行きが三・五センチの深さに達していながら小腸が露出しなかったのは、やはり長さがせいぜい九・五センチで止まっていたせいであろう。それにしてもラッシュユアワ―の車の中でもまれていて内臓が溢し出なかったのは、たしかに幸運であった。本人の腹部の脂肪層も案外厚かったのが幸いしたのだろう。

第二に傘の柄でこすられたような感じであったというのは当然かもしれない。片刃のカミソリとこのことでグーッと引き回されたのだと思うが、傷口が脂肪層止まりであった証拠だろう。腹膜に達していると瞬間に、激痛が走るからである。それでも着衣の上から、これだけ搔き切るとはおそろしい。婦人の切腹マニヤ諸姉には、何と感じられるだろう。

兎も角わざと下腹部をねらったと思える、この犯人。とんでもない見当違いの奴で我々マニヤとしても断じて許すべからざる輩である。気の毒なこの娘さん、これからも下腹部に娘切腹? の傷跡を残すわけだが、気を落すことなく何ら恥らうことなく、元気になれることを祈ってやまない。



「八ミリ緊縛記」

(3)

登 映 治

小生可成り自信をもっている作品ですが、「処刑前後」如何でしたでしょうか。

撮影は五月五日の休みを利用しました。モノクロームでASA二五〇のフジフィルムです。カメラはキャノンズームですが、これはズームの極限まで伸ばして望遠にした時、ピントが甘くなり大分ぼけましたのでカットしました。国産品の欠点でしょうか。それとも小生の買ったカメラが不備だったのかも知れませんが。モ

デルは、小生の家内です。余り体に自信がないというので、囚衣を着せました。場所は小生の兄の旧家の土間でその日半日留守番を頼まれていたのがもつきの幸いでした。兄夫婦は子供三人を連れてハイキングに行ったので

ありませんので、小生は四五丁許り離れた自宅へ、兄のミゼットを運転して引返し、兼ねて準備しておいた材料のはりつけ柱や、そろばん木を運び込んだのです。

最初のタイトルにもあります通り、罪状は火つけの取調べとしました。家内を荒縄で首に縄をかけ前手縛りにして、土間のたたきで鞭打ちです。これはリリースを使用して、片手でリリースを握り、片手で青竹を握りました。手首とほんの一寸下半身が入っているのが小生です。このシーンはファインダーをよく覗いて位置をきめたのですが、少しぶれたのか、ライトが左下に画面に入って失敗でした。次はそろばん木責めで、これは三寸角の古い柱木を、製材所に頼んで三角に半分に切ってもらい

約五十糎の長さになって六本つくりました。膝の重石に使ってある石に見せたのは、実をいうと最近瓶や壊れものや、機械の動揺を防ぐのに使っている、フワフワした白い鉄の様なアレの大きいものです。それに黒ラッカーを吹きつけたら、石そっくりの感じが出ましたが重量は軽いものです。

はりつけのシーンは、縦横の三寸角木を切り込んで組み合せ、リリースで、槍を腋の下から突き上げるシーンをとり、メリケン粉を薄く解いて煮き、それに墨汁を加えて作った血糊を、腋下になすりつけたのです。三脚でカメラを固定し、何度にも血糊を流しては、少しずつ撮って行くのです。

バックに土間のかまどや、農具が見えるのには一寸困りましたがすっかり隠すほどの黒幕もないのでその儘とりました。

何しろ家内と二人きりで撮るので、どうしても動きが少なく、いいアシスタントがあれば最高ですが、今の処、小生以外では家内が嫌がりますので、已むを得ないと思います。

編集部からの御忠告通り、カメラを八ミリの間に、例えば数枚でも撮ればいいのですが、仲々一人

三役が出来ず、次はもう少し簡単なもので、カメラも一緒に撮ってフォト送附致します。はりつけの火あぶりのシーンは、前に薪や芝をつみ重ね、カンテキを芝の前に隠して、煙を上げたのですが、余り効果ありませんでした。煙むいので家内が閉口しましたので、このショットは早く切り上げ、はりつけからおろしたあとの倒れて、打ち伏したシーンで終りましたがどうしても、もう一人必要な事をつくづく痛感した次第です。タイトルとサブタイトル共で、約一七〇フィートぐらいになりました。御批見下されば幸甚です。

次回は一度カラーで撮るつもりでおります。八ミリ同好の方がおられましたら、奇クを通じて親睦を計りたいと思います。

奇クサロン向原稿募集

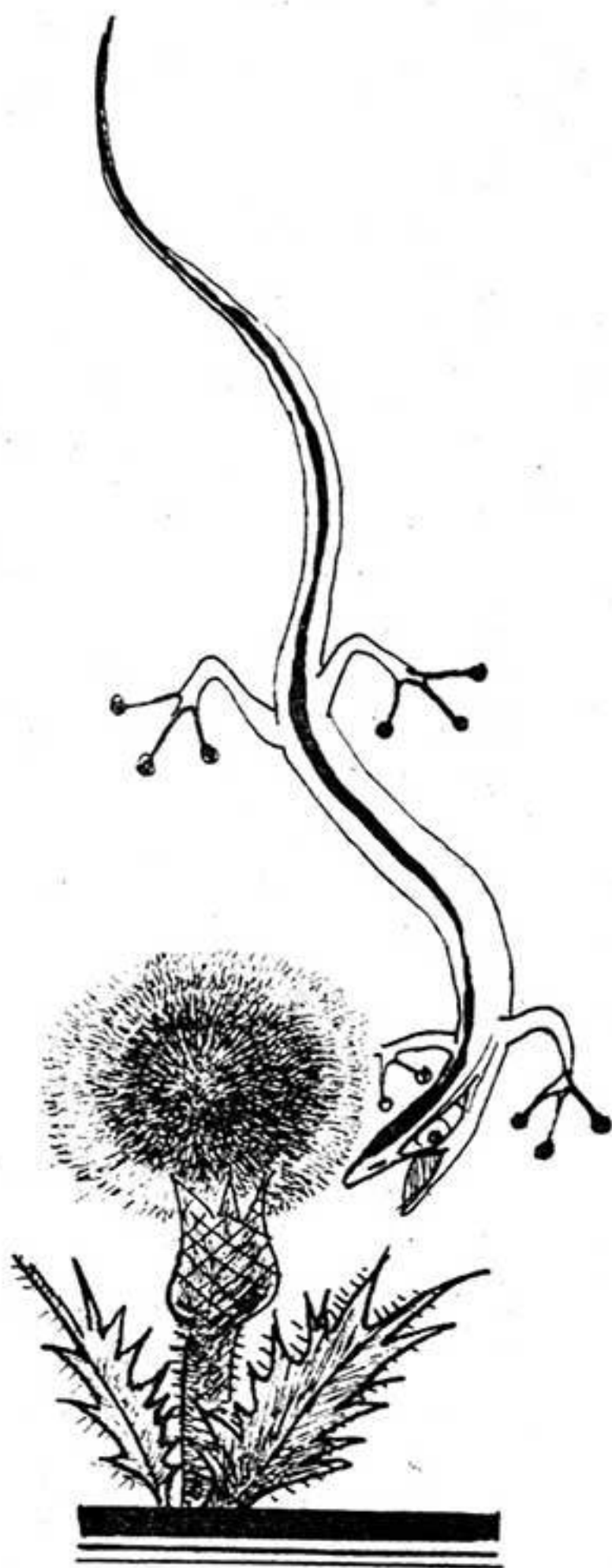
○皆さまの共通の広場としてのこのサロンは、どなたでも叩けば開かれる、楽しくて身近かな集いにしたいと思ひます。マニア通信、短信、文通、呼びかけ写真、絵など、何んでも結構です。から、どしどしお寄せ下さるようお待ちしております。○採用篇には、編集部保有の特写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。奮て御投稿をお願い致します。

(読者原稿)

ある特異なるA・F十二型など

〔註〕A・F (アブ・フィクション)

△脂満愛吉▽



こんな題名をつけますと、えらいエッセイでも書いてあるのかと思われそうで気がひけないでもありませんが、私という奇怪な性向の持主好みのごく異様(勿論グロテスク趣味

を含む)な設定のフィクションの十二型ということであります。あえて「ユニークで傑作なA・F」などと書かなかったと云うのも、自分で傑作であると思っているだけで、一般

的又はアブ的に全く普遍性を持っていないだろうと想像しないでもない弱味は致し方ないからです。

言葉をかえて云えば、私好みの風変りなフィクション小説をものとしては投稿せずにはいられない私ですが、それが又到底活字になりそうもない拙作(自分ではそう思いたくないのだが)揃いなので、それについて潜越ながら、種々のカテゴリーに分類してみたのに過ぎないのです。没になるに定まっている(今)くせに投稿するというのも、旧号の或る奇ク誌上に麻生和夫氏が云っておられた如く、「奇ク誌上に自分の名がのり、文がのせられる喜びは、普通の商業誌に自分の名がのった時に発する売名的なもの」と一寸違う」と全く共感し得る不思議な内的慾求のようであります。ですから、こんな馬鹿げて、グロテスクで気狂いじみて、などと誰方が云われましようとも、そんなに苦にもならないつもりです。勿論フィクション100%の創作のことですし、最大限の誇張がつきものなのは云う迄もないことで、一体に本来小説なるものは、最高度の設定、誇張がのぞましく、日本の探偵小説とか映画、テレビ・ドラマが一般に外国ものに比べて甚だ見劣りがし、又面白味が足りないのは一つには、こうしたアイディアの欠如

にあると思われるのです。大切なのは、その誇張や虚構がうまく処理されることでありましょう。(もともと私のような拙い男に、そんな立派な作品などにし得る筈もないでしょうが、そこは勝手なもので、それをしばらくおいての意見です。)

私は一方真実味あふる告白小説の重要性をおろそかに思いは致しませぬ。つまりそんなノン・フィクションの小説が好ましいと同時に百%フィクションの、みずみずしい小説も同等に望ましいと云っているのです。というのは、この二つは本来表裏をなすべきで、一方的にどちらかのみを重要視して、他をかえりみぬことがあってはならないものだからです。

奇クの内容類別についても自分の好みの記事のみをみとめて、他を軽視、嫌悪する態度は私には何となく不可解の気がしないでもありません。大体アプノルムにオーソドックスなものがある筈がないと思うからです。あるものの読者が他のものよりも多いとか少いかはあることはみとめても、だから例えば、便器が出て来たり、コプロ趣味の記事があつても、その嫌いな方も、そうした現象のあることを認めた上で、そうされるのが本当だ

と思うのですが。…勿論我等の奇クを線香花火で終らせたくない、ユニークな姿をささやかでも持ちつづけて貰いたいという真摯な願いの余りとは思いますが。…

そこらはベテランの編集者におまかせする雅量がほしいものではないでしょうか。…といって自分の好みのものが、少いと淋しいことは争えませんが、時々見受けられるように、直接的な部分をカットしてけしからん、という怒りをぶちまけるのはどうかと思います。我々は矢張り慾求(勿論、文中の)はある限度までは、おさえる必要はあると思います。それは又表現力の養成にもなる筈ですから…。

ユニーク且つカタルシスの要素の少ない貴重な奇クなのですから、失言の類いは出来るだけ避けたいと思いますが…、それからエログロ味を廃す、というのもよく判らないことで、それらとアプノルムと関係のないものなど残念乍らとも考えられず、かえって不自然と思います。これも愛する奇クが不幸にならぬようにと云うファンの気持としてよく判るのですが…ただこの場合も一つには表現の問題で、それとあくまで真摯な作者こそそのぞまれるのではないでしょうか。

圖考えてみるといつの間にか潜越な議論みたいになってしまつて恐縮ですが、全く信頼し得る編集部の方が好ましい低姿勢で、(この言葉は本当は好きになれないのですが)、而も文献的価値にも重きをおかれ、奔放で而も細心に編集に当たれていると拝察されますので、大いに読者の我々としては意を強うすることが出来るというものです。

…といって矢張り読者の誰かが云いたいことは云いたいし、又云うべきで、そうでないと微温的になって意義も失われがちになるおそれもなきにしもあらずでしょう。この誌のあり方のむつかしさの一つはこんな所にあると思いますし、編集の方々のご苦勞はさこそとを考えます。むつかしい編集をやつて来られ、文献誌として地味ながらも高い信用と評価をもつておられる奇クに改めて讃辞をひそかに送る所以です。別におもねって申したのではないのです。

バラエティについて三月号のトップ記事に寺井紀夫氏が類別の統計は一般に公開すべきでもなく、編集上の指針となすべきもの、と云っておられたが、これには全く同感で、読者としては或る限界以上はすべて編集者側に寛大におまかせするより方法もないし、又そ

れが望ましいでしょう。といってどこまでが編集者側かは事情を知らぬ私共にはよく判らないのですし、創立当時よりの奇クの輝しき功績者、先駆者の方々、例えばM女史などのご意見は勿論尊重なさるべきでしょう。この種の類別の問題が屢々論議されますが、奇クの発展永続という大事——つまり、ファンにとっての希求——を考えますとき、こと更他人種を排斥する如き偏狭はかえって余り後味もよろしくなく、結果として無益のことが多いような気がします。ただ云えることは我々は奇クを通じて、広い意味での勉強は出来、こと更刺激的にならぬ自分の独得な趣好等の表現能力を身につけられるのではないかとも思うのです。

かつて羽村京子氏に対して吾妻新氏が解答をよせられたのを拝見しまして、その文献的価値のある考察がきわめて理解のある、格調高く、暖か味あるお態度で、流石は奇クならでは、と思いましたがを告白しないではいられません。類誌のふえたことも、奇クにとつては余り好ましいことではないでしょうし、それはよく判りますが、奇クが斯界で独創と歴史をもつだけで充分という気もしないではありません。若しそれがまがいものなら

ば永続し得るとも思いません。題名にそれとくどくどと余り面白くもなさそうなことどもを書き記しましたが、これも私の癖であり、又三月号を手にしてその充実ぶりに驚嘆し、毎月のこととはいえ、嬉しさの余りでした。

さて私のA・Fですが、前述した如く、きわめて特種なフィクションと思われますので決して普遍性をもちたいなどという大それたことは考えません。いわば私の秘密に近い陰影(?)といったものが、こんなフィクションを考えつかせるのです。私の陰影(?)の好みと致しますのは、先ず第一に浪漫怪奇の世界です。これから美を感じ、やがては異常なものでさえもつ美、それから畸型趣味、猟奇趣味、ショックキングの美、となりこれには浪漫というものの奔放自在な境地まで範囲をひろげたいと云う自由への憧憬が含まれます。そして卑小で窮屈なものより緩やかに膨大したものへの憧憬、それが体となると肥満体。世界となると、勿論本質的な美の国——勿論非常に広義のそれで、空想的ダダイズム、アナーキズム(あくまで空想的)に近くあらゆる美の他に醜(つまり美)を含む、と見え所のない膨満な世界——抽象的だが、私

の表現能力ではこれ位にしか書き得ない。善悪を超越したと書きたいのだが、誤解されると困るし、一体にカトリシズム宗教的地盤や物の考え方のない(又は乏しい)我々日本人にとって善悪とは何かと考えると益々判らなくなるばかりである。

これは私見だが、サドの翻訳本が問題になつて裁判にかけられるなど書いてあると、善良な我々は一体欧州人でない日本人が何を基準として裁判しようとするのか、と素朴な疑問に頭をひそかに悩ますし、無名の私などがその問いを放ちたくても、どうしていいのか判らない者です。実存主義が神を否定するといふが、それが生じたのも神が存在するキリスト教人種、又は文明だからこそであつて、クリスチャニティ的文化なき所に、又なき日本人に実存主義とかサドとか本質的に理解し得よう筈もなさそうだし、だからそれがモラルにもとるかどうか判定することなど無理というもの、と思つて何となく滑稽になるのだが、これは一体いけないことなのか、それとも私の非才のためなのか、素朴な私にはわけが判らなくなつて情なくなる次第です。カトリシズム的モラルというのなら判るが一体日本人的モラルというのは何なのか。ま

さか万世一系的神国モラルでもなさそうだし、人まねモラルでもなさそうだし、勿論麦飯を食え式モラルでもなさそうである。――

――まあ今まで時々奇クファンタジーにのっていた奔放なる空想のイメージの国々をこっちゃんにしてみとめて、それを私なりに取捨選択したり、つけたしたりしたものと思えばよいのです。その中で、最も心ひかれるインモラルとされる要素、インセックスとか、主従逆転とか、ネクロフィリアとか、ウラニスムとかデロントフィリアとか、アルゴラグニアなどを主にして、一体それらはあくまで醜にすぎないのか、美を発見出来ないのかとひそかに思いつづけた後、私好みの肥満体フェチシズムが基調となって書き続け、自らを慰めているわけなのです。

本誌をはじめとしましてマゾ味の多い傑作は少なく、尊敬すべき沼氏のご業績中主要なマゾ男による人間関係、就中三者関係のご研究にはうたれますし、鬼山氏の「痴迷」とか、谷崎氏の「饒太郎」を代表とする一群の傑作、又それを裏がえしとした「本牧夜話」「愛すればこそ」、「愛なき人々」、「神と人との間」等は流石に心理的アルゴラグニアの甘美の世界を心にくいまでに展開してくれ

ましたが、そのショッキングな美の原因の一つは、どうにもならない人間関係の追求のシリアスな面にあると思います。つまりある意味で非常に個性的な二人以上の人間が衝突（出会）する時に生ずる様々なシチュエーション。三人となれば益々残酷な設定が生じます。それらがよりユニークであればある程、人間のもつ醜（つまり美）は発揮されることでしょうし、又意義を持つてくるでしょう。

このトリオリズムで、私好みに肥満者優位を先ず喜びますので、皆どっしりと便々たる巨軀をシンボルとしているような（その豊饒な体軀の如く誇り高く君臨する）人物が上位にあるのは致し方なく、これらはH・I・J・Kの四種を作りました。（H）が私の典型的なグロ・マゾ・スタイルで、劣位者の男つまり女の元の夫が、主従逆転による従者への転落によって、これも逆転によって優位支配者にのし上った巨腹便々な河馬的太っちゃ男に臣従又は奴隸化し、その尻ふき下郎として生きて行く。女と肥便優位男との間に結合あり、劣弱被支配男は二人から二重支配をうけており、女は準優位にあるわけです。

（I）も同型なるも、劣弱者は肥便優位支配者の知人のこれ又肥便者に譲渡される附加

をもっています。（J）は特種形で、劣弱者に何と男女の支配者、つまり男女の肥便優位者が彼の上に君臨しています。（K）になるともっと特種でありまして、劣位の男女、つまり元の夫婦結合体が合意によって解体し、共に一人の肥便優位者の支配のもとに彼等らしい生甲斐を見出すテーマです。この場合は肥便優位男と結合しますので、その意味では彼、つまり劣弱者は女よりも更に下位にあるわけですが、実際問題として二人は同意の下に肥者の支配を受け、それに陶醉していますし、共に支配者の肥軀を讃美しては話し合っているのです。本質的には男女同位にあるわけです。右隅に肥便優位者の支配下に巨従する男があるのは、主従逆転が男女のグロ且マゾ趣味等をより満足させるためのつけ足りです。つまり男女共に肥軀狂崇という特異なストリーイでありますから、とても真実味に乏しいのではないかと思われても仕方ないのですが、こうした特種型が存在したなら面白いだろうという愉快な想定です。つまり一夫多妻の特種な変型。

その他はトリオリズムになりません。

（F）では父娘、（G）は兄弟で別に結合体では勿論なく、劣弱者の男のマゾ趣味が、結

合体ではなくとも女房の兄又は父がその優位肥満者であるということ、風変りな強調をされています。(E)では肥体狂崇の劣瘦者が好運にもそのようなタイプの女を得たのに病で瘦せて、夫婦同格となる。つまり彼は女房を愛せなくなる。次には新しい肥軀腹優位男が登場するというわけです。他は皆二者関係にすぎませぬ。

こうして私の肥満体狂崇癖はフェチシズムから出発して、それだけでは物足りず、おかしな肥満体優位小説と発展して行ったわけで、それらをひそかに書き記すうち、色々な型があるものと気づいた次第です。

この他にもこのテーマでいくつもあります。が、どうも更に無理ですので筆を途中で折ってばかりいます。特種で一般にとっても共感など持ちうる人はごく少いに決っていると思っています。ですが、まあ一般的にアブノーマル趣味というものも空想位にとどめておくのが無難でしょうし、(気弱で泥臭い私が実際そんな慾求を少しでも行ってみようなどとは思って見たこともないのは勿論です。)色々御自分好みのテーマから、様々な人間関係やその他のことを類別や図解してごらんになって見るのも、よほど暇でお困りの方は(そんな方は

いらっしやらないでしょうが)お金のかからぬ楽しみというもの。決して自慰などでもありませんまい。あたりそうもないクイズよりも頭脳をよりクリアにする絶好のものではないですか。特種形好みの私ですから前述の如くになったのにすぎませんし、同じ肥体マニアでも男女入れかえてみても同様な楽しさです。況や賢明な奇ク・ファンの方々は私のグロ趣味をうす汚いと思召された上で、そんな趣味もあるものかと認めて下さる寛大な方々と確信して居りますし、又こんな方法もあったのかと思召され、若し心理的M・S好みでいらっしやるなら、各位のエキセントリックな性癖を適度に余暇などで発散され、又は憂さばらし用に、考察又は新しき設定や分類など考えて頂いたらと、余計なさし出口かも知れませんが願うものであります。

大体ミステリイと同じように奇クなども、それ自体フィクションだと思っています。勿論真実味溢れる告白が多数けいさいせられ、それを喜ぶものですが、どんな真実の告白でも、それが一度活字になったものを読む場合、すべてフィクション化されてしまいました。よう。つまり遠い、而も憧れの世界となり、それでいいわけで、且つ楽しいのではないで

しょうか。つまりまだ見ぬ例えばアフリカ奥地の草原、それが現実になりながら、手にとれぬ我々には一種のファンタジーでありフィクションのようなもの。お伽話にも似かよっているし、ミステリにもそんな面がある。

残酷な殺人を含んだミステリは、始めからフィクションだという作者と読者の默契があつてこそ、面白いのでありまして、殺人が出ていたから、それを現実に見ようでは余りにも滑稽であり、情ないでしょう。ミステリ小説一つエンジョイ出来ぬようでは文明人とは云えますまい。(そんな事実が本当にあるのか考えられない位だが、我国の世論又は偉い人はすぐに結びつけたがるイージーな思考態度があるようだ)プロ野球で熱援の余りいつも不祥事が出るのも面白いから見に行く筈のそれをエンジョイし得ないためで、こうした傾向の誌でも、エンジョイ(いたづらに享乐的な意味でなく、面白く楽しむ。健康なもの)する態度が大切だと思ふがどうでしょう。だから現実とフィクションとを混同する稚なさは日本人から追放しなければならぬと思うのです。そこへ行くと奇クの方々の方々は賢明でしょうから、かかる心配は潜越かもしれません。

オムツとオムツカバーの実験

奇妙な育児室

原 由貴子

(一)

おかげで、昨今のわが社の製品は評判もよく、日赤産院の御推奨もうけ、市場占有率も高いのとで大新聞のS紙(×月×日)産業欄にもとりあげられたことがございます。もちろん、ここにいたるまでの私どもの努力も一通りではありませんでした。材料、型、衛生的見地などからだけでなく、使用感などいろいろの面からの研究の成果だと、研究にたずさわった私たちもよろこんでおります。

一つの製品が世に出るまでに、その陰にいろいろの苦勞がかくされているものです。私

どもの製品にしても、婦人雑誌などの広告をはじめデパート、洋品店などで、あるいは医療用として薬局等を通して販売するについても、かなり力をそそぎましたが、こういったものは衛生用品でもあると同時に又赤ちゃんにとっても大事な毎日身につける衣料品を兼ねているので、やはり実際の使用に即した研究が心要で、そのための実験なども計画いたしました。

最初は、せめて数週間、できれば少くとも一カ月位の使用の状態を知りたいものだと考えましたが、ただ困ったことは使用する赤チ

ャン自身は、自分の意志を表現できないことです。そこで、女子医大の育児御専門の先生に御相談いたしました。実験のためのヒントやアイデアをお借りした結果、先生に顧問になっていただいて、一人、赤ちゃんの代りにまだ成長期にある、しかもある程度初歩の幼児心理学の理解できるという点で、十七、八才位の若い女性の方に赤ちゃん向きの同じ型と材料で新しく大型製品を作って使用してみていただいたらどうだろうかということになりました。

そんなわけで、材料を決めたり、新しく型

紙から作らねばなりませんので、着け心地よい製品に仕上げるために、種々のランジェリーメーカーに問い合わせたり、女学生向きの生理用品なども参考にしたりいたしました。そこまではよいのですが、いざ製品ができあがってテストの段階になり、使用の対象になっていただく方を探すととなると、なかなか適当な方が見あたりません。アルバイトをたのむことにして人を募集してみたのですが、なかなか適当な人がいませんし、又たまたまきていただいても、普通のアルバイトと違って、いざ内容をお話しすると、しりごみしてとても承知していただけません。とうとう先生の御親戚の高校へ行ってらっしゃる方をお願いすることになりました。

恵美子さんという十七才のお嬢さんで、セーラー服のよく似合う大柄の可愛いらしいお嬢さんです。健康な身に一月もの入院生活そのままの実験を続けることも大変ですが、御本人を説得する前に、まだ学校のある若いお嬢様なので御両親からなかなか御承諾いただけませんでした。世のお母様方の育児のために少しでもお役に立ちたいという私どもの熱意と、御紹介下さった先生のお口ぞえのおかげでやっとお許しができました。もちろん

私どもとしては、お礼は普通のアルバイト以上にさしあげることはいうまでもありません。

丁度この頃、ベビーフード（乳児食）を売り出そうとしている食品会社が共同研究を提案してきましたので、私どもと食品会社、先生方との三者共同による実験がこうして若いお嬢さんをモデルに始められることになったのです。（昭和××年の頃のこと、当時は今のようにナイロンやビニール張りの製品は一般に出まわって、ゴム製品全盛の時代でした。そして又わが社がその後発売するまで大人用——主として病人用——のものも市販されていませんでした。）

結婚のため昨年退職するまで私の勤務していた某ゴム製造会社製品部で行われたテストの模様を、当時のメモやノートをもとに、ここに綴ってみることにいたします。

（一）

女子医大の附属病院の一室です。まず最初使用に入る前にできるだけ実際の赤ちゃんに近い状態で着用していただくため、幼児の心理状態そのままを再現するのに暗示療法を用いて催眠状態から始めることになりました。

恵美子さんはセーラー服からネグリジェに着か

えさせられ、お薬がわたされると飲んだらできるだけ何も考えずのびのびした気持ちになるよう言われました。与えられた暗示を受け入れ、純粋な赤ちゃんの心になるには安定した精神状態でなければなりませんので精神的動揺を避けるためお母様にもくれぐれ御配慮いただき、御本人には前もってあまりくわしい内容はお話ししてありません。お布団や着がえなどは下着にいたるまでこちらでいっさいそろえて用意しておくから、別に何もお持ちにならなくともよいと申し上げてあるだけなので、ただ普通の入院生活ぐらいに考えて、素直に先生の指図に従うばかりです。

やがてお部屋が薄暗くなるとテープレコーダーが静かにまわり始め、催眠状態に入った恵美子さんの耳に新生児のうぶ声が響きます。

「オギャア、オギャア、ほーら、もうあなた、赤ちゃん。そうそう、赤ちゃんになったのですよ。」

昏睡状態の彼女の意識は、いつしか心の奥深く、あたたかいママのふところにいだかれ、乳房をふくんだかつての幼い日々へと時間を逆行していきます……。

こうして、どの位時間がたったのでしょうか。すっかり赤チャンの心になり切ってしまった時、彼女は再び新しい誕生を迎えたのです。

お誕生と同時にまずうぶ湯です。身につけていたものはすっかり脱がされ、生れた時のままの姿にされると清潔なタイル張りのお風呂場へ運ばれ、温かな湯気のたちのぼる中で赤チャンにもどったのびやかな十七才の白い裸身が香りのよいベビー用石鹸の泡ですっかり包まれます。やがて注意深く体のすみずみまで洗われた後、湯舟からあがった彼女の体は大きなバスタオルにくるまれ、看護婦さんのなれた手で全身にオリーブ油がすり込まれ、体重を精密に計られた後、またさつきと同じように催眠状態のままお布団のところまで運ばれました。

お部屋では、うぶ湯をつかう前に脱がされたものは、枕もとにあったネグリジェはじめ、スリッパやブラジャー、パンティなどの下着類からストッキングにいたるまですっかりどこかへかたづけられ、代りに若い女性向きの華やかなお布団の敷きのべられていた横には、まあ、どうでしょう、クリーム色のうぶ着や湯たんぽ、ガーゼの肌着などのベビー用品

と一緒に、幾組もていねいにたたまれた青い雪花模様のオシメから、可愛いレースのついた赤チャン用よりかなり大きめの真新しいおしめカバーまでちゃんと用意してあります。そっけない無地の病人用のビニール引のと違って、特にこの実験のために彼女の腰まわりにきちんとあわせて作られた、美しいぬいとりのある柔らかなピンクのベンベルグトリコット地にしなやかな上質の薄ゴム引おしめカバー……それが、看護婦さんの膝の上で可愛いレースをひるがえらせて大きな赤チャンを待っているのです。しかし彼女自身はそんなことは何も知らず、長いまつ毛の美しい眼を深く閉じ、可愛いらしい唇からやすらかな寝息をたててやすやすと眠っています。けれども、これも育児用品の大切な研究のためなので、止むを得ません。普通、新生児には巻きオムツなのですが、実際の排泄量を考えてみても、前もってゴム布や便器をいつでも使えるようにしてあれば別に心配はいらないといっても、豊かに成長した十七才の少女に巻きオムツを使用するのは一寸無理ですし、いくら催眠状態にあるといってもやはり動きが激しいので、こうして普通の前開き型が使われることになったのです。

曰

お部屋は暖房で充分温かく、うっすら汗ばむ位なので、彼女の腰をおおうものはバスタオル一枚ですが、風邪をひく心配は少しもありません。

「さ、オムツあてましょうね。アンヨひろげるのよ」

オムツカブレをふせぐためシッカロールが使われると、看護婦さんは彼女の両足を少しもたげ、いよいよオムツにとりかかります。お布団の上にレースでふちどられた派手なゴム引おしめカバーがひろげられ、しっとり甘い黄色のゴムの上に色とりどりのおしめが幾枚も重ねられると、お風呂から上ったままの姿で横たえられたお尻の下から半ば開かれた両足の間へ手ぎわよくオムツがあてがわれて行きます。丁度この時半ば意識をとりもどし、夢うつつのうちにお尻からヒンヤリあたる生々しいゴムの感融にふと眼を覚した恵美子は、緊張した空気の中で自分の身に何か起っているのに気づき、おどろきのあまり思わず体を固くして両足をちぢめましたが、次の瞬間、両足の間にあてがわれているものにはっと気づくと、はずかしさで体中の血が一度に顔へのぼり、頬が熱くなるのを感じました。

「どうしたの、何なの？……あら、イヤよ、嫌、嫌、イヤだわ……」
半分あてがいかけたおしめカバーをはさん

だま両膝を固く閉じ、肩をふるわせ、若い女性らしい羞恥心を全身にあらわして駄々をこねます。



「困ったわね。どうしても、オムツするのがイヤなの？ もうテスト始めなきゃならないのに。いう通りになるって、お約束だったでしょ」

「だって、あたし、まさか……。やっぱり羞しいんですもの……」

「わがままばかり言って、ほんとうにしょうのない子ね。だって、あなた、赤ちゃんなのよね、そうでしょ。だから、ちゃんとオムツしなきゃ駄目よ。いい子だから、じっとしててね。すぐすみますからね。いいこと」

「ひどいわ、ひどいわ、そんなの。許して勘忍して……」

ばたばた両足でもがいても無駄です。さっきのお薬のききめが残っているのか、体の力が抜け、赤ちゃん同様の無力な状態になっている彼女の精一杯の抗議もすっかり無視され、無理矢理に赤ちゃんがオムツをする時のような恰好にされると、もうすっかりあきらめたのか、そのままの姿勢で耳まで真赤になって顔をそむけ、眼をふせている恵美子へ情容赦なく派手なおしめカバーがあてがわれ、赤ちゃんの着せつけは続けられます。

もうこうなつては、いくらつらくとも我慢して、そのままオムツをされて行くより仕方がありません。赤ちゃんなので自分ではそれをはずせないからです。こうして、嫌がる彼女に無理矢理にオムツをあて、おしめとおしめの間に脱脂綿でつつんだ小型の不快感測定計（湿度計と体温計を組合せたもの）のメーターをはさみ込んで上からおしめカバーのホックをとめるとき、看護婦さんの頭の中に、かわいそうに、こんなにいやがる大きなお嬢さんにオムツをさせるなんて……せめて、オシメをもう少しへらしてあげられたらなあ……と、そんな考えがかすめて通るのでした。でも次の瞬間には、そういうわけにもいかないうからと、やっぱりおしめカバーの前ホックをはめつけ、「ごめんなさい、がまんしてネ」と紐を結ぶのでした。

こうしてオムツの装着が終ると、ブラジャーを外されたまま柔らかな素肌の上からガーゼの肌着、絹のベビー着と次々に着せられ、いよいよ大きな赤ちゃんがすっかりできあがりました。

「さあ、もうすっかりすんだのよ。具合、どう？ 若いお嬢さん向きに作られているから肌ざわりもいいでしょ。これからずっと、一

カ月ぐらい赤ちゃんとして暮すんだから、こうしてオムツあててなきやならないのよ。でも、もうそのまま濡らしちゃってもちっともかまわないのよ。そのためのテストなんだから、毎日きちんと、きまった時間にミルクビンでオッパイを飲んで、オムツ取り替えるのよ。でも、時間外でも、濡れたらいつでもすぐ取り替えてあげましょうね。あら、そうそう忘れるところだったわ。お涎掛けもしなくちゃ。ああ、そうそう、ちよっと待って。お母様がこれ、恵美子ちゃんに穿かせて下さいって、とどけて下さったのよ。どう？ やっぱり穿かせてあげましょうか」

お母様が、もし万一粗相しても大丈夫なようにお宅から女学生用のブルマースをお持ちになったので、念のため穿かされると、やがてキュウキュウというゴムの音だけとなり、ブルマースの裾からはみ出しているおしめのぞいてすっかり見えなくなりました。

ベビー服の上から可愛いお涎掛けをつけた、若くて美しいお嬢さんが、まるで本当の赤ちゃんのようにお尻をすっぽり派手なゴム引のおしめカバーで包まれ、お布団の白いシートの上で、恥かしげに身をもだえる姿に、さすが不思議な興奮を覚え、ベビー服の下で

太腿にあたるゴムのつよさを調節する看護婦さんの手に思わず力が入るのでした。

恵美子は普段穿いているパンティと違ってお尻から両腿の間にしっとりまつわるおしめカバーの異様に生々しい感融のため、しばらく身動きもできず、まつ毛の長い美しい眼をギュッと閉じて耐えていましたが、とうとうあ、あ……という小さな溜息とともに粗相をして、そのままオムツを濡らしてしまいました。こうして、一たんオムツが濡れると、もう我慢しきれず、あとはじっとりと温いオムツの中にすっかり身をゆだねてしまうのでした。

四

「ベビーの恵美子」

もう赤ちゃんです。ベビーです。

オムツもちゃんとあてました。

濡れたら替えてちょうだいネ。

もうブラジャーもいりません。

ストッキングもパンティも、

大きな赤ちゃん、オムツです。

もし、どうしてもするんなら

おしめカバーがとれてから。

こうしてテストが始まって数日たった日、

使用中のいろいろの育児用品や衣料品の間でメモやノートの記録は、その分量を増していきます。

「オギヤア、オギヤア……」

不快度数計の赤ランプがともり、ブザーの代りにテープにセットした泣声がひびきます。すぐ注射がうたれ、覚醒した彼女は、その意味をうったえます。

「違うの。オツパイ欲しいんじゃないの。お腹が張って、お尻が濡れて気持ちが悪いのよ」早速ベビー服の前が開かれ、今までピッチリあたっていたおしめカバーの前ホックがは

ずされると、内側のゴムがしっとり濡れて光っています。おやおやオムツがぐっしり。看護婦さんは手早くおしめを取替えます。

「少しお通じが悪いようね。じゃ、浣腸しましょうね。よくって？」

すぐ便器が引きよせられ、シーツの上にゴム布が敷かれると今度は浣腸です。看護婦さんの指はたっぷり液の入っている太いガラスの浣腸器をとり上げると、オムツをはずされお尻の下にゴム布を敷かれた恵美子の体を少しもたげ、便利な姿勢にします。

「体の力を静かに抜くのよ。はい、そうそ

梨花悠紀子逆吊り写真特集

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

うお利口さんですね。」

静かに伝わるなまぬるい異様な感触は、初めておしめカバーをあてがわれた、あの時以上に彼女の羞恥心をそそります。でも体の具合が悪いので仕方ありません。……無事浣腸が終り、お湯でしばったタオルできれいにふかれると、また元のようにお布団の上にひろげられたおしめカバーがあてがわれ、赤ちゃんにもどります……。

約一カ月にわたる実験もこうして成功のうちに終わりました。半流動食ばかりで固型食物は避けられていたにもかかわらず、恵美子の発育も体重の増加も正常で、赤ちゃんとしての成長率に換算しても上々でしたし、おしめカバーも従来の欠点がわかり、改良して欠点の少ないすぐれた製品とするための資料が得られ予想以上の成績でした。こうした研究が、私どもの製品の上に大きな影響を与えたのが、現在のわが社の営業成績になっているのです。

テストのために使用された製品は、そのまま恵美子さんのお宅に差し上げました。

(おわり)

× × ×

クロチルドの遍歴

〔十三人の女死刑囚〕 最終篇

佐 出 須 登

1

わたしはクロチルドです。わたしがどんな死刑マニヤであるか、誰も想像つかないでしょう。わたしは自分の欲望を十分に満足させました。その結果もういくらも生きられぬことになったのですが、後悔はしてません。

わたしは若い女性が死刑になるニュースを聞くと、心がおちつかなくなつて、欧州のどこであつてもすぐ飛んでゆき、その処刑の様子を書いた新聞や雑誌を読みふける。その最期が、ひどければひどいだけ興味はますのです。始めて電気イスについた女性の、電流が

通じている最中の写真を手に入れた日など、興奮のあまり眠られぬ位でした。

絞首台に立ち踏板が、グラリとはずれかけた時、ギロチンの穴に首をさし入れ、頭上の刃が動きかけた時、銃殺柱に縛られて隊長の「射て」の号令を聞いた時の女囚は、どんな気持ちで、どんなことを考えたろう。そしてこの直後、彼女たちはどんな風になつて死んでゆくだろう……。わたしはこんな事を、考えるだけで楽しくなるのです。

わたしは始めのうちは想像だけに止めておいた。だがナタリーは違ふのです。この十九

才のあどけない顔の彼女は、わたしに対し殺人のための旅行をすすめるのです。

「世の中にはきつとわたしたちと同趣味の人がいるわ、殺したい人や殺されたい人など、自殺なんか年に何万人もあるんだし、宗教上から自殺を思いとどまっている人はもっと多いわ。こう云つたSMマニヤのための秘密処刑場をさがしてあるかない。そして殺させてもらうのよ」

「でも、そんなことをして、捕まったら、自分が死刑にされちゃうわ」

「死刑！ ちつとも怖くないわ。獄舎暮らしは

ひどいでしょうが、今はスピード裁判がはやっているから、三カ月位でサッサと片付けられるわ。絞首刑なんか何ともない、せいぜい十五分よ。こんな話知ってる？ ある女死刑囚が二十分たってから引きおろされて、足が床についた時、息をふきかえしたの、それでもう一回やり直しになったんだけど、彼女曰く「絞首刑がこんなに気持ちのいいものとは知らなかった」だって。そして二度目は実にウツトリとした顔で死んだの」

「その話はわたしも知ってるわ、だけど死刑は絞首刑だけじゃないわ」

「ギロチンだって平気、一秒もかからないもの。フランス革命で死刑になったベルダンの三十六人は、十八才が最年長の処女ばかりだったけど、みんなピクニックにでも行くみたいにはしゃぎながら首を斬られたんだって。

わたしだったら、ふてくされた恰好で、さつさと階段をのぼるわ。そして思い切り遠くまで首をとばしてもらおうの。バスケットを飛びこす位にね、獄門台の上でもふんぞりかえってやる。銃殺なら隊員みんなにキスしてやるし、電気イスなら両手両脚全部に電極をつけてもらう。ガス室の時はみんな息のつづくまでがんばるけど、入ってすぐ深呼吸してあっ

さり死んでやる。絞首刑で気持ちがよかったら首を吊られたままバレーナーみたいに踊ろうかしら。ただ十分に欲望をはたすまでは死刑になりたくないわ」

「あきれた人ね。だけど、わたしも全く同意よ。賛成するわ」

ナタリーは全く恐ろしい女です。同志を集め、秘密処刑場もさがしました。二人のほかにピア、デビー、キム、ミッチィ、ミレーヌが同行します。

皆さんはわたしは気が狂っていると思うでしょう。どう思われてもかまわない。この旅行ほど生きがいを感じたものはありません。後日わたしの手記に名をつけてくれる人があったら、クロチルドの遍歴（処刑マニヤの栄え）とつけて下さい。

2

わたしたちは最初の目的地を訪れました。

特に名を秘す必要があるの、仮にA別荘と呼び、以後もこれに習います。

主人は三十才位の美しい人で、わたしたちを喜んで迎えてくれました。初対面でも同好者と思うと、少しも気がねしません。

「あなたたちは直接手を下したことは、まだないの？ それなら早速やってもらうわ。疑

うように悪いけど、もし密告されたらわたしの首がなくなることだもの、用心のためよ」

「その心配はいらないわ、それが目的で来たんですもの」

「では最初は刺激の弱いものから、やりましょう。どうかごゆっくり」

主人がベルを押すと、十七才位の全裸の美少女があらわれました。

「ブリギッテ、このお客さんのために死んでもらうわ」

少女はこっくりとうなずきます。あとについてきた二人の、ビキニの水着をつけた女が太い輪ゴムをのばし、少女の首にさっとかけると、たちまち頸は強く絞めつけられ、美しい顔はみるみる蒼白となって、どっと床にたおれ、両手でけんめいに喉をかきむしっていますが、ゴムは深く肉に食いこんでいるため爪もかからず、あっけなくあの世ゆき……わたしたちは、まばたきもせず、このすばらしい光景をみつめました。

「死刑を自ら望んでいるものと、そうでないのがあるわ。泣きわめきながら死ぬ方が面白いのだけれど、始めてというからね」

これからたずねたほかの所も、そうでしたが、十六才から三十才位までの二百人位の女

が収容されていました。このうち死刑志願者は三割位で、彼女たちは逃走防止の意味もあって全裸にされていました。たまに逃げるものがあったても、この近所では裸の女を見るとすぐこの屋敷につれてきて賞金をもらいうようになっているので、かえって惨殺されることになるのです。ビキニ姿の方は三十人位で、執行係をつとめているのですが、死刑になりたくなった時は水着を返上すればよく、また主人に水着をぬがされた時は、即ち死刑宣告ということになるのです。死刑囚が処刑係を襲って水着を奪いとれば、立場が逆になるというのですから、全く面白い規則です。

わたしたちは、何回か絞首刑を見物しました。何度みてもわたしたちの胸はわきたったのです。そしていよいよ十三人の女が与えられました。

はじめの五人は普通の絞首刑でしたが、あまり平凡なので、踏板からおとすかわり、逆に床から吊りあげるのです。するとこの方がジタバタもがく時間が長いのです。いつかナタリーが云った様にウットリと死ぬのは、あまりない様です。最後の五人は別な方法をやってみました。

スーザンは、口に綿をぎゅうぎゅうつめ、

鼻をつまんでやりました。こんな殺され方は、いくら覚悟の上でも、あまり馬鹿らしかったのか、かなり抵抗しましたが、十五分で死体となりました。

ザビーネは足の先から首まで、長いロープでグルグルまき、丁度みのむしの様にしてから、絞首台にヒョイとひっかけて息の根をとめました。

ポーラは背が高いので、絞首台からおとしでも足が地面についています。彼女は助かったと思ったようでしたが、これが面白いところで、足の下の地面を掘るのです。やがて足首が穴のなかで宙にうけばどうなるか、彼女の驚ろきを御想像下さい。

イベットは、足首で逆吊りとし、首にまいたロープに分銅を吊りました。逆さ絞首刑です。軽いものでも頸は容易に絞まることを発見しました。

最後のパトリシャは竿の先につけたロープを首にひっかけ、みんなで持ちあげると、彼女の身体は釣竿にかかった魚の様になってぶら下りました。『釣れた、吊れた！』と誰かが叫びます。

こうして十三人は簡単に死にました。生れ始めての殺人。それも相手にはっきりと意

識させ、死刑という形式で執行するのです。想像だけでは及びのつかない楽しさ、これでは自分の死刑と引きかえにしたって惜しくはありません。

3

次は斬首刑です。女たちはひとりづつ目かくしをしてしゃがみこみ、わたしたちはそのまわりを手を組んでぐるぐるまわりました。犠牲者の後に立ったのが誰か、あてれば許されるのですが、間違ったら即座に死刑です。子供の「かごめ、かごめ」と違って首が問題なのです。彼女たちの表情をみるだけでも愉快でした。

これが十三人になると、一応打ちきられ、いよいよ執行です。斬首といっても、ギロチン、大刀、斧、短刀とあるので何度みてもあきません。

ギロチンは全く確実な機械です。フランス革命で数万人を殺した時も、殆ど失敗がなかったとか。わたしたち初心者でも簡単に首がおちるのですから。ただエレエンの時は失敗で、首がおちぬどころか絶命にも至らず、わたしはその首をつかんで、ひっぱったり、ゆすぶったりすると、恐ろしい悲鳴をあげてもがきましたが、グルグルねじると遂にちぎれ

てしまいました。

大刀はまず主人が模範を示します。これは死刑希望者だったことありますが、さすがに鮮やかなもので、首をせいっぱいさしおべているのに、無造作にふりおろしたただけできれいに打ちおとしました。

二人目は臆病者で、ガタガタふるえておりどうするかとみていると、主人は「仕方がない、許してあげる」といいます。彼女がハッと狂喜する。その瞬間、スバリと首を刎ねました。拾いあげた首にはニッコリした表情がのこり、極楽往生を思わせました。

わたしもやってみましたが、一度できまる時の手ごたえといったら、もうたとえようがなく、「かつ」という頸骨のひびき。「ドオッ」と噴きでる血汐。マイがそうでしたが、フィリスの時はなかなか首がおちず、殺すのでさえ五度、完全に斬りはなすのには八度もかかりました。きちんと坐らせて首を打つだけでなく、逆吊り、いの吊り、えび吊りにしてバサリ、バサリと斬りおとすのもあり、興味はつきません。

斧はよほどうまくやらねば一度では成功しません。斧自体の重さで割に死ぬ率は多いのですが。ダナの時にしめがゆるんで逃げだ

したので、ナタリーが追っかけて斧をふりおろしたら、これが見事に決って一度で首がころがりました。しかし、クラウディアの如きは、死刑希望者で身うごきもしないで横たわっていたのに、十五度も失敗し遂には下腹にまでうちこまれる仕末。首がとれたのは、息絶えてからでした。はじめ収容としてた美女が、次第にもがき、のたうちまわるのを見るのは、また別な味がありました。

一番むずかしく、一番面白いのは、短刀で首を掻くことです。もがくのをしっかりおさえつけ、短刀を頸すじにあて一気に右に引きはらうと、「どおっ」と血汐が噴きでるので、ロッサナは喉にプスリとやっただけで、ショックもあったのか即死してしまいました。が、リリアンは刃が頸に食いこんでから絶命まで五分位かかり、その間わたしの身体の下でもがきつづけ、「うわあ」「キャア」「うーん」「ギャッ!」とよくもいろいろあるものだと思わせる各種の悲鳴をあげて、わたしを満足させてくれました。いよいよ首が胴をはなれた時、その斬口から「くやしーい」と云う声がでたように聞えました。

首を使つてのゲームも楽しく、砲丸投げならぬ生首投げ。おさげの髪をつかつてのハン

マー投げ。サッカーはすぐ首がいたむので、ラグビーの様に抱いて走ったり、バスケット・ボールをしてみたり……でも生首って案外重いものですね。

これら生首はきれいに洗って獄門台に梟けるのです。特に美しい首は防腐剤入りのアルコール漬けにして長くのこすとか。

「あなた方はみんな美しいわ、標本として残す価値があるから、誰か死にたくなったら、わたしの所に来てね。おのぞみの方法で死なせるから」

主人の別れの言葉をききながら、わたしたちは次の別荘への紹介状をふところに、この土地をあとにしたのでした。

4

絞首刑と斬首刑を経験して、まず初等科を終えたわたしたちは、今度は種々の惨刑を学びました。即ち火あぶり、ハリツケ、股裂きです。いずれも十三人づつ、十三は不吉な数といわれていますが、わたしたちには最も親しみのもてる数字です。

ハリツケ柱の十三人の内訳は、足をのばした十字型が三人、大の字型が七人、逆さ大の字が三人と、軽重の差がみられました。

十字の三人は、型の如く両脇腹から肩をめ



がけてズブリ、ズブリ。三度目で喉をかき切る簡単なものです。

大の字、即ち両脚を、せいっぱいにひらいた組は、この間を刺されてから下腹を、し

かも浅く刺すので、二十本位まで生きています。ズブリとやると血汐がぱっと飛び散って隣の、次に殺される女にかかります。両端から処刑していったので、丁度中央の女は両側

からの血汐を浴びて、処刑前に血まみれになっていました。

逆さ大の字は最も重刑で、槍は脇腹から股のつけ根へ突き刺さるのですが、二本刺しただけであとは放置するのです。お昼に処刑したのに夜になっても死に至らず、一晩中うめく声が、わたしたちの耳には子守歌の様になつかしく聞えました。しかも翌朝になっても二人が、三日目になっても一人が生きていた時の嬉しさ……惨刑の場合は、確実に死ななくては首はとられないのです。

火あぶりは直接焼かれる前に、煙のため窒息するのが多いといいますが、確かにその通りで、ガックリ首をたれた時、火を消して、死体をあらためてみると、火傷のあとはあまりないのです。ジャンヌ・ダークは死体の検死をうけ、明らかに女性であること、本人に誤らないことを確かめたと云いますが、焼けただれた死体では、こんなことはわからなかったでしょう。

わたしたちの執行したもののうち、変わったものを紹介しますと、ケイは熔解炉に投げこんだので、焰の色がちょっと変化しただけであっけなくおしまい。

■キャサリンは鉄の檻に入れて火の中に起重

機でおろし、三十分後引きあげてみると、赤く焼けた檻の中で白骨になっていました。

モイラは広場に立たせ、焼夷弾を打ちこむと、猛烈な焰が立ちのぼり、彼女は一瞬にして灰となるのです。

ジナは絞首台の下に火をたいて、その焰の中に身体がおちる様にしました。彼女の息の根をとめたのは、ロープが焰かわかりませんが、普通の絞首刑よりずっと良い眺めです。

グレースは絞首台に吊り、ジタバタしている身体に火のついた薪をおしつけてやりました。かなりもがいていたから、きつとあつかったのに違いありません。

メリーは首にロープをかけて薪の山の上に立たせ、これがくずれたら首が絞まる様にして火を点ずると、彼女は足首からジリジリ焼かれていましたが、やがて薪が焼けくずれ、下半身がスッポリ焰の中におち、同時に首が絞まります。薪が燃えつきた時、焼けのこった上半身が、尚も首を吊られた形でゆれているのは見事でした。

次は股裂きです。マーサの両脚を大きくひろげて二頭の馬に縛りつけ、むちをあてて別々の方向に走らせれば、女体はピシリと生木を裂く様に真二つです。彼女はこんな目にあ

わすより、せめて首を斬ってくれと泣き叫びましたが許されるわけはなく、絶叫と共にまっぴたつになりました。その首を斬りとって馬の尻尾に結ぶと、生首をブランブランふりながら、どこかに走り去って行きました。

二本の木を大きく曲げて両脚をしぼる。曲げた支えをとればこれまた血汐の雨がふり、次々と何人かが裂け死んでゆきました。

最後に残ったロンダとナディアを、互に向き合わせてたばねて縛りました。即ちロンダの右脚とナディアの左脚、同じく左脚と右脚という具合です。顔と顔、乳房と乳房がそして、下腹と下腹がくっつき合っています。

「ギャア！」 「うわあ！」

同時にふたつの悲鳴があがり、血汐の量もバラバラにとびちる内臓も、二人分あるわけです。こうして二人は四切れになったのです。その首はどちらも同じ側の木に逆さにくら下っています。ナタリーがとびだし、大刀をふるってその首をバサリ、バサリとたたきおとし、両手にぶらさげてもってきました。

5

思いきり楽しんだ何日かが過ぎ、明日はこのB荘ともお別れです。別れの宴をやってくれるというので、わたしたちは期待に胸をふ

くらませていました。屋敷のあちらこちらから長くつづく悲鳴があがっています。

いよいよ食堂に通されると、ところどころの台に、それぞれ一人の女が背を下にしてねかされ、四本の手足は台の脚に縛られてありました。このため腹部が上に大きくつきだす恰好となり、おへそにローソクがたてられています。一人がそのローソクを倒したところ即座にローソクのかわりナイフがブスリとつき立てられ、部屋の隅にすてられました。

食堂の四隅に四人の女が絞首刑となって吊られ、大テーブルの中央にはおそろく釜うでにされたのか、全身からもうもうと湯気をたてた美女が大血の上に、野菜と共にのせられています。わたしたちの前には蓋つきの皿がおかれて、あけてみると皿の上にはまだ斬りたての、生々しい首がのっています。スープがわりに血を吸えというのでしょうか。

釜うでの美女も喉から足のつけ根まで切り裂かれ、わたしたちの間にまわされました。どれでも好きな内臓を自分の皿にとり分けるのですが、おかわりもあると云うのです。

「生のものはないの？」

「おのぞみなら、どれでもよりどりよ」

「ビキニ嬢でもいいの？」

ナタリーが一人を指さします。主人はその女のブラジャーと、パンティをはぎとりました。即ち死刑宣告です。たちまちほかのビキニ嬢がよってたかって、彼女を大皿の上におさえつけ、喉から一気に脚のつけ根まで切り裂きます。おびただしい血汐が噴きだして大皿を満たしました。

このすばらしい料理のあとデザートを頼むと、主人はまた近くの一人を捕えました。

そのマリサは、全身に油脂をたっぷりぬられ、脚の間にローソクをはさんで火をつけます。火が次第にもえて、身体にうつったとたん、彼女の全身が、ぱあっと燃えあがりました。女体すべてが一本のタイマツの様に。すばらしい明るさで、すべてが燃えきった時、あとには白骨の小片が残っただけでした。

食事が終ってベランダに出ます。ふと庭の方をみると、赤い風車がまわっていました。直径二メートルもある大きなものです。それがいかにも重々しく、ゆっくりゆっくりと……よくみると何かぶらさげています。いったい何でしょう、大きな十字架の様な四片の羽根に、何かが縛りつけられています。

やがてライトがあてられ、その光の中に一枚の羽根が浮きでました。それに縛りつけら

れてあるのは、殆どつけ根から斬られた人間の脚でした。次の羽根にもスラリとした、明らかに女性の足です。尚もおそろしい十字架はまわり、三枚目は無造作に二本たばねた腕ではないでしょうか。そして最後に見えるのは、ブロンドの髪をふりみだした、美女の生首だったのです。

「ミレーヌ！」

わたしたちはいっせいに叫びました。急に姿が見えなくなったのも道理、彼女は無惨な晒しものとなったのです。

食堂のテーブルの、あの皿の上に胴体だけがのっけていて、生々しい五つの斬口が強く目を射ます。おへソには勿論ローソクが……「わたし彼女が気に入ったの、それで死んでもらったのよ」

主人が平然と云います。しかしこの眺めがあまりすばらしかったので、仲間が一人減ったさびしさは少しも感じません。そのためつい、ミレーヌが首と四肢と、どちらが先に斬りおとされたのか、聞くのを忘れてしまいました。わたしたちは二十二年の生涯を終ったミレーヌの胴体にお別れのキスをしました。

6

C地に行く途中、わたしたちは自殺クラブ

によりました。これは何人か車座になって、一発だけ入ったピストルの輪胴を一回転させてから自分にあてて射つのです。弾の出る率は常に六分の一で、射つ場所も額や心臓でなく腹や脚など次々と変えるのです。こうしてぐるぐるまわすうち、いつかは弾が出るわけで、わたしたちが見学した時は、ジョーンという女がおへソに射ちこみ、かなり長い間苦しんでから死にました。

C地で面白いのは、死刑になる女はその方法を自分でえらぶのです。目かくしをして、燃えさかる火の中の、番号のついた焼きごてを一本とり、それは主人の手によって彼女たちの背中におされます。肉の焼ける臭と共に気の弱いのはそのまま気絶するほどですが、この番号が自分にはわからないというのが興味をひきました。他人に読んでもらい、処刑番号表とてらしあわせて、やっと自分の刑を知るのです。絞首や斬首ならとにかく、惨刑と知った時の彼女たちの表情をみるのは、全く楽しいものでした。

シャーリィは投下の刑、崖からポイと投げすてられ、悲鳴が長く尾をひいてハタと絶える。彼女が粉々に砕けた瞬間です。

ジョーンは砂浜に首だけだして埋め、あつい

日ざしに照りつけます。彼女は必死に水を求め、ピアがコップに水をくんで目の前におきました。いくら首をのばしてもとどかず、空しく見ているだけ、この心理的拷問は見事でした。やがてカラカラに乾いて死ぬのです。

ダイアンは四肢を大きくひろげ杭で止め、ある程度乾くと裏がえしして背中を陽にあてる。こうして三日後には魚の干物ならぬ、美女の干物ができあがりました。

生き埋めも何人かやりましたが、モナは穴の底に枯草を敷きつめた上にねかし、上からも枯草をのせてから砂をかけました。こうすると空気が残るので長く生きられます。わたしたちは、その上に薪をつんで火をつけました。即ちむし焼美女の製造です。

エバは塩の箱に入れ、上からもたっぷりふりかけて蓋をします。いつ彼女が死んだか知りませんが、美女の塩漬けです。

ジュリアは等身大のガラス箱に入れ、アルコールを注ぐと間もなくいっばいになり、溺れ死ぬのをガラスを通じてゆっくり見物しました。標本としても見事な身体です。

ヒルデは冷凍室に入れて霧をふきかける。たちまち凍りつくのを何度もくりかえし、冷凍マグロならぬ冷凍美女にしてやりました。

エルザは冷凍室内のガラス箱に入れ、水を太股のあたりまで注ぎます。この水が凍るともう身うごきもできず、全身に寒気のみか激痛がたらぬきます。次に下腹部まで水を満たすとこれがまた凍る。次は乳房まで、首までとふやし、息絶えたと箱いっばいにして、哀れ彼女は花氷ならぬ、氷柱の美女となるのです。再びあらわれることはないでしょう。

ヴァージニヤは無数の穴のあいたガラス箱に入れ、この穴から長い針で刺すのです。中世の頃貴族の女性に対する刑として、人形をかたどった鉄の箱に入れて刺し殺す「鉄の処女」があるのを知っています。この場合中の様子は見えず、死体も外に出さずに処分すると云いますが、わたしたちの「ガラス娘」はどこでも好きなところを狙えるし、苦悶のさまが見えるだけ、はるかにまさっています。わたしは女性にとって最も敏感な乳房の先端を刺してやりました。みんなて千本も刺すと完全な死体となっていました。

このほか印象にのこったのは、上下平行におかれた二枚の鉄板に、オードリイとタイナをお互に向きあう様に縛りつけ、機械を動かすと、鉄板は一枚は下にさがり、一枚は上に上がり、やがて二人の乳房と乳房、腹部と腹

部がピッタリくっつき、キュウキュウとお互いに押し潰さんばかりになるのです。

十分に苦しめておいてから、再びひきはなし、また押しあわせ。五―六回楽しんでから最後に大きくはなし、猛烈な勢でぶつかり合わせると、鉄と鉄のうち合うすさまじい音と共に、二人はペチャンコに押し潰され、粉みじんになって消え去り、あとにはひき肉の様なものがいくらか残っただけでした。

7

特筆しなくてはならぬのは、ルーレットゲームです。一台のルーレットのまわりに緊張のため蒼ざめた三十六人の美女が座っています。それぞれ番号がついていて、球のおちこんだ穴と同じ番号の女が死刑になるのです。

わたしが球を投げると皆が首をのばしてのぞきこみます。やがて球はコロコロと十四番におちりました。ほっとする三十五人、そしてガックリとうなだれる一人。無理もありません、大金を得ずして生命を失うのですから。「どうして殺すの?」

「もう一度投げるのよ、今度の番号で死刑の方法が決まるの、その表はここにあるわ」

つまり一番は絞首刑、二番はギロチン、三番火あぶりという風に決っているのです。球

は八番で止まり、窒息させる刑です。

四人に四肢をおさえられた二十才位のマリ
ーの鼻孔に、わたしは薄紙を水にぬらし、二
枚三枚と重ねてゆきました。次第に息がつか
まり、顔面は紅潮し、激しく身体をふるわせま
したが、四人の力をはねかえすには至らず、
顔は次第に蒼ざめ、鼻孔は大きくピクピクと
あえぎます。何度やっても相変らず面白いも
のでした。やがて手足が運動の意志をやめ、
かわりに痙攣がきて遂に死体となるのです。
欠番は直ちに補充されゲーム再開です。

ミッチイは大刀による斬首の刑をあてまし
たが、その女はガタガタふるえており、なか
なか狙いがつきません。ニヤリとしたミッチ
イはその女の尻をけとばすと、ピョンと飛び
あがり首がのびました。そこを狙って斬りつ
け、鮮やかに首を刎ねあげます。ナタリーも
犠牲者をねじふせて短刀で何の苦もなく首を
とり、デビーは十六才位の処女の左乳房にピ
ストルを射ちこんで、あっけなくあの世に送
りこみます。面白いのはピアの投じた球によ
って、むし焼きとなったアンの最期です。

アンは大釜を見た時、てっきり釜うでと思
ったのでしよう、なかに湯も水も入ってない
ので不思議そうな顔をしながら、中に投げこ

まれ蓋をされ、外から火をたかれました。次
第にあつくなってくるなかで、アンはもがき
まわります。釜にふれた肌はたちまち焼きつ
いたことでしょう。外からみるとその釜がい
まにもころげおちそうに動き、なかの苦しみ
を想像するだけで胸がおどります。やがて釜
は遂に火の上に静止しました。

蓋をとってみると、哀れアンは世にも無惨
な最期です。身体じゅう焼け焦げ、目は大き
くみひらいたまま、どんなに苦しんだかは一
目でわかりました。焼けただれた死体をはが
すと、底にコップ一杯ほどのドロリとした液
体がたまっています。これは何でしょう、二
十一才の美しい女体からにじみでた脂か血か
汗か、それとも涙も含まれているのか。死体
は外にすてられましたが、近よってきた野犬
でさえ悲鳴をあげて逃げたほどのすさまじさ
と云えば、御想像がつくでしょう。

続いてキムの投じた球は、0番におちまし
た。この番号の女はなく、しかもいい気味だ
といわんばかりの顔でこちらを見えています。
0番と00番は胴元がとる規則、すると……

そうです、この場合球を投じたキムが死刑
になるのです。気絶せんばかりに驚き、あわ
てて逃げだそうとしてもだめ、今度は自分の

刑を決める球を投げねばなりません。

ふるえる手から投げられた球は、今度は00
番に入りました。これは無罪なのでしょうか
？ いや、水も食物も与えない刑でした。

「いちばんひどいのは0番よ。これは水は与
えられるの。結局は何十日もかかって餓死す
るわけね。水もなければ三日で片附くわ」

主人が冷く宣告すると、キムはすべての衣
類をはぎとられ、両脇をビキニ娘にとられて
引たてられて行きました。

「面白いゲームね、スリル満点だわ」

わたしたちは尚もゲームをつづけ、次々と
美女を殺しました。一度球が0番におちそう
になり、わたしをヒヤリとさせましたが、幸
い隣の穴におちました。

四日目の朝、キムが死んだ報告を受け、彼
女の閉じこめられた地下室に行ってみると、
哀れ二十三才の女体はカラカラに乾いていま
す。人間に水分がどんなに大切かがわかりま
した。透きとおる様な皮膚はきれいなめし
て本のカバーにし、首は剥製にすると云って
いました。

「おへソはどうするの？」

「寶石をはめこんでスタンドの笠にするわ、
いい考えでしょう」

わたしたちはこんな愉快な言葉を聞いたことがありません。さっそく皮を剥ぐ手伝いをしたのでした。

8

五人になったわたしたちは、更にD館へ紹介され、まず同時死刑を見物しました。十三人の美女が絞首台、ギロチン、十字架など種々なところに縛られており、主人がボタンを押すと、全部が異なった方法で死ぬというのです。こうして、それぞれ悲鳴を一声のこして息絶えた十三人の死にざまを、わたしたちはひとつひとつまわって歩きました。

絞首台からぶらさがったものの、ギロチンで首を刎ねられたもの、槍で串刺しのもの、短刀で乳房を突かれ、銃弾をうけ、火焰をあびて黒焦げ、熱湯の中におちる、更に撲殺、圧殺、股裂き、生き埋め、粉碎と並び、最後の女は腹部から両断されていました。

次に主人はあらたに十三人の女たちをビキニ娘に捕まえさせ、庭につれてゆきます。女たちはぶるぶるふるえていましたが、その怖れ方が普通でないのです、わたしたちは期待に胸をふくらませてついに行きました。

庭の隅に大きな檻があり、数頭の虎が飼われています。主人は今捕えてきた女たちを、

投げこむ様に命じます。悲鳴はたちまち絶えて、女たちはまたたくまに食われてしまいました。はらわたが一番おいしいのか、どの虎もふくよかな腹部を真先に食い破ります。首がふたつだけのこり、ゴロゴロころがされておもちゃになっています。

人間が食われる光景は想像もしなかったことで、さぞやわたしたちの目はいきいきと輝やいていたことでしょう。わたしたちが気に入ったのを見た主人は、ビキニの一人を捕え檻に入れます。これまたあつという間にむさぼり食われ、血にまみれズタズタになったブラジャーとパンティを残したけでした。

今度は十三人を裏庭に放ち、ブルトナーで追いまわします。けんめいに逃げてもひとり、またひとり紙の様にのされ、地面にすり潰されてしまうのです。

次の組は自動小銃で射ち殺すのです。わたしはグロリヤを狙って一連射すると、見事首根に命中し、血しぶきと共に首がふつとびました。文字通り「射ち」おとしたわけでした。

このほかわたしたちをもてなすため、絞首刑、斬首刑など十三種の死刑が行なわれました。最も平凡な絞首刑でも、十分位で往生するものもあれば、三十分以上もがくものもあ

る、何度やっても決してあきません。処刑が終って、テーブルの上に並べられた生首の数は、もう百を越えました。

撲殺の刑で死ぬまで撲りつづけるのはなかなか大変で、苦しみは十分に与えることはできても、こっちがしびれてしまいます。このため二組に分けてお互にやらせることにしました。即ち一定時間のうちに相手を撲り殺さなくては、今度は自分が撲られる番になるのです。この撲殺トーナメントで誰が優勝するか賭をやり、勝ったデビーがその優勝者を撲り殺しました。

刺殺の刑はちょっと変わっていて、十三人を谷底に四肢をひろげて縛りつけ、わたしたちは崖の上から槍を投げるのです。身うごきもできぬままじっと上を見つめている美女の一人を狙って、わたしは一本の槍をとり、さつと放りました。惜しくも首すじすれに立ちましたが、彼女はの時ヒヤリとしたでしようか、それとも喉に命中して即死したかたでしようか。

てんでに槍を投げると、あちらこちらから悲鳴があがり、運の良いのは一本で即死しますが、五本も刺さってまだ死ねないのや、或は狙った様に、おへそに命中するのもありま

す。こうして二百本も投げると一応中止し、下におりて確実に死んだ五人の首をとりました。最高十九本も刺さり、まるで針ねずみの様になった女もおります。命中ゼロの四人は別な刑を与えるため引きあげ、死にきれないでいる四人には、再び二百本が雨とふり、すべて針ねずみと化しました。

引きあげた四人は、助かったかと一安心しましたがさにあらず、まず一人がつきおとされ、岩のトンがった所に喉があたり、まるで刃物で切った様に首がスッパリと切れ、血しぶきの消えたあとを見れば、首はその岩棚の上にチョコンとのっかり、胴体はそのまま地上に激突です。

二人目は穂先を上にもつけて立てた槍の真上におち、腹から背中までズブリとつき通りました。この槍の柄を木の枝に縛りつけ、もずの早にえみたいにして晒されました。

三人目はギロチンの刃をまたぐ様におち、スカリとおへソのあたりまで裂け、見事文句のつけようのない即死です。

最後の一人は槍を股の間にはさんでおとされ、柄が地上にあたる反動で女体は喉まで串刺しです。「ギャア」と恐ろしい悲鳴をのこしてあの世に去って行きました。

9

賭もいろいろやりました。十三人の女をそれぞれ横木につかまらせてからロープを首にかけ足台をはずす。手をはなせば絞首刑になるので、必死につかまっても次第につかれて手をはなし、次々と死んでゆく。誰が最後まで残るかという賭。

十三人でグラウンドを一周させ、ビリになった女の首をとり、残る十二人でもう一回。これでまた一人が首を斬られ三度目は十一人。こうして十二回を終って一人になってしまいうゲーム。これこそ死のダービーでしょう。

十三人の美女決闘トーナメント。最後に生首を十二集めたのが勝というのが一番見ごたえありました。首を斬りおとされても、尚も相手の下で二度三度ともがくものもいます。これについては別の機会に話します。

こんな賭が何回も行なわれ、的中者が、その優勝者を好きな方法で殺すことができるのです。わたしも何度か勝ちました。

次のゲームで集められた十三人のうち、すばらしい美女がいました。その脚のスラリとしていることといたら、美人と自称しているわたしたちの誰もが及びもつきません。

「彼女の名はフランソアーズ。もう二十四才

だけど、ミスD館よ」

ビキニ娘は二人づつ組んで、一人の裸女を近くの泥沼につれてゆき、脚を一本づつつかんで逆さに吊るし、あっという間に泥の中につつこみました。もがいてもあばれても、次々と遂に二十六本の美しい脚が、泥の中から逆さにニューと立つのです。一種の溺死の刑ですが、これも面白いものでした。ぶるぶるともがく身体、その苦しみが終われば、女体は大根でもぬく様に引きぬかれ、ドサリと投げだされます。鼻口だけでなく目にも耳にもいっぱいの泥……

「あんたたちも、洗うの手伝ってね。どれでもお好きなのをあげるから」

こんな話のうちにも十二本の大根、いや十二人の女体がひきぬかれ、あと一人です。

「やれやれ、やっとうたばったわ」

ぐいとひっこぬいてドサリ。フランソアーズの変りはた姿です。こうして簡単な、そして惨酷な、しかし愉快なゲームは終わりました。それにしても実に気前よく殺させてくれたもので、もう十三人しか残っていません。いよいよ最後のゲームです。

これは十三人を一列に並べ、遠くから矢を射るのです。目標はおへソで、命中したらそ

の女の首をもらえるところのこと。

ピアが真先に弓をとり、ひょうと放ちましたが、惜しくも目標のすこし下です。

「さんねん、もうちょっとだったわ」

次のデビーは右肩口を射て引き下がり、ナタリは左股、わたしは右の乳房、ミッチイはピアよりも更に下と、かわるがわる射つうち、とうとう二十本目にナタリが命中させました。もうとつくに死んでいたのに、喜々として走りより、いかにもなれた手つきで首をかききって帰ってきました。

二人目は十五本目にピア、三人目は二十六本目にわたしとゲームをつづけ、早くも最後の一人です。射手はデビー、すでに三つの首をあげており

これをとれば優勝です。

矢は喉にグサリと、羽根もかくれるほどつ

きささり、二三度ピクピク唇をふるわせたかと思うと、ガックリ首をたれました。即死です。この女にとっては幸い

でしたが……。

「一矢で即死させた時は射手に責任をとってもらうのよ」

と女主人。つまりデビーは十四人目の的にならねばならないのです。わたしたちは面白がってデビーを裸かにすると、即死した女の隣に縛りつけました。

デビーに対してピアが真先に射ると、見事おへソに命中です。悲鳴をあげてもがき苦しむデビーをよそにわたしたちは殊勲のピアに握手を求めました。デビーにとって誠に不運なことに命中すれば矢を射るのは終で、そのままにして放置されるのです。確実に絶命するまで首をとることは許されません。



「ちょっとかわいそうじゃない、もう三時間になるのにまだ生きてるわ」

「そんな弱気をだしちゃだめよ」

それでも親友のことなので、特別の慈悲として、四人で一本づつ射てやることにしました。その結果デビーは、情けの矢を最初の矢を中心として、上下左右に射ちこまれ、ようやく息を引き取りました。

ピアが首を刎ねるのを見ながら、わたしたちは何とも云えぬ興奮を味わいました。ミレーヌやキムの時と異なり、今日こそ自分の友達を自分たちの手で殺したのです。

10

わたしたちの旅行もいよいよ最後の目的地につきました。シルビヤという二十五才の美女がこの主人です。部屋に通されると例によってビキニ姿の二人が全裸の一人をひっそらえ、わたしたちの目の前で絞首刑にしました。これがお茶がわりなのでしょう。哀れな女は両足をバタバタさせていましたが、あまり長い間ではありません。

「十一分でおさらばね、早い方だわ」

ナタリーは、ちゅんと時間をはかっています。全く感心させられる十九才ではありませんか。実はわたしもはかっていたが……

次はお菓子がわりの処刑で、二台の回転のこぎりが一台は早く、一台はおそくまわっています。多分首を斬りとるのでしょう。また大きな錐がぐるぐる動いているのは、身体に穴をあけるつもりなのか、それに左右にゆれながら少しづつ降りてくる斧があります。

ドロレスという女が、ゆっくり回転しているのこぎりの刃に首をおしつけられます。どうせ死ぬのなら、早くまわっている方を願ったでしょうに、もがくのも空しく刃が頸にふれ、恐ろしい叫びと共に血汐が霧の様にとび刃は肉に食いこんでゆきます。やがて骨に達したのか、ちがった音をたて、五分後首がゴトリとこがりました。執行にあたったビキニ嬢は、死体をX字型にねかし、両脚の間に首をおいてわたしたちに一礼します。

「早い方だと三十秒位で片附くのよ。首ばかりでなく、おなかから斬ることもあるわ。いろいろお見せしましょう」

十七才のジャクリーヌ、二十才のテリー、二十六才のエレオノラの三人が床に横たえられ、ジャクリーヌに対しては斧が左右に振り子の様にゆれながら首すじを狙い、エレオノラも同じく斧でしたが、これは腹部を断とうとし、テリーは回転もみぎりで同様腹部を狙ら

われています。いずれも長い間苦痛と恐怖と戦かねばならぬのでしょう。

じりじりと刃が三人の上に近づきます。目をあけているかぎり、鋭い刃をもった斧や錐が、ゆっくりゆっくりおりてくるのを見なくてはならず、そうかといって目をつぶれば、恐怖は更に増すでしょう。

テリーの悲鳴があがりました。錐の先が肉体にくれたのです。しかもまさしくおへソの中央に。血汐がたまり、こぼれおちます。その上身体に食いこむ速度はずっとおそく、一分に一ミリ位となり、完全に刺しとめるまでにはどの位かかることでしょう。

続いてエレオノラの口からも苦鳴がもれ、雪をあざむく下腹にすっと赤い線が画かれます。それは次第に太くなり、血汐がにじみだしました。美しい彼女が、このふくよかな腹部から胴切りになるのだと思うと、嬉しさのあまりいても立ってもいられぬ思いです。

ジャクリーヌの首にも刃がせまり、とうとう僅かながら皮膚を切りました。「もうどんなことをしても助からないのだ、それなら」おそらくこんな風に決心したのか、次に斧が大きく動いて再び首すじに近づいた時、ジャクリーヌは思いきって首をせいっぱい上に

さしのべました。すさまじい激痛に耐えながら、けなげにも刃に押しあてていると、数秒後刃はザックリと右の頸動脈を一気に断ちきり、血汐を二メートルもふきあげて、若きジャクリヌは一瞬にして絶命しました。

「油断してたわ、だけど勇敢な子ね」

シルビヤがかけよりましたがもうおそく、不満そうな顔をしながら、この処女の下腹を切り裂き、血汐をコップに、内臓を皿にのせてもってきます。

ほかの二人はさぞうらやましく思ったことでしょう。いずれも腹部では少しあげた位では即死できませんから。即死どころか、テリーが完全に床まで刺しとめられるのに、三時間かかりましたが、まだ生きています。エレオノラに至っては、更に速度をゆるめられたので、まだまだ死ぬそうもありません。

「これで場所や方向を変えると、何種類もできるのよ。とりあえずこれだけお見せするけど、お気に召した？」

「ありがとう、十分に満足したわ。ああやうとテリーが、おだぶつになったようね」

興奮は今迄にくらべて決して劣りません。

11

お茶とお菓子がすめば、いよいよ正式の食

事です。広い部屋の四方に五十枚ばかりの肖像画がかけられ、柱のボタンをおすと、その一枚の上のランプがつかます。その画の女が死刑になるわけで、処刑方法は画の裏に書いてあるというしくみです。

わたしは十六才のサンドラというかわいい少女をあてました。斧による斬首です、彼女は静かにブロンドの首を台上にさしのべ、

「この姿勢でいいの？ お客様」

これが最後の言葉です。わたしはゆっくり斧をふりあげ、はしとふりおろすと、あどけない少女の首は、何の苦もなく胴体をはなれます。二人目は絞首台に追いあげ、三人目は股裂きにして内臓を拾う。ただ面白かったのはピアが双生児をひきあてたことで、その刑は「重ねておいて四つにする」というのです。ピーナッツの様によく似た二人を、腹と腹を合わせてねかし、ピアが大刀をふりおろす。首尾よく四つになるまで、実に三十六回も斬りつけねばなりませんでした。

デボラは優雅という形容が、ぴったりくる女性です。さすが殺しにあげくれているマニヤも、彼女には手をだせないできたのですが、明日で三十才になる以上、今日のうちに片付けねばならぬことになりました。

デボラは静かに床に横たわります。わたしはその身体の上に、首だけ出るようにして、石炭を山の如く積み、一番上に真赤に焼けたのをひとつのせました。よく燃える様におおいでやると、火は次第におこってきて熱気がデボラを襲います。はじめはあたたかく、だんだんあつく、そして猛烈に。

さすがのデボラも顔が苦痛にゆがんでいきます。しかしいくらもがいてもぬけだすことは出来ません。とうとうむし焼きになって死んでゆきました。首だけが残りましたが、これはあらためて石炭の山の上にのせ、今度は下からたいて完全に灰にしてやりました。

ピアが何回目かのボタンを押すと、鏡の上にランプがつかしました。

「あら、鏡じゃないの。すると！」

さすがはピア、すぐに自分が死ぬことになったと知り、服をぬぎながら云います。

「いいわ、もう十分に殺したし、今さら逃げもかくれもしないわ。ところでどんな死に方かしら、打首か絞首刑なら良いけど」

鏡の裏をかえしてみると粉碎の刑とありました。いったいどうされるのでしょうか。ピアは巨大なミキサーのところにつれられてゆきました。

「この中に入るの？ 首まで粉々にしてしま
うの？ いやだわ」

さすがのピアも、こんな目に合うとは思っ
ていなかった。顔色がさっと蒼ざめまし
た。ビキニ嬢は返事のかわり、背中をどんと
ついた。ピアはまさかさまにその中に
おちこみます。続いてモーターのスイッチが
おされました。

鋭い刃をもった長さ二メートルもある鋼鉄
の刃が、一分間二千回転ものの早さで、百五
十センチ、四十五キロの彼女をたたいたので
すから、ひとたまりもありません。悲鳴をあ
げる間もなくピアの美しい身体は、あっと云
う間にズタズタになり、それがドロドロの赤
い液体となって底の方でかきまわされている
のです。

「人間の身体の八十％は水分よ、これを見れ
ば、それが証明できるわね」

コックをひねると、赤い液体が流れだしま
す。主人はそれをコップにとってわたしたち
にすすめます。ピアの身体最後の一滴まで
しぼりぬいたジュース。血汐だけでなく骨も
肉も含まれているのです。あまりおいしかっ
たので、わたしたちは何杯もおかわりをしま
した。ピアはこうしてこの世から消えうせま

したが、わたしたちの血となり、肉となって
くれることでしょう。彼女ももって冥すべき
です。

12

わたしたちの旅も、もう終らねばなりませ
ん。この屋敷に別れをつげれば、二度とこん
な興奮は味わえないでしょう。ナタリーとミ
ッチイと三人で、いっそここの主人になろう
という相談をしました。

運のつきか、夢にも知らぬシルビヤは、翌
日近くの噴火山にさそってくれました。まだ
煙を噴いており、底には熔岩も見えるところ
と。ここに女を投げこむと云うのです。

わたしたちは山にのぼり、火口に女を放り
こみます。シルビヤが落ちてゆく様子を見よ
うとかがみこんだ時、ナタリーは岩のかけら
をつかみ、後頭部を一撃し気絶させます。

シルビヤが息をふきかえた時、彼女は自
分が全裸にされているのに気がついて、たち
まち自分の運命を知りました。

「なぜなの？ ピアの仇討ちなの？」

「ピア？ ああ、そんなこと忘れてたわ、た
だあんたを殺したくなっただけ。今日から、
わたしたちが屋敷の主人よ」

わたしたちはシルビヤを抱きかかえ、火口

に投げこむと、彼女は前の犠牲者のあとを追
う様に、あっちにぶつかり、こっちにぶつか
りしながら地球の中心にむかっておちてゆき
ます。手足をバタバタさせていたので、熔岩
の中におちるまで生きていたことがわかりま
した。熔岩は彼女を苦もなく飲みこみます。

屋敷へ帰ると、わたしとミッチイで、ナタ
リーをつかまえ服をはぎとりました。

「どうしたの？ わたしを死刑にするの？」

「御名答。年貢のおさめ時よ。さあ、あきら
めておとなしくしなさい」

「いやよ、助けて。わたしまだ殺したりない
わ。あと二百人位殺してからにして」

「もうそんなに殺させるところないわ、あな
たも、この道のベテランでしょう」

「お願いよ、あきらめるから、そのかわり絞
首か斬首にして。苦しむのはまっぴらよ」

「ずい分虫がいいのね、さんざん楽しんだく
せに。ひどく苦しんでから死ぬのよ」

さすがのナタリーも自分が殺されるのは有
難くない様です。わたしはその脚を大きくひ
ろげて、足首を床に縛りつけ、手は天井にと
めました。脚の間にはローソクをおいて、彼
女の美しい身体がその熱のためだえ苦しむ
のを眺めました。ローソクが短かくなると、

下に台をおいて苦しみを続けます。

一方ミッチイも別なローソクでナタリーの乳房の先端や喉、鼻、耳を焼き、さらに彼女の身体にアルコールをぬって火をつけます。ナタリーは一瞬間と化してもえあがりませんが、あまり長い間ではありません。それでも皮膚は見事に焼けたされました。

アルコールの次は黄燐です。乳房や下腹にぬりかため放置すると、次第に温度があがって発火点に達し、燃えだします。これがあつい火なら却って苦痛は少いのですが、低い温度でジリジリ焼くのは実に効果的でした。身体をふるわせて泣きわめくナタリー。その十年の生涯は、いま終ろうとしています。もう乳房は焼けおち、おへソにもポツカリ穴があき、下腹にいたってはふた目とみられる惨状で、しかも何よりも愉快なのは、まだ生きていることでした。

ナタリーは最後まで早く首を斬ってくれと頼んでいました。しかしその願いがなかったのは翌朝でした。それでも親友だけに、ずいぶん早く苦しみを止めてやったのです。

13

わたしたちの話はこれで終りです。しかしわたしは運が悪く、屋敷の主人となった喜び

は長くありませんでした。

わたしたちは突然警察に襲われたのです。頼みのミッチイは、折悪しく外出中で、わたしはビキニ嬢たちをけしかけて対戦しましたが、もはや運のつきと知って屋敷に火をつけ、残っていた百人ばかりの女を焼き殺しました。美しい女が火に追われて、髪の毛をふりみだしながら逃げてくるのはすばらしい眺めです。それを槍と銃で追い帰したり、突き殺したり、この世における最後の楽しみを十分に味わいました。

明日わたしとミッチイに判決が下ります。ビキニ嬢たちのうち、すでに死んだものは足首でもって逆吊りにして晒され、捕えられたものはすべて、打首の上獄門に梃けられました。わたしたちはどんな刑をうけるのでしょうか。バーベキューにしてしまえという声もあるとのこと。世にも平然とした顔をして死んでやるつもりです。

判決

ミッチイ・レイノルズ(二十五才)

G広場に於て、衆人環視のなか刑吏の手により死刑に処す。附加刑として宣告翌日より三日間、午前八時市内ひきまわし三度のち広場中央の台に四肢をひろげて晒しおき、午

後六時再び市内三周をもって終る。

四日目正午、刑は臍部を槍でもって台に刺しとめ、次いで斧により四肢を切断、最後に断首を行う。

刑終了後、胴体はそのまま台上に、四肢は刑場四隅にそれぞれ晒し、首級は槍につき刺し市中を三周したるのち、獄門に架ける。

判決

クロチルド・ピアアンジェリ(二十六才)

この世に於ける最も怖るべき罪をおかしたかどにより、この世に於ける最高の刑を宣告す。

- 一、歯を一日一本づつ抜く。
- 二、次いで爪を一日一枚づつはがす。
- 三、手指を一日一本づつ、第一小関節より切断す。
- 四、同じく足指の切断。
- 五、手指の第二小関節よりの切断。
- 六、足首、手首の切断。

(この間市内引きまわし、G広場における生き晒しの附加刑あり)

七、肘、膝よりの切断。

八、上膊、大腿つけねよりの切断。

(上記の刑に際し、麻酔をのぞく最高の治療を、特別の慈悲により与える)

九、広場に晒し、通行人一人一人につき一本づつの針せめの刑を、絶命に至るまで続ける。

十三、首級はアルコール漬標本とし、犯罪博物館に陳列す。

十、死体を絞首姿勢として晒す。

十一、翌日頭部を切断す。

十二、胴体を火刑に処し、灰は丁河に投ず

(終)

「十三人の女死刑囚」の登場人名が、映画女優からとったことはおわかりでしょうが、クロチルド(愛称クロー)とは聞いたことがないでしょう。近く私の妻となるべき二十六才のパリジェンヌです。失礼しました。

臨時増刊 花と蛇

小説、絵画、写真、特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉
グラビヤ・フォト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁
長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載
オフセット印刷緊縛写真へ縛られた女体オンパレード

三十二頁

愈々堂々完成 (乞直接お申込) 定価一部五〇〇円 略号(花)

内容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部 特写

柱に縛られた美体……………玉田美佐子
厳しき縛しめに喘ぐ……………玉田美佐子
浣腸器による責めの幻想……………大塚 啓子
美貌醜弄(鼻責めの幻想)……………大塚 啓子

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直接お申込みを――。

裸女緊縛の幻想……………大塚 啓子

両手首くさり吊りの美女の幻想……………大塚 啓子

美女手吊り晒し悶々の幻想……………大塚 啓子

ガラスシリンドラーと裸女責め幻想……………玉田美佐子

柔肌と麻縄の織りなす幻想……………玉田美佐子

《花と蛇》画集 四馬孝・画

一、静子夫人捕わる

二、静子夫人と桂子の対面

三、静子夫人に迫る魔手

四、川田の悪どい企らみ

五、桂子と静子夫人のオシメ責め

六、令夫人に対する浣腸の洗礼

七、深窓の美女夫人の晒しもの

八、あぐら縛りの特別席

九、カメラに向けられる苦悶する美貌

十、京子探偵への惨忍な報復

十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人

十二、美人探偵京子頑張る

十三、静子と京子の後手吊り
 十四、捕われた美津子の姿
 十五、京子と妹の美津子
 十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

私の可愛いペット……………梨花悠紀子
 明眸のいましめ……………大井小夜子
 美女の柱しほり……………絹川 文代
 二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
 ………………絹川 文代
 着衣剥奪と緊縛シーン……………竹野ひろ子
 算盤責めのお仕置……………大塚 啓子
 乱れ裾緊縛絵模様……………愛川 悦子
 荒縄と竹竿の責め……………絹川 文代
 扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画

団鬼六作、四馬孝画

長篇「花と蛇」

第一章 発端……………静子令夫人―誘拐
 ……された令夫人―送られた着衣―ズ
 ……ベ公の本拠

第二章 陥穽……………二度目の嫌がらせ

第三章 美人探偵……………落花紛々―美人探

偵京子―浣腸地獄図

第四章 浣腸……………浣腸強制―屈伏

第五章 救援者……………羞恥地獄―観念の

座―京子の活躍

第六章 救援の失敗……………逆転―囂りもの

第七章 好餌……………京子の屈伏―淫獣

の餌

第八章 悪魔の哄笑……………毒牙は迫る―新鮮

な生贄―悪魔の笑い―遂に美津子

第九章 地下室……………悪鬼の饗宴―美津

子のおとり

第十章 翻弄……………屈辱と羞恥―身代

りに立つ夫人

第十一章 蛇の執念……………裸踊り―おしめを

使う夫人―屈辱の挨拶

第十二章 姉妹危し……………屈辱の猿ぐつわ―

浣腸競演

第十三章 調教師……………遂に京子も―土牢

の中―調教師来る

第十四章 美津子受難……………二人の美女―調教

師―狂乱の美津子

第十五章 結末……………美津子の屈伏―二

つの肉塊―絶対絶命―美しい童女

―スター誕生

第二グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

責めに悶える女体の幻想……………大塚 啓子

浣腸器の恐怖につかれた幻想……………大塚 啓子

玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子

両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子
 苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子
 羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子
 柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子
 着衣剥奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子
 光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子
 輝美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子
 怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子
 足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

女体緊縛アルバム

美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代
 手吊にもだえる八態……………桜井 葉子
 美しき捕われの餌物……………絹川 文代
 雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子
 伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代
 緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子
 柱しほり女体悦虐模様……………絹川 文代
 縄に憑かれた陶酔境……………梨花悠紀子
 ショート・パベツ哀感……………絹川 文代
 カメラに全身を晒して……………絹川 文代
 レインコートのかがやき……………絹川 文代
 紺色の囚衣をまといて……………？
 ・予告いたしました通り臨時増刊号「花と蛇」
 特集号は、五月中旬発売いたしました、未
 入手の方は売切れにならないうち、お申込み
 下さい。略号「花」とお書き下されば、折返
 えしお送りいたします。



赤い腰巻と民族文化

森田 敬三

赤腰巻の美しさ

日本女性のキモノ姿を最も美しく見せるのは、ダイヤの指輪でもなく金時計でもなく、勿論トッパーやショールでもなく、実に、その真紅の腰巻です。

戦前の大阪で、近所の白系露人に

「ロシア婦人と日本の女性と、何方が美しいでしょう」

と訊ねると、彼は言下に

「勿論、日本女性のキモノ姿です。比較にならないです」

「ほう、それで、キモノのどんな点が一番美しいですか」

「あの、歩く時に赤いお腰がチラチラと見えますね、とても美しいです、世界一です」
途端に、側に居た二十才前後の娘さんが、

少し顔を赫くして、くるり背を向け、逃げるように行きかけましたが、交叉点に差しかけると、突然横なぐりの風に裾を吹き散らされてばあっと翻える赤い腰巻の鮮やかさ、忽ち真赫に頬を染めた彼女は、然し慣れたもので当時の誰でもがしたように、右手で軽く前襟を押えてくるり体を左に一廻転させると、風を利用して乱れた裾をきれいに直し、また歩きだしました。当時はキモノの全盛時代、つまり、歴史上和服が最も美しかったと言われる昭和八年頃でした。

眼の前を盛装した若い女性が、恋人らしい大学生と並んで通りかかる。この女性、故意か偶然か、彼との間隔を適当に保って左側を行くので、左足を出す度毎に、緑地に黄の花模様を着物の裾から、鮮紅色の腰巻が、痛い

程に恋人の眼を射ます。彼は幸福の絶頂でしょう。当時のキモノは、表面には決して赤や桃色を用いることが無かっただけに、下着の赤が、強烈な印象を与えるのでした。

呉服店の陳列で、今しもマネキン人形の着替えの最中です。顔と手足は美しく作ってあるが、胴は張りボテの、不細工な人形です。その不細工な胴に赤い腰巻を着けると、急に色っぽくなるのは奇妙です。やがて着付けは終わりましたが、あの豪華な着物の下に、真物の人間同様に、赤いお腰をして居ると思うと何だか胸が高鳴ります。

踏台の上に立って、棚へ何かを上げた女性が降りようとして足を踏み外し、悲鳴と共に仰向けにひっくり返りました。忽ち、ばあつと四辺一面が火の海になったように、真赤な腰巻が散って、あわてた彼女は倒れた踏台も

そのままに、急いで走り去りましたが、私は我れを忘れてその後を見送って居ました。

その他、女性が溝を飛び越える時、階段の昇り降り等々、日常絶えずチラつく赤い腰巻は、白系露人の指摘を待つまでもなく、魅力的な限りでした。

大阪郊外のある劇場の広告ポスターに、美しい未亡人が大蛇に上半身を巻き締められて苦悶する姿が出ていました。髪ふり乱して絶叫する彼女の、大きく、然し羞かしそうに踏み開いた裾には、緋の腰巻が燃えて情感をそそります。(當時は現今のような、平然と、何の羞じらいもなく裸身を露出した、アメリカ直輸入ポーズのポスターは無かったものです) どうせ観客集めの絵だとは思いますが、私も休日を利用して観に行きました。

邪恋に狂った未亡人が、恋人の正妻を巧妙に毒殺したが、その殺された女の亡霊が、大蛇となって彼女を苦しめるという筋書きで、時代はほぼ大正中期、背景は一方に雑木林、他方は急な土手、月夜。今しも風呂敷包みを手に通りかかるのは、三十才前後の盛装した美女、ふと雑木林の一角に眼をやって

「あっ……」

恐怖の叫び、風呂敷包みを取落して、ぺた

りと尻餅をつく。その林の陰から、今にも飛びかからんばかりに鎌首をもたげて現われたのは全長三メートルにも余る大蛇、女の隙をねらってじりっ、じりっと迫る、女は怖ろしさに声も立て得ず、がくがくあごを震わして少しづつにじり退る。それがまた素晴らしく美しい。女の美しいのは羞かしがる時と怖れる時だと言いますが、芝居もまだ盛んであった当時、田舎芝居とは言え洗練された演技です。出演者はその女優さんが唯一人なのに、舞台一面に陰々たる恐怖の感を漲らせて、にじり退った女が、背後を土手に阻まれて遁れ得ないと知ると、再び

「あーっ」

と絶望の悲鳴、身をくねらせる途端に裾前が僅かに開いて、チカリ眼を刺す赤腰巻、恐怖の闇に点じられた艶かしい灯のようです。遁れよう、立上ろうともがけば、見る見る裾前は大きく割れて、真紅の腰巻が情炎のようにゆらめきます。その中、逃げ場のない彼女は、とうとう巻附かれて転び

「うっ……ああっ……」

手足を空に泳がせての苦悶、大蛇は上半身を巻いているだけで、下半身は自由なため、右に左に転げ廻って苦しむ彼女の、青い着

物、真赤な腰巻、白い脚が、もつれ、離れ、絡み、解けて、その艶かしさ悩ましさ。散々にのたうち廻った後、やがて動きを止めて絶命のポーズ。裾は乱しても女の教養、赤い腰巻の絡みつく双膝を、羞かしそうに固く合わせています。

ところで、私は変な気がして来ました。

「死」は生きとし生ける者にとって最も悲しい現象です。枯れ行く雑草にさえ哀れを覚える人間が、この、若い美しい女が殺されるといふ残酷な場面を見て、何故美しく感じるのでしょうか？ 永い間かかって到達した結論は結局、その女性の乱れた日本髪や和服が美しい、とりわけ、その真赤な腰巻が、激しい羞恥を伴って、強烈な色気を発散するのです。これが若し、マンボスタイルだったり、或いは和服でもその裾に、赤腰巻でなくて、近代的な白い、レース付きの「裾除け」を見せたら、ただ殺人場面の残酷さだけが残って、色気のいの字もなく、美的感覚など、微じんも湧かなかったでしょう。

京美人

当時大阪に居た私は、よく休日を利用しては友人たちと自転車で京都や嵐山へ出かけま

した。京の衣裳道楽と言って、男女とも服装は立派でしたが、殊に女性の着物の着附けに独特の風情がありました。と言うのは、その腰巻が一人残らず真紅の無地で、大阪に見られるような花模様など、全然見当りませんでした。しかも、それが全部新しい上質のもので、色の半分落ちたネルの腰巻などは、全然見当らないのです。そして、その位置がまた大変に低く、他の地方の女性は、赤腰巻を羞かしがって高めに締め、下の端が膝小僧と踵の中間に来るようにして、少し歩いても裾前から見えないようにして居るのに、京都の女性は、殆ど着物と同じ高さの、踵の近くまで下げて、その上、その着物の前裾を高く取って、下端が八の字になるように着て居るので、少しでも脚を動かす度毎にその鮮紅色の腰巻が、惜し気もなくこぼれます。いや、故意によく見せる目的で、あんな着附けをして居るのです。

ある人の説明では、京都には「外出の時は、下着だけは立派にしておかないと、殺された時に恥をかく」という言い伝えがあるのだそうですが、これは多分、あの幕末当時に暗殺が盛んで、毎朝のように街頭に人が殺されていて、終には

人々が慣れてしまい、これは一と思いに死んでいるとか、これは斬り口が汚いとか、女子供が平気で批評したそうですが、その当時の氣風が残っていたのでしょう。なる程、斬られて死ぬ場合は必ず裾は乱れるのですから、男性でも下着の汚れは恥かしい。まして女性の腰巻が汚れたり、古びていては恥かしくて死に切れないでしょう。本当に、あの人形のように着飾った京美人が、花のように裾を乱して死んでいる様は、前述した芝居の女性と同様、死の悲惨をおおって余りある程艶かしいでしょう。

戦後は京美人も、みなアメリカンスタイルだそうです。が、わざわざ外国の観光客が見に来る程の京美人が見られなくなったのは、惜しんでも余りあると同時に、徹底した占領政策の怖るべき力を、思わずに居れません。アメリカの対日文化政策は、日本国民に、あの京美人の姿を「美しくない」と思い込ませ、京都の女性も殆ど完全に洋装にしてしまったのです。

近年の一時期、和服ブームが盛んになるのに反比例して、赤い腰巻が次第に姿を消したのは如何なる理由によるのでしょうか、時代の如何を問わず和服の場合、男性は純白の褌、

女性は赤い腰巻こそが、最もエロチックな感じをかもし出すもので、赤い蹴出しのチラチラする風情を「見苦しい」と思う人は居ない筈です。赤いパンティ、赤のトッパー、赤のスカート等、洋装には盛んに赤い色を使う女性が、その最も美しい赤腰巻を嫌う理由はどこにあるでしょう。赤い腰巻は当然、強烈な羞恥を伴います。が、民族、階級、時代の如何を問わず、羞恥心こそが女性の生命であり、美しさこそ、女性が男性に優れている点であることを、否定する人も居ない筈です。赤腰巻の恥じらいが起居動作の上に自然に浸み出して、習性となり、洗練され、教養となつてこそ、和服女性は限りなく美しいのです。あの警察官が

「裾さばきを見れば、彼女の教養の程度が知れる」

と言ったそうですが、蓋し真理でしょう。

処女と人妻では、やはりその羞恥心の程度に大きな差があります。処女の間は、裾の乱れを非常に気にしますが、結婚して半年以上も経った婦人は、座った膝前が割れて、赤いものが覗いても、何等羞恥の色を見せなかったりして、色気なさにげっそりします。

戦前の映画は、どうも不思議でした。と言

うのは、男の俳優は剣戟などに際して、その純白の褌を誇らし気に（？）見せるのに、女優さんの方は、どんなに走っても転んでも斬られても、不思議にその裾だけは絶対に乱しません。勿論人気スターとしては、腰巻などを日本中の人に見られては恥かしいからでしょうが、それにしても写実性がないと思います。最近の女優さんは、時代劇では、やはり写実的に、ノーパンティに赤腰巻だそうです。が、それを、何かの拍子に、ほんのチラリと見せてくれるのが、とても嬉しいものです。

裾の乱れを防ぐものに袴があります。武士は戦争を職業とするが故に、平時にあっても袴の着用を正規の服装とし、裾さばきを軽くしたものでしょうが、女性の場合、そんな戦争動作は、あまり重要視されなかったでしょう。また、女性の場合、袴は上腹部から下をみんな隠してしまうので、和服の美観を損なうこと甚だしい。けれども、昭和に入ってから戦前は、女教師や女学生、電話交換手、武道家など、機敏な動作を必要とする女性は、動く度毎に赤い蹴出しを気にして居ては仕事にならない処から、制服として袴を用いていました。

満洲当時

入営した私は、当時のソ満国境へ移りましたが、時たま外出して出会う日本女性に、赤い腰巻を見出すことが出来なくて、意外に感じました。一般家庭の主婦も、水商売の女性も、一様に桃色なのです。日本で私は、桃色の腰巻と言うのは、大阪と京都の間の枚方という女郎街附近の淀川で、女郎さんたちが洗濯しているのを、自転車の上から見かけた以外、全く見たことが無かったです。赤と桃色では、その感覚に格段の差があるのに、何故赤を用いる人が無いのか、理解に苦しんだものでした。

その国境は、文字通り満目百里荒寥の山野で、ただ春になると、此处彼処につつじが咲いて、僅かに美観をそえてくれるのみでした。その中で、日夜の秋霜烈日の猛訓練に追われる私たちにとって、時々来てくれる慰問団は、大変に有難いものでした。流行歌手みち奴さんや、舞踊家の石井漢氏一行も来てくれましたが、然し、一番私たちを喜ばせたのは、福岡県の某日本舞踊の師匠さんが、御主人と共に、多勢の御弟子さんたちを連れて、一切自費で来て下さったことでした。舞踊の

技の巧拙はともかく、娘さんたちの一生懸命の姿は、実にいじらしい程でした。

ところが、甚だ申訳なく、また恥かしいのは、私たちが如何に荒寥寂莫の毎日を送っているとは言え、舞踊よりも、むしろその娘さんたちの、一人残らず締めている赤い腰巻に魅せられたことでした。特に印象深かったのは「お夏清十郎」のお夏の、からげた裾に燃えたつ緋縮緬の腰巻と、いま一人は「九段の母」を演じた娘さんで、杖を片手に腰をかかめて、覚束なげな歩を運ぶ度毎に、黒紋附の裾前の間から、チカチカと眼を刺す赤い腰巻の艶かしさ。それが、白っぽい背景に黒い衣裳といういでたちだけに、余計に腰巻の赤いのが鮮烈に映じて

「うふ……うふふふ……」

と喜悦をかみ殺した笑いの声が、私の周囲に起る程でした。その印象の強さは、二十数年を経た今日なお、まざまざと記憶に残っています。

後で考えてみると、あれは、どうもあのお師匠が、私たちを喜ばせるための演出ではないかと思います。老婆にふさわしくない真赤な腰巻だし、黒紋附の身巾も狭く、一寸でも脚を動かせば、厭でも腰巻が見える構造にな

っている上、娘さんは、絶えず私たちに右側を見せて、歩いてても座っても、絶えずその赤いものをチラチラさせるのでした。

同じ年の秋、連隊長の提唱で演芸会が催さ

れましたが、その数日前、一等

兵であった私は将校室の当番をやって居ますと、突然、げらげら笑い乍ら飛込んで来た某准尉が、

「おい、みんな聞け。小村の奴腰巻をしてるよ、赤いコシマキを、ううう！うわっ、堪らん」

小村上等兵は、国定忠治の妾お蝶の役を練習して居たので、それなりに、女と見まがう美貌、丸い肩、豊満な腰、女形には打ってつけの人物でした。

「ほう、腰巻をね、そりや徹底してるなあ、いくら女になるからって」

「度が過ぎてますよ、僕だったら興奮してやり切れん」

他の将校たちががやがや騒ぐと、恰度居合わせたのが、演出係を勤める軍曹で、下士官とし

ては珍しい大学卒でした。

「いや、腰巻はどうしても必要であります。

むしろ、これが女装の重点になります」

「ほう、そんなものか。だが演劇中に腰巻を

見せる場面もあるのか」

「無いかも知れません。然し、女性になるには下着まで全部女の物でないと、女の心理や動作が表現できないものであります」

聞いて居た私は、何だか羨ま

しかったものです。誰にも遠慮なく、あの美しい女の着物が着られる。しかも、赤い腰巻までして……異性を全然知らなかっただけに、余計に、そうした女性衣裳に興味をもったものでした。

外地での経験

戦い敗れてソ連に抑留された当時、その中の数年間を私は農村で、ソ連国民と同等の待遇を受けて働きましたが、戦乱のために男性は甚だ少なく、あり余る程の女性たちと、結婚する気には、どうしてもなれませんでした。その原因の一つは、やはり日本女性のキモノ姿が忘れられず、赤い腰巻や長繻絆が恋しかったことにあるのは事実で



す。成程、彼女たちは白人だけに、洋服の着こなしは美事です。が、キモノの美しさとは、てんで比較になりません。そのことを、彼女たちはよく知って居て、

「キモノ姿の日本の女性を、絵に描いて下さい」

と、しきりに頼むので、私は

故意に、真赤な長繻絆一枚に緑の扱帯で眠っている娘の、裾が少し開いて青い腰巻、白い脚がのぞいている姿態、蛇の目傘片手の芸者が、裾をからげ赤い腰巻を大きく見せて歩く姿態、斬られてのけ反る女間者が、空を掴み片膝を高く上げて赤い蹴出しを、文字通り大きく蹴開いた姿態等、精一杯に悩ましい構想で、幾枚も幾枚も、描いては彼女たちに贈りました。特に好んで描いたのは、若い男女の情死場面、心臓をひと突きした女は仰向けに仆れて、瞬間の苦悶に裾踏み乱し、赤い湯文字も羞かし気に絶命。その傍らで、やはり和服の青年が、少し開いた膝前に真白な禪を見せたまま、腹一文字に掻き切っている場面で、これは、ハラキリは知っても情死事件を身近かに経験したことの無いソ連の人々にと



って、まさに衝撃的な情景でした。それにしても、この情死という、言うに耐えない悲劇が、キモノの美しさに幻惑されて、むしろ美しい情景として眼に映る不思議さに、感心しない者は居ませんでした。

勿論これは、私自身を慰める目的もありましたが、貰った彼女たちは大喜びで「こんな立派な、キモノを常時着用できる日本の女性は、その意味では世界一の幸福者です」

と、口を極めて讃歎するのです。然し、少し物足りなく感じたのは、ソ連の人たちは着物の構造を知らず、日本人なら悩殺されそうな裾の乱れ、赤い腰巻の色気に対する感覚が弱いことでした。

終に私は、描くだけでは満足できなくなっ

て、終戦直後のソ連の、極度の物資不足の中を、苦心して買った白絹を、赤とオレンジの二色の染料を使って理想の色に染め上げ、型通りに、上に白木綿の腰布をつけて女性用の腰巻を作り、誰も居ない室の中で、全裸になって大きな鏡に向かい、自分で締めてみました。私という

人間の、腰から下が、急に失くなってしまいました。其処には二人の人物が居ます、上半身は健康な男性、下半身は艶かしい赤腰巻一枚の女性です、白い靴下が、腰巻の下から白足袋のように覗いています。素晴らしい！嬉しくなって来た私は下半身の「女」だけに注目しながら、正面のまま、処女のように慎ましく、膝を揃えて座りました。

次には姐御のような横座り、少し膝前を割ると、女性そのままの、むっちりとした白い内股が（私は脚に毛が無いので）赤い腰巻の間から垣間見えます。更らに立て膝になれば、内股はいよいよ大きく露出しますが、何しろパツも脱いで、素肌に腰巻一枚で居るだけにその羞じらいの所作は、まさに女性そのままです。時間の経つのも忘れていろいろな姿勢

に見惚れて居た私は、思いついて、手製の短剣を握り、腰巻の上から、一文字に切腹の型を演じてみました。急に何か激しい興奮を覚えます。左から右へ引く動作が、鏡の中では逆に右から左になります。切り終えて痛さに堪らず崩折れ悶え苦しむ様を、かねて芝屋で見た通り実演しますと、鏡の中の女性は私の方に脚を向けて居るので、上半身はよく見えません。紅蓮の炎のような腰巻の間から、白い双脚をチラチラさせて、のたうち廻ります。自分の演出に少し陶醉した後、ふと立上がった鏡に自分の側面を向けた時、やはり女性でない悲しさをつくづく感じました。私に

は、勿論、発達した乳房も、豊かな腰部も無いばかりか、やはり上半身の肌色そのものがあの女性の匂うような優しい感覚を与えてくれないのです。これで見ても、演劇の女形というものは、心理から体つきまで女性になり切る必要があります、なかなか難かしいものと思われました。

ところがです。最大の問題は意外な処に横たわって居ました。その時、突如、予告なしにロシア人(男性)が入って来たのです。若しこれが日本人であつたら、私は心臓が止まる程に驚き、恥かしさに逃げ場を失ったところでしよう。ところが、不思議なことに、こ

の外国人の前では、全然羞恥心が湧かないのです。また先方も極めて平静な気持ちで、私の腰から下を包む真紅と白の布に、何の関心も払いません。それは恰も、原色の好きな彼等自身が、赤シャツを着ているのを見る眼差しと、何の異なる処もなかったのです。

これは私にとって大発見でした。何故平気で居られるのか、結局これは、相手が腰巻を知らないで、人形の前でどんなことをしても少しも恥かしくないのと同じ原理によるものでしょう。この場合、彼が如何に知識人であろうと、腰巻に関する知識の限りでは、人形と同じだったのですから。

緊縛写真と悦唐絵画満載の超弩級版

大好評！注文殺到売切れ近し

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

目下発売中 直接お申込を 定価一部五〇〇円(送共) 略号(文献)

◎サド、マゾ、フェチ、女斗美、女体切腹、女相撲、浣腸、とあらゆる趣向を網羅した本誌臨時増刊号の決定版。今後二度と再び集録出来ない特殊文献を掲載いたしました。売切れますと、補充がつかまへん故、今すぐ直接発行所まで御注文下さい。着金次第折り返え

し急送いたします。

【第一グラビヤ】 (十六頁)

自己愛の女神を写す……………塚本鉄三、構成
「私の乳房を見て」……………長野 良子
露出癖の充足……………長野 良子

後手縛りのワンカット……………大塚 啓子
軋ったエビ縛りの女体……………大塚 啓子
新井マリさんと共に……………由岐敏夫・構成
棒責め愉悦……………新井マリ子
ムチ打たれる肌……………新井マリ子
サテンの責衣緊縛……………東浦ひかる
顔なぶり、踏みつけ……………大塚 啓子
押しつぶし、足逆取り……………大塚 啓子
餅肌はくびれて……………東浦ひかる
柱縛り首縄……………梨花悠紀子
海老責二態……………梨花悠紀子
黒いアンネパンティ……………遠藤百合子
【巻頭口絵】 (オフセット八頁)
△絵物語△白ターバンの女……………四馬孝・画
第一図章△捕獲△……………第五図章△美容△

第二図章／飼育命令／第六図章／洗腸／
第三図章／調教／第七図章／矯正／
第四図章／訓練／第八図章／仕上げ／

〔第二オフセット〕 (八頁)

女体切腹、城主の姫君切腹……四馬孝・画
女相撲、御前相撲……雪崎京人提供
マゾ画、犬になった男の告白より……
マゾ画、谷崎潤一郎「富美子の足」の幻想、
女相撲「海辺にて」グラマの対戦……雪崎
女体切腹「侍女の奮戦」……四馬孝・画

〔第二グラビヤ〕 (十六頁)

五月亜紀子さんの場合……由岐敏夫・構成
軽い拒否と羞らい……五月亜紀子
美しい諦観のポーズ……五月亜紀子
恐怖と怨嗟のまなざし……五月亜紀子
鼻責「鼻孔測定」……大塚啓子
緊縛俯瞰姿……大塚啓子
憧れの優美ポーズ……長野良子
両手吊りの構成……新井マリ子
ズベ公天使（トカゲグループ）……由岐敏夫
1、「みんな剥いじまいな」
2、「その顔をめちやくちやにしてやる」
3、「それだけは止めておきなさい」
4、「トカゲ団の掟をよく覚えておきな」
投げ出した脚線美……絹川文代
悶悦ポーズ二題……絹川文代
厳重な本縄掛け……梨花悠紀子

〔写真版アルバム〕 (十六頁)

裸女斗争場面……絹川・大塚
浣腸部屋の悦楽ムード……大塚啓子
浣腸器を握って……大塚啓子
縄にくびれた柔肌鑑賞……大塚啓子
女やくざ一本刀姿……大塚啓子

女ネズミ小僧次郎吉……大塚啓子
高手小手二ツ折り……松本アサ子
エビ縛り二種類……松本アサ子
血紅使用女体切腹連続フォト……大塚啓子
サジスチン宮井美佐子の近影……宮井美佐子
縛り過程の構成……大塚啓子
鼻責めシーンの点綴……絹川文代

〔本文・解説〕 (三十二頁)

新人撮影行、五月亜紀子さんの場合……由岐、
絵物語「白ターバン」の女……辻村隆
新しいモデルを写す……由岐敏夫
（告白）宮井美佐子の略歴……宮井美佐子
（告白）モデルとしての私……大塚啓子
自己愛の女神、長野良子撮影記……塚本鉄三

〔第三グラビヤ〕 (十六頁)

台所のめしうど……新井マリ子
飼育のヴァリエーション……新井マリ子
椅子に呻めく……新井マリ子
長襦袢と腰巻……遠藤百合子
豊満への擦過……遠藤百合子
美しき小鳩の緊縛……長野良子
ポリウム自慢絵模様……長野良子
床柱縛りに耐える表情……大塚啓子
煙草一服の鑑賞……大塚啓子
組上の鯉と料理の仕方……五月亜紀子
二ツ折り縛り……大塚啓子
鼻料理と鼻掃除……大塚啓子
上からと横からと……梨花悠紀子

〔第一オフセット写真〕 (十六頁)

神さまへの人身御供……絹川文代
腕と脚の双曲線……梨花悠紀子
足首の縄を解く……大塚啓子
緊縛女体モザイク模様……愛川悦子

光と影の表と裏……梨花悠紀子
縄に狙われたポーズ……梨花悠紀子
女相撲「四ツに組む」……A氏提供
女相撲「吊り合い」……A氏提供
爪切りと白足袋……浜千代子
高手小手腰縄……梨花悠紀子
底園の塑像……絹川文代

〔第四グラビヤ〕 (十六頁)

女奴隷の飼育効果……新井マリ子
ゴム衣着用中……梨花悠紀子
バンド着用後手縛り……東浦ひかる
荒縄さらしと折檻場……梨花悠紀子
下着の散乱する中にて……新井マリ子
用意周到なる馴致……新井マリ子
白刃に狙われた柔肌……大塚啓子
浣腸器の恐怖と幻想……梨花悠紀子
くさり、くさり、くさり……長野良子
団子鼻をいためる……長野良子

〔第二オフセット写真〕 (十六頁)

美しき乳房……長野良子
愛らしき羞らい……長野良子
仰角のいたずら……長野良子
顛倒した瞬間の表情……大塚啓子
森の中のニフ……絹川文代
緊迫の演技（斬られる女）……愛川・田中
ヘッドロックと首絞め……春日・愛川
SMの魅力プレイ……三木・浜本
前手縛りと後手縛り……梨花悠紀子
黒フンドシと白フンドシ……大塚啓子
Mフォト陳列——長靴にもだゆ。鉄鎖と手枷
の下で。凌辱される男ドレイ。煙草とローソ
クで——
愉悦ポーズ二景……絹川文代

ファンタジック・フィクション

女学生の生体解剖

危険な実験

黒 木 節 夫

1

若宮君枝と長沢達也とは従姉弟である。君枝の父が、達也の母の兄なのであった。

両家は近所同志で、よく行き来をしたし、君枝も達也も一人っ子で、幼い時分から不思議と気が合って二人はよく遊んだ。そんな関係で、君枝と達也とは、従姉弟というよりはお互いに本当の姉弟の様に親しい感情を抱きながら育った。

二人がよくやった遊びは、どの幼児も好んでやる泥棒ごっこやお医者ごっこだった。

お互いに泥棒になったり、被害者になったり、お巡りさんになったりして、縛ったり縛られたりした。映画やテレビの見よう見まねで、手ぬぐいの猿グツワを口にはめ、手足を縛り上げて、柱やテーブルの脚にくくりつけるのであった。

お医者ごっこも、同様に、互いにお医者さんになったり患者になったりして遊んだ。患者は、ふとんの上に寝かされる。お医者さんは、その傍に坐って、脈を見たり、お腹をさすったり、注射をしたり、お薬を飲ませたり

するのである。注射は、お箸の針で腕やお腹にするのである。時々、手術もした。手術は主としてお腹で、プラスチックの櫛の背をメスにしてお腹を切開し、マッチ棒の針で縫合するのである。その間はくすぐったくてもガマンしていなければならなかった。

勿論、二人は、こんな遊びを大人が考える様な不純な気持ちをもってしているわけではなく、君枝にしる達也にしる全く無邪気に、単純な模倣的な遊びとしてやっているに過ぎないのであったが、これが後に彼らをサジスト

或はマゾヒストたらしめた要因として大きく作用した事実は争えぬところであった。

2

君枝は、高校へ進み、達也は中学の三年生になったが、二人とも年の割に大柄で、知らない人からは、よく二つぐらい年長に見ましがえられた。君枝は高校へ入るとすぐに全校の生徒の注目を集めたほどの美少女であり、達也の方もまた校内のおませな女生徒達から秘かにマスコットにされている様な凛々しい美少年であった。二人は成績もよかった。幼な馴みの気安さで、映画や音楽会へよく一緒に行ったし、暑中休暇には田舎の祖父母の家へ行って一緒に暮した。

この年頃の少年少女は、異性に対して異常に強い関心を示し始める。君枝の友人達は、達也の様な美少年を親しいボーイフレンドに持つ君枝を心から羨んだ。達也の友人達もまた、君枝の様な美少女を親しいガールフレンドに持つ達也が羨望の的であった。そして、それが二人にとって何ともいえず誇らしく感じられるのであった。今まで姉弟の様に無邪気に気安につき合ってた来た君枝と達也も、いつか、だんだんと相手を「異性」として意識する様になっていたのである。それだけに、

親しさもまた、一層深まっていた。

修学旅行などで、君枝と二、三日会えないと、達也は妙にもの足りない空虚な淋しさを感じたし、また、君枝が友人達と余り親しげに話しこんでいたり、まして男性と話していたりするのを見ると、湧き上って来る嫉妬の念をおさえようがなかった。君枝も同様で、達也が同級の美しい女生徒などと親しそうに口をきいている所などを見ると、いたたまれぬ様な嫉ましさと焦りを感じるのであった。それは二人とも一人っ子で育てられて、人よりも独占欲が強いということだけではなくて、明らかに淡い恋心のあらわれであった。そして、達也が高校に進学し、君枝が二年生に進級する頃には、二人とも、そのことをボンヤリとはあるが自覚する様になった。

3

「出生」の秘密。

それは、かなり幼い頃から子供達の頭に宿る疑問であるが、それへの関心と興味とは、やがて思春期に達して本格的となり、最高度に達するのである。そして何時とはなしに、自己をとりまく周囲から、その秘密をうすうす学び取る様になる。その知識が、自分の成長した肉体と結びついて、異性への憧れが、

単なる精神的なものから肉体的要求を伴ったものへと進んで行く。精神的にも肉体的にも、異性と一体になりたいという強烈な願望に支配される様になる。

君枝も達也も、その様な、所謂「危機的年齢」に達していた。

その頃、前々から喧伝されていた『人間誕生』という映画が封切られた。これは有名人のS医博が力を入れて推奨している性教育映画であった。君枝も達也もこの映画を観に行った。但し、別々にである。一緒にこの映画を観に行くことは、さすがに親しい二人もまだ恥かしくて出来なかったのである。

映画の内容は、大人にとっては別段刺激的なものではなく、穏健な啓蒙的なものであったが、肉体の秘密におののいている若い少年と少女である二人にとっては、ことごとくが驚異の世界であり、目もくらむ刺激であった。

女性の体内にある一個の卵子を目がけて無数の精子が群がり集り、その中のただ一個が卵子と結合して胎内で成長して行く。その過程の女体の神秘的働き。二人とも息を呑んで見つめていたが、達也は画面の女体を、いつの間にか君枝のそれとして感じていたし、君

枝は自分の肉体として画面を凝視していた。

4

二人とも『人間誕生』を観に行つたことを互いに秘密にしていたが、心の中では相手の肉体を強く意識する様になってきていた。あの神秘的な動きが、まだ若い自分達の肉体でも果して行われるのだろうかという疑問的な好奇心と共に、愛し合う異性の肉体を求め合う人間としての自然の欲求が、映画によって強く刺戟された結果であつた。

五月の末、田舎の祖父が卒中で倒れたため、君枝の両親も達也の両親も田舎へ行つた。君枝と達也は、丁度学校の中間試験中だったので、留守番がてら家に残つた。

その晩、君枝は一人で家にいるのが恐いので達也を自分の家に誘つた。

二人は、並んで机に向つて本を開いたが、互いに相手の存在を強く意識して本の内容などてんで頭に入らなかつた。バラ色のネグリジェ姿で、白い頬をポツと上気させた君枝は蛍光灯の光の下で、お伽の国の王女のように美しかった。家には二人の外に誰もいない！。ただ並んで坐っているだけの二人の呼吸が、次第に熱く、激しくなつて行つた。

そんな事があつて後の或る日、君枝と達也

は例によって機会をつくつて二人だけの秘密の時間を持った。いつもの様に達也が、君枝の弾力に満ちた滑らかな腹部を撫で回しながら、ふと

「君ちゃんのこの柔らかいお腹を思いつきり切り開いて、ぐにゃりとした腸が摺んでみたいなあ」

半ば真剣な面持でいった。

「達也ちゃん、それ、本当？」

君枝は思わずドキリとして問い返した。

大好きな美少年の手によって、自分のこのお腹を切り開かれる！。それこそ自分が夢にまで憧れていた事ではないか。ただ、余りにもアブノーマルに思われはしないかという心配と、いざとなった場合の恐ろしさで、今までそれをいい出しかねていたに過ぎない。

今、それをまさに達也の方からいい出したのである。君枝の胸は妖しく震えた。ゴクリと生唾をのみこみながら、

「本当？ 達也ちゃん、それ本当なの？」

「嘘じゃないよ。君ちゃんさえOKなら、いっただって僕、切っちゃうんだけど、まさかね……」

達也の言葉に、君枝の全身の血潮が熱く騒いだ。思わず達也の右手を掴んで、自分の柔

かな腹部に強く押しつけながら

「嬉しいわ！ あたしね、もう前から、達也ちゃんに、このお腹を切り割かれたい気がしていたのよ。ただ恥ずかしかったのと、少しこわかったのよ、それがいい出せなかったの。それを聞いて、あたし勇気が出たわ」

少年もまた、少女の告白を聞くや、忽ち全身をカッと熱くした。ああ、美しいこの君枝のお腹を思うがままに切り割いてみたいという、夢寝にも忘れず描き続けて来た幻想が、こんなにもたやすく実現されようとは！。達也もまた、上ずった声で確かめずにはいられなかつた。

「それ、ほ、本当かい君ちゃん？。マスイもしないでお腹を割かれれば、すぐく血が出て痛いよ！」

「ううん、平気よ。本当よ。本当にあたし、切ってもらいたい。マスイなんか要らないことよ。実はね、あたしお腹に赤ちゃんが出来たらいいのよ。お友達で、感づきそうな人がいてね、弱っちゃってるの。色々と考えてみたんだけど、誰にもわかんない様に処置するには、達也ちゃんに手術してもらうのが一番いいと思うの。手術のお道具は、あたしの先輩が病院の看護婦さんをしているから、何

とかいって借りられるわ。だから……ネ、達也ちゃん、お願い！、いいでしょ？」

こうして、少年が少女の開腹手術を行う約束が出来た。今度は幼年時代の遊びではなく、本当の手術なのである。それは危険極まる実験という外はなかった。

全身を熱くほてらせながら二人は、その事について色々と細かい打合せをして別れた。

5

十月の或る土曜日、町内の希望者で集って貸切りバスで隣のK温泉方面へ二泊旅行に出かけた。若宮君枝の両親も、長沢達也の両親も、久しぶりだからといって、この旅行に参加した。

計画の実行に、二人はこの機会を選んでおいた。

その日は、君枝も達也も夜になるのが待ちきれぬ思いだった。漸く待望の夕方がやって来た。君枝の家で、少し早めに軽い夕食を済ませた二人は、早速、計画の準備にとりかかった。

先ず、四畳半の洋間をとりかたづけて、床の上に、大きなビニールを一ぱいに敷き広げた。園芸用の丈夫なビニールで、広さは二間四方もあったから、その端は四面とも壁に沿

って上の方へ四、五〇センチも余っていた。

それが済むと二人は、かねて用意の長さ二メートル、巾六〇センチ、厚さ三センチの長方形の板を部屋の中に運び入れて、その一方の端を隅のテーブルに立てかけ、他の端を向い側の壁と床との交線に支えさせて、丁度スキのスクロープの様な厚板の斜面を作った。

これが手術台であった。これらの作業を、二人は黙々として行なった。時々、深い色の熱っぽい目と目とを見合わせて、ニコリ微笑み合った。

総ての用意が終った。

「君ちゃん。じゃあ、始めようか」

「ええ。それじゃあ……」

口よりもものをいう目と目を熱く見交わして、二人は互いにうなずき合った。

君枝は、静かに一枚ずつ衣服を脱ぎ始めた。シュミーズを脱ぎ、最後にパンティーを脱ぎ捨てると、匂う様な美少女の肌が明かるい蛍光灯の白い光の下にさらけ出された。早くも激しく騒ぎ立つ胸を、じっとおさえて達也は、

「さあ、台の上に載って！……。頭を高い方にしな」

「うまくやって。お願いね……」

ボツと美しい顔を桜色に染めながらいて、君枝は長々と手術台の上に仰向けに寝た。白魚の様に清らかな、少女の白い裸身。そのすんなり伸びきった形の好い四肢を、少年がしっかりと用意の紐で縛りつけて、少女の体を台に固定させた。

「達也ちゃん。もしかして、途中であたしが叫び声を出したりすると困るから、口をふさいどいて頂戴。それから、あたしがどんなに苦しがっても途中で止めないで、最後まで、しっかりとやって頂戴ね」

達也はうなずいて、君枝の口にしっかりと猿グツワをかませた。

改めて、台上に縛りつけられた美しい少女の可憐な姿をじっと見下した。さすがに顔色が青ざめて、激しい呼吸と共に胸と腹とが大きく悩ましげに波打っている。

この可憐な美少女の腹部を、これから自分の手で思う様に切り割くのだと思うと、ぞくぞくとつき上げてくる歓びに達也の全身は妖しく震えた。少年の右の手が、つと伸びてテーブルの上から冷たいメスを取り上げた。

刃先が、電光を反射してキラリ！と光った。

「君ちゃん！、では、始めるよ！」

君枝の目がうなずいた。少年は、鋭いメスの切先をピタリと少女のお臍に押し当てるともう一度

「じゃあ、いいね？」
必死にうなずく少女の腹部の激しい波動の静止した一瞬を捉えて「えいっ！」

無慈悲にメスを押し込むと、少女の臍は、一瞬グーッと凹んで弾力ある抵抗を示したがそれも束の間、

——ブスリ!!——

鋭いメスの刃先は、無惨にも少女の臍を一気に刺し通して深々と腹腔内へ没し去った。ズシン!という電光の様な衝撃が、少女の全身を貫き走った。

生身を刺し貫かれた激痛と驚愕に、少女の両眼が大きく見開かれ、身をよじって悶えた



が、既に如何ともする事は出来ない。

メスを直角に突き立てたまま大きく波打っ

の必死の抵抗の限界を突き破って、
——プリッ! プリ、プリ、プリッ!!——

ている臍の傷口から鮮血が溢れ出して、一筋赤い糸の様にスーッと下腹部を伝った。

——いよいよ、この柔かい女体を切り割くのだ!

少年は、熱っぽい目をギラギラさせて、少女の弾力ある生体に刺し込まれたメスを見つめながら徐々に右の手に力を加えて行った。

生身の肉体を無惨に切り割かれようとしている少女は、苦痛の余り我を忘れて身をよじって悶えたが、少年は非情にメスに力を加えて行く。切られる少女も切る少年も、今は火の様な息づかいであった。

遂に鋼鉄の刃が、肉体

無気味な音と一緒に、少女の分厚い皮下脂肪を臍から下腹部の真中辺まで、一気に切り割ってしまった。

おそろしい激痛に美しい少女の顔が真青にゆがんで、溢れ出した生温かい鮮血が、みるみる下腹部一面を真赤に彩って行く。

——き、切った！……この手で、君ちゃんのお腹を切り開いた！！……もう一息！——

少年は、青ざめた顔に冷たい脂汗をにじませながら、少女の腹部の真中辺に突き刺さっているメスの柄を両手でしっかりと握りしめて、苦しげに波打つ少女の下腹部を更に下の方まで力一ぱいに切り下げると、

——プリッ！プリプリプリプリッ！——

すさまじい手応えと共に、鋭いメスは分厚い皮下脂肪を一文字に縦に切り割き、少女の腹部はパツクリと左右に切り離されて、見るも無惨に大きく口を開けてしまった。生温かい鮮血が流れ落ちて、ポタポタと音を立てながら下のビニールの上にしたたった。

弾力に満ちたみずみずしい腹部を、生きながら真二つに切り割かれた少女は、目もくらむ苦痛に大きく身をよじり、脂汗を流して悶え苦しんだ。

——……ああ！……とうとう切った！！……き、

君ちゃんのお腹を思う存分切り開いてしまった！！……

無惨に切り割かれた恐ろしい傷口から、血まみれの小腸をのぞかせながら、息も止まる様な苦悶が続けている美少女を、べっとりと汗ばみながら見つめていた少年の脳裏を、一瞬サツと悪魔の考えが通り抜けた。

憑かれた様に、両の手を少女の血だらけの傷口から腹腔内へ差し込むと、グニヤリと生温かい無気味な内臓の感触が少年の手に伝った。血まみれの内臓をぐちゃぐちゃに引掻きまわして、子宮を探し出し、両手に掴んで力一ぱい

「ウーム！！」

と握りつぶすと、グシャリ！と異様な手応えがして、模糊とした生命の芽は無惨に断たれた。

想像を絶する激痛に、少女の両眼は今にもとび出しそうに見開かれ、縛られている台をもゆり動かす程、激しく全身をゆすぶって悶え狂った。

今や一匹の獣と化した少年は、今度は少女の腹腔内からグニヤリと血まみれの腸を掴んで、ズルズルと全部外へ引っ張り出し、直腸と十二指腸とをメスで、プツリ、プツリと切

断して、少女の腹腔から完全に腸をとり去ってしまった。周囲は血の海であった。

最後にメスを持ち直した少年は、その鋭い刃を、既に虫の息の少女の柔かいミゾオチへ

——プスリ！！——

と刺し込み、渾身の力をこめて

——プス、プス、プス、プス、プス——

厚い皮下脂肪を臍まで切り割いて、下腹部の傷口に接続させてしまった。

今や、少女の腹部はミゾオチから臍を通って無惨にも一尺以上も切り開かれてしまったのである。生きながらの解剖であった。傷口から、空洞となった血まみれの腹腔内の奥に大動脈と大静脈とがハッキリと見えた。少年は血だらけの左手を少女の臍の辺りにかけて傷口を大きく押し広げると、右手のメスで、二つの血管をプツリ、プツリと切断して、虫の息の少女に最後の止めを刺した。

ピクピクと痙攣が続いていた少女の血まみれの体が石の様に動かなくなったのを見て、「き、君ちゃんは、し、死んでしまった！……ああ……僕も、僕ももう生きてはいられない！……そうだ！！」

上ずった声で、狂った様に叫ぶと、少年は血に染んだ衣服を素早く脱ぎ捨てた。

傍から、少女の生血を思うさま吸った冷たいメスを拾い上げると、立ったまま自分の左下腹部に刃先を当てて思いきり突き立てた。

——ザクリッ！——

すさまじい手応えと共に、メスは、一気に下腹部の脂肪層を刺し通した。

「あ、あーッ!!……き、刺した!……ム……ム……むーッ!」

わななく右手で、右下腹部へ力一ぱいにメスを切り回すと、

——ブス、ブス、ブス、ブス、ブスッ!!——

少年の下腹部の厚い脂肪層が一文字に切り割かれて、パツクリと大きく口を開け、熱い血汐が音を立てて足もとのビニールの上に流れ落ちた。

「グエーッ!……き、切った!!……」

思わず口走りながら、右下腹部から血まみれのメスを引き抜くと、更に自分の臍に刃先を当てがい

——ブスリ!!——

深々と刺し通して

「あ、あーッ!!……き、君ちゃんのお腹も、こうして……ムーッ!!……」

口走りながら、力一ぱい切り下げると、
——プリッ! プリ、プリ、プリ、プリ、プ

リッ!!——

鋭いメスは少年の下腹部を縦一文字に切り割いて、生温かい鮮血を溢れ流れさせた。

「き、君ちゃん!……き、切った!……ぼ、

僕もお腹を切った!!……痛うッ!……」

十文字の傷口を内側から押し開けて、血にまみれた腸がうねうねと溢れ出して来て、ゴボリと床の上へこぼれ落ちた。

「ムーッ!……あ、あーッ!!……」

苦しまぎれに、その腸のつけ根を掴み上げ君枝にしたのと同じ様に、右手のメスでブスブスと切断して自分の腹腔から腸を残らず切り取ってしまうと、それを、そっくり床から両手で拾い上げて、既にこと切れている少女の腹部の傷を押し開き、その腹腔内へゴボリと押し込んだ。そのために、少女の空洞の腹腔に満ちていた血が押しのけられて、傷口からダラダラと外へ流れ出した。

「ムーッ!……痛、痛うッ!!……」

苦痛に呻吟しながら少年は、今度は、床の上から少女の腸を両手で拾い上げて、下腹部の傷口を押し広げると自分の腹腔内へ

「あ、あーッ!……!!……」

呻きながら、ゴボリと押し込んでしまった。入れた腸がすぐまた、下腹部から外へ溢

れ出してしまうのを防ぐために、左手で下腹部の傷口をしっかりとおさえながら、右手にメスを取り上げた少年は、最後の力をふりしぼって、自分のミゾオチから、心臓を目がけて

——プスーリッ!——

深々とメスを柄まで刺し通した。ピューッと飛び散る血汐を朦朧と感じ取りながら、

「き、君ちゃん!!……」

仰向いたまま息絶えている少女の死体の上に、バタリとうつ伏せに重なって倒れると間もなく、そのままこと切れた。

こうして、若宮君枝と長沢達也とは、若いみずみずしい肉体を存分に切り割いて、お互いに相手の腸を、自分の腹腔の中にしっかりと収めて抱き合ったまま死んで行った。二人の死体は勿論、部屋一面がすさまじい血の海である。悪魔に魅いられた危険な実験の末路であった。

(完)

(以上はある切腹マニヤのファンタジーです)

手錠の話……………



水谷光男

御誌の投書欄を拝見して居ると、手錠や足枷についての御注文が時々出て来る。例えば梨花悠紀子さんに手錠や足枷を掛けて居る処の連続大寫しの写真を載せて貰い度いとか、

嘗ての絹川文代さんの「女囚第十四号」は傑作だったが、同嬢の手錠足枷姿は女囚の哀れさが良く出ているから、この種のものをもっと撮って貰い度いとか……。兎に角世の中には

手錠や足枷に関心を持たれる向も少くない様だ。それで此処には手錠について幾つかの話を拾ってみ度いと思う。

一、或る看守の話から

「出廷に行ってもらいたい」

……

「連れて行くのは、いったいどのコだな」

(女区の看守に向って)

「待って下さい。青山、小川、それに芝の三人だけど、あなたには小川をお願いするわ」

「若いコは苦手だな」

彼女は被告であるから、和服を着ていた。

白粉も口紅もない若い素顔。

「さあ手錠をかけるぞ」

冷たく光る手錠。こんなひわな手首にかませるのが、いい気はしない。すると柔かそうな手が、私よりも勇ましかった。

「あら遠慮はいりませんよ。どうせ恥さらしなもの」

「……」

呆れて返答に困った。それでも私は、シャバで目に立つ手錠をおもんばかった。

「ハンケチで包むのがいい」

と教えてやった。片手錠を包むには、一枚

のハンケチで足りた。一見してそれとわかる捕縄は、帯にかくしてやった。彼女らは、裁判所への電車内で、たいへん陽気であった。いっしょにいる女囚と、手錠のあるのを忘れたかのよう、ベチャベチャしゃべっていた。

公判廷では判事が、

「この判決に異存はないか？」

とたずねた。小川は女らしく小声で、

「ありません」

と答えた。とたんに、床に涙を落した。ところが、帰りの電車を待っているとき、大きな声でいった。

「ああ、裁判もへったくれもあるのか。あればかりのことで、一年を打つとは……どうにもなれ！」

「そんなヤケは止すんだ」

「こんなもの何になるんだい。罪の女をみんなで見るといい。笑うがいいさ」

と叫んだ。親切で巻かしてやったハンケチを、にくにくし気を取ってしまった。太陽の下で、手錠がピカピカ光った。

私は護送出張を命ぜられた。彼女たちは五名であった。

彼女らの手首へ手錠をはめるとき、

「あら、くすぐったいわ」

と笑う女がいた。

「いやんなっちゃうわ。電車に乗るのは……と恥ずかしがるのもいた。でも、まんざらでなさそうなのは、異性に触れている感覚によるものだろうか。」

電車の中では、列車の動揺をいいことにして、彼女らに利用された。つまり、手錠があるがため、吊り皮につかまれない手は、持つて行きようがない。その手は当然、われわれの腰へきた。制服につかまって、動揺を防いだ。手を離すんだともいえないし、眼尻を下げるのは、なおさらきまりが悪い。名古屋から笠松まで、ものの三、四十分の乗車時間はまるで三時間の長さに感じられた。

公衆の視線をあたりに感じつつ

手錠かくす「日田」の駅頭

腰縄に手錠あらわなわが前を

はばかりごとく人往来す

この駅に遥けく腰縄手錠にて

移送されしあわれ記憶のみ

幸いに生き行く群を見つめたり

歩廊の隅に手錠をせるまま

(板津秀雄著「看守」より)

二、手錠騒ぎ

一、二年前に東京で手錠騒ぎと言うのがあった。事の起りは或る洋品店に手錠を付けた儘の青年が入って来たので、てっきり脱獄囚とばかり一〇番に急報、警官が駆け付けたら、おもちゃの手錠だったと言うもの。こんなことが二、三度あったので警視庁が旋毛を曲げて、以後製造発売は止めさせたと言う。(これは人騒がせだし、勧告も止むを得まいが、この手錠よりもっと犯罪に使われている精巧なおもちゃのピストルがその儘なのはどうか)

これらの騒ぎより前に、たしか朝日グラフに一頁大で、「この手錠売ります」と言う題で、銀座の或る店先に手錠が置いてある写真が載ったことがある。説明書きには確か値段は千円で、身分の確かな人になら売る、とあったようだ。

その後、新宿の玩具ピストル屋さん等で八百円でショーウィンドーにも派手に飾り、新聞広告で通信販売もやり、可成り売れたそうだ。値段から言って、子供のおもちゃと言うよりも、買ったのは大人の方が多かったのだ。

はなからうか。そしてそれが今書いた手錠騒動のもとになったと想像されるが、何れにしても、沢山売れたと言うことは、世の中で手錠に関心を持つ人が少くない証拠と言って良いことは、初めに書いた投書欄に手錠ファンが可成りいることと符合する。

今では金属製の方は御法度になったので、黒いベークライト製のものを百五十円位で売っているようだ。

三、手錠とは一体何か？

監獄法によると鎮静衣、防声具、連鎖、捕縄と並んで「戒具」の一つと言うことになっている。実際に一番使われるのは、逮捕した者を警察に連行する場合、裁判のため出廷する場合その他護送の場合が多いだろう。勿論逃亡を防ぐ為だ。

余談になるが、嘗て志賀暁子というその頃盛名を馳せた女優が、何かの事件で刑務所に収容された時のことを後に書いた「我過ぎにし日に」と言う手記によると、出廷の時深編笠をかぶせられるのが屈辱的で一番いやだったが仲間の女囚の話によると「これは顔を人に見られないためのお上のせめてものお慈悲」だといわれたが、それでも編笠をかぶる

時はいつも拗ねて看守を手古づらせたと書いている。手記で手錠のことに触れていないが、手錠は勿論嵌められただろうし、それは流石の大女優も観念したことだろう。尚手記によると、一番楽しかったのは運動場に出された時で、その時は解放感から態々草履を脱いでハダシになって、しみじみ大地の感触を楽しんだと言う。

四、手錠のままの脱走

何年か前のアメリカ映画に、白人と黒人が片手を繋がれたまま脱走、お互いに憎み合いながら行動を共にしなければならぬ心理を皮肉に面白く描いたものがあった。最近我国でも護送の途中手錠の儘脱走した男が、何処かの工場で金ノコを借りて自由になり逃避行を続けたが、直きに悪運が尽きた話しは読者の御記憶に新ただろう。

いつかのアサヒカメラに「裁きを受ける人」と言う題で、手錠を主とした組写真が六頁にわたって載っていたことがある。「派手なアロハシャツにしゃれた靴も、いまは冷く光る手錠とワラ草履」として、前手錠から足までのクローズアップ。「失われた自由もすぐ窓の外に。だが金網とさらに鉄格子がへだ

てている」として、しょんぼりと手錠姿で腰かけてる姿。「公判五分前に、看守によって手錠がはずされる」として、両手首の錠が外れずされつつあるクローズアップ。「看守に縄尻りをとられて法廷に。どのような運命が待っているのか」そして「公判が終るとふたたび拘置所へと地下道を引かれて行く」として又前手錠姿で腰縄を打たれ悄然と引かれて行く姿。

扱て話しを初めに戻して、世の中には手錠ファンも割合多いようだから、御誌も更にこの上とも手錠（足枷）を多く使って、ファンの要望に応えたらどうか。イングリットバークマン等は態々自分から希望して、手錠を嵌められる過程の大写しを撮らせたと言い、それが又ファンの好みに投じて好評を博したと言う。幸い御誌も、梨花さんや絹川さんのような手足迄綺麗な得難いモデル嬢がいるのだから、今迄のよりもっと大写しとか連続動作（嵌められつつあるところ、外ずされつつあるところ等）を捉えて、グラビア写真を飾ることが出来たら、そこに又新しい分野がぐんと開けるだろうし、一段と精彩を放つのはなからうか。

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 皮の水着

今年の女性水着の流行は、全般的にボーイッシュになるらしい。

週刊誌や新聞に紹介された写真は、男性用からヒントを得たベルト付きのヒップダウンのセパレーツである。

外人モデルの可愛いおへそが気になる。

エレガントなワンピースより、セパレーツが中心になってきたことは、女性の肌がより露出されるわけで、男性にとってもうれしい夏に違いない。

三月二十四日東京新聞朝刊によると、

「特に日本人の体格やプロポーションを考えると、若さを強調するようなボーイッシュなものになったとある。

男性用と云ってもいいショーツはヒップを

ひきしめ、ヒップダウンはヒップを小さく見せている。即ち、より少年的に見せるわけ。

セパレーツを着る勇気があれば、ブラジャーとショーツがセパレーツよりやや小さく細くなっただけのビキニスタイルだって容易に



着られるだろうと思うのだが。

この意味でも今年の夏は楽しいのである。そのビキニスタイルなのだが……皮のビキニが紹介されているのには驚いた。

四月七日東京中日新聞によると、

「水着としてはまったく新しい素材（皮）を使ったニューモード」とあり

とあり

「子やぎの皮で作った白のビキニ」

デザインは、アメリカ人で「ローズ・マリ・リード」という女性。

皮のブーツ、皮のジャンパーと日本女性の流行もあざやかだが、皮の水着とは泣けてくるね。

アメリカでは、皮のブラジャー、皮のベルト、皮のコルセット、皮のブラウス、皮のストラックス、皮のブーツと、美しい女性の肢体をギリギリと締めあげる、皮の拘束法が発達しているそうだが、とうとう日常生活に於いて皮の水着を生んだわけである。

どこまで女性を皮で縛れば満足するのだろうか。

水のために子やぎの皮は少しづつでも緊縮しないものなのだろうか。

デザインした人が、女性だけに、こんなことを考えてみたくなったわけ。

泳いでいるうちに水着が緊縮すれば、胸とヒップを責められて、苦痛を感じることもだろう。

皮での緊縛こそレザーレディの快感というのなら、云うことはありません。

紹介された写真ではよくわからない。願えば、プールや海で皮のビキニスタイルに目にかかりたいものだ。

B イジメてやりたい気分よ

「ソノ部分にキスマーク」

なんて書かれると、大人でもドキッとするね。それが週刊平凡の記事なんだから、青少年教育に熱心な児童福祉審議会は、しっかりしなければならぬ。

大人の雑誌ばかり眼を光らせているから、児童週刊紙まで眼がとどかなくなる。

どっかが狂ってんだな。

東京ビートルズ（四人の平均年齢十九才）の舞台の紹介記事なのだが、

「お客はほとんど女性ばかりで、女学生、ハイティーン、BG、バーのホステスなど」

だそうです。

彼女達の掛け声のすさまじいこと。

「イジリたいワッ」

って、何をイジリたいんだろう。気をまわすよ、本当に。

掲句の果て、

「彼らの下半身をしっかりと抱いて、ソノ部分にぴったりとキスマークをつける女性まであらわれた」

「本当かよ、これ」

と云ったら

「あら、本当よ」

と客のBG、じゃなかったOL「オフィスレディ」が涼しい声でおっしゃった。

「見たの」

「見たわよ」

「へえ」

「何が、へえよ」

「俺がペッティングしようって誘ったって、ことわったくせに」

「それとこれとどう関係があるのよ」

「ビートルズをイジリたいんだろう。ペッティングじゃないの」

「失礼ね」

「ねえ、ペッティングをしましょうよ。ヘビーペッティング。本番をやるうなんてくだらないことは云わないからさ」

「知らない」

俺は何を云いたいんだろう。

話を元にもどします。

「不意にタイトスカートをはいた女性が、舞台にかけあがり、Sのタイツを脱がそうとする」

もどさないほうが芸術的な話なんだがな。

まあ、いいでしょう。続けます。

「見るに見かねて、着物姿の女性が前へ出て来た」

そうさそうさ。公衆の面前であまり露骨なことをすると、その筋におこられる。

「だが——」

このルポライター、演奏なんて聞いてなかったんだろうな。

「——その女性もステージにあがると——」

いいですか、児童福祉審議会のオジサマとオバサマ。

「——Sの部分にタイツの上から手をあて、指を動かす」

発禁。

「Sのからだに——」

からだ、ですよ。

「——反応があらわれると、客席は手を叩いて歓声をあげた」

いいねえ、おしとやかな日本の女性は。あるOLはこう云っている。

「イジめてやりたい気分よ。カラカッたり騒いだりできるから、ここに来るのよ」

写真の説明に、

「最前列でスカートをまくるファンもいる」というのがあった。

「客席の女性がわざわざビートルズの目に触れるように、すうっとスカートをたくしあげる」

いいですねえ。

「露わになった彼女の下半身は、生れたまま

の状態だった。

名文です。

あわれ、四人の少年達は真赤になり、ドギマギしてしまう。

「その困った表情を見て、彼女たちは、ニコニコ喜んでいる」

現代女性は、加虐的であり、露出的である。

東京ビートルズ、

「サポーターで装備」

とあいなる。

「週刊平凡」四月二十三日号・風俗ルポ「東京ビートルズ」より。

C 洗 剤

「エスキモーって、オシ……あら、失礼」

「何が云いたいんだい」と私。

「TVの記録映画を観たのよ」

「ああ」

「エスキモーが洗濯してたでしょう」

「オシッコでね」

「それぞれ」

「そのことを云いたかったの」

「いやだわ」

「いやなことないでしょう」

「きたないわね」

「何もわかったじゃないねえんだなあ」

「なんでよ」

「あれはね、洗剤ですよ」

「センザイ」

「石けんのかわりにしてるんですよ」

「うそ」

「うそなもんか、尿を石けんの製造に利用したのは、ローマ帝国の頃ですよ」

「ローマテーク」

「いいですか。二千年前の話なんですよ」

「ああ、そう」

「たよりねえなあ」

「よく知っているね」とA。

「史実はまかせておけ」

「あぶねえもんだ」

「その頃、コンモドスっていう皇帝は」

「なに、コンドームだって」

「コンドームじゃないよ。コ、ン、モ、ド、ス皇帝」

「いやあねえ」

「あれ羊子、コンドーム知っているの」

「失礼ね」

「そのコンモドス皇帝は」

「どうしたんだい、その皇帝」

「話がどうも進まないな」

「どうぞ、どうぞ」

「洗濯業者に、市民の尿をとる特権をあたえ、それに課税した、とモノノホンに書いてあった」

「池田さんに知らせたい話だ」

「路傍に、大きな桶や土の壺を置いたり、埋めたりして、市民の協力を求めたんですね」

「公衆便所のはしりだな」

「そういうことにもなる」

「洗剤で思い出した」と羊子。

「よかったね」

「コップ洗いの洗剤がないのよ」

「羊子のでいいよ」とA。

「馬鹿」

「さっそくだけど、俺のコップ、洗ってくれよ」

「いやあ、きたない」

D 忍者異聞

東映「第三の忍者」を観た。

織田信長の忍者二人と、武田信玄の忍者一人の斗争なのだが、筋はどうでもいい。

信玄が忍者に命を下す時の二人の位置が意外であった。

信玄は厠の上から、厠の矩形の穴を通して

厠床に坐る忍者に命令しているのだ。

史実なら結構だが、映画のことだからたしかないことはわからない。

忍者が信玄の厠の下穴に住んでいたとは、異様な設定であり、その着眼は面白い。

信玄と忍者の対話は、かならず厠の上と下でおこなわれる。

これが信玄でなく、淀君だったら、この映画を何回も繰り返し観たことだろう。

ディレクターは、そこまで考えるべきである。

淀君だったら、忍者になってもいい。

信玄の厠は、湯殿と同じ部屋にある。

湯は絶えず流れて、厠の穴倉にそそぎ、不浄な物を淀みなく流している。汚物が目にはいることもない。湯は温泉だろう。

現代の水洗よりはるかに清潔ではないか。

温泉の豊富な日本式トイレの絶品といえよう。

忍者が信玄の厠を利用したのは、信玄の命が外部にもれるのを防ぐ目的と、敵方の忍者の襲来をさける為だと思われる。

まさか厠の中に住んでいるとは思えない。

厠床に入る入口は小さいが、穴倉は縦坑と違って外堀に続いている。

外堀をもぐらないと外には出られない。

信玄は死ぬまで築城しなかった人だ。古府中は普通の屋敷にすぎない。

信長の忍者が、信玄の厠に侵入した。

その時、信玄は湯を浴びていた。

たちまち、厠の矩形の穴と、厠床の入口がしまり、忍者は厠の穴倉に閉じこめられた。

信玄、湯桶の湯を一度に流す。

湯責めである。

厠の穴倉にどうとうと湯は流れる。

やがて、忍者の身体は湯の中に沈んだ。

厠全体がおそろしい畏だったとは、忍者も気がつかない。

この着相が無かったなら、信玄の忍者が、厠の中に住んでいたという設定が生きてこない。

印象に残ったのはこの為である。

忍者映画は面白い。

E SMクラブ始末

「文通会特別グループ」

という三行広告をおぼえている方も多と思う。その案内書を紹介します。

「グループはマゾに興味を持つ紳士と、サドに興味を持つ淑女の集いです。現在MSに関する雑誌等も数冊見られますが、そのいずれ

もマニヤの交友の場を開放してはおりません。何分特種な世界ですから、そこには色々な問題があるわけですが、当会ではその様な多くのマニヤの声に答えて、ここにこの会を結成しました。したがってこの会の活動は、会員相互の文通を建前とし交際斡旋などは一切致しません。又この会は営業目的の会ではありませんから、その点もはっきりお断りしておきます」

とあり、

「会費は入会金一千円と会費二カ月分五百円とし、会費の納入なき時は自動的に会員名簿から削除されます。」

「入会と同時に御希望の条件に一番近い文通相手を、会員の中から紹介致します」

とある。

その他の会の活動行事は、

「会員の投稿による機関紙発行、

文通名簿発行、

会員相互の研究雑談会、

MS関係の著書の紹介、

MSポートの頒布、手札六枚一組五百円」

とあり、ペン字で、

「フェチ愛好者の為に女性使用後の下着実費

頒布」と書き込んであった。

「会員の希望があれば新にそれを加えます」とあるから、女性下着頒布は希望が多かったと思われる。

「住所、氏名、年令、性別、職業、文通相手の希望事項」

を記入する。

「入会申込書」

が添えられてある。即ち、

「貴会の趣旨に賛同し入会致したく、入会金一千円と会費二カ月分五百円を添えて申込みます。入会の上は会規を遵守し貴会にいささかの迷惑もおかけ致しません」というものである。

私が入手した案内書では、会の連絡所在地は、東京のある局の私書箱になっているが、三行広告によって連絡先は変わっていた。

結局、この会は、入会金詐欺だったらしい。

読者通信で詐欺にあった人の通信を見て、入会金を送ったら、その女性使用後の下着とやらを送ってくれるのか問い合わせたが、返事は得られなかった。

やがて、三行広告も消えた。

SMクラブもいいけれど、この類の詐欺にひっかからないようにお互いに注意しましよ

う。

その点、文通会の詐欺行為をあばいた読者通信の記事は貴重だった。

読者通信を読んでも、M的紳士は非常に多いけれど、S的淑女は少いのである。

「御希望の条件に一番近い文通相手」

とあるけれど、考えただけで、そんなにうまく男女の文通相手がいるわけがない。

SMが一般化した証拠かもしれないが、そう手軽にSMクラブが存在するほど、日本の法律は甘くはない。

SMクラブは、あくまで非営利の、同好者の小グループであれば、趣味として存在価値があるのである。

愛読者の座談会も結構だし、読者通信を通じて知り合ったグループも結構である。要はお互いに性傾向を理解し合い、信頼し合い、その上で、プレイの相手が求められれば、これ以上の幸福はないだろう。

最高の恋愛だといっても過言ではない。

F 下着なし

(イ) バックモード

白くてなめらかな肩や背中が、薄地の服から覗いていたら、気にならない男は女性を愛する資格の無い奴だ。

肩から背中にかけての、なんとも云えないやわらかい丸味ぐらい、女らしいムードが漂っているところはない。

半袖のレースの上着は、前から着て、背中で上部をサテンのひもで結んであるだけだから、二等辺三角形に背中が露出してしまふ。それに短いレースのパンタロンを穿いているから、誰でもパジャマだと思うだろう。

ところが、夏の夜会服。

あらわな背中にブラジャーのひもも見えないから、モデルは素肌に夜会服を着ていることになる。

アンドレ・コレージュのデザインで、パリのニューモード。

今年もバックモードの流行のようだ。

バックモードで思ひ出すのは、今年の春のピエール・カルダンの作品で、松本弘子が着た黒と白の絹のイブニングである。

各種の新聞週刊誌に紹介されていたから、記憶している方も多と思うが、松本弘子の大きく割れた背中に、黒バラが一輪、実に印象的であった。

このカルダンのショーでは、モデルはブラジャーをしていなかったと報告されている。

「下着なしで、それが流行なんですよ」

バックモードの元祖はマリリンモンローらしく、イブニングドレスの背を、ヒップの線まですばっと切って、世界中の男達を騒がせた。勿論、ドレスの下は何も着ていない。ヒップの割れ目さえ少し見せてくれた。湯殿からあがって、浴衣を肩にかけた美沙夫人のうしろから抱きしめた。

「あっ」

浴衣が肩からづれて、まっ白な肉づきのい背中がむきだしになる。

その美しい背筋にそっと唇をつけた。

「ああ」

一瞬、美沙夫人の背中一面に鳥はだがつた。

「やめて」

身をくねらせて悶えた。

唇は、しっとりとしめりを帯びた湯上りの肌に密着して離れない。美沙夫人が身をくねらせればくねらすほど、背中を自由奔放に動き廻る。

「いじわる」

美沙夫人の息づかいが激しくなる。

浴衣が足元にくずれ落ちた。

背中が、美沙夫人の性感帯。

(回) 中国服

シルエットは、たしかに、裸だった。ドアを開けて入って来た理紗は、白のサテンの中国服。

「窮屈で」

そっと横に坐った。

「ふとったらしい」

ひざまでの短い中国服で、スリット（裾の割れ目）が長いから、視線はどうしても見えない方向をむいてしまふ。スリットからレースのスリットが覗いている。

「何処を見ているのよ」

連れの女将が男のような声で云った。

「気になるんでね、このスリット」

「あら、これ、中国服にぬいつけてあるの」

「下着じゃないの」

「見せかけね、レースの飾り」

「ブラジャーは」

「していません」

「すると」

理紗は素肌にサテンの中国服を着ていることになる。

「中国服のときは、なるべく、下に何も着ないことにしているの」

「何も」

「ええ、着ないんじゃない、着られないのね」

「失礼」

「ええ」

「パンティも」

「あら」

「聞いて悪かったかな？」

「いいえ」

「穿いてないの」

「知りません」

はちきれそうな理紗の肉体は、少し小さくなった純白の中国服に窮屈そうに身をこめていた。

「でもね」

「——」

「パンティの線がうつっていないもの」

「うつるようなのは穿きませんわ」

「ふむ」

「薄くて小さな」

——フフ、っと笑った。

「いやな方」

「見せてくれないかな」

「あとで」

理紗の中国服は、その外に、純白のタフタの光沢が美しいカクテルアンサンブルと、白地に黒の花を刺繍したシックなドレスの二点を見た。白が好きなように、上品で優雅で美しい。

白と黒が好きだと云っていたが、この二色は派手にも地味にも見える。

中国服のデザインは、カラーを高くしたり裾を長くしたり、スリットを短かくしたりする程度の変化しかないから、着こなす人のムードで色々違ってくる。

ドレスの生地が派手なせい、理紗はアクセサリーはあまりしていない。

そういえば、ハイヒールも白か黒だった。

中国服だから下着を着ないのか、素肌にドレスを着たいから中国服を着ているのか、理紗に聞くのを忘れた。

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビア印刷写真集

豊満と清楚

お待たせ致しました。予約の方々には既に発送済です。

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共） 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビア写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号（美3）を本年二月に刊行いたしましたところ、多数の方々のお求めを頂き、嘗て十数年前、縛

られた女体ばかりのアルバムとして頒布しました「美しき縛しめ」の第一集、第二集同様、マニヤの方々から好評を賜り、厚く感謝しております。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビア印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) △

- (一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
 胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
 (二)、グラマーの縄目……………長野 良子
 むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
 (三)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
 うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
 (四)、鼻をいためつける……………長野 良子
 指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
 (五)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
 とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
 (六)、黒と白の対照……………大塚 啓子
 白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
 (七)、責めに疲れて……………大塚 啓子
 責め抜かれてぐったりとなった女体。
 (八)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
 アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
 (九)、襲いくる魔手……………新井マリ子
 恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。
 (一〇)、首締め縛り……………新井マリ子
 のびやかな肢体が疼れんする首絞め姿態。
 (一一)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
 開股しばりの上に非情の猿ぐつわが……。
 (一二)、開股棒しばり……………新井マリ子
 革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
 (一三)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
 縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
 (一四)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子

- 責められて急所の痛さに思わず呻めく。
 (一五)、首縄と足縄……………大塚 啓子
 首に掛った縄と足の縄が女体を変える。
 (一六)、縄に狂う……………大塚 啓子
 悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
 (一七)、足首の縄目……………大塚 啓子
 反りかえった足の指が縄目に可愛い。
 (一八)、縄による姿態の変転……………大塚 啓子
 二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
 (一九)、緊縛美の誇示……………長野 良子
 誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
 (二〇)、美しき肢足……………長野 良子
 投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
 (二一)、全裸緊縛の羞らい……………長野 良子
 はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
 (二二)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
 両手両足を縛られて一本棒に晒らされる。
 (二三)、けがされぬもの……………五月亜紀子
 清純な美しさが、この全身に漂っている。
 (二四)、猿ぐつわを噛ます……………大塚 啓子
 晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
 (二五)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
 荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
 (二六)、噛まされた猿轡……………大塚 啓子
 珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
 (二七)、猿ぐつわと縄……………大塚 啓子
 激しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。
 (二八)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
 縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
 (二九)、くねらす豊満女体……………大塚 啓子
 瑞々しくて柔かな女体が縄にくねった。

- (三〇)、棒責めの序曲……………新井マリ子
 両足首を棒の両端に縛られて、さて、……。
 (三一)、笞打ちのポーズ……………新井マリ子
 さあ、打って、とながし目の艶なこと。
 (三二)、素晴らしき美身……………長野 良子
 輝くような美しい裸身もあらわに……。
 (三三)、ポリウムを縛る……………長野 良子
 縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
 (三四)、むくれた双丘……………長野 良子
 情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
 (三五)、開股しばりの表情……………大塚 啓子
 開股しばりになった女の顔のアップ。
 (三六)、開股しばりの全貌……………大塚 啓子
 両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
 (三七)、伸ばされた足の表情……………大塚 啓子
 ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
 (三八)、開股ざらしの表情……………大塚 啓子
 放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
 (三九)、強盗侵入の構想……………新井マリ子
 押し入った強盗は女を縛って転した。
 (四〇)、緊縛女体の鑑賞……………新井マリ子
 家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
 (四一)、炊事場の嗜虐場面……………新井マリ子
 台所で縛られていたぶられるシーン。
 (四二)、美しきトルソ……………大塚 啓子
 胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
 (四三)、遅ましき臀部……………大塚 啓子
 くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
 (四四)、全裸の背面緊縛美……………大塚 啓子
 後手高小手の美しさは素晴らしい。
 (四五)、ビニール・コード……………大塚 啓子
 柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

連載傑作S小説

花 と 蛇

(第十四回)

団 鬼 六

二人の美女

「どう御気分は？」

銀子と朱美が鍵を外して、牢舎の中へ入って来た。美津子は、慄然として、体を硬化させる。一時間ばかり前、この毒蛇のようなズベ公達は、調教師に顔見せするんだと姉の京子を何処かへ引きたてて行ったのだ。

屈辱の象徴のような小さいバタフライ一枚を身に許されるだけの美津子は、緊縛された身をくねらせ、うしろの柱へ顔をすりつけるように伏せる。

「お姉さんがいなくなって淋しいだろうと思っ
てね。お友達を連れて来てあげたよ」

朱美は、そういって、顧り、手招きすると

悦子とマリが、桂子を引き立てて来た。

今まで、姉の京子が立縛りにされていた柱へ、ズベ公達は桂子を押しつけ、ひしひしと縄をかけ始める。

必死に顔をよじっている美津子のおどに手をかけた銀子は、ぐいと美津子の顔を桂子の方へ向けさせて、

「お嬢さん、ちよいと見てごらん。こういうのを股間縛りというのだよ。そのうち、貴女

にもしてあげるわね」

銀子は、そんな事をいって笑い、次に、悦子とマリにいった。

「桂子の股縄だけ外してやんな。それから、おしめを当てておやり。ふふふ、だけど、よく辛抱したわね、桂子」

悦子とマリに股縄を外された桂子は、その代りに、悦子が用意して来た真赤な布を禪のようにしめられていくのである。

桂子は、もうこれらの悪女達に抵抗する氣力を失ったように、されるがままになっている。

美津子は、そうしたズベ公達の残忍な行為を見るに忍びず、眼を伏せ恐しさに震え出す。

「おっと、こちらのお嬢さんの方は、お姉さんのお古で間に合わせて頂くとしようよ」

悦子は、桂子の腰に襦をしめ終えると、ズボンのバンドにはさんでいた桃色の布——昨日まで京子がしめさせられていた襦を手にとって、美津子に近づくのだ。

「やめてっ、嫌、嫌です！」

美津子は両肢を固く閉じ合わせて激しく首を振る。

「何いってんのよ。その可愛いバタフライを汚されちゃ、こっちが嫌だわ」

悦子とマリはそういつて、美津子のバタフライの紐を解き始めていた。

遂に、悦子とマリに、ピンクの襦をしめられてしまった美津子は、消えいるように首を垂れ、すすりあげる。

赤と桃色の色襦を、キリリとしめられた二人の美しい乙女を、しげしげと見た銀子と朱美、互いに顔を見合わせて、とってもよく似合うわね、と笑い合う。

「いいかい。あと三十分ばかりしたら、また来るからね。それまでに今しめてあげた襦をおしめの代用にして、二人とも、ちゃんと用

をすませておくのよ。もし、いわれた通りにしていないと、お仕置するからね」

美津子はそれを聞くと真っ赤になり、声を震わせて泣きじゃくるのだった。

「いいね。三十分以内にだよ。お互いに、よいいどんと調子を合わせて、一緒にすませるがいいわ」

ズベ公達は笑い合い、揃って、出て行こうとしたが、銀子は、ふと足を止めて、

「そうそう、二人とも初対面だったわね。一応、御紹介しておいたげるわ」

銀子は、桂子の頬をつつく。

「こちらはね。遠山財閥の令嬢で桂子さん。金持娘の火遊びというやつで、一時、この葉桜団と関係していた事があるのさ。馬鹿な娘だよ。自分が何時か葉桜団のいいカモになるってことも知らずにね。結局、美しいママと一緒に森田組の商品になっちゃったわけさ」

朱美が美津子の紅潮している頬を指でつつく。

「こちらはね。美津子さん。夕霧女子高校の才媛よ。私立探偵美人秘書、京子の妹であったのが運のつきね。これからは、お姉さんと一緒に秘密ショウのスターとしての修業をするのよ。年も背恰好も大体二人とも同じ位だ

し、今後は二人コンビで色々な芸当を教えこんであげるわ」

固く眼を閉じ、唇を噛んで、美津子と桂子は、鬼女のようなズベ公達の言葉を聞いている。

ズベ公達が高笑いしながら、外へ出て行くのと、一きわ激しく屈辱が胸にこみあがってき、美津子は、身を震わせて号泣するのだった。

そんな美津子に涙でうるむ瞳を向けた桂子は、すすりあげるようにいう。

「——美津子さん。貴女とお姉さんの事は今の連中から私、よく聞かされて知っていましたわ。許して。一番悪いのは私なのよ。私のために、ママや貴女にまで——」

桂子は、たまらなくなつたように声をふるわせて、すすりあげる。

「け、桂子さん。ここから逃げる方法はないのでしょうか。私、私、気が狂いそうです」

美津子は、眼の前の柱に緊縛されている桂子に、キラキラ涙で光る瞳を向け、声をつまらせていう。

「駄目よ。ここは、森田組の本拠ですもの。それに、こんな姿にされて、逃げられる筈はないわ。時期を待つより仕方がないわ」

「そ、そんな事いっていたら、私達、どんな目に合わされるか、わからないじゃありませんか」

美津子は、しきりに身をもみ、何とか縄目をゆるめようと悶え出したが、びくともするものではなかった。

「駄目だわ、ああ、お姉さん」

美津子は、どうしようもないようにぐったりして柱に背を押しつける。ここから連れ出されて行った姉の京子が、ズベ公達に今頃、どのような悪どい責めに合っているのかと思うと美津子はたまらなくなってしまうのだ。

「美津子さん。もうそろそろ時間だわ」

桂子がおろおろしながら美津子にいう。

銀子や朱美達が再びここへ来る前に、彼女達が命じておいたことをしていないと、桂子は口ごもりながら美津子にいうのだ。

「嫌よ。そ、そんな事、私、死んだって、嫌嫌」

美津子は、真っ赤になった顔を激しく振った。

「貴女は、連中の恐しさをまだ知らないのだわ。私だって、死ぬ程、恥しい事よ。でも、一旦、そうしなきゃ、どんな目に合わされるか——それに私——」

桂子は、先程から生理の苦しさに悶えていたのだ。だが、美津子は、泣きじゃくるだけで、桂子のいう事を聞こうとしない。

「美津子さん、お願い、しばらく眼を閉じていて——」

桂子は、仕方なく、気弱に眼をしばたきながら美津子にいうのだった。

美津子は、顔を横へねじるようにそむけ、固く眼を閉じる。

「——美、美津子さん。お願い、こっちを見ないでね」

音はやんだが、桂子は哀願的に何度も美津子にくりかえすのだった。

と、同時に、ズベ公達の足音。ギーと扉の開く音。

美津子は、ギクリと身を震わせ、深く首を垂れる。入って来たのは、悦子とマリの二人だった。

「わあ、ずいぶんと派手に濡らしちゃったわね。桂子、昨日のママそっくりじゃない」

二人のズベ公の高笑い、しかし、それは、すぐ止まった。

「なんだい。美津子の方は、おしめを使っちゃいないよ。一体、どういう気なんだよ。私達にさからう気なのかい」

美津子のセーラ服を着こんでいる悦子が眼をつりあげてどなった。

美津子は、悦子とマ리에、いきなり横面をひっぱたかれ、憤怒のこもった美しい瞳を開き、歯を喰いしばったような表情で、二人のズベ公を睨む。

「何だい。その顔。あたい達にさからう気なんだね。よし、そういう量見なら、こっちにも考えがあるよ」

悦子とマリは、美津子の縄尻を柱から外すと、どんと美津子の背をついた。

「おしめを使わなかった事を後悔するようにうんと責めてやるよ。さあ、表へ出な」

美津子は二人のズベ公に縄尻をとられて、牢舎の外へ突き出される。

桂子のいう通り、葉桜団の残忍さを美津子は、骨身にこたえるほど思い知らされる時がきたのだ。

調教室

ちょうど、その頃、静子夫人と京子は、三階の突きあたりの物置、つまり、調教室として用意の整った室へ、川田や田代達に引き立てられて行く。赤い絨氈の敷かれてある階段を一步一步、くの字の恰好して歩んで行く夫

人と京子、布切一枚許されず、肌身にあるのは、両手を後手に緊縛している非情な麻縄だけであった。

森田組の若い乾分達、それに葉桜団のズベ公達、それらが、屠所へひかれて行く小羊に等しい夫人と京子の周囲を取囲むようにしてからかいながらついて行くのだ。

いよいよ、人間である事を忘れさせられるような恐しい訓練を鬼畜のような人間達の手で、受けさせられるのだと思うと、静子夫人も京子も恐しさに足がすくみ、時々、二人とも階段の途中で、たまらなくなったように身をかがめかける。

「何をしてるんだ。ちゃんと歩かねえか」

その都度、川田は、縄尻をひいて、二人の美女の尻をけた。

すすりあげ、身悶えしながら歩いて行く夫と京子の尻が、左右に色っぽく揺れ動くのを、森田組の若い男達がニヤニヤして見つめている。

調教室という事になっている三階の部屋まで、二人の美女を引立てた川田は、ノックする。ドアが開いて、顔を出したのは、出歯をむき出した猫背の鬼源だ。

部屋の中には、鬼源の指図で、森田組のチ

ンピラ達が作ったらしい不気味な道具類が、部屋の隅にぎっしりと配置され、部屋の中央には、土俵のように大きなマットレスが敷かれてあった。その上に、二本の麻縄がからみ合うように天井から垂れている。

川田は、恐怖に身を硬くしている夫人と京子を追いついて立てるようにして、マットレスの上へ押しあげ、垂れて下がっている縄に夫人と京子の縄尻をつなぎとめた。マットレスの上に二人の美女は、ぴったり体を寄せ合ったように立たされてしまう。

これから、一体、どのような目に合わされるのかと、二人の美女は生きた心地はなく、ぴったり体を寄せ合って、小刻みにふるえているのだった。

川田が煙草を口にしながらいう。

「へっへ、この部屋が、お前さん方の調教室というわけさ。見てみな。木馬も、ハリツケ台も、大まな板も、全部揃っているぜ。素直に鬼源のいう通りの事が出来なきゃ、何時でも、ああいう責道具が、ものをいうってわけさ」

川田がいうと、田代も、

「これだけの道具を揃えるには、ずいぶんと金と手間がかかったよ。二人とも、しっかり

調教を受けて、立派なスターになってくれなきゃ困るぜ」

と、腹をゆすって笑う。

静子夫人と京子は、互いの白い肩に顔を埋め合うようにして、この屈辱を必死にこらえ合っているようだった。

「そんな風にしてしまうと、まるで恋人同志のようね」

と銀子がからかう。すると、鬼源が、

「恋人同志になって頂かねえと、これからの調教もやりにくいんだ。つまり、同性愛でやつだな。二人とも、そういう気分になんてならなきゃ駄目だぜ。さて、一つ、本当の調教に入る前に、二人でキッスしてみな。うんと熱の入ったやつをね」

鬼源がそういう出したので、ズベ公達はわあーとわき立った。

静子夫人と京子は、反射的に身を離し、あまりの屈辱に、こめかみのあたりをけいれんさし、涙のにじんだ美しい瞳できっと鬼源と川田を睨む。

「何でえ。それ位の事で、驚く事には当るめえ、これから、しなきゃならねえ事にくらべりゃ序の序の口でやつだぜ」

さあ、やったり、やったり、とやくざやズ

べ公達に身体のおちこちを突かれる夫人と京子である。

「何なら、お前さん達の眼の前で、美津子と桂子に面白え実演をさせてもいいんだぜ」

川田は、ちらりと奥の手を出した。

「——京子さん」

静子夫人は、二人の少女が自分達の眼の前で鬨りものにされるのを見る勇気はない。少女達の危機を救うために、その犠牲になろうと覚悟をきめたのか、泣きはらした瞳を京子に向ける。

「——お、奥様——」

京子も静子夫人の覚悟を知って、すすりあげながら、悲痛な表情で夫人を見た。二人は頬と頬とをすり合わせ、身体をふるわせて、口惜し泣きする。

「何をもたもたしてるんだ。早くキッスをしねえか。甘く激しいキッスをね」

川田が、笠にかかって大声をあげる。

静子夫人と京子は、人間的な思念を一切投げ捨てたような気持で、互いに固く眼を閉じ唇を近づけ合っていく。

夫人と京子の唇が触れると、ズベ公達は、どっと喊声をあげた。が、川田と鬼源は、「唇を合わすだけじゃ駄目だ。二人とも、し

っかり舌を吸い合って、熱烈なキッスシーンを開けるんだ」

川田と鬼源は、何度も夫人と京子にそういう行為を演じさせ、氣に入らぬと、青竹を持つて来て、うしろから二人の尻を激しくひっぱたく。

一時間近くも、そのように強制された接吻を演じている二人の美女は、遂に鬼源と川田を満足させる本格的な接吻をするようになった。夫人も京子も齒を開いて、舌を交互に相手の口の中に入れ合い、吸ったり吸わせたりしているのを見た川田と鬼源は、互いに顔を見合わせニヤリとする。

ようやく、唇を離す事を許された夫人と京子は、すぐに体をねじり合い、互いに背を向け合って、激しく嗚咽する。

「何も、そんなに照れる事はねえよ。きっといいコンビになれるぜ。なかなか気分の乗ったキッスだったよ」

と川田は笑う。

「さて、気分の乗ったところで、本格的トレーニングといきましょうか。小道具は出来てますかね。鬼源さん」

川田が鬼源の方を向いていうと、細工は流々、と鬼源は笑い、黒鞆を持ち出して来る。

鬼源は、ふと、そのあたりに群がっているやくざやズベ公達に向っていった。

「すみませんが、これからの事は、わっしと川田の兄さんだけに任して、皆さんは、一まず、外へ出て行っておくんない。最初だけに、皆さんが、そうじろじろ見ていなさるとこの別嬪さん方、羞しがって、体がコチコチになって、うまくいかねえんです」

鬼源がそういうと、やくざもズベ公も、口をとがらし出した。

「何だい。あたい達は、それを楽しみにしてこままでやって来たんじゃないか。邪魔はしないから見物さしとくれ」

銀子と朱美が口を揃えていったが、川田がさえぎった。

「まあ、お前達の気持もわかるが、この御婦人方は、俺達の玩具じゃねえ。森田組の資金源になるよう鬼源さんのやり方で、みっちり仕込まなきゃならないんだ。それに。練習中を同性の女達に見られるってのは、たまらねえ恥しさで、鬼源さんのおっしゃるよう、美しいスターが固くなってしまっちゃ、俺達がいかににくい」

夕方までにみっちり、訓練し、今夜は必ず皆んなの前で実演させるから、と鬼源がズベ

公達に約束したので、やっと納得した銀子は森田組の若い連中をさそって、廊下へ出る。二皆のホーム酒場で、大いに飲もうとズベ公達はやくざ達を誘うのだ。

「じゃ、今夜を楽しみにしてるよ。奥さんと京子嬢の成長ぶりが早く見たいものだわ」

銀子と朱身は、身体をふるわせて、すすりあげている夫人と京子にそう浴びせ、笑いながら、ドアを閉めた。

狂乱の美津子

花模様の青い絨氈のしかれた明るい部屋、そこは田代の邸の中の豪華なホーム酒場だ。十人ばかり坐れるスタンドが作られてあり、スタンド椅子にぎっしり坐っている森田組の若い連中に、カウンターの中に入っているズベ公達が壁の棚の洋酒をサービスしている。部屋の隅にあるテーブルには、田代と森田が向い合い、メモを書いて、何か話し合っているが、秘密ショウを開く時期や接待する客の打ち合わせであろう。

やくざ達とズベ公達は、賑々しく杯のやりとりをし、異様な熱気が部屋全体に充満してきたが、その時、ドアが開いて、悦子が、姐さん、いるかい、と入って来た。



やくざ達の間混って、スタンドの中央に女王然として坐っている銀子が、何だい、悦子、と酒ににごった眼を向ける。

「姐さん。美津子の奴ったら、全く強情なんだよ。せっかくしてやったおしめを使って用をたそうとしないんだ。少し、生意気だよ。ちょっとばかり、ヤキを入れてやって下さいよ」

悦子は、そういうと、廊下の方へ向って「マリ、その娘、こっちへしょっぴいておいで」

外の廊下で、お願いです。許してっと美津子の悲鳴が聞える。野卑な愚連隊とズベ公達が酒を飲み合っているそんな場所へ、あられない姿でひっぱり出されようとしている美津子の必死なあがきが聞えてくる。

「何をしてるんだよ。おいでったら！」

マリのヒステリックな声、と同時に、マリにどんと背をつかれたらしい美津子が、倒れ落ちそうに部屋の中へ入って来た。

身に許されているものは、ピンクの褌一つというあられもない姿をひしひしと麻縄で緊縛されている美津子は、酒ににごった男女の眼に射すくめられたように、その場にちぢかんでしまう。そんな美津子の縄尻をうしろか

ら、ひったくるようにとったマリは、強引に美津子を立上らせ、スタンドに坐る銀子の傍まで押し立てて来た。

「お嬢さんの褌姿って全く良く似合うぜ。ふるいつきたいぐらい可愛いじゃねえか」
やくざ達は口々にそういい、ニヤニヤしながら近づいて来る。

マリに縄尻をとられ、銀子の前に立たされている美津子は、体中を火の玉のように赤らめ、美しい顔を横に伏せ、血の出るほど固く唇を噛みしめている。

銀子は、底意地の悪い眼つきで、美津子の腰のあたりに眼を落とす。

「なるほどね。おしめを使うのは、嫌なようね。じゃ、いいわ。必要でないものをしていたってしかたがない。脱がせておしまい」

銀子は、悦子とマリにいった。

あいよ、二人のズベ公が、ガムを噛みながら、結び目に手をかける。

「——か、かんにんして！」

美津子は、悲鳴をあげて、その場にうずくまってしまった。その上へ、のしかかっている悦子とマリ。

銀子は、自分の足もとで、バタバタやっている三人を面白そうに眺めながら、ビールを

飲みつつける。

「ふふふ、お嬢さん。そんな褌でもないよりましなようね」

銀子が声を立てて笑うと、髪の毛をくしゃくしゃにしたマリと悦子が、ハアハア息をはずませて立上り、銀子の前のスタンド台に、長いピンク色の布を置く。

「全く、手のかかる娘だよ」

悦子とマリは、コップに注がれたビールを一息に飲み干し、足下にうずくまり、激しく泣きじゃくっている美津子の尻を憎々しげにける。銀子は、二人をなだめて、

「手荒にしちゃいけないよ。商売ものじゃないか」

そして、椅子から、降りた銀子は、床に泣き伏している美津子のすべすべした両肩に手をかけて、抱き起す。

「さあ、お嬢さん。この椅子にお坐りするのよ」

スタンドの止り木型になっている椅子へ、美津子は、ズベ公達に支えられるようにして坐らされる。

「たまらねえ眺めだな」

背後で、そんな光景を酒を飲みつつ眺めるやくざ達は、蕩然としていたのだった。

丸い平たい背のない椅子へ、絹餅のような美津子の尻がべたりと乗っかっている。美津子のなめらかな背の中頃にある痛々しく後手にくくし上げられた可憐な手首が、妙に艶かしくも見えるのだ。

「お嬢さん。ビールがいい、それとも、ウィスキーにする？」

銀子は、唇を噛んで、首を深く垂れている美津子の黒々とした髪を手でいじりながらいう。

「姐さん。何もそんなに優しくしなくたっていいじゃないか。おしめを使おうとしないこの娘の強情さを、たたき直そうじゃありませんか」

悦子は、口をとがらして、そういった。

「まあ、そうあわてなくてもいいよ。お前だって、このお嬢さんのセーラ服をちゃっかり頂戴したんじゃないか。あまり、そういうじめてやるもんじゃないよ」

銀子は、悦子のコップにビールを注いでやりながらそういった。団長の銀子が、そんな風に颯りものにする娘に対して優しく出る時は、嵐の前の静けさで、より一層の残忍さを発揮する時であり、悦子も、それをのみこんで、顔をくずし、コップのビールをうまさう

に飲み出す。

「ところで、お嬢さん。貴女も、森田組の商品になったのだから、そう何時までも、我儘を通してもらっちゃ困るのよ。そこで、考えたのだけどね。貴女にいいおムコさんを世話してあげようと思うの。十八といえば、もうそろそろ、花嫁になっても、いい年頃じゃないの」

銀子は、美津子の美しい横顔を眺めながらそんな事をいい出した。かなり酩酊した朱美が、割りこんで来て、美津子の雪のように白い肩に手をかけ、酒くさい息をはきながら、「そうよ。あんただって、男を知っちゃえばもっと素直になって、葉桜団や森田組のために働く気になるわよ」

美津子は、新たな戦慄をおぼえ、柔肌に血をのぼらせ、激しく首を振る。

「一応、お見合だけでもしてみたら」

銀子は含み笑いで、美津子のすぐうしろに立って、ニヤニヤしている吉沢を呼び、席を開けて美津子の隣に坐らせる。

ちらと吉沢を見た美津子は反射的に顔をそむけ、石のように身体を硬くする。忘れもしない。昨日、不良少年達に残忍な強制浣腸を受けた自分をからかいつけ、そのあと、姉

の京子にむごたらしい浣腸をほどこした毒蛇のように恐しい男なのだ。

屈辱と憤怒に、肌身をわなわなふるわせている美津子に、銀子は煙草の煙を吐きかけながら

「この人はね。森田組の幹部なんだよ。貴女のような初心な女学生が、とても好きだとおっしゃるのさ。今朝から、私達にね。貴女との間を、とりもってくれと何度も頼みに来てるのさ」

朱美が、つづいて、

「森田組の大幹部に、女にしてもらえるなんて、すばらしい事じゃないの。私達の顔を立ててくれるわね」

美津子は、狂ったように白い裸身をふるわせ

「嫌っ、嫌です！ かにんして、かにんして下さい！」

スタンドの台の上に、顔を押し当て、美津子は激しく泣きじゃくる。

ずいぶんと嫌われたものね、と銀子は笑いながら、吉沢の顔を見る。

派手な格子じま模様の背広を着、青色のソフトを横っちょかぶりにしている吉沢は、ウィスキーをなめるように飲みながら、

「鳴くまで待とうほととぎす、てのが俺の氣持さ。鳴かすのは、お前達の役目だぜ。そのかわり、これからは、大いにお前達を眼にかけてやるからな」

わかつてるよ、と悦子が笑い、吉沢がポケットの中にしまっているものを出させる。それは、刺繍のほどこしてあるピンクのパンティであった。美津子の顔の前へ置き、

「ふふふ、お嬢さん。これは貴女のものね。」

吉沢さんがぜひ譲ってほしいというので、譲ってあげただけど、こんなものをポケットに入れるほど貴女の事を想っているのよ。思いを遂げさせてあげる気にならないかい」

眼の前に、自分の今まで穿いていた下着が、これ見よがしに置かれ、美津子は、羞恥にきゅっと唇を噛んで、それから眼をそらせる。

「吉沢兄さんに抱かれるのは嫌、となるとお嬢さん、今、おしめを使わなかったというよ。うな我儘は絶体に許さないよ、いいね」

銀子は急に声を大きくしていった。

美津子は、涙を流しながら、小さくうなずく。吉沢の毒牙にかかる事を思えば、どんな辛い目に合わされても耐えようと悲痛な決心を美津子はしたのだ。

「もうおしめなんて、ぜいたくなものは使わせないよ。朱美、そら、あれがどこかにあったろう。病人の使うやつさ」

朱美が、ああ、あれかい、と笑って、部屋を出て行ったが、すぐ、かけもどって来て、カウンターのの上に、ガラス製の横にした壺のような容器を置いた。尿瓶である。

耳たぶまで真っ赤にして、美津子は、再び顔をカウンター台にすりつけるようにして泣きじゃくる。

銀子の指図で、森田組の若い連中が、部屋の中央に椅子を積み重ねて、天井の梁に二本の縄を通した。二本の麻縄がゆらゆらと揺れているその下の床に、ズベ公達は、間隔をおいて、二本の短かい棒を打ちこみ始める。

それを見た田代が、驚いて椅子から立上り「おいおい。部屋の床にこんなか打ちこんで気でも狂ったのか」

と怒ったが、朱美が、

「美津子嬢があまり強情なんでね。ちょいとばかり教育するんですよ。面白いものをお目にかけますから、今日のところは大目に見て下さいよ」

カウンター台に顔を埋めて、激しく鳴咽している美津子のすべすべした陶器のように白

い肩を銀子はうしろから抱くようにして、「お嬢さん、用意が出来たわよ。さあ、こっちへどうぞ」

魂を失った人間のように、美津子は、銀子に体を支えられるようにして床の上を腰をかがめて歩いて行く。

天井から無気味に垂れ下がっている二本の縄、そして、床に打ちこまれてある二本の棒、そして、ズベ公達は、美津子を酒部屋の中央にX型にして縛り止めようというハラなのだ。

ちら、とそれを見た美津子は、眼まいがして、その場に、膝をついてしまう。

悦子とマリが、そんな美津子の両側にしゃがんで、固く後手に縛ってある縄を解き始めた。勿論、美津子をこれからX字型に縛り止めるためである。それから、どういう事を演じさせられるか、美津子は、想像するだけで息が止りそうだった。羞しさと口惜しさで火の玉のようなものが咽喉もとにこみあがってくる。

縄を解かれた美津子は、本能的に両乳房を両手で固く押さえ、両腿をぴったり閉じ合わせて、猿のようにちぢかんでしまう。

「さあ、元気を出して、お嬢さん」

銀子が、舌なめずりをするようにいい、悦

子とマリが、死刑執行人のように美津子のしなやかな両腕を左右からかいこむようにして立ち上らせた。

「——嫌です。お願いっ、や、やめて！」

美津子は、待ちかまえていたズベ公やくざ達に取囲まれ、上から垂れている二本の縄に両手を大きく高々とあげさせられ、その各々の手首を縛りつけられてしまう。

両手首にきびしく喰いこむ縄目の痛さに、美津子は悲鳴をあげたが、野卑な男女の眼の前に全身をあます所なくさらけ出してしまった羞恥の辛さの方がたまらなかった。

美津子は、吊られている両腕の附根のあたりに、真っ赤になった顔をこすりつけつつ、すすり上げ、形のいい両肢を力一杯閉じ合わせている。ぴったり、くっついた可愛い膝

◎読者の皆様へのお願い◎

○電話にての問合せや照会等及び直接のご訪問は固くお断りいたします。連絡や通信はすべて書面にてお願い致します。面識のある方以外は、電話と訪問は受け付けませんからご諒承下さい。

○住所氏名年令職業用件などをご明記の上事前に書面にてご連絡下さった方には、時間に余裕のある限り、つとめてお逢いする

小僧が思いなしか、ぶるぶるふるえているようだ。

銀子が、美津子の紅潮した頬を指でつつくと、含み笑いしながらいった。

「ふふふ、どう、お嬢さん。貴女これから、皆んなのしている前で、とても羞しい事をしなきゃならないのだけど、思い直して、吉沢さんの花嫁になる気はないかい」

美津子は、嫌々と首を振る。

「——嫌ですっ、死、死んだって、そんなこと——」

銀子は舌打ちする。

「そうかい。それなら仕方がないね。じゃ、酒のさかなになってもらおうよ」

銀子は、悦子とマリに眼くばせした。

美津子の兄もとに身をかがめた悦子は、美

ようしておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。モデルの照会など一切電話ではいたしておりません。何事に拘らず電話は無駄ですから、お止め願います。

○常々お願いしている甲斐があり、最近読者通信のヨコ書きは殆どなくなり喜んでおります。ヨコ書きは全部没になってしましますから悪しからず。尚、用紙は問いませんが、なるべく行間をあけて下さる方が好都合です。

津子の生毛の生えている白い脛をパチンと平手でたたき、

「さあ、アンヨを開くんだよ。お嬢さん」

美津子は、悦子に足首を握られると、狂ったように悶え抜く。

「往生ぎわの悪い事では、姉の京子とそっくりだね。吉沢の兄さんに満座の前でヒジテツを喰わす度胸があるんじゃないか。何も今更羞しがる事はないよ。うんと大きく開いて頂きやしょう」

マリは、そういつて、見ている連中に応援を頼む。合点だ、と酒気を帯びている男達がばらばらと近寄って来た。

「——やめてっ、嫌っ、ああーお姉さん」

美津子は、かっと頭に血がのぼり、逆上したように悶えたが、どうしようもない。すらりとした両肢は、打ちこまれてあるくいに、がっちり足首はつなぎ止められてしまった。文字通り、X字型に固定された美津子をズベ公達は哄笑して見つめる。

「お嬢さん、そういう恰好をね。どうでもし頂戴スタイルというのよ」

銀子が楽しくてたまらぬような口ぶりであった。

寒 椿 抄

女相撲美考

雄 松 比 良 彦

相撲美については、古来語りつくされた感がある。最近に例をとっても、尾崎氏、北条氏らの作家をはじめ、石井鶴三氏らの絵画方面から、和歌森氏らの文学家の眼で、また特に舟橋聖一氏のそれは独特のものである。さて女斗美としての女相撲のことになると、これはまことにすくない。江戸時代の発生以来の見世物としての立場から、これについて書く人もすくないのだと思われる。しかし全くないわけではなく、江戸時代の風俗物にも女相撲の「やさしさとはげしさ」などと述べているし、戦前の雑誌「歴史公論」をはじめ、

風俗史家たちも女相撲の美しさについて一面からではあるがいろいろ述べられている。現在私共のもっとも重視するのは、土俵四股平氏のこの方面の業績で、奇譚クラブに連載された「女斗美考現」をはじめ「女斗美短歌」^{うわなり}「鬪相撲」等の健筆によって、さまざまの角度から女の相撲美について分析されているのは諸賢皆御承知の通りである。

氏は女斗美の根本を女と女の間につねにある対抗意識にとり、これが美しい肉体を見せあい組み合うことにより烈しい斗志となる、という御見解を示され、これに恋愛上の確執

とか、その他の敵意の交錯した土俵を設定される事が多い。氏はさらに女の相撲美の形態的な面、感覚的な面についてもくわしくのべられる。諸賢御承知の通りであるからくりかえさないが、氏の見方により多く女斗美への眼をひらき得た後進の数は多いと思う。氏の分析の上につけ加えることもないわけだが、私共もまたそれぞれこの方面をひろげてゆくのが後進のつとめでもあろう。駄文を草する次第である。

○

対戦する女の間になにか劇的な確執を設け

るのは原則にかなっている。けれども精神までは心理的な背景は一応別として考えたい。



娘相撲 「はたき込み」 畔亭数久

斗いに対する美しさは、それが女であるためにすばらしい甘さとかげりをもつ。この演出

単なるスポーツとしての女相撲であっても、そこには土俵に上ただけで斗志に昇華してゆくさまざまの心のかげりがあるわけである。女相撲の美しさとして、まず間接的サディズムをあげる事が出来る。美しく逞しい女の体を置く場所として、土でかため砂をまいた土俵、その俵、その上での格闘、そして多くの極まり技は土俵にたたきつけられる、または土俵から転落するといったものである。また吊り技、投げ技の際の女体の全体重が立俵にかかる感じなどもそれであるし、吊り合いの乱れで乳房と乳房を揉み合うのもそれである。柔らかくて甘い女体と砂、土、俵、格闘の対照が美しい。更にまた、これは男の相撲美でも論じつくされていることだが、もっとも素朴な、純粋な、虚構のない、力そのものの

のバックとして素朴な土の土俵、水、紙などの役割、また一本の布を唯一の斗争の衣として腰にしめ込む褌など、そのすべては古典的な均整を思わせるものだし、そこに粋な、りりしい、やさしい色気があるわけである。黒い鼓の赤い緒の紐、とだれかいだったが、そのような可憐さもある。

次にフォームとしての女相撲については、この相撲という格技がもっとも男性的なもので、この点では他のどんなスポーツとも異っており、特にフォームのもっとも女性的なゲレンデ・スキーと好対照であって、従ってそのさまざまの攻防の型や礼儀、技などがすべて、女性のとらないまたはとりたがらない型としてある点を考えてみると、蹲踞の両腿を開く型（草相撲の若者も女性的なものは腿をすぼめてしやがむ）、仕切りの型や四股等の斗争外の型をはじめ、取組中の足をからむ技、吊り上げ、寄り倒し等、いわゆる日常の（斗争時でない）女性のころでは抵抗のあるものばかりである。それが斗争のファイトの上に昇華されて美しく伸びのびと行なわれるところに、真の美しさがあるわけだが、特に吊りと、腹を合わせての寄りは柔道をはじめ他のどんな女性の格技にもなく相撲独特の

美しさである。

○ 男の相撲でもそうだが、褌一本で何の虚飾もなく力斗して雌雄を決する相撲の美しさにその極まる瞬間の一種の無常感がある。これは極まり技にもよるけれども（踏み切り等ではあまり感じがない）、こらえにこらえて寄倒される瞬間とか、あるいは逆に寄り倒そうとする一瞬の逆転でうっちゃられるとか、投げ技でも残し残して遂に砂に落ちる瞬間等にはこの一種の無常感があることは先達ものべている。女体の場合、その心的情景のかけりが特に美しい、これは斗争中や勝負あった負け力士の「悲愴美」ともいわれるけれども、私はラオコーンなどを連想することはないと思うので、やはり一種の「無常感」だと思う。女と交わった直後の、死滅をさそうような無常感には近い。これは男の相撲よりも、格闘するものが女であればはるかに印象がつよいのであって、リルケが「芸術的体験は性的体験に同じ」といっているが、私は女相撲のエロティックな面はやがて昇華されてこの死滅をさそう「無常感」にリルケのいう芸術性をつよく感じている。

褌について。先にものべたように褌の美しさはまずその素朴なこと、原始の美しさであろうか。一本の布をしめこむのであるから、そこには人工的な縫い目もなければ、袷の切り去った曲線もない。素朴さと力強さのみがある。六尺褌の愛好者もこの点は肯かれると思う。そして、次に考えられるのは結び目の美しさである。ボタンとか、ジッパーとか、そういうものを考えればこの「結び目」がいかに素朴で力強いかがわかる。女相撲のうしろ三ツ（結び目）は、とくに女の帯のやさしさを連想させたのしい。簡素に、うつくしく、りりしく結んでほしいものである。さて褌はりりしくしめこまれるが、これは力斗とともにみだれ、ゆるみ、結び目はとけて、格闘するものそのものの心のうごきをそのまま目に示す。髪の流れなども同様である。さる外国誌が「日本人は風流であるから、この褌が斗争中解けることを改良しようとはしない。この褌を絶対解けないものに改良すれば相撲は美しくない」といっていて、これは男の相撲についてだが、女相撲にはもっとつくよくあてはまる。決して前袋がゆるんでプベスのぞくとどうとかいうものばかりではない。私共男性は無論女相撲の前袋のゆるむこ

とにも大いに関心はあるが、それは別に恥部を見るということではなく、そういう状況にかまっていられない斗争のはげしさの中で力斗する女のうつくしさであり、またさらにそれよりもつくくしくしめた褌が力斗で次第にみだれてゆく美しさを指摘したい。あまり乱れては斗争出来ないから、しめ直すことは必要である。先の外国誌ものべているように、しめ直すなどはまどろっこしい、などといったのは相撲美と無縁の人である。児童用相撲パンツなどは教育上の意味はあるしスポーツとして普及するためにもよいが、美的要素はゼロである。

褌の美しさは、そのつくくしくしめ込まれることと共に、他の下ばきではかならずかくれる尻が全くかくれないことも一つであろう。女体の尻の（特に力の入った）美しさは、土俵四股平氏が「女相撲のほれどころ」といったくらいである。またその股間の中もおおうべきはしっかりおい、他は全くかくさず、その美しさは投げ技や寄り倒し、うつちやり等の際、最高度にあじわうことが出来る。これは単なるエロティックな見方かというところでもない。私は全裸の女相撲（？）をこのまない。上のようにはげしい極まりわざでも、



久数亭 畔 「上手投げ」 相撲娘

るが故に美しいのである。

女斗美に六尺褌を配するか相撲褌を配するかは人々の好みでことなるが、私はやはり相撲褌をとる。六尺もわるくないが、斗争と共にみだれてゆくこともすくなく、何よりもそのしめ方自体が元来ゆるまぬ様になっていふということにある。六尺褌はむしろ女性の下着として美しいであろう。そして、六尺褌は一般の「格闘」であり（寝業のある）、相撲はあくまで相撲であって（相撲褌で寝業は出来ない）、私は女の相撲を好む。褌の色は土俵四股平氏によって「黒」と断定されている。たしかに髪の色と対照する黒褌は美しい。力斗に血の上った肌にもよく調和する。けれども、他の色もまた悪くない。スポーツ用の相撲褌は白木綿であるが、これも清潔でよい。真紅は、すこしタイハイ的で、私は連想したことはない。どちらかというと地味な色の方がよこと

思う。しかし芸者衆のたわむれ相撲の話では、真紅のふんどしをしめたという人もあり、目のさめるような情景だったというから私もよくわからない。濃紺や小豆色、ガーネットやワインカラーが若い娘相撲には清潔で力づよい。不可なのは模様のあるふんどしである。女のための相撲褌は、すこしやわらかくて、巾もすこしせまい（女の掌でしっかりと握れる位にしめあげる）のがよいと思われる。しかしグニャグニャの布はだめである。何といっても斗争の衣であり、単なる飾りではないのだから。緋モミの褌など、力強さを失なうこと甚だしい。

しめ方は、大体ふつうであるが、後立褌を細く締上げる、結び目を美しくする、それと前袋に不要のシワを作らぬ（これは男の力士でもいましめられている）こと、前下りを折込む形を美しくとのえ、遅ましさととりしさと柔らかさとやさしさと可憐さを一挙に表現することが出来るという点は、この相撲褌の女体におよぼす魔力である。

下り、いわゆる馬簾下りは、相撲美としては私はいらなと思うているが、用いれば独特の味もある。それはある場合には簡素な力強さをそぐののでよくないと思うが、土俵上に

もし全裸であつたら多少醜悪であると考え。みだれ、ゆるんでいても、そこに褌があ

い。どちらかという地味な色の方がよこと

相對して蹲踞するとき及び仕切りのとき、それから斗争中ぬけ落ちる等の美しさはある。また土俵に上るときや、花道を来る女力士が両手で前に捧げぎみに持上げてくればつつましくて美しかろう。しかし総じて下りをつけると人工的なおいになるのは、どうかと思っている。これは職業力士という印象になることもいろいろ問題がある。

対戦する二人の女の禪の色をかえるのは通俗的である。髪の色、肌の色、それに年ごろまですこしずつでもかえるというのも同様である。しかしゲートルもいうように、真に感銘をあたえるものは常に通俗的であるのだから私もこれをこのむ。ただ年令までかえるとなるとはじめにのべた試合以外の状況の設定があつて、年増と娘の格闘とか、そういうのはかならずしも本質的ではあるまい。体格も微妙にちがっている二人の取組がこのまれている様だ。ヤセギスは困るけれども。

禪論が長くなったがやはり女の相撲美の大きなポイントであろう。女斗美といつてもレスリングや柔道を好まぬ人も多いゆえんである。

○
力斗する女体の美しさについては、土俵四

股平氏の健筆につくされているので、この文では故意にその方面にはふれてないのだが、勿論これが女相撲の美しさの本質であることは当然である。しかしこれはある点では万人共通の所感となりうるもので、あえて個人の文に草するところもあるまい。土俵氏の文をまた読まればよい。髪から顔、首、乳房、胸、腹、腰、尻、太腿、膝、ふくらはぎ、足のうらまで氏の分析にあっている。

○
女と女が肉体を組み、そこにレスボス的なものを見る愛好者もあるようである。私はその方にうといのだが、実際格闘する女体にはそんな感じがおこり、それが逆に斗志にかわってゆく点もある。ボードレールのイポリットとデルフィーヌのようなものだが、相撲は格闘であるから、どちらが手弱女でも逞ましい征服者でもない。あるいは吊りあいや足のからみ合い、寄り合い、投げ合いのうちに変転する両者の雌雄の感じが楽しいのかもしれない。私にはすこし受け入れにくい。

○
私の判断出来ぬものに行司と観衆がある。これは当然相撲という以上あるわけだが、どうもじっくりした設定が出来ない。スポーツの「高校女子」などは客観的に行司は教員、観

衆は応援の生徒たち及一般人ときまってしまうけれども、女の相撲を演出する行司と観衆の理想の形はどんなものだろう。行司も観衆もなくしてしまうというのでは単なる敵意の露出した斗争にすぎず、相撲のルールを守ることや相撲禪をしめこむことは無意味になってしまう。いわゆる女のケンカになってしまふだろう。土俵四股平氏は行司は絶対女に限る。上半身禪で緋ぢりめんの二布をまとうがよい、とのべていられるが、どんなものだろうか一寸わからない。私個人の趣味ではむしろ下半身禪で（六尺禪をしめる）、上半身に地味な布子（そでなしで尻の上までの丈）を着た女行司がよいかと思うが。雪崎氏のS・E画伯にあらわれる正規の行司（男）もむしろ小細工がなくてよい様もある。観衆のこともふくめて、識者の卓見を承わりたいと思っている。

○
女斗美の愛好者は数多い。エロティックな好みといつても、芸術の根元はエロティックなものであり、女の相撲は芸術的なものだという（男の大相撲でも左様にいわれている）考えにはかわりがない。

この方面にまとまったイメージと交流の場をはじめて作られた奇譚クラブにあらためて謝意を表する次第である。

（完）

小説に現われた処刑場面

黒田 寿

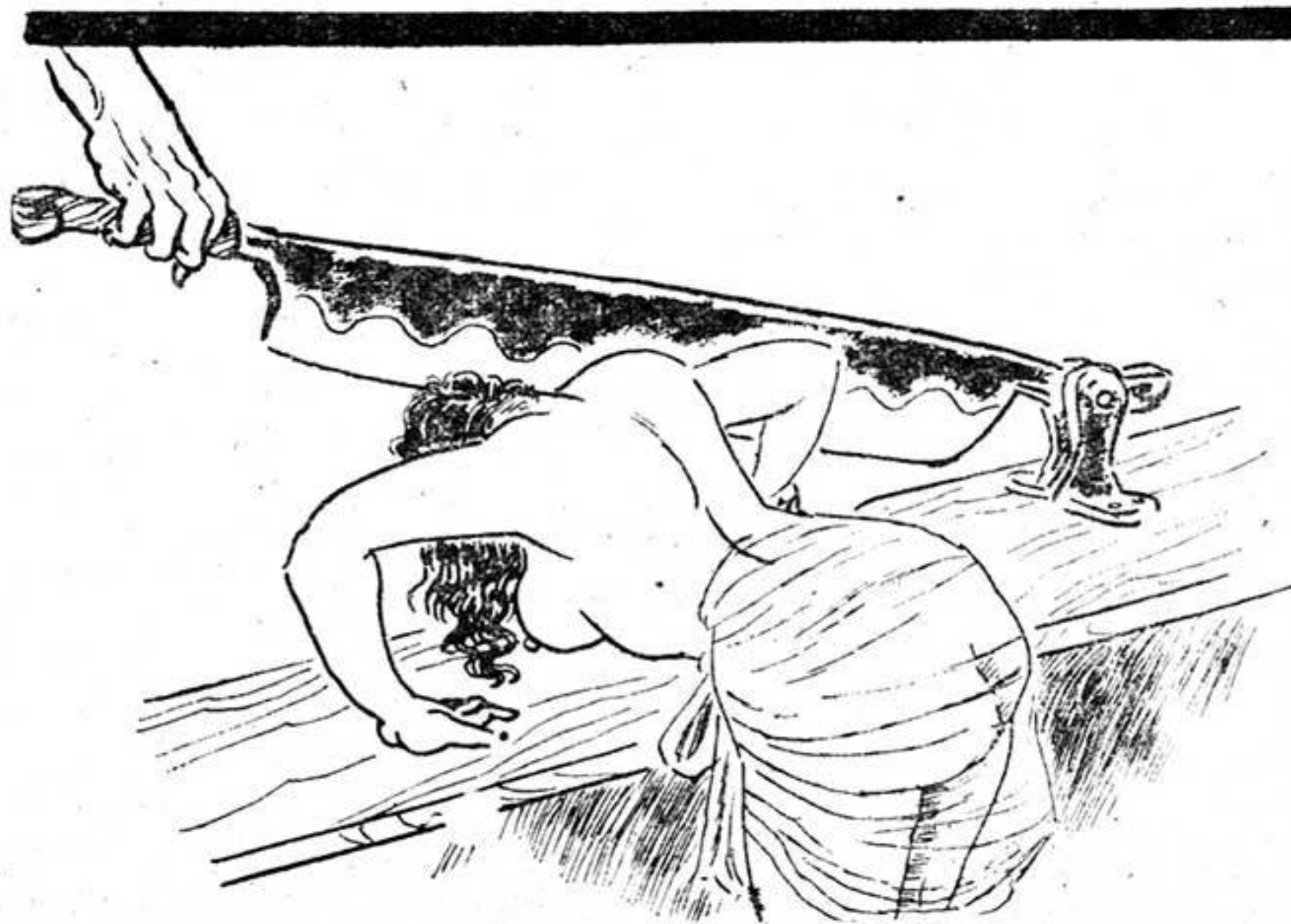
絞首刑

ジョウン・ヘンリーの「夜への屈

えらそうな題名をつけましたが、私の本棚は貧弱なものだし、第一に私は、読んでいるものと自分の空想が入り混り、原作とはえらく遠いものになってしまう癖があります。そんなわけで、一応女死刑囚の登場する小説の名が出ますが、以上のわけをあらかじめ御承知願います。

伏」がある。映画にもなったが、殺人罪を犯して死刑の判決を受けた若いイギリス女性の最後の幾日かを、日記風に生々しく描いたものである。桜の木が花でたれ下がっているの

を見れば、死ぬまで首を絞められて吊り下がる自分が目に浮かび、爪の斑点を見れば、爪がのびてなくなるまでに自分は死ぬのだと思う。そして死刑の日が次第に迫ってくるのだ



が、正確な日はまだわからない。毎晩が死刑の日を知らずにすむ最後の晩だと考え、遂に明後日の朝と知ったとき……彼女の気持を察すると私はワクワクしてくるのです。

いつエレベーターが止り、いつ絞首台がバタンと落ちるか、わからないだろうと、看守は言った。彼等はみんないっしょに降りていく。だが私はたった一人で降りていくのだ。白いシャツと茶色のスカートを着け、磨いた靴をはいて、下へ、下へ……。それから彼等はわたしが死んでいるのを見にやってくる。わたしたちは歩いていく……顔になにかかぶせられ……首のまわりになにかかけられる……わたしの脚にもなにかつけている……これがそのラストです。

このあと踏台がバタンと落ちて、十数分後彼女は短い一生を終えるわけ。この場合四月号の「パンティと死刑マニヤ」にも書いた様に、パンティはおそらくぬがされているのでしよう。彼女は死ぬまでにジタバタと、かなり長い間苦しまなければならぬのは云うまでもありません。

「ノートルダムのせむし男」では、映画と違って、美しいジプシー女は哀れ絞首刑に処せられ、ロープの先に首をくくりつけられても

だえ苦しみつゝ息絶える。「オデッセイ」では実に十二人の侍女が一行に並んで首をつきだし、網にかかった鳥の様な哀れな格好で、一度に吊られるという嬉しい場面があります。文章は短かいのですが、強く印象に残るのは数のためですか？

アーサー・ケネストラの、そのものズバリの題名「絞首刑」は実話に取材しただけに迫力があり、恐怖と苦悶のあまりはらわた（子宮？）がとびだし、看守のなかには発狂者もでたと言うエデイス・トンブソン。比較的落ちついた最期をとげたのは良いが、執行翌日にその人形が作られてショー・ウィンドウにかざられたルス・エリス等が登場します。

実話なら私は、いろいろ興味をもってしらべたのですが、前記二人のほか、絞首台にのぼるときあまり抵抗したために、衣類が裂けてしまい、殆ど全裸でブラ下がったマリイ・アン。無実の罪ということが処刑三日後にわかった十七才の少女サラ・トーマスの話が興味をひきました。

日本の代表としては大逆事件の菅野須賀子でしょう。主に左翼関係の人の書いた文献や小説では、彼女は従容として絞首台に立った

ことになっています。この事件の少し前に、当時の帝政ロシアでも革命主義者が捕えられ女性も二人死刑になりましたが、その一人はロープを自分で自分の頸にまき、自分で踏台をけとばして死んだそうです。彼女はこれを手本とし、日本に於ける女流革命家第一号を自負していたとか。

しかし別な本によると彼女は先が輪になったロープを見たとき失神し、それまで彼女に反感をもっていた刑吏も始めて同情し、死刑をうける時ははつきり意識しなくてはならないのですが、特に目かくしをしてやり、失神したままの身体を二人で抱きかかえて台上にはこび、首にロープをまいてあの世に送ってやったと云います。左翼の方は怒るかもしれませんが、私はこの方が人間らしくて良いと思います。読者の皆様は如何ですか。

斬首刑

斬首と云ってもいろいろあるが、ギロチンが最も有名だし、フランス革命を第一にあげなくてはならぬ。ツワイクの「マリイ・アントワネット」では御承知の王妃が断頭台にのぼる場面がクライマックスだが、私にとってはあまり従容としているのは気に入らないし

それに王妃は三十六才の年増（失礼）白髪になつていた、など云うのではゲンメツ。

むしろ私はランバル夫人の最期の方が好きだ。半裸姿で逃げるのを追いかけて、下腹をズタズタに断ち割り、首をかきおとす。あぐくのはてに槍の先に生首を突き刺し、むきだしの死体を脚でもって引きづり、三人目はえぐりとった内臓を高くかかげて行進する。この内臓とは何だろう。革命指導家のなかには王妃の内臓をシチューにして食うことを、公約としたのが居たと言う。おそらくこれは心臓や肝臓よりも重要な（女性にとって）ものではないだろうか。さすがの王妃もこの親友の生首に続くものを、はつきり認めたとたん気絶したと伝えられている。

故人となつた辰野隆氏の「フランス革命夜話」に斬首されたシャルロット・コルデーの生首は、或はアルコール漬となり、或は剥裂となり、もうひとつの説は骨だけの標本となつたと云う。いずれにせよ彼女は胴体だけしか葬られなかったわけ。しかも検死の結果完全な処女と言うので、怒りわめいた詩人まで登場している。

十八才が最年長という三十余人のヴェルダンの乙女たちの話もすばらしい。ズバリ、ズ

バリと、一人一分たらずの割で処刑されたのだろう。とにかくナイフを持っていただけで暗殺家とされ、首を失った女性が居る始末。つくづく当時のフランス市民がうらやましい。五十万の犠牲者のなかには若い美女も相当数あつたろうから。

最もみにくい最期をとげたのはデュバリー夫人だと云う。ルイ十五世の寵妃で、彼女のために死刑になつたライバルの美女は数を知らないが、時勢一変し、彼女自身が首を斬られる番になると、まさに獣の様にあばれまわり、ギロチンの刃の下に押しつけられても抵抗を止めなかったので、頬のところからザックリと断ち割られ、ぞっとする無惨な姿になつて死んだ。

「三銃士」では、ウィンター夫人が大刀で首を打たれ、胴体と共に包まれて川底に投げ込まれる。「ロンドン塔」では十八才の王女ジェーン・グレイが、斧の下に首をさしのべ悲惨な最期。「ベアトリス・チェンチ」では髪の毛吊りの拷問にも耐えたベアトリスが、親兄弟の証言のため、広場で斬首の刑をうけ、死体は晒しものとなる。

小松太郎の作品に、今次大戦の直前ウィーンで処刑されたブロンドの美女、マルタ・ロ

ーエンスタインの処刑の光景を画いたものがある。夫殺しの彼女は十分に計算をし、軽い罪をうける覚悟で捕えられたのだが、残念にも裁判官はナチスの役人となつており、死刑を宣告されてしまったのだ。

……そこにはフランスのギロチンを横にしたような無気味な断頭機が横たわっている。彼女はその前に膝まずき、何か祈っていたがナチの将校の剣が一振され、号令がひびきわたると、二人の看守が左右から彼女の肩をつかみ、断頭機の下に横たえた。鈍い鉄の音が一つだけして、彼女の首がコロコロと降りしきる雨の中にころがった。ペールがはがれ、美しい死顔に氷雨が降りそそいだ……。

これがその一説だが、ドイツの死刑が断首であることは「白バラは散らず」で反戦主義の女子学生が死刑になり、生首をみせしめとして晒されたことからわかる。

「ヘンリー八世」に絶世の美女サルズベリー夫人の処刑の場がある。反逆罪に問われた彼女は、一時は護送車から逃げすだのだが、結局は斧でもって断首され、木の枝にかけられて晒しものとなる。

我国では戦国時代の小説に、首を斬られる女性は数多く登場する。だが実話としては高

橋お伝、夜嵐お絹が両横綱だろう。

お絹の生首は獄門に梟け晒しものとなったが、獄門が廃止になったのは、この翌年だから、彼女は最後の獄門女囚のわけだ。お絹は一刀のもとに首を打落されたようだが、最後の斬首女囚お伝の方は、どの本を見ても三度目でやっと首が胴から離れたと云う。その性器がえぐりとられて、東大医学部に戦前まで標本としておかれたのは事実らしい。

その他の死刑

「私は死にたくない」は、映画の方が有名だし、これについてはすでに何人か書かれているので、ここではとりあげない。「夜と霧」を代表とする今次大戦をあつかったものもまた同じ。

一九四三年、世界で最初に電気イスによる女性の死刑が行なわれた。題して「電気イスのアニー」。彼女はたしかに美人だったらしい。しかも電流が通じて断末魔の痊れんの模様を一人の記者が、かくしカメラで撮影している。この写真は私も見ているが、両手両脚を縛られ、ふくらはぎに電極、鉄の帽子をかぶった女性が、ぶるぶるとふるえている場面である。ほかにも見た人がおられますか？

電気イス死刑では、三度も焼き直され、普通の倍以上の電圧をかけても尚、腹から下の部分しか完全に焼けず、上半身は生焼けだったルス・スナイダー。名前は忘れたが平然と殺人を行い、全く無感動のまま死んでいった十九才の美人ギャングがある。

電撃にしびれ、死の苦痛にのた打つ美女の姿。三分から四分と云えば、かなりの長時間である。十五秒もすると電極に近い部分の肉体の温度は五十度以上となり、白い肌はうす茶色に、やがて黒く変色してゆく。絶命した時の口腔、肛門その他の温度は普通六十八度に達し、血汐も煮つめられて暗赤色に変わるのだ。ある女性の場合、誤って十万ボルトの電流を通したからたまらない。一瞬にして完全な黒焦げ、灰になったそうだが、即死できなかったら却って幸せかもしれない。

銃殺で有名なのはマタ・ハリ。実際の年齢は知らぬ方がよい。肉体は二十台の若さと云うから、これを採用しよう。彼女は死の瞬間まで銃殺は狂言で、死んだふりをすれば放免してもらえるつもりだった。銃弾が乳房を貫いて、始めて本当の死刑と知った時はすでにおそく、その〇・一秒後に絶命した。但しその最後の絶叫はすさまじく、立合人のすべて

が耳をふさいだという。

ハリツケは戦国時代には我国でも多くみられたし、特に人質を殺す時はハリツケか火あぶりのどちらかだった。信長など随分美女の串刺しが好きだったらしい。肛門から口まで刺し貫ぬくのだから、女性にとってはあまり有難いものではない。ここでは火あぶり代表の八百屋お七君と共に別な機会にゆずることとする。

小説の方に目を転ずると、本家本元のマルキ・ド・サド以外にもかなり目がつく。宝物を盗んだぬれぎぬを着せられて、ハリツケにかけられるピエル・ルイスの「アフロディット」代官の求婚をしりぞけたため、あぶり台に縛られるケラーの「ドロテアの花籠」水責めから火あぶりの刑をうけるガボリオの「鉄仮面」が面白いが、ヒロインが助かってしまふのは感心しない。この点「千夜一夜」に王妃が二頭の馬による股裂きの死刑をうけるものがあるので気に入った。

我が江戸川乱歩も死刑ではないが、よく美女を殺している。長篇ともなれば必ずと云って良い位、私を満足させてくれる。全部を読んでいないのが残念だが。

作者も題名も忘れたし、内容もウロ覚えだ

が、適当に着色したこんな話は如何です。

ある美人探偵が、誘かいされた三人の美女をさがしもとめ、遂にある解剖学者が犯人らしいとわかる。そこで彼女はひそかに彼の地下室にしのびこむのだが、彼女の見たものは白骨となった三人の死体だった。しかも最初の一人の白骨には、動静脈がそっくり残されており、二人目のそれには神経が、そして三人目には筋肉が附着している。呆然としているうちに、この美人探偵も捕えられる。

この三人の美女は学者の実験台に使われたのだ、即ち絞首、ガス、電気イスの死刑をうけた時の女体の変化をしらべ、更に骨格、脈管、神経、筋肉の標本とされたわけ。美人探偵は自分が次の犠牲にされることを知って泣きわめくが、哀れ斬首され、各種内臓は生首と共にアルコール漬標本となる。

学者は最後の犠牲として、二十才になったばかりの愛妻をえらび、バスに漬けて窒息死させたのち、女体の完全標本に作りあげる……。

食われる女

探偵小説のなかに、殺した女の死体の処分に困った結果、安全なくし場所として自分

の胃袋をえらぶ、というのがあった。バレた原因はソースを買いすぎたためだから愉快。

実際に人間が人間を食う話は知らないでもないが、さすがの私もこれを書く気にはなれない。やはり小説から出しましょう。

同好の友佐出須登が四月号に書いた「地獄船」に美女が鱈、怪魚、蛇、虎、蟻の餌食となるが、これ以外にも川で水を飲もうとして鰐に首を食いちぎられたとか、象に鼻でなぐられ頭蓋骨が碎ける、踏みつぶされてペチャンコになるとか、大ワシに心臓や肝臓をつき破られ、足首をつかまれ人吊りになって巢に運ばれ食われた、などが考えられる。

人喰人種に捕われた美女が一番面白い。火で焼いたり、砂に埋めてむし焼きにしたり、土釜で煮たりして食べてしまう。まるい、かたい乳房は、早くこうなるようにとの意味をこめて幼女に与えられ、妊婦には子宮が優先される。ちよっとした臓器療法ですな。

最後に御紹介したいのは香山滋の作品で、「魔女の足あと」で美女がバッタの大群に襲われ、白骨だけがきれいに残っていた、というのはまだ平凡だが、「海鰻莊奇譚」が実にすごい。

プール・サイドに横たわる全裸の美女、そ

こにうつぼの一種のものすごい怪物があらわれて、まず強力な電気で彼女を即死させ、その肛門から首をつつこんで、若く美しい女体を強力な消化酵素の力で溶かしながら、グビグビと飲みこんでゆく。あとには彼女の白骨とそれをつつんでいる皮膚だけが残っていたという。

解説によれば、これは科学的に全然考えられないことではないという。実際に自分の身体よりも大きい魚に吸いついて、丸のみでなく溶かしながら骨だけにしてしまう生物が居る以上、何時この地球上にどんな怪物があらわれるかわからない。

海岸で数人の美女が波とたわむれている。間もなくあがるおそろしい悲鳴。即死させてからなど親切なことはいらない、生きたまま肛門にもぐりこんで食いあらず。骨も皮膚ものこさず……かくして悲鳴がすべて消え去った時、波の上には数枚のビキニ型水着が浮いていた、というのは如何です。

こんなわけでS—○○%、それも殺しだけが趣味の私は、三文小説も名作もすべて同一書架にならんでいます。お世辞もあります。奇クなどは私にとって重要なものですから、今後もし引き続き発展されることを願ってこの愚文を終わります。

雨の夜ばなし

……悦虐絵燈籠……その八

万田不仁

……島原の古城を夜る昼る普請をくはだつる。そうして此のしろと申すは、ひがしはあらうみ、西はぬま、しほのさしひきあって、馬のひずめもたたず、南北岩石そびえたり。たて十八町、よこ十ちやうばかり、中からぼり、三重にほりとほし、山のこしをほって鉄砲狭間をあけ、本丸にこでんしゆをあげだし、やぐらだし、塀逆茂木をかいだて、二のまる三の丸までもおふづにこしらへ、たてこもる人数は、ざふひやう三万四五千におよべり……(吉利支丹物語)

☆
また、降り出しましたナ。ひと雨毎に寒々となるこの頃、落葉を叩く雨音は侘びしいものでございますナ、殊に私のように盲目の、無明の世界におります者には、秋の長雨は何やらひどく気が滅入ってなりませぬ。ええ、何と仰せられます。また何か恐ろしげな話をせよと仰有る、ハハハハ、これは亦いかなこと、さなきだに陰気な今宵、え、なに、じやから尚更話が面白う聞かれるとか、ハハハ成程、御前のような男盛りのお方には、そうか

も知れませぬ、また私からしますれば、老いぼれの下手な昔話も暗い雨の晩のあたりの気配、何とのお打沈んだぐるりの様子に助けられて何程か興も添おうかと……いやいやいずれにせよほんの屈託しのぎになりますかどうか……ええ、では今宵は私が未だ二十前のこと、この身に降りかかった思い設けぬわざわい、誠に今思うても一場の悪夢としか思えぬ忌わしい地獄図中の人となった私のその折の所業、見聞の一端をお話し致しましょうか……が、何分にもあまりに厭わしい、醜い事柄

でございますから却って御機嫌をそこねはしまいかと、些か心配なことでございますが……あれは、もう今日より五十年も以前のことで、寛永十四年、あの肥前島原のいくさの時のことでございます。当時、私は島原城下の高麗屋という旅籠屋——父が営んでおったのでございます——におりました。これより先私は熊本の能楽師友枝様の許で修業していた者で、折柄母が死病という報らせに生家へ戻っていたのでございます。ところがあの天草の一撥の騒ぎで……もう城下は申すまでもなく、二三里四方放火で炎の海、一撥の群は兵糧、人手を徴発して廻り、異議を云う者等を容赦なく斬捨ててゆきました。私も城下を大風の吹き通るように荒らした一撥の団に捕らえられ、原城に連れてゆかれたのでございます。

☆

「こらあッ、性根を据えて働かんか！」

生爪を剥がした足を引摺り、下痢腹を抱えて土運びをしていた伴作は、いきなり後から腰骨を強く蹴上げられて、ひとたまりもなくつんのめった。

「馬鹿者、気を入れてやらんとぶち殺すぞ」
びゅうッと鞭が唸る。うわッ、悲鳴をあげ

た伴作の手が己が後頭をかばう、びしッ、びしッ、びしッ、突き上げて来る怒りにまかせたひどい鞭打の嵐が伴作の頭、肩口、背中を襲う。

「意気地のない奴じや、とっとと立てッ」

原城二の丸の空濠掘り現場だ。見廻りに来た佐土倉監物は虫の居処が悪かった。彼は伴作の困憊した足どりをを見ると、忽ち革鞭の雨を降らしたのだ。

「早ようせんと寄手が来るわ、まごまごしておる者どもは軍陣の血祭にあげてくれる」

出陣をむき出し、罵った監物はその儘飛竜を描いた黒い陣羽織の肩を揺すって、他の普請場へ向かう。

伴作は俯伏した儘、容易に起きあがれなかった。首筋にねっとり血が流れているのが解る。彼は鞭打と蹴られた痛み、それに堪えがたく差込む腹痛に呻吟しながら、城内に連れて来られて直ぐ赤い髪、碧い眼の伊留満から聞かされた神様の摂理、神様の慈悲、久遠の愛の光と凡そ掛離れた、彼のような細い少年には地獄にも等しい使役の苦しみを与える城兵を心の中で呪った。その時

「この男はどうしたのです？ 喧嘩でもしたのですか？」

伴作の耳に、ふと優しい、天来の妙音にも似た円やかな声音が聞えた。

「へ、へい、この者は只今お見廻りの方に打たれたんで、へい」

年嵩の人足が答えている。伴作は、あまりに苛酷な鞭打に体がばらばらになってしまったような痛みで気を失いかけていたが、人をつつとり惹き込む声の主を、そっと仰いで見て思わずはっと息を呑んだ。

額に天冠の光る鉢巻、豊かな黒髪にくっきり映える少年のような凛々しい顔立、赤い唇。南蠻風の白い頸飾を巻き、朱金襴の陣羽織を軽い皮具足の上に着た若い女が小具足に身を固めた侍女と見える少女四五人を従えて立っている。

「どうやら病んでいらしい。阿蘭、その者を……」

若い女は、暫く伴作を見詰めた後、傍の小柄な侍女に何か耳打ちして、足早やに去っていった。秋の日に女の華やかな陣羽織が光り黄金造りの細身の太刀が輝いた。

☆

伴作は、阿蘭と云う少女に導かれて、二の丸の長い廊下を通り、幾度も階段を上り下りした。甲冑に身を固めた、いかめしい顔付の



武士たちと摺違う。鎧の擦れ合う音が伴作に恐怖と不安を感じさせたが、ことによると、あの若い女のお蔭で苦しい空濠掘りや土運び、石垣の修理等の使役から解かれるのではないかという微かな望みも何時か湧いていた。最後に曲った、窄い階段を上ると、阿蘭

は黒光りする重そうな扉を押し開けた。

「お入り、坐って待っていなさい」

八畳程の部屋だった。足の長い和蘭机があり、机の上の燭台に絵蠟燭が明るくともっている。香炉から何やらいい香りの煙が薄っすらとあがっている。伴作は固い床の上にお

ずおずと坐り、そっとまわりを窺った。阿蘭は片隅の床几に腰掛けている。左右の壁は西班牙織の真紅の天鷲絨で蔽われ、天井から下げた金の鳥籠の中に緑色の翅の小鳥の番いが頻りに鳴いている。それから正面の壁を見て、伴作はあッと声を立てそうになった。

藤色おどしの鎧を着た、うら若い女武者が逞しい白馬に跨がってこちらへ駆けて来る。赤い母衣が風をいっぱいはらんでいる——女武者は、先程堅物の鞭に打ち倒された伴作に声をかけた若い女だ。彼は驚いてまじまじと女武者の姿を眺めた。しかし、それが所謂南蠻絵、彩色鮮かに人物でも景色でも生々と描き出す南蠻絵であることに程なく気付いた。それにしてもその画像は本当に生きているように色どり美しく等身大に描き上げられてある。女武者の大きな黒瞳がまばたきする。丹花の唇がほころびて白い歯が見える。黒髪が風になびく……呆然と彼が南蠻絵に見惚れていると、扉が開いた。

「ああ、この男、いい顔立、大人しそうじゃの」

女はそう云いながら机の向う側にいき、華

車な椅子にかけた。女は革具足も陣羽織も脱いで、白綾に金糸で十字架を散らした具足下に黄金作りの太刀を佩き、右手に長い鞭を持っている。

「ホホホ、また姫君のお癖が……こんなやさ男では力がありません」

「フフフ、遅い男ならば、城内にいくらもいる。私はこんな優しい少年を使うてみるのが面白いのじゃ」

「ホホホ、途中で気を失なってしまうます」

阿蘭は憐む眼差を伴作に向ける。

「これ、そちはどこぞ悪いのか？」

女が伴作の顔をじっと見て訊ねる。黒い瞳が蠟燭の明りに妖しく輝く。白いほっそりした首に黄金の細い鎖が光放っている。

「こりゃ、お答えするのじゃ」

阿蘭が立って来て、膝頭で伴作の背をこづく。

「は、はい、腹がひどく痛みまして……」

「そうか、可哀想に。先ずこれを飲め」

女は腰の印籠の中から取出した赤黒い丸薬を阿蘭に渡した。

「果報者よ、有難く頂くがよい」

阿蘭の手で鼻先に差出された丸薬は、異臭の濃いぬらぬら光った粒だ。

「秘薬じゃ、安んじて飲むがよい。そちは何という名じゃ？」

「伴作と申します。城下の旅籠屋の件でございます」

「ふむ、伴作とやら今日から私の下で働くのじゃ。伴作はもう宣教師から天帝の御心について聞いたであろう。この城内の地下牢に切支丹を迫害する長崎奉行の下で働いていた同心衆、探番どもが多数囚われている。邪宗門の名の下に祭司や宗徒の人々を獄門に送るべく走狗となって働いた彼奴らをここで如何に苦しめ、責め殺すか。デウスの教えを防げる彼奴らを滅す手段は色々ある。そちはその手助けをするのじゃ」

女の言葉につづいて阿蘭が

「これ、伴作、そちは濠掘りの使役で斃れるさだめであったところ姫君のお情で救われたのじゃぞ、御礼を申し上げなさい。このお方はかの宇土の虎王と云われた小西行長様のお孫さまで、沙羅姫さま……」

云う間に姫は立上って部屋を出ていく。

「これ、伴作、もしも不埒な考えをおこすと命はないのじゃぞ」

平伏している伴作の頭上に阿蘭が太刀を閃めかせた。刃風がひやり伴作の頸に触れた。

☆

木板に線彫りで浮き出した十字架上のキリスト像と、木の面に貼付けた艶のある石版画のマリヤ（嬰兒を抱いた優しい姿）、ふたつの像が正面の壁に、大人の背の高さ程のところに懸かっている。それは幕府が切支丹宗徒狩に用いる踏絵であった。伴作も庄屋の庭で同心衆が厳しく見守るうちにその六七寸程の長方形の踏絵の上に足を乗せたことがある。彼は切支丹には些かも関わりのない人間だったから踏絵の前に何等恐れを感じなかったが元来氣立の優しい彼はたとい絵や彫物でも、その人物が異国の人でも、やはり神様と云われる者の像を足裏にかけることに何か後めた気がしたものだ。

壁の踏絵は両側から引かれる西班牙織の紫天鵝絨の幕の間に、ほんのり明く浮き上がっているよう。チラチラと踏絵の面を照らしている蠟燭のあかり。それは、踏絵の前に跪いた二人の屈強な男の頭、双肩の上で燃える、火繩を蠟で固めた灯だ。男は鈍く光る褐色の鉄仮面をかぶせられ、その鉄仮面の額の上には蠟燭を懸ける尖りが髪のかげの渦毛の形をしている。肩には蠟燭を立てる為めの釘が打込んである。黒々と凝った血汐がそこから背にかけ

て筋を傷ましく引いている。男は手首のない両手を鎖で結ばれ、踝に重そうな鉄輪を嵌められている。

「ここは処刑場のひとつじや。その男二人は長崎奉行の走狗、探番だ。己れの犯した大罪切支丹宗徒を拷問、殺戮した大罪のむくいを今こうして、生身にひしひしと受けているのじや、悪業をなした手はあの通り、手首を斬落したから最早用をなさぬ。彼奴らは死ぬるきわまで燭台代りに神のみ前に跪いておる訳じや」

阿蘭は低い声で喋る。左右の玉子色の壁に刀、錐、針、鞭、太い蠟燭、大小様々の棒が懸かっている。(これは、責め道具だ――) 伴作はおびえた。振向くと壁いっぱい凄じい戦鬨の模様を克明に描いた南蠻絵。紺地に黄金の十字架を描いた軍旗が騎兵と騎兵の長槍閃めく激突、乱闘の彼方に砂塵を凌いでたためき、その上の青空を分けて両手を挙げたキリストが淡く影のように見える。

扉が軋って開き、高手小手に縛められた上背のある中年男が皮具足を着た少女に縄尻を取られて、よろめきながら入って来た。すぐ後から同じ皮具足姿の四人の少女を従えた沙羅姫が現れた。姫は菊形の白い頸飾を巻き、

和蘭風の濃緑の天鵝絨の袴をはいている。

「同心須永善兵衛、到頭網にかかったの、ホホホ、いくさの初めに軍神マルスの儀に捧げてくれよう、ホホホホ」

沙羅姫は仰向き、白い喉元を見せて心地良げに笑った。

「うぬッ、卑怯者ッ！」

「フフフ、卑怯なのはお前たちの方じや、切支丹に対する汝等の所業を考えてみよ、かの立山の大火刑をはじめ数々のむごたらしい殺戮、天刑が下らずには済まぬ、ホホホホ、覚悟は出来ていよう」

「御禁制の切支丹、伴天連の魔法使い共、貴様らの命も城攻めと同時になくなるのだ。筑紫諸大名の軍勢に逢っては、こんな小城はひと揉みだ。こりや、女ども今のうちにデウスとやら唱えて末期の水でも飲んでおけッ」

「ホホホ、まア何とでも喚くがよい」

「ええいッ、すばッと殺せ」

「ホホホホ、そうはいかぬ、これ、百合亜、茉莉亜、寿里亜、善兵衛に吹矢をふるもうてやるがよい」

沙羅姫の頬に嗜虐的な笑みが浮かんだ。揃いの朱の皮具足を着た少女三人、いずれも白桃のような潤いのある容姿で、伸びやかな体

は若さに弾んでいる。彼女たちは皆右手に紅白だんだら塗りの吹矢筒を持っている。

「胸、腹、腰、腿、そこらがよい、さ、さ、はじめよ」

「サンタマリヤ」

三人の少女は声を揃えて云うと、吹矢筒の元を唇に当てて、善兵衛のまわりをゆるやかに走りだした。そして次第に足を早めながら善兵衛の体へ吹矢を吹きつける。啞さながら無言で踏絵へ燭を捧げている二人の鉄仮面の男の背後で始まったこの処刑、蠟燭の明りにきらッ、きらッと光る短かく太い針のようなもの

「うッ、うッ、むむッ、ううッ」

善兵衛が苦しむ。少女たちの軽やかな足音が段々繁くなる。吹矢が颯々と飛ぶ。

「わッ、う、うッ」

「おホホホホ、少しはこたえるであろう。そちも男、宗徒の間では鬼と云われた男、これしきの責めで呻くのは聞き苦しい。それとも己れのこととなれば存外苦痛に脆い人間なのか、ま、今日はもうよい、吹矢が刺さって喉が乾いたであろうから水を飲ませよう、阿蘭あれを」

「ハイ、かしこまりました」

阿蘭の姿は踏絵の左側の紫天鵲絨の幕の陰に隠れた。間もなく両手に大きなギヤマンの鉢を捧げ持った阿蘭が静々と善兵衛の前に進んだ。鉢の中には琥珀の水が七分目程入っている。

「善兵衛飲むがよい。ただの水ではない、南蠻の靈薬が少々加えてある、傷の痛みが薄らごう、まだまだそちを殺さぬ。さ、早よう飲み、飲み、ホホホ何故そのような顔をする。飲まぬか善兵衛」

「こりゃ、奉行の走狗、早々に飲むがよい、姫君のお気の変らぬうちに……善兵衛とて命が惜しかろう、フフフ」

蒼白になった顔をギヤマンの鉢に傾けた須永善兵衛は、ひと口飲んで、ううッと呻き、世にもうらめし気な眼付で沙羅姫を、阿蘭を睨んだ。

「ホホホ、うまいか善兵衛、遠慮なく飲み、阿蘭よ、善兵衛の頭を押してやれ、鉢の中へ顔を入れてやれ、ホホホ」

姫は止めどなく笑っている。伴作は呆然と吹矢を持った少女たちの傍に立っていた。恐怖を感じるより何か重苦しい夢の襲に押包まれて身動きも叶わぬような硬張った気持であった。

☆

いくさの大勢は、伴作にはよく解らない。

が、原城が簡単に落ちる筈がないことは、城の恵まれた地形、城兵の盛んな士気を思っても判断がついた。沙羅姫の卒いる少女軍は手に手に大柄杓を持ち、城壁から炒った熱砂、煮え湯を寄手の頭上に見舞った。また、手毬くらいの石を投げ下して奮闘した。上使板倉内膳正はじめ、細川、黒田、鍋島、有馬、橘、寺沢の諸大名の軍勢を以てしても聖寵を信じる四万の城兵を降し得ない。天帝旗ひるがえる原城は誠に難攻不落だった。

伴作は、二の丸の地下牢にあるギヤマンの大水槽の番をしている。厚いギヤマンを透して、中に閉籠められた大勢の男たちがそれぞれ気力も体力も萎えた形で胡坐をかき、寝そべり俯伏している。互いに凭りあって、辛じて上半身を起している者もいる。彼等は衣類を剥ぎ取られ、まっぱだか、後手に縛められてここへ入れられたが、縄は互に歯で噛み切った者たちもいるが、つまりはどう逃れる術もないギヤマンの檻のなかである。邪宗門と云われ、魔法伴天連と云われる切支丹を根絶やしにするために役人衆、探番衆に名を連ねた人間の誠に惨めな末路である。南国とは

いい条、冬の寒気と飢がやがて彼等を死に導くのは必至だった。

——ギヤマンの壁を蹴ったり、叩いたりして何やら怒号し、哀訴している者もいたが、もう諦めたのか、いやに静かだ。伴作は胸のうちで呟く。

「どれ、水を入れにいかうか」

声に出して伴作は腰を上げた。小さな和蘭灯を片手に、牢の出口から続く螺旋階段を登る。湿った風が何処からとなく流れ来て、蝙蝠が羽ばたき、気味悪く啼く。青銅の扉を推して伴作は暗い庫のような場所へ入る。彼が和蘭灯から火縄へ移した火が壁に懸けた仮面のあんぐり空いた口の中に移り、その灯芯に灯った。その明りで見るとここにはギヤマンの小型の桶が沢山並んでいる。彼はそろそろ暗がりの濃い方へ歩む、彼の足下に真新しい如雨露状の大盥が巨大な墓のような形で据わっている。やがて彼はギヤマンの桶の列と大釜の間を何度も往き来して、桶の中の液体をどう、どうと釜の中へ注ぎだした。漸く彼の体は汗ばみ、息使いも荒くなる。むっと嘔吐を誘う濃い淀んだ臭いが立ちこめる。「ふうッ、やっと終わった、思えばひどいことだ、それ鎖だ」



彼はひとり言を云い、天井から大盥の上に下がっている錆びた鎖に手をかけた。と、

どうッ——と天井の一角が裂けて水が満を持していた勢いで盥の上に落下して来た。忽ち盥の底が抜けて……而も大量の水は盥の外に溢れ出ない。それもその筈盥の底は水圧で自然に外れ開く仕掛けになっているのだ。どうどう——凄い水音。

「あッ、また水攻めだ、わッ冷たい」
「うむッ、痛エ、水だ、また水雑炊だ」
「糞ッ、ひと思いに殺すがいいに……」

「臭せえ、臭せえ、臭えぞう」

地下牢のギヤマン槽で、囚人たちが呪咀の声を挙げて立騒ぎ、ひとしきり地団太踏み、己れの髪を掻きむしったり、切齒扼腕のていたらく。

——筑紫大名の軍兵の上には炒り砂、煮え湯。こっちのギヤマン箱に犂めく奉行の配下の奴等の体には、沙羅姫さまを筆頭にあの朱い皮具足の少女たちのゆまりの雨をまじえた汚水責めか……。地下牢へ注ぐ水柱の傍で、伴作は白痴のようなうつろな表情。

ギヤマン槽の水量はぐんぐんふえる。

「うわッ、今度こそ殺されるぞ」

「臭せエ水だ、嘔きそうになるわ」

「小便壺をあけやがった」

汚水は背の低い囚人の首のあたりまで溜まるとぴたりと止まった。しかし、もう我慢にも立っておれなくなり、顔れて汚水の中に沈み溺れてしま

う囚人もいる。

☆

部屋は煌々と明るかった。真ん中に長方形の台がある。台の両端に立てた太い絵蠟燭、台の傍の黄金の棒燭台にもる長蠟燭の灯が円い量の芯にとろとろと燃えている。

台を蔽う純白の布、その上に仰向けに横たえられた男の裸体。

「伴作、手早くせよ、もう度胸もついたろうに……」

筒袖の黄色い和蘭着物を着た沙羅姫がなぶるように云う。伴作は既に催しかけている吐気をこらえた切ない顔を伏せて、男の手足を銀色の金具で台上に釘づけにしている。失神している男は台上に両手を挙げ、両足を開いた恰好できっちり定着する。台のまわりには円や角の数々のギヤマンの盆、桶が置かれ、白磁の水盤に一杯に水が湛えてある。脚の長い和蘭机の上に並んだ大小の刃物、尖ったもの、鉤形のもの、彎曲したもの、それ等の刃からはうす紫の炎が立つようだ。姫と同じくきっちり身を括るような和蘭着物の、色はこれは水色を着た侍女、阿蘭、百合亜が冷やかな表情で控えている。

「百合亜も阿蘭も御覧、よい体格の男である



う。それにこの美貌、ゆうべ搦手に寄せた寺沢兵庫めの手の者じゃ、猿火車火に照らせば蟻の動きすら見逃さぬ、この者も退かんとする折、石火矢の的になった。今は秘法の魔睡薬で眠らせてある。どりゃ用意がよくば取掛かろう」

沙羅姫の白い指が男の胸に触れた。百合亜が一尺余の刃を姫の手に渡す。阿蘭が駆け寄り、姫の着物の袖を今ひと折捲くる。

「うむ——」

含み気合と共に姫の右手に光る刃は、仮死の男の胸に刺さり、す——と腹へ一文字に走った。ぶつぶつと不気味な肉の裂ける音。——ああ……。

伴作は眼を蔽うてよろめく。

赤黒い円形の袋がぬらぬらと動く。赤く太い筋青い筋、石榴の実のようなものの蠢き、黄色い大きな芋虫に似たものの動き……

「百合亜、肝を取れ」

姫の凛とした声、姫の刃は男の下腹を開けている。滑り出る腸。血が、血の渦巻がぐるぐる回る、赤々と華やかに花瓣がつぎつぎ開くように伴作の眼に拡がる、ぬめぬめとのたうつ青虫が、血の濃いこごりの中に殖えて来る。白布は緋の海に変わり、男は死に、青ざめていく……。

「軍師芦塚忠右衛門殿が鉄砲に打たれた。急ぎ秘薬を造らねばならぬ」

伴作の茫とした頭に姫のせわしげな声がひびいた。白磁の皿に百合亜が赤い肉塊を取った。

……伴作は汚ない木箱を負うて螺旋階段を登る。暗い庫のような場所へ入る。木箱の中のもの——それは蘭法の人体解剖を受けた臓器や腸で、あの琥珀の水を溜めたギヤマンの小桶に入れるのだ。地下牢のギヤマン槽に囚われた長崎奉行の配下の者たち、彼等の中で未だ生きている者の上に汚水と共に捕虜の武士の臓器や腸が落ちていく。汚水はギヤマン槽の隅の小さな穴から下水道へ流れ落ちるから徐々に減るのだが、臓器や腸は流れ去らぬ、ぶんぶんたる悪臭、そして死んだ捕虜仲間の体の腐臭。汚水が干る頃、また汚水が降る。

「これ、伴作よ、人間の体内は面白う巧く出来ていることが解ったであろう」

「はアしかし何ともむごたらしいこととございます。おそろしゅうございます」

「うむ、生きながら胸、腹を断ち割られるのだからナ、だが敵も夜討をかけた城兵の手負うて倒れた者、死んだ者の腹を開けている。城兵が何を食しているか、城の兵糧の減り具合を勘考しておるのじゃ」

「姫君は南蠻の秘薬を造られるのじゃぞ、弾傷には無類に利く、その秘薬には生肝を粉に

して交ぜねばならぬのじゃ」

寛やかに傾いた寝椅子に身を横たえた沙羅姫は真鍮の華車な煙管で煙草をふかしている。百合亜と寿里亜は床に跼み、大小の刃物を研いでいる。

「昨夜おそく、城内に忍び入った甲賀の者を一名捕らえた。これからそやつを体を開くのじゃ」

「姫君、伴作は可愛い顔をしておりますけれど臆病で、あまり役に立ちませぬ、そのうちに伴作の体も……ホホホホ」

百合亜が妖しく笑う。伴作は驚愕して、その場に尻餅をつきそうになった。

「のう伴作、姫君のおきれいな手で、そちの胸や腹がひろげられる、たと血が流れ出るわ、ホホホホ、そちは姫君のお情で濠掘人足の境涯から救われたではないか、お美しい姫君の刃に死ぬるのは本望ではないかえ？」

「……………」

刃を研ぎ上げる手を休めて伴作のおのく横顔を見遣る百合亜と寿里亜は、水色の着物に身を包んだ魔女のような少女だ。沙羅姫の唇から煙草のけむりが輪になって出る。けむりの輪はむらさきに漂い伴作の顔へかかる。

「伴作、そちももう……………」

姫の優しく潤った声。伴作は忽ち白布のかかった台上に仰向けに寝かされ、百合亜に両手を、寿里亜に両足を抑え込まれた上、姫の刃に胸元をえぐられる幻想に捉われた。姫が揮う刃に断ち割られた腹、濃い血汐と厚い脂肪、紅に白を溶かしたぬらぬらした花びら、黄や橙色の無数の粒つぶ、うねうねと曲りくねる桃色の蛇、その青黒い排泄物……一瞬彼は何故か恐怖を忘れ、陶然と、恍惚と甘美な夢心地に沈むのだった。

ぎいと扉が開いて、大兵の士に担がれた男のぐったりした体が部屋に運ばれた。甲賀者らしい。生々しい臓器の臭いが血の臭いと共にむうっと伴作の鼻を衝いた――。

☆

いや、恐ろしい思い出でございます。いくさが進むにつれて、沙羅姫の作る秘薬の要求も益々増して、従って愈生身を切り開くむごたらしい業も数多くせねばならなくなりました。大の虫を生かすには小の虫を殺さねばならぬと云う訳で、城兵の手負いのうちのどの途命の絶える者は……と云う訳で、誠にどうも……ギャマン水槽の琥珀の水といい、何とも醜く残酷、さだめしお聞き苦しいことでございましたらう。で、さしも勇猛な原城の将

士も衆寡敵せず、到頭要害堅固な城も陥落致しました。大将の天草四郎も二の丸で戦ううち鉄砲玉に当り戦死したそうで……細川家の足輕某に首級を取られたそう。首実験の時、左の耳の下に瘤が証となり、四郎時貞の首に違いないことが解りまして、その足輕は千石の禄を得たとか。然るにまた風説では四郎は影武者を身代りに立て、己れは呂宋に逃れたと云う話……何せ伴天連の魔術に通じ、天童と云われた四郎のこと故、あるいはそんなこともあろうかと……ハハハ、これは老人の想像でございます。ええ、はい、私は、その原城陥落のみぎり、城の火薬庫の爆発のあたりを食って、盲になったのでございます。え、姫の身の上でございますか、さあ、あの美しい沙羅姫もやはり城と運命を共にされたのでございましょう。侍女の云うところを信ずれば姫は宇土の城主であった小西行長の孫娘、さだめし勇婦の見事な最期であつたらう……と、まあ私は考えております。ハハハハ、怖ろしい目に逢わせられたり、地獄の獄卒でもする如き忌わしい仕事を強いた姫を褒めるなど、ハハハ奇怪な私の心ばえでございます。いやどうも陰気な雨音でございますナ、仲々止みそうもありません。 (おわり)



「時評」

近代感覚に指向された

『鼻の魅力』

陽 谷 照 夫

人間的——赤裸々な個性の象徴は鼻の周域に在る。私は多年にわたって、この考え方に徹してきたし、またこの持論を逆転させる程の反証にも未だ出くわしたことがない。然し時代は変転して、世を挙げてマスコミの最盛期であり、私の考え方にも一沫の不安を抱いて現世代人の趣向というか感覚に対する探究意欲に駆られていた。

世相探究のこの鼻マニヤ（私）は、毎年のことながら今年も全国カレンダー展（一月一日より銀座松屋にて）で、今年の世情傾向

を求め私の見解が的外れでないことを確認して、自ら決裁を叫ぶことが出来た。全国カレンダー展は、既に十五回におよぶが、今年程自ら満足した年はなかった。前述の通り、このマスコミ時代には並大抵の宣伝では人の心を捉えて印象づけることは困難である。その証拠に、あなたが昨日見たテレビ広告のいくつを頭に覚えていたかを辿ってみたら思い当ると思われる。そこで一般の関心を引つけるには、常時目の前にあるカレンダーを仲介にして強烈な印象を植え付けようとする。

試みるのは斯界の人の誰もが思いつくことである。月余にわたって目につくカレンダーに引つける三大条件は、第一強烈な印象であること、第二親近感があること、第三に身に付まされるイメージを表現することである。話がやや専門的になったが、筋を元に戻して、今年の第十五回カレンダー展では千余の秀作のうちから、六四年度にアッピールする作品が展示され、一巡して私は二巡三巡を強いられた——湧き出る情感が私にそれを強いた。

盛り上ってくる自分の情感を書き記すことは、読者の好むところではないと思われるので、結論を急いで記して、そこに至った私の感情の盛上りを想像して頂き度いと思う。

先ず、通産大臣賞授賞のC社。浮世絵の一段に近代娘のアップが眼前に迫っている。オペラ風の人工過剰の眼の周辺は最近ザラに見るもので勸賞は薄いが、在るがままでしか在り得ない鼻型、その鼻の美しく情欲的なこと浮世絵にみる鼻筋に力量感を盛った近代娘の鼻桿の下にダイナミックに刻みつけた鼻孔がカメラのレンズを鼻息のかかる距離に置いて息づいている。鼻孔入口の鼻柱の肉付きがライトに照らされて湿気が温かい。続いて陰黒く孔深く神秘さを思わせ、思わず私の呼吸さえカレンダーの中に調和してくる。宛も山本富士子の鼻孔に時たま現れる情感である。一枚めくって二月カレンダーでは、その鼻孔が一段とアップされて私に迫ってくる。私は心臓の鼓動が狂ってくるようだ。(鼻マニヤの私にとっては余談になるが、その八月カレンダーは臍を焦点にしてパンティーとブラジャーを背景にしているようだ)

次に同じく通産大臣賞授賞のS堂。これまた、焦点を鼻に絞った強烈に引つける作品で

ある。特に七、八月用カレンダーは思わず自分で手を触れてみてしまった。鼻筋美しい裸女と思われる近代娘の首から上のアップ。鼻筋に均合った鼻孔が画面一杯にアクセントをムキ出しにして私を圧倒して迫る。鼻息が画面から吐き出されている。唇に軽く当てがっている薬指に対応して尖った爪の中指は「わたしのこの孔を觀賞して下さらない、どう? この鼻筋に何か感じなさらない?」といったげに鼻孔と鼻頭の所を指さして私の気を集中させてしまう。唇に触れている薬指と鼻孔に注意を集めさせる中指が形成しているVの字は何を暗示させる積りなのであろうか。

第三に、通産省繊維局長賞に輝くT社。この作品は横写しの鼻孔と鼻翼が創造する芸術作品的鼻型の魅力をこれまたアップで表現するもの。そのため顔を顔巾で蔽って焦点を鼻に集中させている。鼻のバックの空白を「ほんばし」の橋の銘板で殺して、美しい鼻孔鼻翼を強調している。全く鼻以外は平凡に見えるが、局長賞の栄冠を獲得したのは焦点の鼻の魅力によるものと思われる。

次に、紹介したいのは私のテーマたる鼻から外れるが、奇巧党として省くわけに参らぬので同志のためにお伝えする次第であるが、

日本印刷工業会長賞を授与されたF社カレンダー。水中の青さをバックに少女が蛙の様なフォームで泳いでいる姿、もぐりつつあるのであろうか、お尻を高くし膝を曲げて、今から力強く一掻きしようとする愛すべきポーズである。流行かどうかは知らないが、朱色地に美しい模様のオムツ型の海水パンツが、突立った丸いお尻を蔽って、その尻の辺りに、長く黒髪が波型を画いて双丘の谷間に喰込みそうになっている。

その外、尖ったブーツを穿いて直線的感觉を盛り上げた作品が異様に目についた。色々事例過多の記事になりすぎたが、先を急いで私の共感を覚えました所以を端的に申上げて皆様のご批判を頂きたいと念願する次第である。

即ち、本文初めに申し上げましたごとく、マスコミ時代に一頭地抜いて人心を捉える方策として六四年カレンダー界に実証された事象は、鼻を焦点として目から情感から心を捉えようと試みた「潜在的本能発掘の鍵」を美鼻に発見したこと。是即ち私の持論であり肌で体験した鼻の魅力が、多くの青少年男女のみならず広い世代の人にとって吸い寄せられる魔力を持っている事が実証された事である。

何故六四年度カレンダーの授賞作品が、こ
うも鼻に焦点をおいた作品であったか。処女
峰の様に、気高く犯すべからざる神秘さを秘
めている鼻に、身につまされる多くの女性、
征服欲に駆られる男性、男女共通に胸の中
持つ感情の眠れる意欲を掘り起して、強烈な
印象を引っぱり出そうとした作者の心情およ
び授賞に値すると評価した審査員の見識に、
私は敬意と共感を覚えているのである。

最近を顧れば、美鼻魅を物語る本誌が語る
人間の性がこの目まぐるしい世相の中で、計
らずも一致して、私共の急所を突いているこ
とがうれしくてならない。昨秋来識者の執り
上げた種々の処策に、やや同調しなくて心苦

しいが、世人の心情動向の真の現れが、衆目
の中に公然と証明されて快哉を唱えざるを得
ない次第である。

美を欠いでは成功しないカレンダー展傑作
が今年程大胆に鼻孔を取上げた年はなかった
——前述の通りである。漠然たる美より、局
部的な美（鼻か？）を掘起して敬発し啓発さ
れる事が人の心をゆさぶるのであろうか。呼
吸と共に微かにあるいは激しく歪む鼻孔の神
秘さを、もう一度意欲的に探ろう。感湧き上
って意識してそれを歪めてみよう。歪を加え
る者の加虐味が呼び起ってくるようである。
歪められる責められる被虐の哀歎が我身の琴
線の何処かを掻き立てて、もだえて来そう

もある。美にあこがれ、美の破壊に衝動を止
め得ぬのは人間の宿命であろうか——繰り返
された歴史の事実は、破壊と破壊をつなぐの
に安逸と悦楽の年代が入り混って、相互相反
する世相の織物の様で、人間本能の公約数を
示している。耽美から耽虐へと先人が綴った
歴史の歩みを我身自身に当てはめれば、やは
り同じく、美をあこがれ、昂じて自らその美
を痛めつけて耽溺するのは避けられぬ宿命に
思い当り、自分もまた多くの世人の例外では
ない。カレンダー論が意外な結論を生み出し
たが、昨今我意を得たりと自ら鼻うごめかし
て満足している次第である。

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙（9×13 糎）焼付

A 1	フミツケ汚辱縛り	(新井)
A 2	手吊り乳房責め	(五月)
A 3	ハリツケ猿ぐつわ	(新井)
A 4	全裸正面柱しばり	(遠藤)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A 5	亀甲強烈乳房縛り	(遠藤)
A 6	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ	(遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり	(遠藤)
A 10	全裸後手高小手	(遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし	(長野)
A 12	全裸正面強烈縛り	(長野)
A 13	うねる緊縛裸身	(長野)
A 14	色褪の開股しばり	(長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき	(長野)
A 16	裸自慢縛りヌード	(長野)

A 17	正面アグラしばり	(長野)
A 18	正面大の字開股縛	(長野)
A 19	遅ましき裸しばり	(長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A 21	両手前縛り髪首絞	(大塚)
A 22	両手吊り股間吊り	(桜井)
A 23	両手膝下しばり	(関谷)
A 24	疼れんする裸身像	(関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛	(大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄	(梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢	(梨花)
A 28	責衣にはみ出る肌	(東浦)
A 29	投げ出し全裸縛	(長野)
A 30	捕われの全裸縛	(梨花)
A 31	羞らいの両股縛	(大塚)
A 32	猿轡の両股縛	(大塚)
A 33	荒縄全身縛り豆絞	(大塚)

A 34	盛り上る乳房縄目	(長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ	(大塚)
A 36	ムチ打悶えポーズ	(関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責	(東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面	(関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身	(大塚)
A 40	くさり乳房責め	(長野)
A 41	強制片足挙げ責め	(大塚)
A 42	正面乳房くびり縛	(関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ	(梨花)
A 44	手吊りパンティ落	(梨花)
A 45	白バンド後手吊り	(東浦)
A 46	豆絞高小手呻	(梨花)
A 47	裸縛り鼻いじめ	(梨花)
A 48	ガングロメ立縛	(愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛	(絹川)
A 50	立木縛竹棒責め	(桜井)

サジスチック・ストーリー・シリーズ

「貞女」

竹 谷 十 三

(一)

矢田治夫は、夜学から帰えると、真直に書生部屋に入った。治夫は有村家の書生というよりも、食客であり居候的地位にあった。この家の主人とは遠い親戚関係にあり、昼間は主人の会社で使って貰い、夜はS大の工学部に行っていた。下宿代の代わりに、この家の雑用をしてやっていた。

「矢田さん、帰ってる?」

妾の鈴江の声だ。治夫は嫌な気持がした。

「ねえ、一寸、私の部屋に来てよ」

襖が開いて、瓜実顔の磨き上げた美しい顔が笑った。

「何の用ですか、用をいって下さい」

治夫は洋服のまま座蒲団の上で、あぐらをかいてキツとした顔で鈴江を見上げた。

「まあ、こわい顔をするのね。ちょっと用があるのよ」

鈴江は平気で治夫の横にペタリと坐った。

三十になった女のしぶとさが露骨に現れていた。

「ですから、何の用だか云って下さい。僕は

これから勉強をするのですから……」

治夫は独語の工学書を机の上に広げた。

「矢田さんは勉強家。どうして矢田さんは、そう近頃冷めたいの」

白粉の甘い香りが治夫の鼻をついた。

「鈴江さん、へんな事をいわないで下さい。僕は君とは何の関係もありませんよ……」

治夫は、くると向き直った。三日月型の眉、スラッとした鼻筋、真赤な口紅のついた小さな唇——そこには三十になった脂の乗り切った女の顔があった。治夫は目を閉じた。

「何の用ですか……早く、云って下さい」

治夫は誘惑されまいと自分の心を押しつけて、冷然といったつもりだったが、言葉は少し震えていた。

「用っていうのはね。一寸、貴男に聞きたいと思った事があるのよ。貴男は……あの女が好きなんでしょう」

鈴江は、キラリと目を輝やかして、治夫の色白な頬を凝視した。

「あの女？ 誰です」

治夫は、胸がドキドキとした。

「フン、しら切るものじゃないわよ。奥さんの事よ。牛女の事さ」

「……」

「返事しなくても解るさ。お清に、貴男、奥さんは可哀そうだね。何故、あんな可愛い人を皆なでいじめるんだろう——っていったでしょう」

「……」

治夫は、女中のお清に、何故、そんな事をいってしまったかと、今になって後悔した。年若いお清だけは、気を許してしまったのだ。有村家に世話になっている者で、若奥さんの味方をしたら、一日もいられない事ぐらい治夫にも解っていた。女中頭のお里にして

も、小間使のお千代にしても味方でない事は知っていた。だが、お清だけは一番新しく、年も若いのでつい心を許してしまったのだ。

「貴男、あんな女が好きな。ホホホ、顔を赤くして、まだ坊やね。可愛いところがあるわよ。まあ、いいわよ。その事は、だけど不用意に女中達に喋らない方がいい事よ。ご隠居さんの耳に入ったら大変だから……」

鈴江は立ち上りながら云った。

「用はそれだけです。ご忠告は有難くお受けします」

治夫はプイと机に向った。

「用はまだあるけど……いいわ」

鈴江は、しゃなりしゃなりとしなをつくて部屋を出て行った。

丁度、その頃百合子は、やっと姑のお市が床に入ったので、あの蛇の様な目から逃れて夫の寝室で一郎の床と鈴江の床を並べてひき始めていた。今、鈴江の掛けている花模様の蒲団は百合子が嫁に来る時に持って来た唯一の財産であった。十八で人買いにでも買われた様にして、十五も年上の一郎の妻となって三年になるのだ。

夫と鈴江の床を並べてひき終ると、百合子

はホッと深い溜息をついた。百合子の妊娠と共にお市は、「嫁に一人子供が出来れば、もう沢山ですよ」と、百合子を夫の寝室から引き離し、自分と一緒に寝かせたのだ。浮気な一郎はこれをよい機会にして、前から世話をしていた鈴江を家にひき入れてきた。

百合子は抜ける様に両肩から胸にかけ、重苦しさを感じた。乳がはってきただ。先月生れたばかりの赤ん坊を疫痢で失った。百合子は乳がはって人知れず苦しんでいた。

「そうだわ、今の間に……」

百合子は廊下に出ると小走りに風呂場に行った。音のしない様に硝子戸を開け、うす暗い風呂場に入った。百合子は急いで着物の前を開け、両肌脱ぎになった。百合子の乳房には巾の広い晒が幾重にも固く巻いてあった。

「お前の乳は、畜生の乳だよ」とお市に罵られ「そんな乳を昼間からブラブラされては気が悪いよ。固く晒で巻くのだよ！」と厳命されていたのだ。実際、百合子の乳房は小柄な体に比べ、人並はずれて大きかった。娘時代セーターを着た時余り目立つので彼女自身悩んだものだった。結婚してから夫や皆から二言目には嘲笑と罵りを受けてきた。今一つ、彼女の悩みは髪の毛だった。色が抜ける

様に白い彼女は、髪の毛は赤くちぢれていた。そのため一寸混血児の様に思えた。瞳が大きく、額の広い彼女の容貌は、今の世の中なら近代的美人として可愛がられる筈なのだが、二十年も前の昭和十八、九年の頃では、彼女の美を発見してくれる人も少なかった。寧ろ姑のお市等は身の毛がよだつ程不愉快に感じていた。

晒から解放された二段にさえ見える褐色の乳量についた尖った乳首からは、もう白い乳がにじみ出た。取った晒にもベツトリと乳が浸み込んでいるのだ。彼女は棚から金のボールを取ると片手で持ち、中腰になり一方の手で乳房を押した。乳首からは氣持よく音をたてて乳が流れ出た。

その時だった。何時の間にかきたのか、鈴江が後に立っていた。鈴江は無言で力一杯百合子を押しした。中腰だった百合子は不意をつかれ「アッ……」とタイルの上に倒れ、持っていたボールはカランカランと音をたたてタイルの上へ飛んだ。

「何してるんだい！ 泥様猫の様にさ」

背の高い鈴江は、見下す様に百合子を見ていった。

「あの……あんまり、お乳がはって……苦し

かったもので……」

「へえ、お乳がはるの。よし、そんなら搾って上げよう、部屋において、こんな所で女中達に見られたら、どうすんのさ。だからお前さんはご隠居さんに叱られるのさ。おいで、来るんだったら」

鈴江は細い百合子の手首を握むと、ぐいぐい廊下を曳きずって寢室に連れ戻した。

「さあ、搾ってやるから四つ這いになるんだよ。お前さんは牛と同じだからね。おや、泣いてるのかい。早く裸になるんだよ。腰巻も取るのさ。もう旦那のお帰えりだから、ぐずぐずしてるとまたお仕置だよ」

鈴江は、力ずくで百合子の腰巻も取り去った。

「四つ這いになってるんだよ。動いたらお仕置だからね」

百合子は畳の上に四つ這いになった。

百合子は目に一杯涙を浮べていたが、何の反抗も示さなかった。こんな事、少しでも反抗したり泣き叫んだりしたら、その結果は前よりも怖ろしい事になるのを知っていた。お市でも起きて来ようものなら、それこそ半殺しの目に会わされるのだ。

鈴江は四つ這いになった百合子の重そうな

両乳房をしげしげと眺めていた。

「本当に牛女とは、ご隠居さんも、うまい事をいったものさ。化物のお乳だよ。どれ搾ってやろうかね。処で何に搾ろうか」

鈴江は部屋を出ると洗面器を持ってきた。

そして、百合子の乳房の下に洗面器を置くと、両手で牛の乳を搾る様に、百合子の乳房をもんだ。

丁度、その時真赤に酔った一郎が帰えってきた。

「百合子奥様、お乳がはるといので、私がお搾り申しておりますの」

鈴江が一郎の顔を見て皮肉な調子で報告した。

「そうか。それはご苦労様だな。百合子！

鈴江によくお礼をいえ……」

一郎はネクタイやワイシャツをポンポンと投げ捨て、どてらに着替えした。

「鈴江さん、有難とうございます。もう結構ですわ……本当に……」

百合子は、四つ這いのまま泣き声でいった。

鈴江は聞えない風で、尚何回も何回も乳の出なくなった両の乳房を力一杯にしごいた。

「牛乳で手を洗うと色が白くなるっていうか

ら、これで洗ってみよう……」

鈴江はやっと思ひ手をやめ、洗面器の中に手を入れた。

「動くな、そのままの姿でいろ！」

一郎は百合子に鋭く命令した。

鈴江は手を拭き、洗面器を部屋の隅に片づけた。

「何をなさるの……この人を何時までも四つ這いにさせて……」

鈴江はもう嫉妬の色を目に見せていった。

「うん、乳を空っぽにしてやったのだから、ついでに腹も空っぽにしてやろうと思つて

さ、鈴江、浣腸器を出して来い！」

一郎の言葉に、ハッとした百合子は、逃げ様としたが、もう一郎の十八貫に近い巨体は百合子を押さえつけていた。一郎は手早く百合子の両手を背中にねじ上げると、膝で押さえつけた。

「あなた……許して……かんにん……」

百合子は畳に頬を押しつけられ、泣き声で哀願した。

「着物を着変えてからするわ！」

鈴江は真赤な長襦袢と紫色の伊達巻姿になると浣腸器を持って来た。百合子の真白なヒップは悲しげに震えていた。

百合子は一郎と結婚してから、何回も無理

に浣腸をさせられた。世間知らずの彼女は、夫というものは、こういう事をするものだと思ひ、何時も我慢して来た。しかし、他の女それも妾の鈴江にされるのは、何としても恥しく、悲しかった。百合子は唇を噛みしめて我慢した。涙が後から後から流れ出た。

「あなた……許して……もう、我慢出来ません……お願い……アッ……どんな……ご命令でも従いますから、許して……」

百合子はもう夢中で夫に哀願した。

「よし」

一郎はやっと百合子を離した。百合子はどうも恥も外聞もなく廊下を走った。運悪く彼女は廊下で治夫に行き遭ってしまった。彼女は真赤になって走り抜けた。治夫もハッとしたらしく、何もいわずに自分の部屋に入った。

百合子は便所から出るのに思ひ悩んだ。治夫が、まだ廊下にいる様な気がした。百合子は治夫が好きだった。もっとも貞女である彼女は、夫を持つ自分、他の男を愛する等とは決して許されない事だと自分に深くない聞かせていた。その治夫が自分を見てしまったのだから、胸がドキドキする思ひだった。何時まで便所にもいられないので、仕方なくそっ

と出て来た。

百合子が寢室に来ると、もう夫には床の上で鈴江が寄り添っていた。百合子は自分の着物を持つと、何かいう夫の言葉を後に、逃げる様に部屋を出た。

寢室に入ると姑のお市は、いぎたなく眠っていた。百合子は隣の薄い蒲団にそっと体を入れた。都會育ちの百合子には腰巻一枚で寝るのは寒いし、不愉快だったが、姑と一緒に寝る様になつて、田舎育ちのお市は裸で彼女にも床に入る事を強要した。昼間は、一寸でも肌を見せると、淫らだの、だらしないのと叱るのに、夜はズロースさえしている事を許さないのだ。「女は、腰巻さえしていればいいのです。そんな外国人のする様なものをしなさい」と百合子はズロースを取り上げられてしまった。厳格な両親に育てられ、家は貧乏だったが、両親の生きて頃は百合子には懐しかった。労働者だったが父は百合子を可愛がってくれた。しかし、彼女が高等小学校の時に死んでしまった。その後、母親の再婚、養父との不平等と彼女は、次々と不幸を味わされた。身分違いのこの家に嫁に貰われて来た時も、養父の独断で無理やりに来させられたのだ。一郎は百合子を嫁にする前に、既に三回

結婚していた。しかも、どの結婚も一年とは続かなかった。浮気な一郎と鬼の様な姑があつては、大抵の女は逃げて行つた。

「ですから大奥さん、絶対に逆つたりしない嫁がいるんですよ。可愛い娘ですよ——こうした人買いの様な言葉で彼女は有村家に売り込まれたのだ。

「どんな事があつても、夫を大切にして、我慢するのですよ」と古風な母から何度も注意されて彼女は嫁入りした。始めの一年は珍らしさも手伝つて一郎は、新しい妻を一応可愛がった。しかし女にかけては事を欠かない彼は、もう百合子に飽きると虐待を始めた。お市は他の嫁を追い出したと同じ様に、せっせと追い出しのため一郎とは違った虐待を始めた。しかし、百合子はじつと我慢した。母が急病で死んでからは帰える家とてなかった。夫や姑を大切にどんな命令にも従つて行くのが、彼女の唯一の生きる道でもあった。

(二)

「百合子！もう、四時だよ。ぐずぐずせず起きるのだよ」

百合子は眠つたと思つたら、もう、お市の鋭い声に起された。お市は着物を着て床の上でスパリスパリと長煙管で煙草を甘そうに吸

つていた。百合子はあわてて着物を着ようとした。

「オヤ、お前さん、晒はどうおしだね」

お市の目がギロツと光った。百合子はハツとした。昨夜、夫の部屋で取つて忘れて来てしまつたのだ。

「お前、昨日は晒を巻かなかつたのかい……」

「いいえ、お母さま……あの……」

「寝る時に取つたのなら、そこにある筈だろう。何処で取つたのさ」

「あの……あちらで……」

「何故、お取りだね。一郎が取れといったのかい？」

「ハイ……いいえ……」

百合子は、しどろもどろに返事した。

「お前、私が一日中決して晒を取つてはならないと命じたのを忘れかえ。お風呂の時以外に取つたら、お仕置だという事も……」

「ハ……ハイ……」

「ここは、女ばかりの家じゃないのだよ。そんな乳をブラブラして歩かれては、第一女中達の仕付けが出来ませんよ。そんなに乳を出していたいのなら、それで私にも考えがありますよ」

「そんな……お母さま……決して……」

「もういいです。朝は忙しいのだから……今日は洗濯を朝の間に全部して貰うのだからね。モンペに作業衣を着なさい。着物では働けないよ。お前の様なろまには。晒がなければ、ないでいいんだよ。ぐずだねえ」

お市は持つていた煙管で百合子のふくらした頬を打った。百合子は手で防いだが、真中のくびれた可愛らしい桃色の下唇をたたか打たれた。お市は獲物を逃がした蛇の様に憎々しげに百合子を睨みつけていた。袖の短い粗末な作業衣とモンペ姿になると百合子は風呂場に出た。外はまだ薄暗かった。タイルの上には昨夜乳を搾ろうとしたボールが淋しく転がっていた。春とはいえまだ水は冷めなかった。

百合子は黙々と洗濯を始めた。家族のものだけでなく、三人の女中のものもあった。この家では洗濯は百合子の役目とされていた。女中達が起きてきたのは、それから大分過ぎてからだった。洗濯物を全部干し終つたのは九時近くなつていた。夫も治夫も出勤してしまつていた。茶の間に入ると、もう朝食は綺麗に片づけられていた。鈴江とお市が、食後の茶を飲みながら話をしていた。

「お母さま、全部干して参りました」

百合子がそういっても、お市は返事さえしなかった。

「そうかねえ。そんなに今度の出し物は人気があるのかい。私も久しく芝居を見ないから……」とお市は食卓の前に坐っている百合子を冷めたくジロリジロリと見ながら、鈴江にいった。

「それで、私、旦那様をお願いして今夜の切符を買って置いて貰いましたの、お母様も一緒にと思つて、三枚……」

「おやおや、それは有難いね」

鈴江の出す三枚の切符をチラッと見て、お市は余り嬉しそうでもない調子でいった。百合子は手持ちぶさただし、朝食をしていない腹は、ぐーっと鳴った。台所へでも行つて食事をしようと起ち上った途端、お市の言葉が鞭の様に飛んで来た。

「お前さん、何にしに行くのかい？」

「ハイ……あの……お食事を……」

「冗談じゃないよ。今頃、台所で食事をされたら女中達の邪魔ですよ。自分がマゴマゴしているから食べそこなうのさ。まだ、廊下の掃除もしてないのだろう」

「ハイ……」

「ああ、丁度いいわ。私の部屋の掃除もして

置いて。私、今日はお稽古があるので、直ぐに出掛けるから……」

鈴江は傍から忠義顔に百合子に用をいいつけた。

百合子は昨夜浣腸されたためもあり、腹の中は、からからだった。しかし、こつこついわれでは、今更、二人の前で食事を持ってきて食べられるものではなかった。「お前は太喰いだ。食べる事しか考えていない」と罵られ続けている百合子は、実はこうして一日のうち一食や二食を食べそこなう事は珍らしい事ではなかった。

廊下の掃除を済ませて、夫の寝室に入ると昨夜のままで、乱雑を極めていた。乳を搾った洗面器もそのままだし、問題の晒も放つてあった。やっと片付け終つて、隣の鈴江の部屋の掃除を始めた頃、鈴江が入ってきた。

「何だ、まだ掃除してないの。そんならいいわ。それを後にして、私のお化粧を手伝ってよ」

鏡台の前で双肌脱ぎになり、鈴江はお白粉をつけ始めた。子供を生んだ事のない固い乳房は、桃色の乳首が朝の光線を受けて得意そうに輝いていた。白粉焼けもあるが、生来色の黒い鈴江の体は、白粉をつけた所とそうで

ない処と気味の悪い程に区切りがついていた。百合子は刷毛で鈴江の背中に練白粉をつけてやった。本当ならこんな手伝いは小間使のお千代がやるべき仕事なのだ。お千代は鈴江の連れてきた女中なのだが、近頃では鈴江はわざと百合子をこうした仕事に使うのだった。百合子は、刷毛についた白粉で胸の方も塗らされた。白粉の一滴がポトリと乳房の上に落ちてしまった。

「アラ、冷めたいじゃないの……」

鈴江がそういって、体を曲げたため、百合子の刷毛を持った手が日本髪に触った。

「何すんのよ」

鈴江は大切な髪に触られたため、半月型の美しい眉をキリキリと上げて睨んだ。

「ご免なさい、すみません」

「そんなに私のお化粧を手伝うのがいやなのかい……え……」

鈴江は作業衣から出た百合子の二の腕を取ると爪を立てて力一杯に抓った。

「かんにして……」

「虫も殺さない顔して、心で何を思ってるか解らないっていうものさ。私はね普通のお妾さんとは違うんだよ。お前さんは戸籍の上の妻だろうけど、本当の妻は私なんだよ。ここ

の母さんも、旦那も承知の助けなのさ……オヤ……泣いてるのかい、泣く事はないだろう」

鈴江はプリプリ怒って着替えして、さっさと出て行った。

「若奥様！ ご隠居様がお呼びですよ」

女中のお清の声に百合子は驚いて立ち上った。茶の間では、お市が待ちかまえた様にいった。

「何をしてるのだい。もう昼だよ。明日は、白光会の人を取りに来るのだよ。まだ半分も出来ていませんね」

白光会というのは、お市が関係している宗教団体だった。その奉仕の仕事として封筒貼りを百合子はやらされていた。

「ハイ……只今……」
百合子は納戸部屋の作業室に入った。何千枚という封筒の山があった。



「明日の夕方には、会の人が来るのだよ。まだ三分の一も出来ていませんね。この前の様

な事があったら、今度は承知しませんよ」

毎日、家事に追われ百合子は作業が出来ないままになっていたのだ。百合

子は封筒貼りを始めた。しかし半時間と続けていられなかった。後から後からと別の用が出て来た。やれ、洗濯物を取り込めだ、アイロンをかけろ、四時にはお市と鈴江が芝居に出掛ける仕度の手伝いだと、次々に立ったり座ったり、体の休まる閑がなかった。

女中達はお市や鈴江が出掛けるとこれ幸いと部屋に入った切り、姿も見せなかった。百合子は何力月振りかで、一人でゆっくりと夕食を取った。粗末な食べ物だったが、蛇の目に見られていないという気安さから、百合子には山海の珍味の様に思えた。姑が出掛けに命じた細々とした用事をテキパキと片附けてしまうと、百合子はホッとした気持になった。女中のお里は酒を飲んで寝てしまったし、若い

二人の女中は買物を理由に遊びに出てしまったのだ。

百合子は作業室で封筒貼りを始めた。

「奥さん、入ってもいいですか？」

治夫が声と共に作業室に入ってきた。

「あら、矢田さんは学校じやなかったの？」

百合子は、何故となく顔が赤らんだ。

「ええ、今夜は休講だったのです。今、茶の間にいったら、伯母さん達がいないのでしよう」

「皆、お芝居へ行ったの……」

百合子は、細い指で巧みに紙をそろえ貼り続けた。

「奥さん、大変ですね。僕、お手伝いしましょう」

治夫は百合子の前に坐ると、封筒の紙を並べ出した。

「いいんです。貴方こそ昼間は働いて、お疲れでしょう。本当に結構ですわ」

「いいですよ。少しやらせて下さい」

治夫は糊の刷毛を取ろうとして、偶然にも百合子の手に触った。百合子はハッと手を引いたが、胸がドキドキと高鳴った。

「奥さん、お休みなさい。僕は奥さんが倒れちまわないかと心配ですよ」

治夫はキリリと結んだ男性的な唇に優しい微笑を浮かべていった。

「ご親切は有難とうございます。でも私大丈夫なの。瘦せて弱々しそうですが、とても丈夫なのです」

百合子はニッと笑った。治夫は、その顔がたまらなく愛らしく思えた。人妻というよりは少女の様に可愛かった。

「奥さん、昨夜は本当にご免なさい」

治夫は、低声で囁く様にいった。

「アッ……何ですの……」

「奥さんの……裸の姿を見てしまって……」

「アッ……あの事……」

百合子は、真赤になって下を向いてしまった。

「奥さん、何故、こんな家にいるのです。奥さんの様な美しい方は、こんなバカな目に遇って我慢している事はありませんよ」

「……」

「ひどい人達ばかりだ、伯母さんは鬼婆ですよ。それに貴女の旦那様だって野蠻人です。妾を引き入れ、貴女を虐待して……人非人ですよ」

「いいえ……あの人は……私は、夫を愛しております。どんな目に遇っても平気です」

百合子はキッパリといった。

「解らないなあ、奥さんの気持。あの人は、それは社会人としては若手の実業家かも知れません。でも妻に対する態度はどうです。僕は、奥さんが、いじめられているのを知っています。奥さんの様な美しい、やさしい女性があんな野獣のような人の命令通りになって一生を過ごす事はないと思うのです。これは決して僕が奥さんに悪魔の囁きを告げようというのではありません。僕は正義の立場で、黙って見ていられないのです」

治夫は興奮して、一言一言に力が入って来た。

「奥さん、僕は奥さんが好きです。でも、それだけでこんな事をいうのではありません。僕は、奥さんが、この家を飛び出してあの人達と別れる事を願うのです。そうでなかったら、奥さんの一生は滅茶滅茶です」

「私には行く家もないのです。またあったとしても、私はあの人の妻です」

百合子は囁く様に自分にいい聞かせた。

「夫、夫というけど、あの男は鈴江といういやらしい女を引き入れているじゃありませんか」

「夫は主人ですから、妻以外の女を愛したっ

て、仕方がありません」

「そんなバカな話があるのですか。そんな考えは古い封建的道德です」

「そうかも知れませんが。でも私は、母からそう教って来ました。夫を愛していれば、どんな事でも我慢出来ます」

百合子は黒い瞳をパッチリと開け、治夫の顔を見た。治夫は何故か、百合子の顔に殉教者のな色を見た。

「そうかなあ——、奥さんの気持、僕には解らないな」

二人は何時の間にか、作業の手を休めていた。晒を巻いていない百合子の作業衣の胸もとは悩ましく盛り上っていた。若い二人は黙って向き合っていた。唯、黙って坐っている百合子に対して切ない慕情が湧いて来た。

百合子も口ではいろいろの事をいってないが、心ではこのたくましい青年に身を投げかけたい気持で苦しめられていた。静まり返った部屋の中で、二人の荒い呼吸が互いに聞き取れた。百合子はやっと我に返った。

「矢田さん、有難とうございました。もう結構ですわ。そろそろ皆も帰って来ます。私、叱られますわ。こんな事しては」

百合子は無限の切なさを漂わせていった。

「そう……奥さんを苦しめる事になったら……だけど……もう一度よく考えて下さい。僕は奥さんの幸福を考えて云うのです」

治夫は眼に涙さえ浮かべていた。

(三)

その翌日の晩だった。白光会に出す封筒貼りが予定の数まで出来なかったというので、白光会の使いが帰った後、お市は女中頭のお里に手伝わせ、風呂場に百合子連れて行く。と仕置を始めた。

「お前、昨夜一晚、何をしてたのだい。私達が芝居に行っている間中、なまけて何をしていたのだ……白状をし！ お清の話だと作業室で治夫とベチャベチャ話をしてたそうじゃないか……人妻が、若い男と一部屋にいていいと思うのかい……どんな不義をしたと思われても仕方がないのだよ……」

お市は、百合子の両手を水平に竹の棒に縛り、タイルに坐らせ訊問を始めた。

「済みません、お母さま。私が至らなかったからです」

「白状をし！ 治夫とどんないやらしい事をしたか……」

「いいえ、お母様、何もありません。唯、お話しただけです」

「嘘をつけ！ 晒も巻いてないお前だもの。お乳を出して、いやらしいまねをしたろう」
「いえ……お母さま……アッ……私は何もありません」

お市は別の竹の棒でビシビシと百合子の背を打ち据えた。

「よし、白状しなければ、水責めだよ」

お市は百合子を押し倒すと、持って来た漏斗を無理に百合子の口に差入れた。

「お里、ホースでこの中に水をお入れ！」

お里は命令通り水道からホースをひき、ジャジャと漏斗に水を流し込んだ。お市は腕まくりをして、両手で百合子の顔を押さえた。五十八だというが、田舎育ちのお市は顔の瘦せた割に体はまだ肉付きがよく、両の乳房もダラリと垂れ下ってはいたが、しわ一つなかった。その乳房を百合子の顔の上にブラブラさせ、咳き込んで苦しむ顔を楽しそうに眺めていた。

「一寸、水を止めて……さあ、白状するか」
髪から顔、水でズブ濡れの百合子は苦しい息の下でいった。

「お……お母さま……許して……私、何もありません」

「強情な女だよ。よし、もっと水を飲ませて

やろう。お前は、何時もお腹が空いてると女中にいったそうだが、今夜は満腹にしてやろう」

水は前よりも激しく、百合子の口に注がれた。百合子の細い胴から腹部にかけて、見る見る間にふくれ上って来た。

「母さん、どうしたのです。ホー、これは見ものだ。鈴江、見学しよう」

一郎は、鈴江を連れて風呂場の板の間に立って、お市の仕置を見ていた。タイルの上の百合子はもう臨月の様な腹で唸っていた。赤いなよなよした髪は、額から肩にベツトリと濡れて白い肌について唇を半ば開き、目を閉じて荒い息をしていた。

「強情な女だよ。どうしても白状させるよ。一郎、一寸手をかしておくれ、この女を逆にして」

一郎は母親のいう通り、百合子の両足首を窓の格子に開いて縛りつけた。百合子の体は壁について逆吊りになった。

「それでも、何の話をしたか、白状しないかね」とお市は、洗濯板で臨月の様な百合子の腹部を押して水を吐かせた。

「ゲーッ……ウッ……ゲー」

百合子は、目を吊り上げて苦しんだ。今、

飲まされた水を今度は吐かされるのだった。

鈴江はこの様子をニヤニヤ笑いながら見ていた。

「もう、いいだろう。お母さん、その位にして許してやんな」

一郎にいわれて、やっとお市は押す手をゆるめた。

「少しは性がついたろう、お里、大切な嫁なのだから、後で体を拭いて、気がついたら私の部屋に連れてきておくれ。こっちまで水だらけになってしまったよ」

お市は、体を拭くと、さっさと風呂場を出た。一郎は窓に縛った百合子の足首をとくとこれも鈴江を連れて風呂を出た。

「全くだいになるよ、手数がかかって……」

お里は、皆がいなくなると、邪慳に百合子の体を足蹴にした。気を失ったように、ぐったりしていた百合子が、やっと目を開けた。

「さあ、起きるのだよ。このタオルで体を拭いて、ご隠居さんの部屋へ行くんだよ。両手を自由にしてやるから」

お里は竹棒に縛られた百合子の両手の細引をとった。百合子は両手が自由になっても、まだタイルの上に伸びていた。臨月の様な腹部は依然として痛々しくふくらんでいた。

「さあ、私が抱いて行ってやるよ、仕方がない」

お里は手荒く百合子を起し、体をざっと拭くと、抱き上げ連れ出した。小柄な百合子の体は重くはなかった。百合子の体をお市の寝室に投げ出すと、お里は事もなげに平然と去って行った。何時も仕置の手伝いをさせられるお里には、こんな事は何でもなかった。金を貯める事と酒を飲む以外には、お里には何の興味もないのだ。別に百合子に対して同情もなかったし、特別の親切心もなかった。

夜学から帰った治夫は、まさか昨夜の事から百合子が、こんな目に会っているとは夢にも思っていなかった。彼が家に入ると入れ代わりの様に一郎が出掛けた。一郎は今夜の十一時の夜行で、二、三日東北に商用で出張するのだった。

「行ってらっしゃいまし」

鈴江は一郎を送った足で、治夫の部屋に入ってきた。

「とに角、私の部屋へいらっしやい。あの女が可哀そうだと思うなら、私のいう通りにしたらどう」

鈴江は、治夫の手を取る様にして、無理に自分の部屋に呼び入れた。

「どう、お酒を飲まない？」

鈴江はそういつて戸棚からウイスキーの瓶を出した。

「本当、そんな水責めなんて、されたのですか……」

治夫は酒どころでなかった。

「まあ、いいじゃないの。だんだんに話して上げるから、さあ、どうぞ一杯、貴方の顔蒼いわよ」

鈴江はグラスを差し出しながら、コケテツシュに笑った。

「有難とう、では一杯だけ……」

「そんな事いなくても、皆、飲んでもいいのよ。どうせ、旦那の帰るまでには、新しいの買って置くわ」

「そ……それで、奥さんは、今、どうしていらっしゃるんです」

「伸びてるわよ。ご隠居さんの部屋にいますでしょう。今夜、ゆっくりとお話をしましょうよ。貴方が奥さんが好きだって事を知ってるのは、まだ私だけよ。万一、この事が旦那やご隠居さんに知れたら、それこそ、奥さんの命がないわよ。ゆうべ、あんたと二時間程一緒にいたというだけで、あんなに叱られるんだから……」

「……」

「だからさ……そこは……ね、魚心あれば水心つてのよ。私の舌三寸で、助ける事も出来るしね」

鈴江は何時の間にか、治夫の膝に寄りかかっていた。

「ひどい事をするな」

治夫は呆然として、鈴江の話を聞いていた。

「でも、本人は、一生懸命に詫びてるのよ。貴方と話をした事を。ね、あの女はそんな旧式の女よ。ね、治夫さん」

鈴江は治夫の手を取ると、自分の着物の胸に押し当てた。

「私の胸、ほらこんなに……」

「旦那様が帰えったら、どうするのです」

治夫はぞっとして、手を引こうとした。

「バカね、もう汽車に乗っているわよ。あの女を少しでも助け様と思うなら、私の命令に従わなきゃ駄目よ」

鈴江はパツと帯をとき、長襦袢一枚になった。

「僕は君を信用しない。帰して下さい」

治夫はキツとしていった。

「ホホホ……怖い顔をするのね。でも、貴方

の様な美男子が、そんな顔を見ると立派に見えるわ」

鈴江は治夫の膝に乗ってきた。そして美しい顔に魅惑的な微笑を浮べ、男の接吻を待っていた。治夫はフラフラと心が動揺した。百合子を助けるため、この女を味方にしてやろうか……。

「ねえ、ほら、私の胸はこんなにドキドキしてるのよ」

鈴江は自分の胸を治夫の手に握らせた。

この女は信用出来ない……絶対に百合子の味方にはならない……治夫は、ハツとして鈴江を押し返した。

「僕は君は大嫌いなのだ。君は成程芸者上りだけに美しいさ。だが、君の心は腐っているよ。僕は君の誘惑なんかには負けやしない」

治夫は青年の潔癖さでハッキリといい切った。鈴江は押されて裾もあらわに白い足を投げ出して倒れたが、怒りもせず、治夫の手を再び握った。

「矢田さんは乱暴ねえ。でも、私、矢田さんのそうした純情さが好きよ。貴方は女というものを知らないのね。私は矢田さんがどんなに嫌やがっても、私の思い通りにしてみせるわよ。私が怒ったら、あの女なんか、どんな目

に会うか解らないのよ。それでもいいのね」
「……」

治夫は返事をしなかった。

「返事がないのね。いい事よ。私がどんなに貴方が好きか、だんだんに解ると思うわ」

治夫は立ち上ると後も見ずに部屋を出た。

鈴江は悔しそうに、乳房を長襦袢の中に押し入れると、憎々しく治夫の後姿を見送っていた。

一郎が出張から帰ってきた晩から、毎晩の様に百合子は、治夫との関係について調べられた。鈴江は巧みに二人の關係が怪しい事を一郎に話して煽動したし、女中達を始め、姑のお市も鈴江を応援した。百合子は勿論、どんなに責められても、身に覚えのない事だった。一郎にしても、貞節な百合子と治夫とが不義をしたとは思っていなかった。

ただ、これを理由に妻を苦しめるのが楽しかったのだ。それだけに、百合子の裁判は家の中で公然と行なわれた。しかし、一方、治夫に対しては、気味の悪い程、誰もがこの問題に触れなかった。それだけに治夫は日夜、百合子の事で悩んだ。毎晩の様に聞えて来る百合子の唸き声、悲鳴が、治夫の胸を搔きむ

しった。だが、一郎に対して「奥さんが好きです」とか「奥さんを許してあげて下さい」とか、「二人の關係は、プラトニックなものです」とか、どうしてもいえなかった。治夫は勇氣のない自分がなさけなくなった。

ある晩の事だ。治夫が帰ってくると、家中が暗かった。停電だな——と思った治夫は、勝手知った自分の部屋に入って、スイッチをひねった。

「何だ、停電じゃないのか。それにしても、家中がどうしてこんなに暗いのかな。まだ、皆眠るには早いし……」と治夫は独言をいった。その時、奥の間で女達の笑い声がした。治夫はふと台所から上って廊下に出た時、奥の間だけが、ほのかに明るかったのを思い出した。電灯の光ではない。ハテナ……治夫は好奇心が湧いた。廊下に出ると、奥の間の襖から弱い光が流れている。治夫は、音のしない様に近づいた。奥の間に人の氣配があった。一郎の聲がした。

「中国の古い風習なのだ。卓蠟の刑といってね、不義をした女に対して行なわれたものさ。面白いだろう」
「こうして、暗くして見ていると、何か神秘

的ね……」と鈴江の聲がした。女中達の囁き声と笑いが聞えた。治夫は忍び寄る様に部屋に近づいた。幸いな事というよりは狡猾な鈴江は治夫の帰って来る事を予期して考えたのかも知れないが、部屋の襖が細く開いていた。治夫はそこから覗き込んだ。蠟燭の光に円陣に坐ってる女達の姿を大きく壁に映し出していた。治夫は蠟燭の立てられた中央を見た時、「アッ」と叫ぶところだった。四角の机に仰向けに縛られた百合子がいた。しかもその腹部、丁度臍の上に短い百舄蠟燭が明々とついているのだった。治夫の処からは、人の蔭になってその他の処は見えなかったが、熱い蠟が臍から横腹に流れているのだけが見えた。猿轡でもされているのか、低い唸き声が聞えた。

「それでも、白状しないのですか」

お市が百合子の顔のあたりを覗き込んで云った。何の返事もなかった。

「皆、線香を持ったかい。さあ、思い思いの処に火をつけてやれ」

一郎の聲と共に、女中達も机に近づき、手にした線香を臍の上の蠟燭から火をつけた。「クックツ、クックツ……」と泣くとも、叫ぶとも思えない悲しい聲が部屋に流れた。

治夫は、怖ろしさにそれ以上見ていられなかった。自分の部屋に逃げて帰えると声を上げて泣いた。

(四)

治夫は何日も考えた末、遂に一郎に自分と奥さんとは、何の関係もない事、自分は奥さんが大好きな事等を白状した。

「そんな事はいわなくても解っているよ」

一郎はニヤニヤと笑っていった。

「あれで百合子は貞女なのだからな。君の様な青年に手の出せる女じゃない」

「そうです。ですから……どうか、奥さんを許して下下さい。」治夫は恥しさに赤くなりながらも、真剣に何度も頼んだ。

「それは出来ないよ、妻を裁判しているのは鈴江だし、お袋なのだからな……」

「鈴江さんは怖ろしい人です。あの女こそ悪魔です」

治夫は興奮して叫んだ。

「馬鹿な事をいうものじゃない」と一郎は、冷然とした調子でいった。「あの女は俺にとって大切な女なのだ。人の家庭内の事に口を出す事こそ、正しい事ではないのだ。君もまだ、学生の身ではないか、人妻に恋をする柄じゃあるまい」

「……」

「百合子は、あれで幸福なのだ。その証拠を君に見せてやろう。君が鈴江を悪くいうのは、百合子が好きだからだ。それを一思いに思い切らせてやろう。今夜俺の部屋に来い！」

一郎はそういうと、ニヤリと笑った。

その夜、一郎の部屋に呼ばれた治夫は鈴江の酌で、酒を相当に飲まされた。

「とに角、君は一人前の人間になっていないのだ。これから始まる光景を最後まで見るのだ。いいか、動いたら承知せんぞ」

大分酔っている一郎は、真赤な顔で治夫にいった。

「鈴江！ 奴を引っぱり出して来い」

「ハイ」と鈴江は体をくねらせて部屋を出た。治夫の方に何ともいえない流し目をした。間もなく鈴江は腰縄を持って部屋に入ってきた。引かれて来たのは百合子だった。首に枷をつけ、両手は合掌した様に顔の前で首枷に縛られ、素肌の胴には鈴江の引く細引が喰入っていた。百合子は、ヨチヨチと歩いた。それも道理、百合子の脚は細引で固く結ばれてあった。

「坐れ！」

百合子は二人の前に坐った。あの赤い髪の毛はバサバサと乱れ、美しい顔も痩せ細って頬骨が出て見えた。

「どうだ。百合子！ お前は、治夫君とは何でもないといったな。俺の妻として、俺の思い通りになるといったな」

「ハ……ハイ……どうぞ存分に。私は、あなたの妻です」

「それから、俺が鈴江を愛していても、何の不足はないといったな」

「ハ……ハイ」

「フフフ……どうだね、治夫君」

一郎は鈴江を横抱きにして治夫と百合子を眺めた。治夫は、唯、胸がドキドキして何もいえなかった。

「さあ、これから、お前がどんなに俺を愛しているか、治夫君にご覧に入れるのだ。鈴江こ奴の首枷を取れ」

百合子は、枷を取られると、細い両手を相互に撫でた。両手が前からどくと、二つの美しい乳房が治夫の目を射った。だが二つの乳房は灸の跡、線香の跡が一杯に付いていた。特に両の乳房のまわりは、黒々と皮膚が爛れていた。

「さあ、いつもの様に、乳房の灸から始める

のだ」

「ハイ……」

治夫は、呆れて見ていると、百合子は静かに仰向けに膝を曲げたまま寝て、両手で顔を覆った。鈴江は、何時の間にか長襦袢一枚の姿になると、灸の道具を出し、もぐさを百合子の両の乳房の上に山と盛り上げた。そして、火をつけるのだった。

「どうだね。この女は俺のため、他の男が誘惑しない様に、両の乳房を捧げてくれるのだよ」

治夫は、一郎の言葉は耳に入らなかった。刺す様な目で、恋しい百合子の乳房が煙りを上げて燃えてるのを見入った。

「ウッ……ウ……ウ……」と百合子は、唇を噛んで我慢する唸き声が聞えた。

「奥さん。何故、そんな馬鹿な事をするのです。奥さんは……」と治夫は思わずそう叫んだ。

「ハハハ、おい！ 百合子、治夫君が心配してるぞ。何とかいえ、お前は嬉しいのだろう。嬉しければ、そういえ！ どうだ、鈴江や俺に責められたいか」

「ハ……ハイ……どうぞ……」

百合子はやっとそういった。灸はもう

消えかかっていた。

「さあ、今度は背中とお尻だよ！」

鈴江が命令した。百合子は、足を投げ出して下向きに寝た。

「治夫さん、ほら、この人のお尻をよくご覧なさい。ホホホ……百年の恋も何とかよ」

治夫はいわれるまでもない。ふっくらとした百合子の尻は、一面紫色になっていた。



「これで、今晚私が思い切りつねってやるのよ」

そういつて、鈴江は大きな釘抜きを治夫の目の前に出した。その釘抜きには、先を布で巻いてあった。これは何も百合子の苦しみを手加減しようというのではなく、皮膚が切れず、内出血させるためであった。

「オヤ、オヤ、本当にもう尻でやる処はないわ。旦那、今夜はこれで乳をやってもいいでしょう」

鈴江は、酒を飲んでいる一郎にいった。

「勿論、いいとも。少しはこたえるだろう」

「起きるんだよ！　そしてお坐り。そう手を後で組んで……」

鈴江は、今灸を据えたばかりの百合子の片方の乳房を釘抜きで挟んで、力一杯にひねった。

「アッ……苦しい……許して……」

百合子は、捻られた方に体をくずして叫んだ。

「でも、嬉しいんだろう。ええ、治夫さんは大嫌いだといったが、どう？　本当の事をいったら……」

鈴江は、乳房を力一杯引きながら、百合子に笑っていった。

「ハイ、大嫌いです。私はどんなにされても夫を愛しています。どうか、このお乳を思いのままに苛めて下さい」

百合子は涙を一杯浮べて、治夫の方をチラッと見ただけだった。

「承知してるよ。いなくても、だんだんにお前さんの望み通りにしてやるさ」

治夫は頭がクラクラした。もう一時もこの部屋にいらなかった。一郎の止めるのも聞かず、治夫は部屋を出た。そして部屋に帰って声を上げて泣いた。治夫には、百合子の気が全く理解出来なかった。

治夫は、その翌日、突然故郷に帰ってしまった。治夫は何が何だか解らない気持ちになった。大学途中だったが、今の治夫には勉強する気もなかった。百合子のあの美しい体が、毎日毎日傷つけられて行くのを見る事は堪えられなかった。否、それ以上に、そうした虐待に甘じている百合子の気持ちに堪えられないのだ。自分が心から百合子を愛している事は彼女だって知っている筈だ。それなのに、あの野獣の様な人々に、自分の体を捧げているのは何故なのだろう。治夫は神経衰弱の様になってしまった。彼の自尊心は、もうこれ以上我慢出来なかった。

貧しいが肉親の許に帰った治夫は、美しい自然の間で、次第に苛立った精神も治ってきた。日が過ぎるにつれて、あの夜の事が夢の様に思えた。どうしても、あの事が正気で行なわれたとは思えなかった。

三カ月過ぎ、半年過ぎると、不思議に治夫は再び百合子に会いたくなった。百合子だけでなく、鈴江や一郎、大嫌いなお市さえどうしているかと思う様になった。

あれ以来、有村家とは、全く音信不通だった。半年過ぎて、再び、治夫は東京に出たが今度は下宿をした。それも有村家とは反対の方面に下宿をしたのだ。

大学の試験も済み、無事卒業は出来たものの、治夫には就職の当もなかった。東京での知人といえば、有村家以外にないのだ。

世の中は不景気のどん底にあった。軍部は国民の気持ちを何とか戦争に向けさせようとしていた。そして一部青年将校のクーデターが起り、現職の大臣達が殺されたりして騒然として来た。

治夫は意を決して、一郎の会社を訪ね、就職を世話して貰おうと思った。処が一郎は出征してしまっていた。仕方なく有村家を訪ね

る事にした。懐しい門を入り玄関に立った治夫を迎えたのは、百合子だった。

「まあ、治夫さん……」

齡に似合わぬ地味な着物を着ていたが、美しい顔に何ともいえない喜びを浮べて治夫を迎えてくれた。

「さあ、どうぞ上って下さい」

治夫はあの静かで泣いてばかりいた百合子が、こんなに朗らかな態度が出来るのが不思議だった。僅か一年程の間に、有村家には大きな変化が起ったのだ。

一郎は出征してしまった。鈴江は一郎の出

◎本誌予約購読者募集◎

(お陰で最近予約申込者が急増しました。)

○本誌は現在地方にては、非常に入手が困難な状態だと思われまますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号)予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、七月号から一部三〇〇円です。従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分一二冊三六〇〇円です。今後誌代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三

〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一斉に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上にて「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受け取りになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

征と同時に別に男が出来て、出奔してしまっただのだ。それから間もなくお市が急病で死んだのだ。

「ねえ、それで、私一人ぼっちになったよ。この大きな家を勝手に出来る事になったの。不思議でしょう。あんなにいじめられていた私なのに……」

百合子は、目をクリクリさせていった。

「女中も、前にいた者は皆、追い出してしまったの。今、新しく雇ったのが一人しかいないわ。ね、それでお願いがあつたの。こんな大きな家に女二人では困るのよ。治夫さんどうかお願いだから、前の様に家に来て下さらないこと」

百合子の顔色は生々として白い頬の皮膚の下には桃色の血管さえ見えていた。

治夫は百合子が妊娠している事を知った。「よければお世話になります。僕、大学を出て遊んでるのです」

「お世話して貰うのはこちらよ。お仕事の方も、一郎の会社の方に何とか入れる様に私からお話しましょう」

百合子は、細い指で治夫の手を取った。百合子がこんなに積極的な態度をするとは、治夫には信じられなかった。

治夫が有村家に世話になってから、ある晩の事だった。

もう、十六になる田舎出の女中は眠っていた。前に鈴江と一郎の寝室だった、あの部屋に百合子と治夫は向い合って坐っていた。

「私、本当は、あなたを死ぬ程好きだったのです。でも……」

「じゃ、何故、奥さん」

「奥さんといわないで……」

「うん……百合子さん、何故、あんなに自分の体を犠牲にしたのです」

「それは、あなたが余りにも好きだったからなの。ああしたら、思い切れると思ったの。馬鹿だったわ、私——」

百合子は、治夫の手をしっかりと握った。治夫も力強く握り返した。

「奥さん、いや、百合子さん、僕はあなたがどんな体になっても愛しているのです。あの時、貴女に捨てられたと思って、田舎に帰ったのだけど、矢張り忘れられないので帰ってきたのです」

「嬉しいわ、治夫さん。私の、私の体を見て……」

百合子は立つと、パッと着物を脱いだ。妊

娠六カ月の大きくふくれた腹が白く治夫の目の前に現れた。

「ねえ、もう傷はほとんど治ったでしょう。」

乳首のまわりのお灸の痕もこんなに……」

百合子は治夫の前でファッション・モデルがする様に立って体を一廻りさせた。

「本当だ、前より美しい。それに少しは傷のあるのもいいよ」

治夫はしっかりと百合子の体を抱いた。こんな大胆な行動が自分に取れるとは、今の今まで考えた事さえなかった。

「ねえ、治夫さん、私、一日も責められないと楽しくないの。貴方、私をうんと苦しめて下さらない」

と百合子は甘えていった。

「いやだよ。僕にはそんなことは出来ない」

「私がこんなをお願いしても……」

百合子は、治夫の前に手をついて頼むのだった。その姿を見ると治夫は、むらむらと憎しみが湧いて来た。治夫は百合子の髪を掴むと引き倒し、机の横にあった細引で、ギリギリと縛り上げた。

「僕の責めは、あの連中より激しいぞ」

治夫は夢中で百合子を海老責めの様に縛り上げた。妊娠六カ月の彼女にとっては、これ

は相当に苦しいものだった。縛られている百合子は、肩で大きく息をしていた。

「どうだ？」

「嬉しいわ」

百合子は目を輝やかして治夫を見た。額には脂汗が滲み出していた。

「ねえ、鞭で打って……」

治夫は背を丸くして縛られている百合子を嘗ってお市が使っていた竹の鞭でビシリと打った。

「姦婦！」

「いいえ、私は、貞女よ。夫に操を立ててから、こうして責められてるのよ。もっと強く打って！」

この晩から再び百合子は奴隷の様な生活を始めた。しかし、今度は指導的立場は百合子が取っているのだ。百合子は時には、治夫のやり方に満足せず自分でもっと激しい責めを求めた。

小柄だが乳房の大きな百合子は、妊娠によって一層見事な乳房になっていた。そして腹部の方も、ほっそりとした身体つきなので、その部分だけが特に目立って見えた。

治夫は、もう誰に遠慮気兼ねすることなく

〔新版〕女体悦虐フォト七十選

Z組七十集

大手札印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

Z Z Z Z
4 3 2 1
ゴムの猿ぐつわ
囚女第六十三号
猪型手足吊り
逆エビてばり

(大塚)
(梨花)
(柳)

Z
2221201918171615141312111098765

逆手足吊り
おへソケなぶり
ハリッソケなぶり
無茶な猿ぐつわ
裸身の受縄指
く字の足指
肌喰込む白縄
強烈荒縄し白縄
黒縄高縄小縄
足吊りの媚態
黒髪いじめ
豊満な肌の被虐
全裸後縛り
引き回しニ
ザリガニ
淫らな責め
豊臀への責め
ローソクゼメ

(東浦)
(絹川)
(愛川)
(梨花)
(東浦)
(加茂)
(大塚)
(大塚)
(絹川)
(四花)
(梨花)
(東浦)
(桜井)
(前本)
(竹野)
(大塚)
(竹野)

Z
464544434241403938373635343332313029282726252423

美肌のいたぶり
仰向きの鼻
恐怖の瞬間
火箸の責め
全裸の痴態
ベッ海の老態
足の裏の責め
足絞りの責め
首絞りの責め
鼻孔の責め
悦虐の放り
手枷の責め
寝室の責め
猿ぐつわの責め
首縄柱の責め
巻煙草の責め
尻立ての責め
厳しきエビ責め
彼女の好物
ワッピ棒問
荒縄拷問
浣腸責め
鏡に映す縛り
苦悶に喘ぐ柔肌像

(絹川)
(加茂)
(若原)
(梨花)
(熱海)
(絹川)
(大塚)
(竹野)
(大塚)
(若原)
(梨花)
(四花)
(梨花)
(大塚)
(絹川)
(大塚)

Z
706968676665646362616059585756555453525150494847

酔後の緊縛
逆十字の猿ぐつわ
全裸宙吊り
欄間の逆エビ縛り
全裸逆エビ縛り
荒縄お仕置り
庭園の酷風景
被虐の果て
痛めつけられ
鏡の中の裸身
セーラー服の縛り
檻の緊縛体像
全裸の股縛り
オムツの逆エビ責め
胴の重さ感
縄の形責め
縄の恥態
女大生全裸縛り
白肌露出全裸縛り
強要する全裸縛り
強烈な縛り
亀甲縛り
恥しさに耐え

(絹川)
(東浦)
(梨花)
(絹川)
(梨花)
(大塚)
(大塚)
(梨花)
(愛川)
(梨花)
(絹川)
(田中)
(桜井)
(竹野)
(梨花)
(田中)
(絹川)
(大塚)
(大塚)
(梨花)
(愛川)
(梨花)
(絹川)
(大塚)

今は人妻であり、妊婦である最愛の女を責めた。治夫の罵る「姦婦！」という言葉は、本当は夫である一郎が吐く言葉であったが、彼はすでに遠い異境で戦う身であり、まして彼が在宅中の妻百合子に対する仕打ちから考えて、さして意味はなかった。

ことに異常な興味を抱く治夫であった。少くとも治夫は、百合子の挑発に完全にのせられた恰好であった。妊婦の膨らんだ腹、黒ずんだ乳房に対して、知らず知らずのうちにひかれてゆく自分を、どうすることも出来ない治夫であった。

然し、二人の甘い生活も永くは続かなかった。一ト月も経たない中に、第一補充兵だっ

た治夫に召集令状が来たのだ。さて、その後、百合子は怎么样了。無事に子供が生れたらうか。昭和二十一年夏、サイゴンから復員した治夫は真先に百合子の家を訪れたが、屋敷のあった焼跡には、瓦礫にまじって夏草が徒らに繁っているのみだった。

(おわり)

奇譚三十九夜物語

第三十八夜

辻村 隆

退屈男達の一行は、この大阪府と和歌山県の県境にほど近い、みさき公園の『つつじ人形』を見終ったあと、第二会場の淡輪遊園に再びつつじを賞で、ちぬの海岸べりのホテルの三階に旅装を解いたのでした。

魚は新鮮だし、浜風を送るベランダの陽光は燦々と照りそそぎ、見遙かす淡路の島は、紺碧の海に黒々と真近く迫り、沖ゆく真帆片帆の、のどやかな海浜の景は退屈男ならずとも、さながら一幅の絵に感じとられた事でしょう。

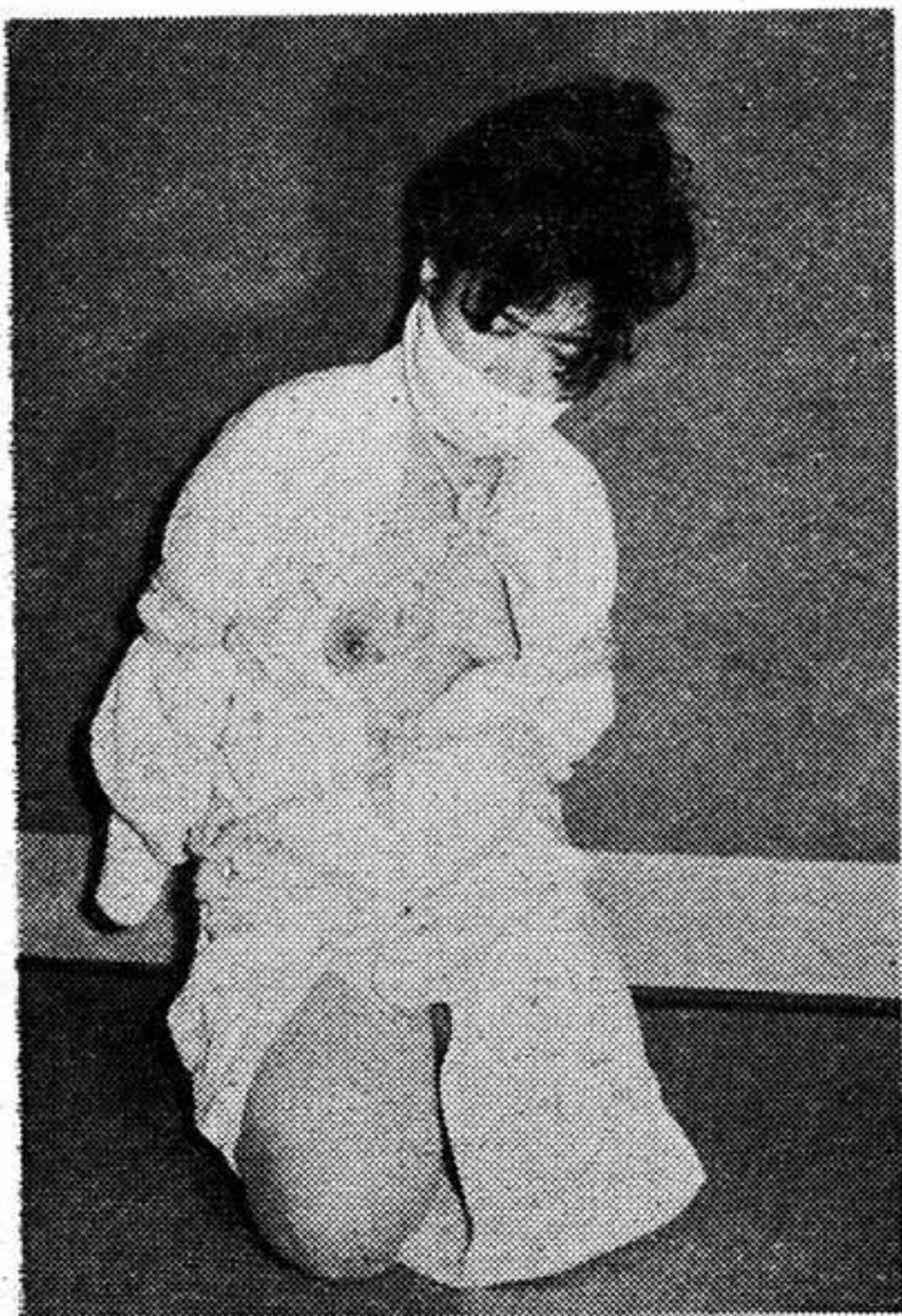
珍らしく例会は午後にもたれました。今日は、久方振りに、スバル氏とナイロン氏がフォトを持参し、快笑と和気霽々裡に、やがてスバル氏のフォトが廻覧され、一同の見終った処で、スバル氏はフ

ォトを重ねてまとめ徐むろに口を切りました。

第八十八夜 宇治さゆりと私

「彼女の強っての希望ですので、彼女の命名通り、宇治さゆりとして今後発表します。勿論本名は外にあります。しかし彼女は奇クに発表の場合、是非共この名にして欲しいと云つたのです。いずれは何か曰く因縁があるのでしようが、恐らく、来月号辺りの奇クから彼女は漸次登場する筈ですが宇治さゆりを私（スバル氏＝辻村隆）はどうして知り、又プレイにまで誘導したか——、それをこれから皆様にお話したいと思うのです——」

スバル氏は膳前に溜った、三箇の盃を手早く次々のみ乾し、一息



つきました

奇友のKから電話がかかって来て、一度アマ（尼崎市＝兵庫県）へ行かないか、普通りの赤線復活だと、私を煽り立てる。旧赤線地帯の、大阪の飛田、松島辺りが盛んな頃も、この種の地帯へは、余り足の踏み入れたことのなかった私である。セックスを売りものにした、単なる金銭的取引以外何ものもない、この地域には、さして私の好むアブの世界はなかったせいからかも知れない。

しかし、都心部を離れた辺地の旧赤線地帯では、最近妙に復活ムードがもり上っている。話のタネに行こうよ、と強引に誘われ、土曜の夜で、私も別段仕事もなかったので、Kに誘われる儘、阪神梅田の地下駅で落合う約束をした。

夜の八時頃、私とBは阪神尼崎に降り立った。

駅からタクシーで十分。Kの謂う初島新地に足を向け、この工場地帯のド真ン中に、こんな活気のある一郭を忽然と見出し、私はいささか啞然とした。すぐ横手を流れる神崎川の堤防に立つと、ネオンや極彩の華やかないろとりどりの夜の色彩が、新地の賑わいを反映させて手にとるように眺められるのだった。

Kの説明をきくと、この種の店は四、五十軒はあるそうである。その周辺に一杯のみ屋、スタンド、串かつ、天婦羅屋と云った安直な店が二十軒許り、新地の客を拾って繁盛しており、その客を送迎して、白タクが、狭い道路を我物顔に右往左往している。既に酒の入った工員風の数人が、大きく喚き乍ら濶歩していた。客筋は荒く工員、船員などの体の、若い血の気の多い連中が、そのはけ口を見出してうろうろとひやかして歩いている。

建て前として、この種の店はバーや料理店として許可をとるのであるが、ここは流石に噂に違わず、そのものズバリの凄まじさで、一軒辺り四、五人から、多いところで十人余りの店の女が、派手なドレス、和服、いろとりどりで嬌声をあげ、冷かすと罵声すら浴せる。Kが遊んだと云う、小店に属する一軒に私はつれられて、心ならずも上る。中年増が現われ、ビール料理はそっちのけで、直ちに交渉——値段は二流地だけに比較的安い。私の相娼は二十四五才の和服の女、部屋へ導かれると、嘗っての雰囲気と全く同じである。強いて云えば、マッドレス使用ぐらいの変化でしかない。兎も角これは本筋ではない。ここは飛ばそう——。私とKは小一時間後にその店を出た。どうだったときくKに、私は彼に悪い気がして、まあね——と云って、笑って見せた。併し内心、面白くも可笑しくもな

い。むしろいい年をして、若い者並みに遊んでしまった私自身に、自己嫌悪すら感じている。初島新地は午前二時頃まで客ダネも尽きず、女達は袖を引いている事だろう。私はどぎついネオンの地を後に、辺りの白タクを拾った。Kは一寸立寄るバーがあると云って、新地の入口で、私独りをおいてけ堀りにして、片眼をつぶると手を上げて去っていった。私と同年輩と云うのに、いつ迄も気の若いKだ。手を挙げると白タクはすぐスルスルと近附いた。運転手を見て私はあっと思った。女性だったからである。それが意外に若く、身綺麗で顔も充分に整っていた。こんな時に、私の好奇心はムラムラっと湧き上ってくる。「大阪へ——」と告げてのり込むと、女運転手は「ハイ」と軽やかに答えて、車を巧みにバックさせ、方向転換して十三方面に向って走り出した。

「色街で大変だね。蒼蠅い酔っ払いなんかも随分あるだろう——」私は煙草をくゆらし、クッションに凭れ込んで前のシートに声をかける。

「ええ、まあネー。でも変な客は乗せないことにしているの。それに新地は私の稼ぎ場ではありませんわ。偶にのせてくるだけよ。大抵はカラで帰っちゃうの。」

「へえー、そうかい、だろうと思った。君はあの新地にはふさわしくないもの。しかし、女でよく白タク営業をやるね。怖くない?」
「怖くなんかないわ。私こう見えても唐手を少々やっていますもの。それに客を見る眼が大分肥えて来ましたもの。大丈夫ですわ。御主人(彼女は私の事を最初そう呼んだ)もあそこで遊びでしたの?」

「まあね。悪友に無理に誘われて、ついふらふらと出掛けただが

今更ね……」

「……………」

彼女は無言で笑った様だった。それには軽いあざけりが含まれていた様に思えたのは、私の思い過しただろうか——。

暫らくは無言が続いて、車は夜の空気をさいて大阪へと走っていた。

「これ君の車?」

「ええ、ブルーバード、去年の九月買ったんです。勿論月賦だけど……………」

「どうして白タクなんかやるの——」

女はそれには暫し返事をしなかったが、稍あって

「それぞれの家には、それぞれ事情があるんです。のせたお客さんは、まるで判こで押したように、その訳をよくききたがりますけど……………。本当の事を云ったって、御主人が車を降りられたら、もうそこで赤の他人でしょう。だから云ったって始まらないと思うの。又、きいたって仕方ないでしょう?」

「そうだったネ。しかしゆきずりで終るのは、一寸惜しい様に私は思うんだ。どう、よかったらキタでお茶でもものまない。食事が未だだったら奢ってもいいよ——」

「キタは殆んど駐車禁止です」

彼女はボソリと応えた。

「じゃあ、都合のいい処か、モータープールへでも預け給えよ。勿論私が払うから——」

「ええ有難う。でもこの時間が稼ぎどきなんです。又ね……………」

「いいじゃないか、少しぐらい。ネ、いいだろ——」



私も日頃に似ず強引だった。余り強引すぎると、女は反って用心するものだと言ふ鉄則を忘れて、私も言い出した以上、意地で粘った。車は既に都心へ入って、車の流れの中にもまれていた。彼女は判っきり有難迷惑らしい顔になって、多少いらいらしている様であったが、決心したのか、

「じゃあ、少しだけお交際しますわ。梅田新道を折れてモータープールに入れます。プールまで一緒に乗って行って下さいね」と漸やく折れた。

彼女が未婚か既婚か、そして名前も住所も年令も私は知らない。つまり、彼女については、まるっきり、何も知ってはいないのである。僅か二、三十分前に知り合った、女運転手と客である私とであって見れば、それは当然とも云えよう。誘って見知らぬ女に、なに

がしかを奢って、それでさよならかも知れない。しかし、どう發展するかも予測し得ないではないか――。

車を置いた彼女を待って、私達はその近くの、ビルの地下のレストランに入った。

車を離れた彼女は、瞬時にして、唯の平凡な、ややくたびれた感じの女性に変わってしまった。私はテーブルを隔ててその時、私が興味を抱いたのは、白タクの女運転手と言ふ職業に対してである事を卒然とさとしたのであった。

女は薄汚れた白い手袋を脱ぐと、急にしおらしくなり、やや乱れたアップの髪を気にして手でしきりにかき上げていた。

ボーイに私はデザートのレストランを注文しビールを添加した。ワンコースとなると可成り長くなるからだ。

「弟がテーベなんです。母は私の幼ない頃なくなり、定年退職した父との三人暮らしなんです。それで私……」

問わず語りに彼女は、喋り始めた。

「勤めていた自動車販売会社の事務をやめてその頃遊び半分に免許をとっておいだ、運転を利用しようと思ったのです。私の結婚の資金と父の退職金の一部で、ブルーバードを買ったのですが……」

「弟さんは随分悪いの？」

「K大の一年生だったのですが、勉強し過ぎて胸をわずらってからもう半年以上なります。豊中の療養所に入っていますわ。」

「気の毒なんだね――」

「お客さんの中にも、同情してくれる方は沢山いますが、それだけの事でしよう。結局どうにもならないんです。」

「しかし変わった職業を選んだネ。」

「アルサロやバーのホステスには、なりたくありませんでしたの。短大を出たと云うプライドが邪魔をしているんでしょうね」

私の好奇心は、既にテーブルに出された、ポタージュが、手もつかず徐々にさめていく様に、冷々とさめていった。誘った淡い悔恨のみが胸苦しくつき上げてくる。

「御主人の御商売は何ですか？」

一転して彼女は訊ねて来た。私は本職はほかし、風俗雑誌に雑文を書いたり、趣味にカメラを撮っていることを、尚探求心を捨てきれず、強調した。

「私読書が好きですわ。何て雑誌ですか？」

「さあ、君には縁なき衆生とは思えけれど、奇譚クラブと云うのが知っている？」

「まあ——あれに？」

「えッ、知ってるのかい、驚いたね、君が買って読んでるの？」

「いえ、買った事はありませんわ。でも、或るところで読んだのです。」

「或る処って何処？」

彼女は又そこで黙ってしまふと、黙々とスープを口に運び、オードルを口で囙んでいた。ほんの少し契めたポートワインのせいでもないに、徐々に彼女の顔は赤らみ、何かを追想し、過去の記憶を呼びさまそうとするのか、凝つと眸を一点に据えていた。

「こんな事、初めて逢った貴方（ここで彼女は私の呼び方を御主人から貴方に変えた）にお話するのきまり悪いのですけど、私が以前勤めていた会社で、好きな方があって、将来は結婚をする約束で、何度かあの人のアパートに遊びに行った時、その雑誌を、あの人の

部屋で見せられたのです——」

「見せられた？」

「ええ、きつと私に見せようとしたのです。私はペッティング迄は、あの人に許していました。いつもの様に私を膝に抱き上げたあの人は、激しいキスと抱擁を私にあげたあと、何気ない振りで、あの雑誌のグラビアの写真を、私を抱いた儘の姿勢で、有無をいわさずつきつけました。私はその写真に思わずかたく眼をつぶりました……」

話はするものである。急転直下、俄然面白くなってきた。私のアブの探求心は猛烈に躍動を始める。

「モデルを縛った写真を、君にそのような形で見せたのは、彼氏はきつと君に、それを要求したかったからだと思うね」

「……………」

「激しい愛の昇華の結晶として、愛する余り、その様な衝動的な行為に出る事は、よくあることだよ——」

「そうでしょうか——。でも私はその時、かたくなに、いつ迄も眼をつぶった儘、それを見ようとはしませんでしたわ——」

「始めてのショックだから、無理もないと思うが……それで——」

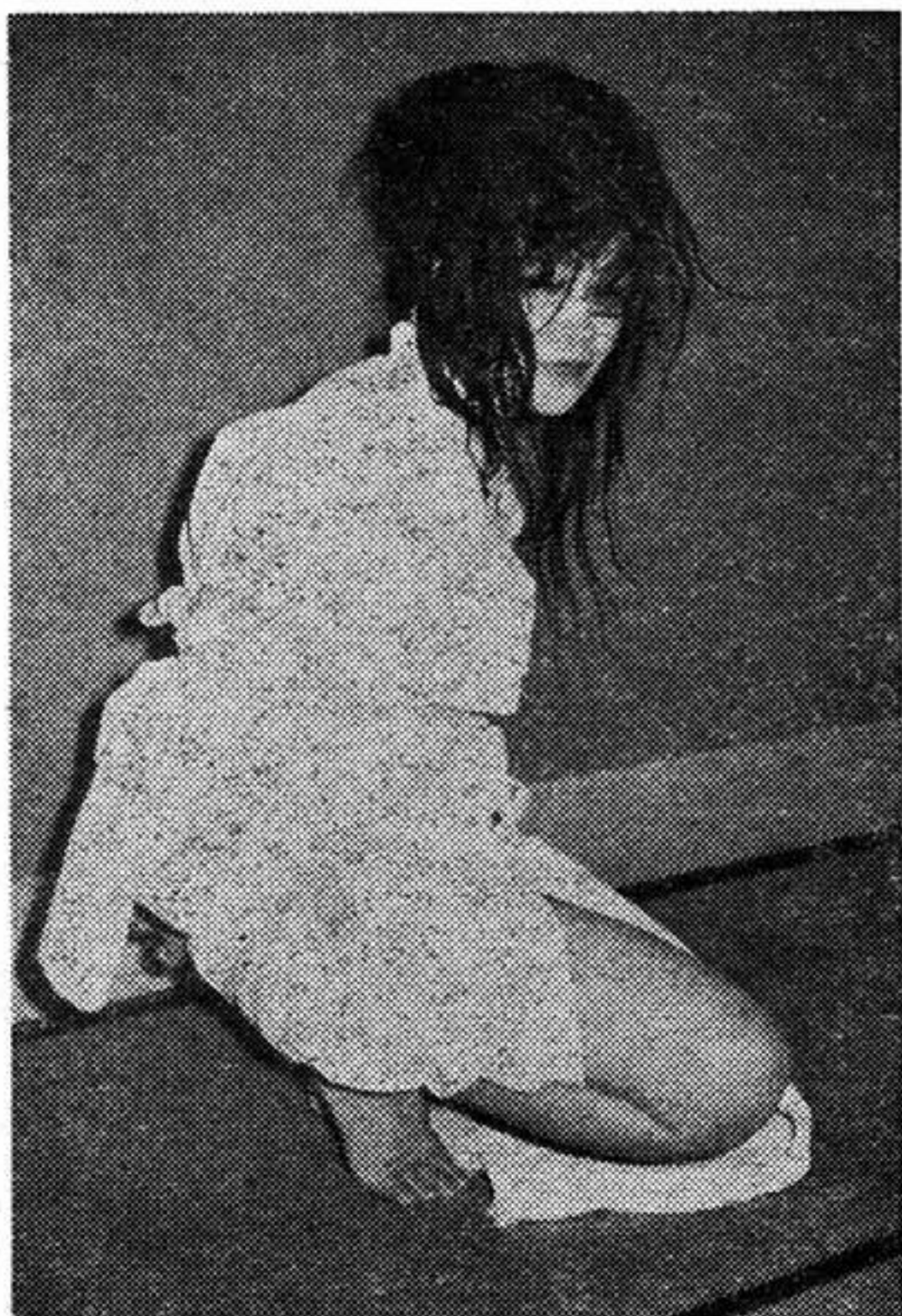
「それより、貴方はあの雑誌に、何と云う名で書いていらっしゃるの——」

「辻村隆だよ——」

「まあ、あれが貴方ですか、ホント？」

「ちーとも知らなかったわ、だろ。どうもお恥かしい限りだが、私を読んで事あるの」

「ほんとの事を云うと、辻村さん始め、隅から隅まで、大抵読んで



しまいました。あの日私とあの人は気拙い別れ方したので、数週間逢いませんでした。でも私、矢張り逢いたくて逢いたくて、あの人のアパートに出掛けたのです。何処へ行ったのか、未だ帰っておりませんでした。鍵は私とあの人が一つづつもっておった儘です。私は独りで錠を開き、部屋に入りました。いつもは整頓し、綺麗ずきのあの人ですのに、部屋の中は雑然としていて、テーブルにはうっすらほこりが溜っていました。私を怒らしたのだと思ったあの人は、きっと懊悩していたのでしょうか。部屋の中に、あの人の悩みがこもっている様に、私には思えました。十数冊の奇譚クラブやその他よく似た風俗誌が投げ出されてあって、あるものはグラビヤを開いた儘であり、あるものは、読みかけなのか、雑誌の間に煙草の吸殻を挟んでありました。私は急に切なくなり、独りでさめさめ

と泣きました。泣きじゃくりし乍ら、手許の一冊をとり上げ、涙でうるんだ眼で、見るともなくそれに眼を通し始めました。たしか、『花と蛇』だったと思います。被虐の悲しさ、その愉こび、そんなことが、万感交々私の胸を打ちました。あの人に素直に縛られてあげたら、どんなに喜ぶだろう。あの人がそれを好むのなら、私はこの身体を投げ出して、あの人の眼の前で、虐たげられ、苦しみ悶え、縄目の強さに身悶えしても……そんな奇妙な気持ちにかられたのです。あらッ、思わずはしたない事をお喋りしましたわ——」

「いいよいいよ、続けてくれ給え。私は断然ハッスルして来たね。矢張りカンが当たっていたのだ。さあ料理を平らげ乍ら話してくれ給え」

「あとは御想像にお任せしますわ——」
彼女は淋しい笑顔を見せて、スルリと逃げた。彼と彼女との間には未だ何かある。しかしその何かは一体何だろう。それは私にとっても、今の段階では全然見当もつかない。

「君の心は傾いたのだから、まあSMのプレイはあったと見て差支えないだろう。ええ、そうだろう——」

彼女は料理をしとやかに口に運び乍ら、耳たぶを染めて、微かにうなづいた。初対面なのに、余り喋り過ぎたと云う悔恨が湧き上ったのか——、それとも次に続ける言葉に羞恥をおぼえたのだろうか——。免も角、フォークとナイフを巧みに使って、料理を黙々とたべている。ナイフ捌きで、彼女の教養の程がおしはかられた。

「君、何て名?——もうきいていいだろう」

私は話題をかえた。彼女は肉片を嚥下し終ると、ナプキンで軽く口辺を押え、

「宇治さゆり——、あの人がつけてくれたのです——。どうぞそうしておいて下さい……」

「本名じゃないらしいね。いいだろう。宇治さゆり……ドラマチックでいい名だよ——」

「電話なら、大阪の七七一局の三××八番にかけて戴き、さゆりと呼んでいただければ通じますわ。そんな御用ないかも知れませんがね……」

「いいや、大いにありそうだよ。メモしておこう——ところで話の腰を折られたけど、それでどうなったの……」

「……………」

「じゃあ、辻村流に解釈して私が代弁して見ようか——。そうだね……、君が奇クに読み耽っていた時、静かに扉が開いて彼が戻ってくる。君の存在に驚くと共に、歓喜が走る——君を後ろから抱きしめ、君を押し倒しただろう。羞恥に君はもがいて見せたかも知れない。途切れ途切れに彼は君の耳許で囁やく。緊縛の要請を……。君の心は千々に乱れ、そして微かにうなづく——そして彼は震える手に縄をとって、君の服を脱がし始めた。緊縛は恐らく彼のイメージにあった、奇クのグラビヤの踏襲に違いない。それからどこまでSMのプレイは発展していったか——君と彼は逢えばプレイに耽溺し始めたかも知れない……どうだね——」

「ええ、まあネ——。その通りと云えばそれに違いないし、違うと云えばムードは全然そうでなかった様に思います。でも辻村さんの夢もありましょうから、その通りと云っておきましょう……」

宇治さゆりは羞らい気味に眼を伏せて、益々憂いのかげを濃くしていった。

「いやに元気がなくなって来たね。彼のことが？ いいじゃないか、話して見給えよ」

しかしさゆりは、涙ぐんだ様に、かたくなに押しだまっていた。「失恋したの？ それとも喧嘩？……」

さゆりは無言で首を振った。

「彼に恋人でも出来たのかい——。何かあったんだネ。SMプレイで非道い事でもしたの」

さゆりは顔をあげると、懸命に無表情になろうと努めて、さりげなく云った。

「死んだのです——」

「死んだ？……どうして——」

「貴方は去年の秋頃新聞ダネを賑わした、航空会社の墜落事故を御存知でしょう。あの飛行機に彼は出張からの帰途、不幸にも乗り合せていたのでした。何も知らず、私は粧いを凝らして、彼のアパートで、心いそいそと彼を待ち侘びていました。恐らく十数日振りの彼は、狂った様に私を、彼の世界へ魅きづり込むことを、私は予想し、期待し、体の隅々まで清らかにして待ちくたびていたのです。そして永久に待ち呆うけの女になったのです。伊丹で別れる時、彼は小声で、今度帰った時は、逆吊りだぞ。僕の頼んでおいた滑車を四ヶ、きつと買っておくんだよと云って、私達二人にだけ通じるサインを残して、元氣よくタラップをかけ上っていったのに……。私は空しくなった、ビニール袋に入れて秘かに云われる儘に買求めて来た、滑車を痴呆のように数日抱きしめていました。」

「悲恋物語なんだね——」

「茶化さないで——。悪くなる時は、こんなものなのでしょうね。」

彼の死後間もなく、弟は胸を悪化させて療養所へ入りますし、父は停年退職しますし、挙句の果てが、白タクの運ちゃんですわ——」

『宇治さゆりの言葉の語尾には自嘲があった。言葉もなく私はビールをあけた。』

× × ×

宇治さゆりを忘れかねて、私は数日後に彼女の許に電話した。下心なかったとは云いきれない。緊縛を体験した女に私は、私なりに口説いて見たかったに違いなかった。

運よく彼女は在宅だった。呼出電話に出た彼女の声は意外に明るく元気だった。

「何か掛ってくる様な気がして、心待ちしていましたわ。私があんな事まで申上げてしまったので、辻村さんならきっと……」



「掛けると思ったんだネ。ズバリだよ——白タクの方は今日は稼がなくともいいの？」

「昨夜遠いお客をのせて、加古川まで行って戻ったのが午前三時。ほんのさっきまで寝ていましたの。貴方さえよかったら私構いませんわ……」

「じゃあ、一時間後にアベノのA喫茶で……」

私は或る種の期待を抱いて、彼女を待った。五分も待たぬうち、彼女は足早に喫茶に入ってきた。白タクの女運転手のあの容姿とは見違える女らしさと、可成り華やかな粧おいを纏っていた。淋しい顔立ちであるが、きめは細かで、嚙かし豊満な肌であろうかと察せられた。彼女との出会いが、既にプレイの芽を吹き始めていると確信してよかった。私はズバリそのものでゆく気になった。

「よく来てくれたネ。失意の君にいきなりこんな事を頼むのは無理かも知れないが、君も奇クを読んだのなら、辻村と云う男を幾らかは御存知だろう。彼の追憶のよすがとして、君を縛らせてくれないか。駄目なら駄目でもいいのだ。いやならいやと云ってくれりゃいい。勿論変な言葉だが縛り料は出すよ。私としてはビジネスで割切ってもらえれば気乗なのだが……いけないかね？」

「多分そう仰有るだろうと思いましたが。電話がかかって来た時、直感でピンと来ましたの——。でも私の様な変な顔、うつされてもつまらないでしょう……」

「変な顔？ とんでもない。私の心の底でつくり上げたイメージにぴったりだよ。じゃあ、いいんだね。私は彼が使おうとして、遂に使い得ずして、心を残した、その滑車を使つての吊りを君に試して彼の心残りを払拭してやりたいのだ。旅館ではその為都合悪いのだ

——。かつて梨花悠起子に逆吊りを試みた、私の友の家を利用した
 と思うのだが、幸いここからなら、車で十数分だ。構わない？」
 「夕方までなら——。遅くなると父が心配するし、夜の八時頃より
 稼ぎに出ますので、その頃までならいいですわ——」
 「承知してくれたんだね。有難う——、じゃあ善（？）は急げだ。
 すぐ行こう——」

私は欣喜雀躍して彼女を伴なうと、市大病院横にとめておいた車
 にのり込み、一路友人の宅へ急いだ。

突然で、友人は出ていたが、わけしり奥さんに一件を切り出すと
 快よく応じてくれた。

「用があったら、離れにおりますから呼んで下さい。じゃあごゆっ
 くり……」

奥さんは、宇治さゆりにチラリと眼をやり、てれた笑いを浮かべ
 て、離れの方に消えた

「なるべく顔のうつらない方がいいですわ。恥かしいですもの。ど
 うせ奇クにのせるのでしょうか」

「かもね……じゃあこうしよう。責めの感じを出す為に、囚衣をつ
 け、附毛をして始めて見よう。多少グロテスクな残酷趣味にはなる
 が、一度撮りたいと思っている構図なんだ。ずっと以前大塚啓子で
 やった事があるが、塚本君はすっかりうまく撮ったのに、私のカメ
 ラはフィルムの装填が悪くて、全部カラ撮りして失敗したことがあ
 るんだよ。今日はそうした事のない様に、しっかりフィルムをはめ
 ておくよ。じゃあぼつぼつ……」

始めようと私は宇治さゆりを促がした。案外素直に彼女は服を脱
 ぎ始めた。パンティ一枚になると、胸を抱いて腰を踢め、私の差出

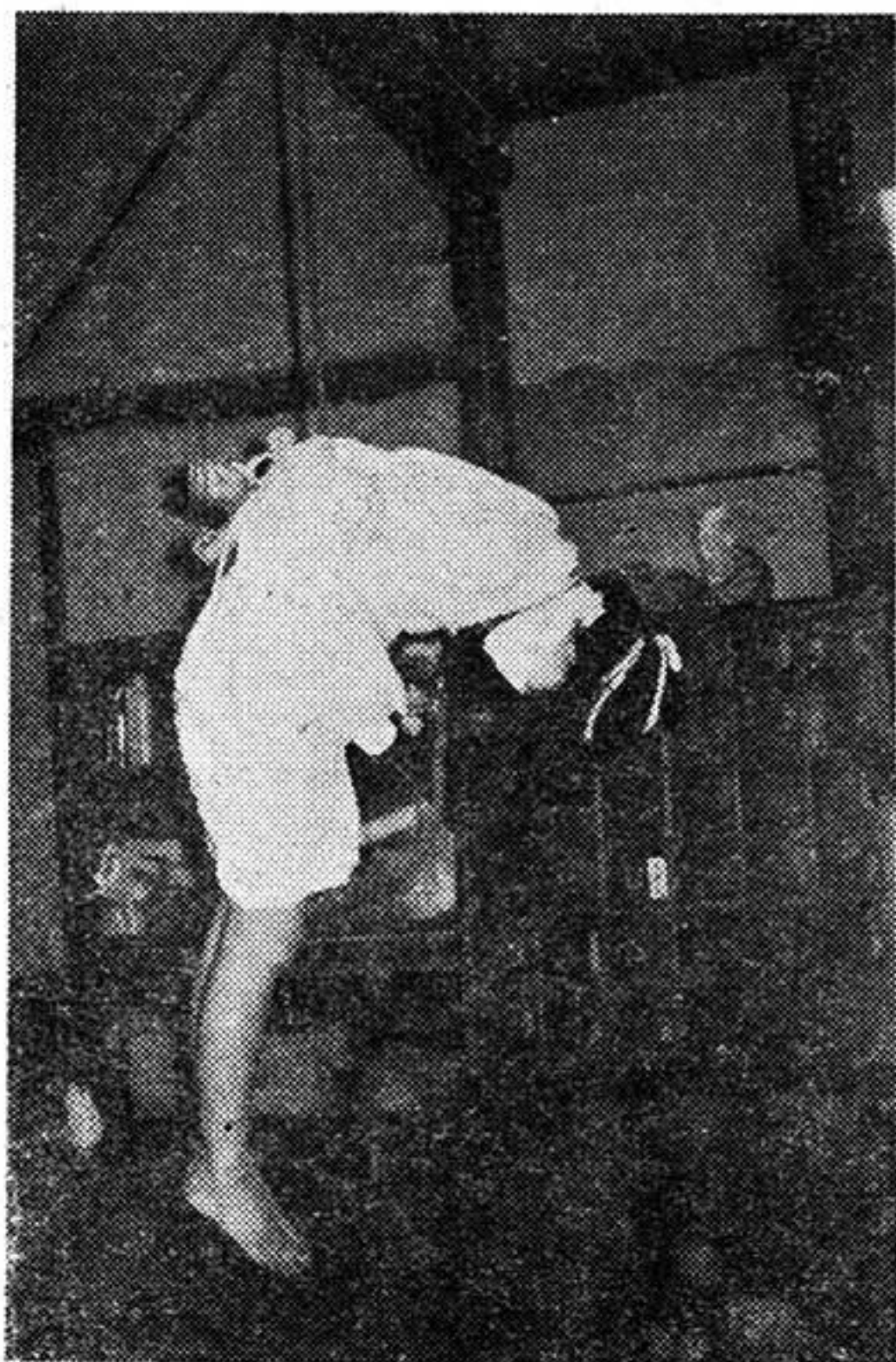
す白い囚衣を片手で受取った。寒々しく薄い着物を身につけ、彼女
 は体を抱きしめて少し身震いしていた。うすら寒さと、昂奮が彼女
 の体を萎縮させ、硬直させるのだろうか——。私は白いロープを手
 にとるとその中央に輪をつくり、彼女の首にはめ込み、菱形にきつ
 ちりと縛り、両手首は別の縄でしっかりと縛り上げた。両方の余つ
 た縄で、股縛りにすると、彼女の縄尻をとって土間へ連れ出した。

古びた土間の高い梁に、太い縄をかけ、滑車を通そうとしたが、
 縄より滑車の溝の方が小さく、己むを得ず、私は滑車を諦めざるを
 得なかった。梁に梯子を掛け、さゆりに介添えして、梯子を一段一
 段のぼらせた。五六キロと云う彼女を、私一人の力で、梁へ吊り上
 げるには私は余りにも懦弱過ぎた。彼女はすっかり観念し、むしろ
 協力的な態度だった。私の想像通り、果して彼女の肉体は堅太りに
 むっちり豊かであったし、肌のきめは細かった。

彼女の後手と腰を縛った二本に太縄を通し、そこでしっかり結ん
 だ。彼女の体は梯子の五段目辺りで、梯子に凭れ気味になっているが
 少々不安定である。太縄をピンと張って、端を、横の柱にしっかりと
 と安定させ、梯子を外すと、彼女の体が宙に吊り下る姿勢になる様
 にして、私は念の為、カメラを構える前に、一度試して見ようとし
 た。

「一度試して見るからね。若し痛かったら云ってくれ給え。縛り直
 すから——」

私は彼女の腰の辺りを抱きかかえ、片手で梯子を傍らにずらし
 た。彼女の重みで、縄がきしり、ズズと肉体は五・六センチ許り下
 ったが、宙にぐるりと半円を描いて舞い乍ら、彼女はこらえた。
 「どう辛抱出来そう？」



「ええ、少しぐらいなら……早く撮って下さい——」

「大丈夫だね。じゃあ、もう一度戻すよ——附毛をするからね」

再び重い体を抱えて、梯子に足をかけさせ、体を安定させると私はかもしの毛を二本、アップの彼女の髪にのせた。腰と腕の辺りで吊ってあるから頭が下がり、附毛をしても、少し頭を動かすと滑り落ちてしまう。ええいと許り附毛の上から紐で頭をぐるぐる二巻き許り絞った上、猿轡をはめた。カメラ位置をきめ、ストロボも装填し終って、いよいよ梯子を外した。高々と吊り下った彼女は、桿をぎしぎしきしませてゆるやかに廻転して揺れた。

胸を圧迫されるのか、彼女は微かに呻いた。夢中で私はシャッターを凡ゆる角度から押した。

「く、くるしいわ……降して」

限界が来たのか、彼女は悲鳴に近い声で猿轡の奥から辛うじて叫んだ。私は大急ぎで梯子を横へかけ、彼女の足をかけさせた。縄は強く肉に喰い込み、後手の両手は冷たく紫色になっていた。縛り方の悪いせいもあるが、三分たらずであった。

彼女は猿轡を外した口で、大きく肩で息をした。心なしか眼はうるみ顔は仄かに紅潮していた。

「非道い方——。あの人に較べたら凄くきついわ」

「御免御免。じゃあ吊りは止めて部屋で撮ろう。その儘でそろそろ来給え——」

私達は奥の座敷に場所を変えた。附毛をつけた変型縛り数枚と、附毛をとった顔を覗かせたものを取り、彼女がその雰囲気に入り出したと見るや、パンティもとった。股縛り、椅子縛り、海老縛りと数種型を変えてとりまくった——。既に二時間前後は経過している。息つく間もなく撮り続けたので、流石に宇治さゆりも疲労の色を見せ始めた。

「一寸一服しよう——」

私もホッと一息ついて煙草をつけた。

「もう少しいいかね……」

「ええ、構いませんわ。でもこうした事が、あの人とならと、フト縛られて写されている時、そんな事を考えました。でもあの人は縛るだけで写真はとりませんでしたので、一度か二度私を縛り変えろと、すぐ止めました」

「あとはおきまり通りのコース？」

「御想像にお任せしますわ。私、連続でこんなに長い間、次々と縛られたの生れて始めてよ。でも撮る辻村さんも大変なんだなって思

いました。」

「読者の人は、発表されたフォトに羨望と軽いねたまする感じ、それに夢と空想をたくしますよ。しかし現実には所詮こんなものさ。塚本君と撮っても、大抵写真をとる事に終始して、拳句の果ては全力を傾注してフラフラ——しかし、何年経っても、又何十回とっても私も塚本君も、常に新らしいモデル、いやこんな言葉はいけないかも知れないが——、君の様に新らしい女性に出くわすと、猛然とフアイトが湧いてくるね。出来上ったものは、過去と似たりよったりであつてもネ——」

「そうでしょうね。辻村さんの今日の態度で、それは恐らく本当の事だと思えますわ。塚本鉄三さんって方も随分おとりになるんでしょうね」

「謂わばプロ野球の選手と、好きでチームをつくった草野球の選手の違いぐらいはあるね。私は所詮道楽——、あの人は奇クの専属。プロだよ。君さえ、若しよかったら、いつでも紹介するよ。どう？……」

「何だか怖いようだけど、一度ぐらい逢って見たい気もしますし……辻村さんにお任せしますわ」

「任せると云う事はO・Kなんだね。彼、きっと喜ぶに違いないよ。このところ、モデルの新らしいのが少なくてコボしていたからね——。そうだ、今日はこれくらいにしよう。」

「もういいの？」

宇治さゆりは、それでもホッとした顔になった。私はカメラを片付け始める。彼女は衣裳をつける。

「あらッ、困ったわ。どうしましょう。手首の縄の跡がとれない

わ。分るわネ……」

と、困った顔付になって、手首をさすり出した。

「大丈夫——、二時間すれば分らないよ。しかしまあ、なるべく気をつけてくれ給え——」

私は約束した金を渡すと、彼女は黙って受取った。SMプレイの当然の報酬と考えたのであろう。恋人でもない。辻村隆に撮らしたのだから、報酬はあつてしかるべきだ——。

私は彼女に運転してもらつて、車を彼女の家の近くまで飛ばした。市内の夕暮れの混雑と、交通麻痺の煩雑さはいつも避けていたので、むしろ彼女の方が、こうした夕暮れ時の運転には馴れていたから代つてもらつたのだ。

別れる時、私は再会を約した。心はすっかり塚本鉄三に紹介する腹で、手を振っていた。

× × ×

「いいよ——あの娘……実に協力的なところが気に入ったよ。拾いものだね」

塚本君は、最近いよいよ出ばつて来た腹をもて余し乍ら、しきりに汗を拭いている。

先刻、宇治さゆりを撮つて、別れるなり私を訪れて、爾後報告に来たのである。粗いチエックのスポーツシャツに、ベレー帽。いつも乍ら同じ姿の彼は、家内のついたビールを一息にのむと、家内が居るのも委細構わず、今日の成果を語り出した。

「免も角、君がいいと云うから僕は彼女と月極めの契約をしたよ。一回一回渡すよう、その方が彼女も有効に使えるだろうからね。相当強烈な縛りを試みたが、彼女は耐えるね。飛行機事故の彼氏の教

育が随分行き届いていたと見える。君が三十九夜に発表後、僕は僕なりに彼女を売り出して見せるよ。ね、いいだろう——」

「いいとも、そうして貰うつもりで紹介だもの——、梨花に較べて少し年を経た感じだが、梨花同様よろしく頼むよ。あとの飼育はすべてあんた次第だ……」

「名を変えなくてもいいの？」

「いや、宇治さゆりと云う名が本人の希望なんだ。けれど妙に、さゆりで電話が通じるからね。本人のプライバシーの生活までせんさくしないのが私の方針だから、さゆりでいいでしょう……」

「宇治さゆりか——、ハハ、松井籟子の『淫火』の女主人公を思い出すね。いいだろう、宇治さゆり——うん、いい名だよ。いずれ焼き次第連絡するから、フォト見にこいよ。じゃあ——。奥さんどうも……」

早腰の塚本鉄三はそそくさと帰った。恐らく、迅速な彼の事、直ちに現像して、夜を徹してでも引伸しに憂き身をやつす事だろう。

案外宇治さゆりは、被虐を希んでいたのかも知れない。女心とは奇妙なものである。彼の残した被虐の想念の蕾が、いまいきいきと開花しようとしている。名も知らぬ、地下の宇治さゆりの彼氏よ。以て冥し給え。

× × ×

スバル氏の話は終わりました。退屈男達は、今更乍ら改めて、宇治さゆりのフォトを、今一度とくと見守るのでした。奇クの発表にさきがけて、一足先に彼女のフォトを見たと言う些細な優越感が、等しく誰しも一様に抱いていたのかも知れません。ついでナイロン氏が実に久し振りに口を切りました。前半期で相当話を稼いでいた彼

は、ここ随分の間、聞手一方に廻っていたのです。

彼のフォトが一覧したところで、彼の話は始まりました。

第八十九夜 坐禅ころがし

「スバル氏から紹介された桑名氏（仮名）とウマが会うと云うのか二三度逢っただけですっかり胸襟を開く仲になりました。桑名氏は刑罰に特に興味を魅かれるのか、昔の拷問、刑罰、責めに関する文献、書籍は殆んど網羅していました。私と一夕歓談すると、場所も辺りもわきまえず、談論風発、刑罰に、責めに飽くことを知らずと云った風です。

その夜は珍らしく女性を同伴し、それは私の未知の人でした。「紹介しましょう。私の姦通の相手ですよ。私の家内もこの人の事は知らない。この人の御主人も私の存在を御存知ない。世に謂う。有夫有婦の姦通ですよ。よろめきなんて言葉は私達の年令になるとピンと来ないですね。しかも私達二人は、お互いが嗜虐、被虐の想念で結ばれた仲です。結びつきの曰く因縁から話すと長くなるのですが、きいてくれますか」

「面白そうですね、お伺いしても差支えなければ……」

「渋沢けい子と申します。どうぞよろしく……」

その人は私に、にこやかに自己紹介した。色白な豊満な肉体である。堂々たるタイプで、可成り大柄の桑名氏すら、彼女と並ぶと貧弱に見えた。年令は四十に近く思えたがもう少し若いかも知れない。服装の渋い乍ら相当高価なことは一眼で分る衣裳である。ふつくらとした薬指にはまったダイヤの指輪から推しても、裕福な家庭の人に違いなかった。

人間同志の結びつきなんて、実に何でもないヒョンなことからです。ほんのとるに足らぬ「些事」が人間の一生を支配することだってあります。話はそれますが、テレビの『夫婦善哉』と云う、蝶々、雄二司会の番組で、二組の夫婦が毎週紹介されますが、そのきっかけを聞いていると、結婚と云う一生の関心事が、ほんの一寸したゆきずりで、擱んでいることすらしばしばあります。電車内で男が、前に坐っている女性に、一寸いかしているので冗談半分にお茶に誘った。女性はついてきた。それが恋愛にすすみ、あっさり結婚しているのです。結婚問題でクヨクヨ悩むのが阿呆らしいような、嘘のような現実が、あの番組で証明されているのです。

私達の場合結婚ではありませんが、結びつきと云う点では、独身の男女より、遙かに難かしい立場にあり乍ら、機会と云うものは、意外な処に転がっていたのです。私はその日、そうですね、たしか四月上旬の長雨の上った、晴れた日の事でしたが、かねて噂にきいている。雄山閣発行の、名和弓雄著『拷問刑罰史』を求めるべく、馴染みの本屋に立寄ったのでした。私の蔵書と、或いは重複する個所もあるかも知れませんが、題名からいって、私の蒐集本の一冊として欠くべからざるものだと思ったのです。

大衆本ではないので（八百円の定価）、或いは予約注文でもしないと駄目かと思っていました。が、運よくある事はあったのです。しかし、

「ほんとに一足違いですわ、実はこの方が買われましてね。ホレ、この通り今お包みしているところですよ。何しろ変った本ですので余り出ないと思って、二三冊とただけでしたので……。是非お入

用でしたら、すぐにでも注文しますけど……」

と、気の毒そうな店主の顔付でした。新刊と古書部と店頭を左右にしきった、便利な書店で、面白い事に、一例をあげると、「新平家物語」が新刊部では、定価の三五〇円で売られ、十数歩あるいた古書部では、新刊と殆んど変らぬ同本が、二六〇円のレツテルを貼って書棚に並んでいるのです。

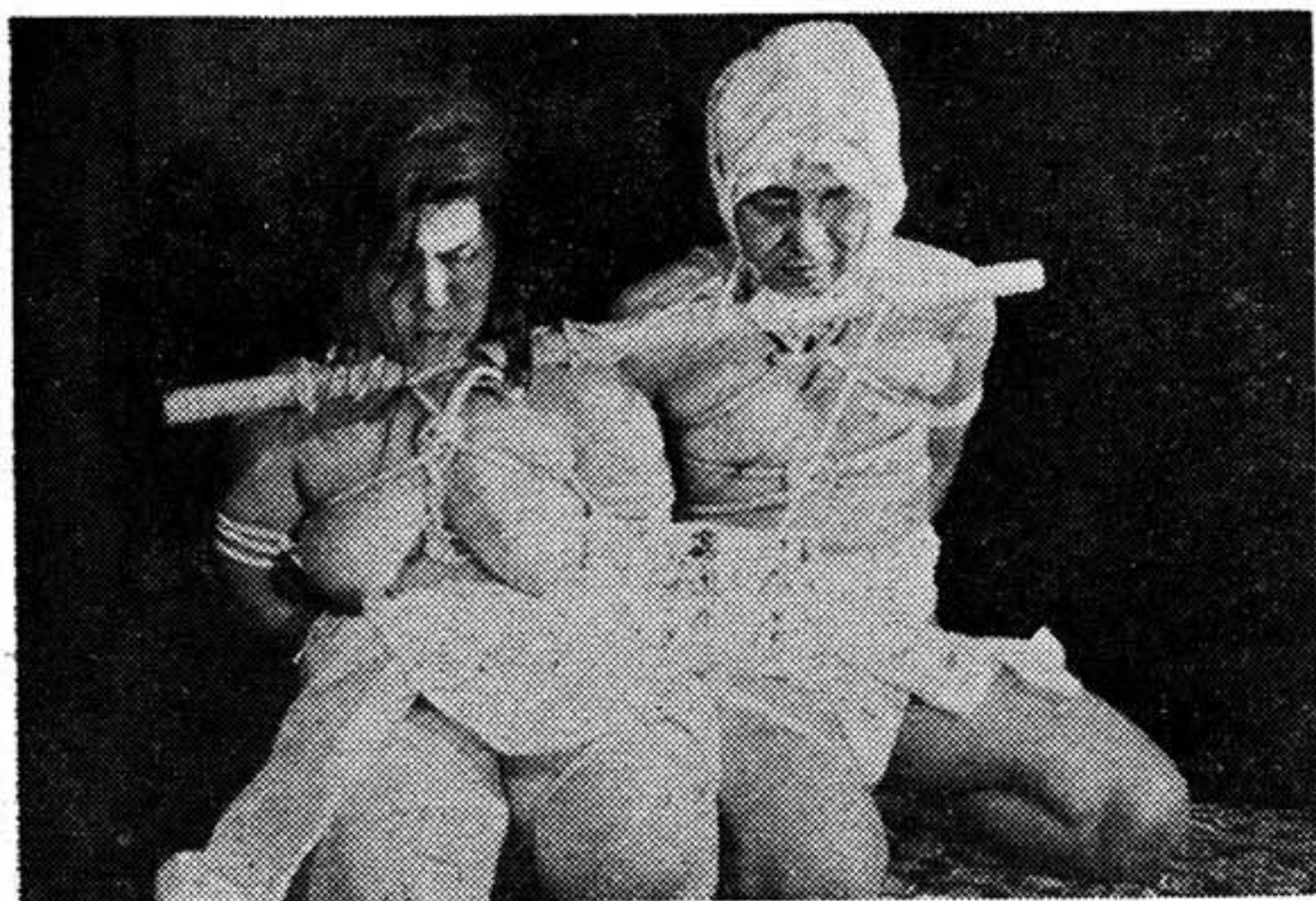
愉快なおやじさんで、私の性癖をすっかりのみこんでおり、こと刑罰や責めに関する文献があると、必ずと云ってよい程、私の現われるまで、とっておいてくれるのです。つい情に負けて、買わざるを得なかった場合も注々ですが、その協力で、随分得難い掘出物を擱んだのも事実です。

ところで『拷問刑罰史』を、私より一足先に買った、件の女性は少し気まり悪げに顔を赤らめて、何とはなく私に会釈をしました。「あのう、もしおよろしかったら、どうぞ……私、急ぎませんからお譲り致しますわ——」

堂々たる恰幅の奥様然たる女性は、何か自分の心の奥底の恥部を見つけられたかの様に、どきまぎして、そう申しました。

「いえ、いいんです。折角買いに来られたのです。どうぞ、どうぞ……」

私達はカウンターを挟んで、短い応答をしましたが、内心は寧ろ反って、今すぐにでも内容を開いて見たい欲望にかられました。しかし、流石に未知の女性に、それも申し出でかね、私はそこをさりげなく離れると、あきらめて、書棚に眼を移し、新刊書をあれこれ手にとりましたが、興味は索漠としたものでした。女性の姿はいつの間にか、店頭から消えておりました。



「近頃の御婦人方は、変り本にも興味をもつ様になりましたね。あの方は、去年でしたか発禁寸前に『続悪徳の栄え』を奪う様にして買って行きましたよ。随分探し廻った様子でしたがネ……」

店主は私の特異な蒐集を知っているので、心易く声をかけて来ました。

私はその日は何も買わず書店を出ました。軽い失望と落胆の入り交った気持で、市電の通る舗道を大急ぎで渡り切り、コーヒのうまい、コロンビアへ立寄りしました。

席を探し乍ら、通路を行き過ぎ様として私は、そこに不思議な偶然性に、あっと一驚したのでです。先刻の女性が、コーヒをのむのも忘れ、あの『拷問刑罰史』の包装紙をといてその内容の一点に見入っているのです。しかも偶然は

ダブルプレートに重なり合い、その前のシートが、さながら私を待つかの様に空席になっておりました。私は静かに腰を落しました。気配で女性は顔を挙げ、私を見て、彼女自身も吃驚した様に眼をみはりました。或いは、尾行されたとも思ったのかも知れません。

「又、お逢いしましたね。一言だけ、私自信の為に弁解をあらかじめさして頂きますが、私は決して、貴女の跡をつけたのでない事を信じて下さい。この店は私のゆきつけですし、席は運よくここが空いていた——。そんな偶然性が重なったのに過ぎません。」

「いいえ、私別にそんなこと——」

彼女はやや、硬ばった顔をほぐしました。

「どうですか——面白いですか？」

私は本について聞いて見ました。ごく軽い気持で……

「はしたないとお思いでしょうね。でも私、どう云うものか、若い頃から、こうしたものに興味を持つ様になりました、主人には内緒で、時々買って来ては読んでいたのですが、何しろ、内緒ですからそうそうどれもこれもと買うわけにも参りません。隠しておくのが大変ですから……。変な女とお考えでしょうね——」

「とんでもない——。私自身、謂わばそのマニアです。私は男の自由な立場から、相当買い漁り、洋の東西を問わず、拷問、刑罰、責めの蔵書は大分沢山集めました。魔女裁判の、悪虐無惨な刑罰の方法、バルカン戦争の文献、徳川御仕置始末書、刑罰珍書集、江戸の刑罰、長崎切支丹御仕置抄録等々、その他いろいろとあります。よろしかったら、どれでもお好きなのをお貸ししますよ——」

「まあ——、本当に不思議な御縁ですね。是非お貸し願いたいですわ——」

私達はそこで、まるで十年の知己を得た如く長々と話し合いました。興味は尽きるところを知らず、共通の話題は、話の端々で、到る所に出て来ました。女性はいづれ子——御主人の沢沢氏は、北浜K証券会社の常務取締役だそうで、お二人の間には、一男一女があります。高校三年と一年だそうです。

私も亦自己紹介し、私が私大の助教授であること、三十五才の案内との間に三児のあることも、包み隠さず彼女に話しました。

彼女の願望はどうやら、被虐にあり、刑罰によく出てくる、女囚の屈辱的な責めや、拷問にあるように思われました。女牢に閉じこめられ、数々に打擲され、辱かしめを受け拷問に悶え、責めに喘ぎ遂には衆人の前で恥かしい姿で晒し者になると云った過程——そうしたことを、最初は廻りくどい表現で、徐々に被虐の願望を示し、いつしか、それを判っきり望んでいる事を、私に語りました。

喫茶を揃って出る頃、私達二人は、既にお互の体の隅々まで知り尽した様な錯覚にすらとられました。ほんの三時間前までは、ゆきずりの赤の他人同志が、共通する嗜好者と知ってからは、急激な親近感を覚えるようになったのです。

堅い再会を約して私達は、街角で右と左に袂をわちました。

× × ×

沢沢けい子夫人から大学へ電話のあったのは、その翌々日でした。押え切れぬ耽読癖が、無精に私の蔵書に対する欲求となって現われ、思わず掛けたと云うのです。

大抵のことなら、家内に話をする私でしたが、彼女のこととは云いそびれ、それが家内に対する秘密となつて心に重くのしかかりました。将来への期待の予感とでも申すのでしょうか——。

家内が最近里の父親の病気で、時々実家へ帰っておりますので、私は家内の留守をえらび、午前中の講義のない日に、私宅を訪問する様申しました。子供三人は学校で、恐らく午後三時過まで帰らないでしょう。何もそうまで秘密に逢う必要もなかったのですが、一度それにこだわると、次々と切り出し難くなるものです。秘密は秘密を生む場合が往々にしてありますが、私達の場合、或いは偶発的に起り得るかも知れない、拷問、刑罰へのプレイめいたものを、私は内心秘かに夫人に対し期待していたのかも知れません。

その日、家内は末の子供の登校と連れ立って実家へ出掛けました。今日の講義は午後一時からです。まるで時間を計ったかの様にけい子夫人が訪問して来ました。彼女は的に違わず『拷問刑罰史』を持参しました。

けい子夫人の話では、この本には、サドルマゾヒストにとって、見逃せない、面白い資料が沢山あるそうです。

私は彼女を書斎に案内し、蔵書を自由に見て貰う様配慮しました。

私にとって、『拷問刑罰史』の中で、特に興味を魅いたのは、その第十一章の「女囚の懐妊」に関してでした。著者の名和弓雄氏は幸いにも、書名さえ明記すれば、資料転載は自由であると言っておられますので、私はそれを書き写して見ました。

女牢における女囚の貞操は、同性愛以外にも風前の灯といった状態ではなかったかと想像される。ことがことだけに記録に残っているものは少ないが、記録がないことはない。『政談秘書』の中に、終身刑に処せられた未亡人の女囚が、牢内で妊娠したことが記録さ

れていて、懐妊させた相手はわからなかったとしてあるが、女囚を自由に出来る男は、牢奉行をはじめとし、その配下の者数人に限られていて、調べれば判明致さず候などということはない筈である。
(以下略)▽

当時牢内で責めを起調にした、女囚に対する配下の方法として、次に挙げられていることに、私は特に興味ををひかれました。
△坐禪ころがし。

当時の秘密出版物に、牢番が女囚を犯す方法の一つとして『坐禪ころがし』というのが記載されている。これは、女囚を裸にして後ろ手に絞りあげ坐禪をくませる。

坐禪というのは、左の太もものうえに右の足先をのせ、さらに右の太もものうえに左の足先をのせる方法で、両膝が充分に開き、組



んだ足は、手を使わなければ外すことが出来ない。こうしておいて前方に突き転がすと、両膝頭と顔の三点で支えられて、臀部が高くあがり、動くことも左右に転がり逃れることも出来ない。後方から誰になにをされても、どうすることも出来ないし、顔を見ることが出来ない。古文獻には、古代支那では、女囚はほとんど『なぐさみもの』にされたが、本邦ではその事実はないと、立派に言い切っているが、『坐禪ころがし』などの記録が残っているところを見ると、いかなるものであろうか——▽

以上ですが、『女囚の懐妊』（相手は判明致さず候）として、白洲に後手に縛られた、お腹の大きい若い女（着衣）が坐って晒されてている挿絵と、道場の様な板の間に全裸の若い女が後ろ手に縛られ、坐禪の形に脚を組んで坐っていると、それが前に倒されて、両膝と顔を地につけ、臀部を高くしているところが、それぞれ描かれてあります。後者の絵には勿論『坐禪ころがし』と書いてあります。私はこの挿絵に強く興味をひかれ、想像は限りなく躍進するのです。けい子夫人はソファアに凭れ、まるで私の存在など無視したかの様に、一心に、『江戸刑罰図鑑』に見入っておりました。

私はそこはかとなく、けい子夫人を『坐禪ころがし』の女囚に見立て、その態位を頭に描いて見ました。

裸で後ろ手に縛られたけい子夫人は、やや太目の両脚を坐禪の形に組み、ころがされているのです。私の顔を見る事も出来ず、アップに結い上げた黒髪は乱れ、抵抗することも出来ず、美しい顔は無惨に床にすりつけられ、息苦しく呻いている姿——。脚を組まされて、前に突き転ばされてしまえば、もう、どうしようもないでしょう。現代なれば、この姿勢は理想的な浣腸ポーズであるかも知れま

せん。世間から厚い壁で隔離された。このおぞましい場所では、女囚はどの様に痛めつけられ、責めさいなまれても、万一それが死につながっても、（相手は判明致さず候）で、何の証拠も残らなかつたに違いありません。

何人かの牢番にタライ廻しされた女囚は、いつしか誰の子とも分らぬタネを孕んだ事でしょう。月が経てば、やがて大きな腹をかかえてモタモタすることになるでしょう。

腹が大きくなるにつれて、ときどき処罰を理由に、妊婦は裸にされ、牢番たちの好奇の鑑賞の対象にされ、相手を云えと強要されては、妊婦の責めが、公然と行なわれていたに違いありません。

女許りの筈の女牢に、孕み女がいると分れば、それこそ牢番達は興味半分に「孕み女——」「まるで犬みたいな奴だ」と珍らしがられ、面白がられ、世の中の恵まれた女達とは違って、誰のタネとも知れない子を孕んだ女は、おそらくは牢中の弄り者になることでしょう。もしその女に拷問がともなえばどう云うことになるでしょう。妊婦の逆吊り、駿河責めも、牢番、同心達には不可能ではなかった事でしょう。

私の幻想はさめて、その挿絵から顔を挙げた途端、けい子夫人の挙げた顔とばかり視線があってしまいました。くびれたおとがい、深い呼吸で振幅し、紅潮した頬は、彼女の昂揚した精神状態を明らかに示していました。

「お気に召しましたか——」

「日頃、見たい見たいと思っていた図柄が随分御座いました。私、すっかりあがってしまつて——。何か裸で貴方の前におる様で、恥かしいですわ」

「私もだ——。貴女はお読みだから御存知でしょうが、この第十一章の『女囚の懐妊』の個所で、『坐禪ころがし』と云う弄み半分の責めがあります。私はそれにいろいろと憶測と想像を加え、不逞な想念を働かせていたのです」

「分りましたわ。私を対象にお考えになったのでしょうか？」

「申し訳ないが、その通りなのです。実際に『坐禪ころがし』を本で読んだ通りに行なつて見て、果してそうなり得るか否か、試して見たいと思ったのです。だけど、この不逞な考えは、所詮想像の産物です」

「私がその実験台になると申し上げたら……」

私は愕然としてけい子夫人の、その大胆卒直なる言葉にとまどいました。それは彼女の、案外本心であつたかも知れなかつたのは、あとで分つたことです。最初の彼女の訪問で、そうした実地の責めのプレイが出来ようなんぞと云う、大それた望みは、毛頭私の念頭にはありませんでした。

私は歓喜と懷疑と逡巡に、問誤問誤し乍らきき返しました。

「本気なんですか——」

「本気じゃいけないのですの？」

逆襲されて、私はますます萎縮します、と共に、大脳神経の、嗜虐末端神経がムズムズして来たのです。彼女は冗談にことよせて、それを望んでいるのではなからうかと思えてきました。

「やりましょう。二度とないチャンスです。まるで、空間の陰と陽が、時と所を得て、ピッタリ一致して、烈しい放電を起した感じがします。嗜虐の放電をネ……。即刻貴女は女囚です。いいですね。私は牢屋同心——貴女は、密通の罪によって、牢に入れられその事実を

白状せぬところから、数々の拷問を受けて来た。今日はいまわしい『坐禪ころがし』が始まるのです。私も直ちに同心になりましょう。いざ立ち候えー」

けい子夫人は眼をきらめかせ、無言で立上ると、シュルシュルとその場で帯をとき始めました。叶えられた期待に胸を弾ませているに違いありません。私は大急ぎで、書斎のカーテンをひき、暗くなつた部屋の、机上の蛍光スタンドだけを点灯しました。十ワットの蛍光灯は、ごく近い周辺だけを照らし、おどろおどろめいた、妖しい処刑の部屋の雰囲気、徐々に部屋に立ち籠もり始めたのです。私は縄をかき集め、長縄絆一枚になつたけい子夫人に近付きました。観念した様に彼女は中央に佇立し、微かに笑って見せました。

長縄絆を通して、感じる皮膚は匂やかに胸のふくらみは大きく、それに豊かな女体の肉付きが、私に軽い錯乱と混迷すら刹那与えたのです。灰色の教職生活にとって、これは又何と云う、願つてもない、甘い刺激でしょうか。二人きりなればこそ訪れたチャンスとも云えます。私は秘かに夫人とプレイする、姦通めいた戦慄を、この身にじかにひしひしと感じました。

腰紐をとると、パリリと前ははだけ、夫人は湯文字一枚のほか何も身につけていなかったのです。サヤサヤと絹ずれの音を残して、長縄絆は肩から滑り落ちました。

私は思い切って更に夫人の湯文字に手をかけ、生れた儘の姿にしました。

まず後手に縛るのですが、これも単なる後手でなく、二の腕から両手を背の上へ吊り上げ気味に縛るのが効果があるのです。

私は従容とした夫人の後ろに迫り、静かに左右に垂れたその両手

首を、後ろ手に重ねました。一本の縄の半分許りが、手首を縛るのに要し、半分の縄を残した儘、更に別の縄を、二の腕と背の間に通して、左右の二の腕を引き絞りました。引き絞った縄は雄結びにして首に上って左右に分れ。胸で更に一つ雄結びした縄を左右に分けて腕に通して引き絞り、分れた縄にかけて前へ廻すと、綺麗な菱形が、乳房の上に造り上げられます。

尚も余つた縄を手首の縄と連結させ、後ろ手縛りは終わりました。私は職業用の、一米の平らな定規さしを、青竹かむち代りに握りしめ、平たい方の部分で、彼女の肩を軽く打ちました。ペチャリンとさして痛くもないのに、派手な音がして、一瞬、けい子夫人は、ピクリと肩をふるわせました。

「坐つて坐禪をくめ——」

私はわざと命令調に云いました。けい子夫人の様相には、ありありと女囚になり切つた、待望の境地に、今やひたつていると見たからです。彼女は徐々に膝を曲げて腰を落し、一旦尻を床につけてから、又ゆるやかに動いて両脚をくもりました。しかし、両手の不自由な夫人にとって、坐禪の足組みは、到底無理な所業です。腰から臀部へと、ゆたゆたと贅肉がつき、両脚は運動不足からか、予想以上に太く感じました。私は介添えて、その両足を何とか、坐禪の形に組むことに成功しました。悲鳴は本人が承知故立てないのは分つてはおりましたが、更に被虐感を味わわそうと、彼女の足袋を丸めて口中に押し込み、その上から、伊達めめで、しっかりと猿轡をかませました。正に夫人は被虐の中に耽溺し、又と得られぬ、この刹那の苦悶に酔っている様に見受けられました。

私は屈辱感を出す為、ピシヤリピシヤリと数度定規さしで臀部や

肩を打ち思い切つて縄尻をとると、前へ廻つて縄を引いたのです。坐禅の足が邪魔をして、彼女の体のみがぐつと前方にかがみましたが、それ以上動きません。再び後方へ廻つて、夫人の双臀に諸手をかけ、うんと力をこめて前へ倒しました。これで、本にある、『坐禅ころがし』の形になり、夫人の両ひざがしらと顔の三点が床につき、臀部が高く上る筈なのです。しかし、実際にこれを行なつて見た結果、坐禅の形に足を組んでいても、彼女の腰がうんと伸びてしまつて、足がほけない儘に、脂肪太りの股が下についてしまひ、瞬間支えられていた両膝がしらと顔で支えられていたバランスは崩れてしまいました。三点の安定がくずれると同時に、脚が浮いて、床の堅さで、痛みに堪えかねた脚がモゾモゾと動き、坐禅の両足は組んでいたのが解かれてしまいました。

世に謂う絵空事とはこの事か——。実際にやってみると、絵にある如き三点で長い間静止できるはずもないし、先ず先に腹が床についてしまつて、組足はすぐ解けてしまうのです。けい子夫人は、蛙を押し潰した様な恰好になつて、肩でバランスをとり、後手の儘、床に這いつくばってしまいました。

結局、足を絞らない『坐禅ころがし』は不十分だったわけですから。完全に坐禅の足組みが解けない様にするには、足首をそれぞれ反対側の太腿に絞りつけるか、それとも、両足の交差しに個所を縛っておかねばならないでしょう。従つて、腰を伸ばせない様に、脚に掛けた縄を、腹を廻して締めた縄に連結して引きしめ、脚を腹の方に引きつけておくか、それとも首に繋ぐなり、肩を越して、後ろ手の手首に結びつけるなりしなければ、『坐禅ころがし』の醍醐味は味わえないと思います。

腰を九十度以上に伸ばす事が出来ぬ限り、臀を高く挙げた姿勢は変えられず、従つて、体を左右にも、前後にも体を動かすことは、絶対不可能になります。孕み女を『坐禅ころがし』にして見たら、どんな結果になるか、これは私も予測出来ないのです。

とあれ、けい子夫人の『坐禅ころがし』の形は、瞬時にして果敢なくも消え去りました。

しかしプレイは軌道にのりました。私はけい子夫人から求められる儘に『江戸刑罰図鑑』に掲載された、縛り図を参照して、女囚の緊縛、又僧侶、武士、町人とそれぞれ区別された縛り方を、迅速且つ、忠実に、次々と彼女に施していったのです。この時程、私はカメラにそつぱを向いていた我が身を口惜しく思った事はありませんでした。

堰を切った二人の責めと、緊縛のプレイは、二人切りの秘め事となつて、僅かの逢瀬をつくり合つては、旅館やアベックホテルで、人眼を忍んで続けられました。しかし、今更四十の手習のカメラの稽古も出来かねて、私達はその記録のとれない事を、常に淋しく又残念に考えているのです。私達はプレイの副産物として、当然、成り行き上一心同体の仲になりました。姦通の模擬プレイは、真実姦通の事実をうんでしまったのです。

長い長い前置きでしたが、貴方を知るに及んで、夫人を口説き落とし、二人の姦通のみせしめの、晒し者の緊縛の姿をカメラに納めて載き度いと思つて、今宵、この人を伴つて来たのです——」

× × ×

桑名氏の長い述懐でした。その間、渋沢けい子夫人は一言も口を挟まず、桑名氏の話をつつましく聞き、我が身の上と性情の個所に

なると、赤くうなだれていたのです。

私は言う迄もなく快諾しました。桑名氏は恐縮し乍らも、喜びを隠し切れず。その計画や考えをしきりに喋り出しました。

組写真として、女盗賊の位置の場に、非人が来て乱暴し、それが見つかって、二人が並んで晒し者となって、醜い姿を衆前に曝すと云う、謂わば被虐趣味のもので、けい子夫人はいいとしても、もともと嗜虐的な桑名氏が、これをやると云うことは、相当けい子夫人の力が働いているものと、私には察せられました。

私達三人は料亭を出て、車で自宅へ帰りました。離れの方に二人を案内し、カメラ、暗幕の準備も整い、囚衣にハタと弱りましたので、スバル氏に電話して、彼の白い囚衣を借ることに、桑名氏はもともとスバル氏の紹介ですので、当然彼も一枚加わって写すことにしました。スバル氏の到着を待つ間、桑名氏と渋谷夫人は、醜い容貌に化粧するのに一苦労しました。黒幕をバックに張り、カメラ位置をきめ、離れの戸を内側より旋錠し、私は弾む心を、年甲斐もないと自分で叱りつけ乍らも、ともすれば、向うから転がり込んで来た。願ってもないコンビに有頂点でした。

フオトも『姦通のみせしめ』ですし、事實は、紛れもない、姦夫姦婦なのです。私は、画用紙に、墨くろぐろと（姦通のみせしめ）と書き、もっともらしく、その左右に、昔風な名前を慥らえて、男――太作、女――とめ、と書いたりしました。

スバル氏を待ちましたが、彼より電話があつてどうしても行けない突発的な用事が出来たと云うので、彼をあきらめ、私は己むなく囚衣もそれと共にあきらめ、男は禪、女は腰巻と云ういでたちでどうかと提案しました。

かつらもあればと頼んでいたのがダメになり、男は非人めいた頬かぶり、女は乱れ髪にしました。

けい子夫人の顔はさながら一変して、女賊と云う想定の際に、彼女は苦心してつくり上げたのか、眉毛をつり上げ、眼くまを入れ、眼尻をあげて、しかも綺麗に結い上げていたアップの髪を惜しげもなくつぶし、乱して額に垂らしました。桑名氏の扮装は更に一層輪をかけ、顔を汚し、片眼はセロテープでつぶして、如何にも下卑極まる非人タイプです。私は彼にスバル氏の来れぬことを告げると、桑名氏は如何にも残念そうでしたが、スバル氏を知らないけい子夫人は反って、ホッとした様子を見せました。

「どうぞ、遠慮なく私達を縛り上げて下さい。どちらからでも……」腰巻一枚のけい子夫人と、禪に頬かむりの体の桑名氏は、思い叶う或る種の感慨と昂奮に、しきりにスウスウと音をたてて息を吸い込んでいました。

「じゃあ、奥さんから行きましょう……」

私は案外落付いた縄捌きで、太目の縄をしごいて解きほぐすと、彼女に近づきました。桑名氏の話より以上に、ききしに勝る立派な、豊満たような乳房が、胸部の大半を占領して、ふさふさと垂れ下っておりました。

首縄をかけて、胸で挟じり、腕をしめ加減に結んで、両手を後に縛り、尚も余った部分を乳房の下でしめつけました。

ついで、桑名氏に近寄り、これは尋常な首縄の菱形縛りにした上後手に縛り上げました。二人を黒幕の前に引き立てて座らせると、やはりけい子夫人の方が堂々と、さも女賊の兇暴な女性に見え、桑名氏は圧倒されそうです。二人の体をくっつける様にして坐らせ青

竹を二人の首に連結させて、尚、猿轡代りに、一本の縄を、二人の口に喰い込ませて、縄に先程書きたての『姦通のみせしめ』と云う紙をはりつけたのです。晒し者の実感は充分でした。角度を変え、少し縛り方を変えて、十数枚、私はシャッターを切りました。

晒し者の実感は犇々と二人の、身も心も打ち砕いていったことでしょう。徐々にけい子夫人の顔は悲愴味を帯び、唇をかみしめて、精神的な苦悩と斗っている様に見受けられました。

現在なら、ソフトムードのよるめきと云う言葉で片付けられてしまふ、この種の行為も、もしこれが、江戸時代だったらどうでしょうか——。二人は姦夫姦婦として、この様な、浅ましい、情ない姿で、日本橋のたもとに晒されなかつたと果して云えるでしょうか。

だからして、二人の容貌には、物悲しい。悲壮さと、苦悩が、まざまざと滲み出ていたのです。私は尚もいろいろに形をかえてとりましたが、例え私一人であっても、その眼前で晒されていると云う屈辱感が、けい子夫人にとっては、その複雑な心情は、恐らく彼女以外誰も想像し得なかつたに違いありません。準備時間の長さに比例して、撮影時間は、三十分程度でした。佳境に入った私が、尚もポーズを考えている時、突然けい子夫人は叫びました。

「もう止めて下さい——。私、何かたまらない気持ですわ……」

私は、慌てて二人の縄を解き放ちました。

彼女は被虐を望み、切望し、事実桑名氏と姦通していても、さてそれが空想ではなく、我が身に、みせしめとして縄目が犇々と喰い込んでくると、矢張り屈辱と、羞恥と、悔恨が頭を拾げて来たのかも知れません。

何かフト白けた空気がただよいました。私は跡を片付け、桑名氏

は顔の化粧を落し、けい子夫人は、あわただしく着物をまといました。鏡台に向い、クリンシンクリームで、よそおいを拭いとして行くと、徐々に、着物にふさわしい彼女に変身して行ったのです。

氣拙い沈然がしばらく続きました。座にいる三人——この氣拙さが奈辺にあるか、誰も口では説明しにくいのです。

モデルを緊縛する氣の軽さは勿論ありません。もしその原因をあぐ迄追求するとすれば今日の想定は、余りにも事実と測して、そのものズバリだったからでしょうか——。

現在よるめき合う二人が、姦通のみせしめをとられたとなると、ひとごとや笑い事ではなくなるからです。余りにも真実すぎて、その事に彼女は自己嫌悪を感じたのではないのでしょうか——。それは唯、私一人の考えですが、この空虚さ、この白々しさ、この後味の悪さは、それ以外には説明のつけ様もないのでした。夜食をすすめ一献準備しましたが、桑名氏と渋沢夫人はそそくさと帰りました。「何か妙な空氣になって済みませんでしたネ。いずれ又改めて来ますよ——」

桑名氏は、それでも最後に一言云って、呼んだタクシーに近附きました。いつもの様に何気なく夫人の手をとり、先に乗せようとして、ピシリと音の感じる程彼女にその手を払われ、私はその時、何故ともなく、二人の仲のカタストロフの近いのを感じました。

× × ×

果してその夜を境界に、二人の仲は急速に疎遠になった様です。渋沢夫人は、元の姿に返り、良家の母と妻の、本来の自分に戻った様です。

私はこのフोटを發表するのを逡巡しましたが、三十九夜の我々

の集いも終りに近付き、いよいよあと一回を残すのみになりましたので、桑名氏にその旨の諒承をうけ、桑名氏より渋沢夫人に諒解を得てもらって、敢て発表したのです。枚数は少ないですが、この三枚のフォトの影に、幾枚かの秘められたもののある事を知って戴き度いと思うのです……。

ナイロン氏の話は終わりました。人々は今更乍ら、改めて余りにも生々しい姦通のみせしめのフォトに、まじまじと見入るのでした。夕陽は遙か水平線の彼方に、真赤な火の玉となって沈もうとしていました。ちぬの海の汐騒はようやく高まり、正に暮れて行かんと

する淡輪海岸の浜の景色は筆舌に尽くし難く、波浪は茜色に染まっ
て、打寄せるさざ浪は金波銀波にとけて、久遠の謎と秘密を、聖な
る海の母体にとけ込ませるが如く、規則正しいリズムを、人々の耳
に届かせておりました。しばしの名残りを惜しんだ退屈男の一行は
やがて衣服を改めると、喧燥と騒音の渦巻く大都会へと帰るべく、
一斉に立上ったのです。次の集いは空白になる様です。退屈男のメ
ンメンは三十九夜の最終の夜を大団円を飾るべく、趣向をこらす為
来月は休会として、満を持すのでした。果してどんなかたちで現わ
れるのでしょうか。

(完)

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13 横) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B 2	逆エビ責め全裸像(水本)
B 3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B 4	後手十字縛肩口上(梨花)

B 5	足の裏擦り責め(竹野)
B 6	おへソいじめ大写真(関谷)
B 7	剃いだバタフライ(関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B 10	無防備双手吊り(絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛(水本)
B 13	全裸亀甲股間縛(関谷)
B 14	足踏付け二つ折り(大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B 16	手錠にもたえる(竹野)

B 17	尻突立てエビ責め(水本)
B 18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B 20	投げ出した全裸(関谷)
B 21	美しき尻部の露出(絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B 24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B 26	責めに気を失って(関谷)
B 27	さアどうでもして(関谷)
B 28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B 29	投げだされた女体(竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地(東浦)
B 34	すべてをさらけて(関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B 36	クリップ鼻挟み(絹川)
B 37	台上のマゾポーズ(大塚)
B 38	吊られゆく美体(絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B 40	マゾ女性の表情美(東浦)
B 41	喰い込む股間縄(絹川)
B 42	灸責めに悶える(梨花)
B 43	犠牲台の人身御供(大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B 46	手枷足枷大写真(四方)
B 47	鎖に悶える足首美(柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B 50	女囚菱縄さらし(絹川)

妖

異

女

斗

美

八

景

佐藤健児

第三景 徴側・徴武の叛乱

配役 徴側……水野久美子

徴武……星 由里子

蘇瓊華……浅丘ルリ子

馬 蓉……白木 マリ

ちょうど、西暦紀元の頃、北ベトナムは交趾と称して、中国後漢の属国であった。その一部ハノイ県の君長に雒将というものがあり二人の娘を持っていた。姉を徴側、妹を徴武といい、美貌をもって近隣に聞えていたが特

に姉の徴側は、豊艶な肉体の持主で、背丈も高く、その上力強く、心剛に、武勇人なみすぐれて、男もよく敵うものがなかった。

かつて洛陽の朝廷に召されたこともあったが、幾ばくもなくして帰郷して、詩索というもの、ものの妻となったが、気驕って力をたのみ、勝手な振舞が多く、遂には夫詩索をそそのかして、周囲の君長を脅かして貢税をまき上げ漢の商人を打擲してその財貨を奪う等、不穏な行動をなし始めた。交趾の太守蘇定は大いに怒り、詩索を捕えて獄に繋いだ。徴側は危うく捕縛を免れて、父雒将の許に走ったが、

やがて詩索が、牢死したことを聞いて怨み憤り、妹の徴武が妖術をよくするのを頼んで、土民を惑わせ、兵を募り、一夜太守蘇定を襲ってこれを殺し、公然漢に叛旗を翻えした。ベトナムは、もとより独立民族であって、漢の支配を喜ばないものも多かったから、ここにおいて徴側につき従うものも多く、更に九真日南、合浦等の諸族も集まり来ったからその勢力は俄かに強大となり、忽ち漢の守城六十五の城を攻めとって、遂に西暦四十三年自立して交趾女王を称したのである。漢は華南の太守に命じて、四方からこれを伐たしめたが

かえって徴側、徴武に逆撃されて、敗軍を重ねたので大いに驚き、当時随一の名将であった伏波將軍馬援を総大将として、水陸十萬の大軍をつけてこれを追討せしめた。しかし漢の水軍は、水練に長じた徴側手下の土民達の間断なき襲撃に遭って上陸出来ず、馬援自ら率いた陸軍も、山嶮、水沢に阻まれて大軍を動かすことが出来ず、徴側軍のゲリラ戦に悩まされて死傷多く、たまたま、交趾軍を捕捉して会戦すると、風を呼び、雲を起す徴武の妖術に、兵達は恐れをなして敗走する有様で、さしもの馬援もどうすることも出来ない。加えて兵達は馴れない酷暑に苦しみ、糧食も残り少なくなってきたので、今は退却するより外なく、思わぬ不面目に悶々の日を送っていた馬援に一策を献じたものがある。それは彼の妹馬蓉で、彼女は広東太守志段の妻となっていたが、先頃志段が病死したので、南方の事情に詳しい彼女は、夫の代りに部下を率いて、兄の案内役をつとめて陣中にあつたのである。馬援の妹だけあって、彼女は容姿優美の上に、才氣煥発、武術にも長けていたのであるが、この時兄に向つて言うに、

部下は彼女の為に死を惜しまない。従つて正面からの戦いでは、たとえ大軍をもつてしても容易に勝てません。ここは詭計を用いるべきです」

「詭計とは？」

「刺客を送つて、徴側を暗殺させるのです。徴側さえ討つてしまえば、あとは烏合の衆。放つておいても離散します。」

「フム、そんなことが出来れば苦勞はないが、ただでさえ、数多の男女に神のようにかしづかれてゐる彼女、それに彼女自身男も及ばぬ勇婦というのに、たとえ近附けても、一人や二人で討ちようはあるまい。」

「女には女の弱点が分ります、男には敵愾心をかり立てる彼女も、女には心を許ししょう。女の刺客を放つのです」

「まさか、そちがやろうというのではあるまいな。」

「口出しをしました以上、妾も一臂の力は惜しませぬ。しかし、外にみずから刺客を買つて出ている女があるのでございます。」

「なんと、誰じゃ、それは？」

「蘇定様のお娘御、瓊華さま。」

「ほう、蘇定殿にお娘御があつたか。父上の仇を討つといわれるのだな。しかし、どうい

う手段で……？」

「蘇瓊華さまは舞の名手です。その上飛劍の術に巧みの由。それで徴側に舞姫を呼ばせ、蘇瓊華さまを、その中に加え、飛劍で討ちとります。」

「フム、成功しても舞姫は皆殺しになるが」

「それは覚悟の上。妾も兄上様の為とあれば舞姫に加わります。」

馬援は妹を失いたくなかつたが、漢国の危機であるし、蘇瓊華の健気な志を思えば、つけてやらざるを得なかつた。そこで蘇瓊華を呼び出して見ると、年は二十許り。丹花の唇柳の眉。星眼殊に鮮かな、初々しい美姫。馬援は歎息したが、その決心を翻えせぬと知つて馬蓉に命じて徴側暗殺の計画を進めたのである。

やがて馬援の漢軍は、潮の引くが如く退却し、交趾の民は戦勝に酔つた。徴側の城では祝宴が催され、舞姫が招かれた。馬蓉の策は当つたのである。彼女は金で本物の一座を買収し、その中に蘇瓊華及び七人の侍女を加え自分は一座の女主人になりすまして城内に乗り込んだのである。

そうとはつゆ知らぬ徴側は、漢の名將馬援に打ち勝つて得意満面、部下に数日の酒宴を

振るまい、今日しも余興の一つとして、呼び物の舞姫の踊りを見ようというのである。

大広間の正面に坐った彼女は、今日はいつもの武装とは打って変って、目のさめるような綾羅の衣裳に金色のうしかけをまとい、漆黒の頭髮には、翡翠のかんざしをゆるがし、げに竜宮の乙姫もかくやとばかりの美しさ。妹の徴式は少し退って、右側に坐していたが、これは女盛りの姉と違って、まだ二八ばかり。うしかけは外して、上衣は薄桃、下衣は水色のうす絹をピタリと身につけ、黄色の大帯を胸高にキリキリと締め上げている容姿は如何にも清楚だが、さすがに南国の女は早熟とみえて、ムッチリとした両の乳から、腰、腿の張りは、処女らしからぬなまめかしさを漂わしている。

並居る男女は、この美しい姉妹の主の側に待っているだけでも、自然と心浮々する上に、山海の珍味を前にし、酒は泉の如く絶えず、まさに歓楽の至境に陶然としている頃、いよいよ、呼び物の舞踊が行われるのであった。幕が開かれると、目のさめるように美しい舞姫が十数人、袖も軽く舞う姿に拍手は万雷の如くとどろく。これら美少女が何ぞ知らん、漢の刺客であろうとは疑ってみる人も

なかったのである。又座長に扮した馬蓉は許されて徴側の御座近く侍り、説明役に当る。

勿論この女王にとどめを刺すべく、その懐中深く懐剣をかくし持っているのだが、充分に仮装したその風態に、さしもの徴側も、漢女と見破れなかったのは、まさに運の尽きであった。かくて舞が長くなって、一座の注意もやや散漫に流れた頃を見計って、わざと一同の端近くに居た蘇瓊華は、この機逃さじと、神に念じつつ、袂にかくし持った懐剣を左右の手にするや、「エイ」と紅唇をついて出る気合と共に、纖手をふるって、正面の徴側目がけて投げつけたのである。

「アッ！」

まさに驚天動地の一瞬、さしも不世出の女傑徴側も、不意を打たれてこの危襲を交す術もなかったのである。一念こめた瓊華の第一の飛剣はあやまたず、徴側の右乳のあたりにグサリと突きささり、グラリとその身体が前後にゆれる。そして一同が、

「曲者！」

と総立ちになった時には、間一髪をいれぬ第二剣が、又も右の太腿のつけねの辺りをプツリと貫いたからたまらない。

「ウッ」

と苦鳴もろとも前につつ伏す。

素破狼藉者！と舞台に駆け上る交趾兵や、女王を助けに集った部下達にさえぎられて、蘇瓊華もそれ以上は剣を飛ばし得なかったけれど、その時には既に、馬蓉姫が、重傷に苦しむ徴側をとって抑えて、その胸に短剣を擬していたし、大道具方や小道具方に化けていた漢の勇士達が、一斉に抜き連れて、舞姫達をかばうと共に、城外の漢兵達に合図の狼火を挙げたから、不意を打たれた交趾側は、ただうろたえ騒ぐだけで、ろくな抵抗は出来ない。

妹の徴式はこの態を見て、姉を救うのも無駄と見たのか、身をひるがえして、表へ遁れ出る。それを目ざとく見つけた瓊華女は逃さじと、その後を追ひ、舞姫達も彼女に続いたが、やらせじと走り寄るベトナム女軍との間に華やかな戦いを開始した。

一方馬蓉は、端の騒ぎには目もくれず、徴側を組み伏せてその上へのしかかり、声も凛然と、

「賊婦徴側、よく聞け。漢室の恩を忘れて上をあざむき、民をまどわし、秦平の天下を騒がす非行の数々、漢の伏破將軍馬援の妹馬蓉が、天に代って討滅にまいったのじゃ。先

程の舞姫は、汝に討たれた交趾太守蘇定の娘、蘇瓊華。恨の飛剣の鋭さ、思い知ったであろう。もはや逃れぬ所、この上は潔く縛に就くか、あるいは更にこの剣を受けるか、性根をすえて返答しや。」

と呼びかける。しかし微側も豪気な女、思わぬ敗北に無念の齒がみをしながらも

「おのれ、卑怯なる漢の人ばら正々堂々の戦に勝てぬと知って、女子を使つての闇討ちとは末代までの恥さらし。なれど天寵を受けたこの微側に刃向えばたちどころに神罰が下るのを知ってか。討てるものなら討ってみや。」

重傷に屈せず剣ね返そうとする。しかし、悲しいかな、いつもの武装と違って、七重八重に着飾った礼服をまとして、全く自由が利かない上に、武術に秀でた馬容に上になられてはどうしようもない。



それでもその臂力に物を言わせて馬蓉をつきのけ、その刀をもぎとろうと、しばらくは揉み合ったが、二箇所傷による出血で眼くらみ、弱る所を、遂に馬蓉の懐剣を右腹に受けて、七転八倒してもがくばかり。馬蓉はなおも油断なく、微側を部屋の壁に押し伏せると、更に二刀、三刀、ズブリ、ズブリと、その豊満な女体の胸や腹を刺し通したからたまらない。さしも勇婦の微側もぐったりと四肢をのばして、無惨な姿を、城の畳の上へ横たえてしまった。

馬蓉はホッと一息ついてから、白い左手をのばして、微側の珠玉で飾られた髪をつかんでひき起し、その丹花の唇から、真紅の血を流してこりと切れている美しい死顔を眺めて暫く歎息していたが、やがて右手の短刀を、その白いうなじに当て、「エッ」

一声、ズバリと頭を斬り落した。あわれ、ベトナム人民の生き神と奉られた女王微側も二十三才を一期に漢の女将の手で、その首を刎ねられ

てしまったのである。

「敵も味方もよく聞け。交趾の女王徴側を漢の將軍馬援の妹夏蓉が討ちとったり。交趾の者は武器を捨てて降参せよ！」

この名乗りに、漢兵は勝利の歓声を上げ、交趾人はただ茫然自失、馬姫の纖手に掲げられて、眼閉じ、色変じて、従らに長い黒髪のみ妖艶な女主人の死首を見て歎泣するのみであった。

一方妹の徴式は姉を捨てて城外に逃れようとしたが、それは単に死ぬのを恐れたというよりは、自分だけでも生きのびて、更に交趾回復の兵を起そうというのであつたが、それと察した蘇瓊華に追撃されたのである。

もとより城外も、馬援の率いる漢兵がとり囲んでいるから、常人なら逃げる道もないのだが、そこは妖術の使える徴式として、脱出の自信があつたに違いない。しかし、瓊華もそれは百も承知で、なお飛剣を袂の中に残していたのである。

それで今しも呪印を結んで雲を起し、それに紛れて逃げようとする徴式の姿を見て、南無三、やらせじと許り、残った最後の一本の飛剣に全力をこめて、ビュウと投げつけたのである。かなり距離はあつたが、動かぬ的

あるし、ちょうど印を結んで、その方へ全精神を集めていた徴式は、よけも交すことも出来ず短剣はその右背部へ深々と刺さって、

「ア—ッ」

と一声、術破れて徴式は思わず前へ転ぶ。

そこへ飛鳥の如くかけつけた瓊華は、今度は懐剣をふりかざし、

「逆賊徴式、逃しはせぬ。そなた等に討たれた蘇定の娘瓊華の恨の刃、受けてみや。」

と斬りかかる。しかし、徴式も姉に劣らぬ豪の者、傷手に屈せず身を起すと、腰の小刀を引き抜き、「おのれ、女刺客、そなたこそ姉の仇。覚悟しゃ。」

と今は逃亡を捨てて迎え撃つ。民族こそ違え、共に花も恥らう美少女同士が、南国の城楼で、人も交えぬ一騎打を展開したのである。

まだ漢の兵もここまでは到らず、お互いの侍女達は自分達の戦に夢中で、主を気づかう暇はない。

容貌、衣裳ならびに美しい二人の乙女は風に舞う花びらの如く、離れては寄り、寄っては離れ、丁々発止と斬り結ぶ。しかし、年こそ二つ、三つ下でも、流石に徴式の方が腕も上で、戦いにも馴れている。蘇瓊華も数合

してそれと知つたが、父の仇を報ずる一念で捨身に斬り込む。けれども、懐剣を使うには相手の手許に飛び込まねばならないから、それだけ動きも烈しく、華奢な瓊華の方の疲れが目立って来た。と見て、初めは手傷のために、緩漫に見えた徴式が猛然攻撃に移つたのである。畳かけてうつ烈しい太刀先に、腕や肩に薄傷を負いつつ、後へ後へと退る瓊華は、もはや、このままでは勝ち難しと見て、最後の手段、自ら後に倒れざま、懐剣を徴式目掛けて投げつけたのである。その咽喉を狙つた飛剣はわずかに外ずれて、右肩へ刺さつたが、同時に振り下した徴式の烈剣は、いくらか力が弱まったものの、瓊華の左の優肩を二三寸も斬りさげたのである、

かくて共に血まみれとなつた両少女は、今度は烈しい組み打となつたが、非力の上に重傷の瓊華は遂に力つきて、徴式のために馬乗りに組み伏せられてしまった。それでも

「無念、無念、」

と呼ばわりながら、身もだえして抵抗したが勝ち誇る徴式は、相手の両手をおのれの膝下に抑え、前帯にたばさんだ七首を抜いて、瓊華の前にひらめかし、

「美しい顔に似ぬ不敵な女奴、普通ならお

前の勇氣に愛でて、命だけは助けてあげる所だが、今はそうはいかぬ。城を破られ、姉を討たれた恨み、漢人への見せしめに首を貰うから覚悟をおし。」

と襟を引上げて、その頸筋へ斬りつけようとした時である。

徴側の首を提げて城外へ現われた馬蓉が、再び敵味方に向って、

「交趾の叛將徴側の首は、この通り漢軍が討ちとりましたぞ。」

と呼ばわったので、そこは肉親を討たれた悲しさ。思わずギクリとその方を振り返る。その一瞬の隙を狙って、最後の力を振りおこした瓊華は、徴式の背から抜けた短刀が傍に落ちてゐるのを手をのばしてとり上げるなり、

「兇賊！」

と下から突き上げた一刀が、徴式の左下腹をしたたかつき通したからたまらない。

「ム……ッ」

と一時はのけ反ったが気丈な彼女「エーッ」



そのままつき下した一刀は、これ又ふくよかな瓊華の胸元をプツリと貫いたから、

「ウーン」

と虚空をつかんで、一旦ピーンと身体を張ったが、やがてガックリとなると、後はもはやピクピクと手足を動かすばかり。

まさに壮絶の相討ちだが、瓊華の短刀はまだ徴式の下腹につき刺さったままだから、こちらは致命傷ではない。（不覚……）重傷をこらえながら、瓊華の胸から七首を引き抜いた徴式は、

「姉の仇、この女の首だけはとらねば」

と最後の力をふりしぼって、左手で瓊華の黒髪をつかむと、震える右手に握りしめた七首を、瓊華の抜けるように白い頸筋にあてがう。その冷たい刃当りに、まだ息絶えたわけでない瓊華は、無意識ながら斬られまいと顎を引くが、非情の刃は忽ち、滑かな咽喉の皮膚にグサリと斬り込まれた。

「ム……ッ」

力一杯右へ引き廻そうとする徴式の身体も重傷のためにグラグラと左右に揺れ

る。一方、生きながら首を斬られる瓊華も、それが鋸引きのようにジリ斬りにされる苦痛に

「きえっ！」

悲鳴をあげつつ、下肢が一ゆれ、二ゆれとけいれんする。まさに凄艶な滅首図である。

静かに、静かに七首は右へ引廻されて、瓊華のたおやかな細首は遂にフツと胴から斬り離された。同時に徴式もどっと前につつ伏して上半身は瓊華の胴体から噴出する血で真赤になった。

「勝った、憎い仇の首を刎ねた」

その安堵感から、ともすれば混濁の中におちこもうとする意識を懸命に呼び戻して身体を起そうともがきつつ、彼女は左手に掴んだ瓊華の首を掲げようとしたが、重くて持ち上らない。そのうちにバラバラと漢兵が走り寄って来る様子。(自害したいが……)

しかし、もうその力もなかった。

(せめて、仇の首を姉上の霊に……)

彼女はつつ伏しながら、両手で瓊華の首を抱えて目をこらした。つい先程まで凛々しく輝いていた瓊華の美しい顔も、今は化石の如く無表情になって、断末魔の叫びをあげたままの可愛い唇はポカンと開かれ、両眼はま

だ無念そうに半眼を見開いている。

(ああ、わたしも、やがてこのような死首になってしまうのか……)

そう思った時、耳もとで、

「あつ、ここに徴式が……」

「大変、け、瓊華様が……」

と口々にさわぐ漢の女達の声がした。徴式も半ば無意識に身構えようとしたが、もう動くことも出来ない。

「おのれ、瓊華様の仇！」

一人が徴式の髪をつかんでひき起し、倅剣をふり上げたらしかったが、

「待ちゃ」

と止めにかかったのは馬蓉であろう。

「徴式は女ながら敵の大將。出来得れば捕虜にしたいが……」

と傷口の調べにかかったが、三力所に及ぶ

深手は手当の施しようもない。

「さすがは瓊華様、これでは相討ちも同然。

しからは、瓊華様への手向け、徴式もこの場で首刎ねましょう。」

と舞姫達に合図する。二人が左右から、徴式の手をとって引き据え、一人が後に廻って太刀をふりかぶる。

紫電一閃！バサッという鈍い音と共に、赤

い椿の花が落ちるように、徴式の美しい首は地上ならぬ城壁の石畳の上に落ちた。

その黒髪を握って高く掲げた斬手は馬蓉の意を汲んで、

「徴側の妹徴式も、漢の太守蘇定の娘、蘇瓊華が打ち取ったり」

と死者に代って名乗りを上げる。それを聞きながら、馬蓉は、蘇瓊華の首を拾い上げておのれの腿の上にのせ、

「貴女の働きで、徴側、徴式共に首を授け、漢は救われました、どうぞ成仏して下さい」と睨をさすって、両眼を閉じさせてやるのであった。

かくて徴側、徴式の首は、氷詰にされて洛陽に送られ、市に梟された。

蘇瓊華の首級は、逆に交趾の地に葬られたが、その壮烈な孝心に感じてか、土民の祈るものも後を絶たなかったといわれる。

(第三景終り)

……
△お詫び▽今月号に掲載を予定していましたが○心傷たむ遍歴(西条操)○青春悲歌(中康弘通)○宇宙のどこかで(佐治麻造)は誌面の都合で掲載できませんでしたことをお詫びいたします。

本誌既刊号に注文殺到！

既刊号のお申込みは、お早く……

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込

本誌既刊号在庫案内

○本誌の既刊号は、非常な人気で毎日注文が殺倒しておりますので、今まで在庫しておりました分も忽ちのうちに、売切れになってしまふ実情です。只今在庫しておりますものも、残部が極めて僅少です。一旦売切れになりますと絶対に補充がつかまないので、この際欠号はお揃え下さるようお願いいたします。

○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、ご送金次第送本いたします。

○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。昭和29年から30年頃の雑誌の有無につき、よくご照会がりますが、在庫はございません。

○限定版特別号の第一弾から第四

弾まで、全部売切れ、在庫はございません。サディズム特集号も第一集から第四集まで、全部売切れしました。

○「悦虐小説と悦虐写真特集号」の第一集から第四集までは在庫しています。一部定価三〇〇円で

す。第五集のみ売切れしました。○各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

○昭和38年11月号誌上に（38年6月号、7月号、8月号）

○昭和39年1月号誌上に（38年9月号、10月号、11月号、12月号）

（35年9月号、35年6月号）

○39年2月号誌上に（36年3月号4月号、5月号、6月号）

○39年3月号誌上に（36年7月号8月号、9月号、10月号）

○39年4月号誌上に（36年11月号12月号、37年1月号、2月号）

2月号、3月号、4月号）
○39年6月号誌上に（37年3月号6月号、7月号、10月号及び35年7月号）

在庫品及び定価

昭和35年6月号	（定価三〇〇円）
昭和35年7月号	（定価三〇〇円）
昭和35年7月号	（定価三〇〇円）
昭和35年7月号	（定価三〇〇円）
昭和35年8月号	（売切）
昭和35年9月号	（定価三〇〇円）
昭和35年10月号	（売切）
昭和35年11月号	（売切）
昭和35年12月号	（売切）
昭和36年1月号	（売切）
昭和36年2月号	（売切）
昭和36年3月号	（定価一五〇円）
昭和36年4月号	（売切）
昭和36年5月号	（定価一五〇円）
昭和36年6月号	（売切）
昭和36年7月号	（売切）
昭和36年8月号	（売切）
昭和36年9月号	（定価一五〇円）
昭和36年10月号	（売切）
昭和36年11月号	（定価二〇〇円）
昭和36年12月号	（定価二〇〇円）
昭和37年新年号	（定価二〇〇円）
昭和37年2月号	（定価二〇〇円）
昭和37年3月号	（定価二〇〇円）
昭和37年4月号	（売切）
昭和37年5月号	（売切）
昭和37年6月号	（定価二〇〇円）

昭和37年7月号	（定価二〇〇円）
昭和37年9月号	（売切）
昭和37年10月号	（定価二〇〇円）
昭和37年11月号	（売切）
昭和37年12月号	（売切）
昭和38年新年号	（売切）
昭和38年2月号	（売切）
昭和38年3月号	（売切）
昭和38年4月号	（売切）
昭和38年5月号	（売切）
昭和38年6月号	（定価二〇〇円）
昭和38年7月号	（売切）
昭和38年8月号	（売切）
昭和38年9月号	（定価二〇〇円）
昭和38年10月号	（定価二〇〇円）
昭和38年11月号	（定価二五〇円）
昭和38年12月号	（定価二五〇円）
昭和39年1月号	（定価二五〇円）
昭和39年2月号	（定価二五〇円）
昭和39年3月号	（定価二五〇円）
昭和39年4月号	（定価二五〇円）
昭和39年5月号	（定価二五〇円）
昭和39年6月号	（定価二五〇円）
昭和39年7月号	（定価三〇〇円）
悦特第一集	（定価三〇〇円）
悦特第二集	（定価三〇〇円）
悦特第三集	（定価三〇〇円）
悦特第四集	（定価三〇〇円）

○各月号とも在庫が多くありませんので、第二希望品がございましたら、お書き添え願います。



KKグラビヤ悦虐フォト回顧

△昭和38年のベスト12▽

近藤

—

モデル陣の主軸は、やはり、大塚啓子・絹川文代・梨花悠紀子の三人で、これについて華々しい活躍をしたのはムチ撻ち願望の人妻関谷富佐子。中堅ところで相応な作品を見せてくれたのは、愛川悦子・桜井葉子・東浦ひかるに新人遠藤百合子というところ。

自粛々々ということで眼を奪うような作品がグラビヤに現われにくいのも肯けるが、それにしても豊作といえない年で、折角の緊縛もマンネリ化したポーズのために、呼吸をのむところまでには至らなかった。新鮮で意欲的なフォトは乏しく、既に発表されたものと

同種の作品が多かったし、勢い、各モデル嬢の内面的演技というか、表情の変化が勝負どころとなる。肉体のヴォリュームだけでは問題にならない。眼許、口許、全身の隅々にまで行届いた演技が要求されるから、肉体の美しさと優秀な演技力を兼ね備えない者は良いモデルと呼べないであろう。

1月号

梨花。「責め疲れた顔廃美」はグツタリと任せきった女の柔らかかみが美しい。責め疲れたではなく責めに疲れたではないか。「憂囚

の美女」の第4葉が屈辱と羞恥に身悶える美女として佳麗。愁いをたたえた美貌だけに得をしていよう。

絹川。鏡台の前での落花の風情が艶。顔廃的な悪女の媚態。

大塚。「女体馬」がムチムチした弾力を捉えていて面白い。長い黒髪とパンティがよく表情がいかに女畜らしい。「逆エビ」はリアルだが腰の布(スカート)が不似合だ。

関谷。固ぶとりの美肌が好感を呼ぶ。縛しめがキツチリしていて、縦縛りの縄目も猿轡もいい感じ。顔立ちも清潔な情感が漂よい、

髪のはつれた悶悦陶酔の表情は、いかにも鞭撻願望の人妻らしく、ムッチリと丸いヒップが可愛らしい。

2 月号

東浦。「異臭にむせて」がマニアらしい嚴重な嵌口ぶりで、マゾ女の匂いが立こめる。「縄に奪われた素肌の自由」も、肩の辺の厚みや腰の逞しさは格別で、浣腸濁望の下腹部が独特の味をもっている。

関谷。「皮ムチの下で」の第2葉が好演。「逆エビ」「麻の縄目」は引締った美体だけ。

絹川。宙吊りにならない彼女では近代的美貌と美身の均斉の価値しかない。「責めに乱れた表情とポーズ」は体当り演技だが、第1葉の表情が欲しい。

梨花。「エビ縛り」は恋人同志のプレイか。女の素直さが可憐で、殊に第7葉のあぐら姿が好演。浜千代子。和服がよく似合って可憐。

3 月号

関谷。悦虐にひたり、哭くが如く訴える如き表情というところ。

絹川。「胴縛りと首縄」ではすねたような表情が可愛く、「ウエスト縛り」はいかにも苦しげで瞳が悩ましい。

大塚。「黒髪の乱れ」「エビ縛り」は豊かな長髪をつややかな上半身に着せて縛ったもの。パンティが清潔で、プックリ突出た下腹が生々しい。前者の猿轡が印象的。

梨花。セーラー服姿は失敗と思う。「女体荷物」も熱演だが訴えるものが乏しい。

4 月号

梨花。「苦悶にゆがむ美貌」は佳作といえる。「エビ縛り」には悶えが感じられず「鎖と鉄輪」は女奴隷の哀愁程度。「ムチの下」はショウのようで見事。猿轡を噛ませられた表情が美しいし、高手小手に厳しく括り上げられた裸身が哀れにも華やかなムードを醸し出している。

関谷。両手吊りムチ打ちの残酷ムード。大塚。肉に喰入る緊縛がヴォリュームにマッチして、陶酔の喘ぎがリアル。

絹川。彼女とは異質のポーズのようだ。

東浦。厳しい海老縛りで、責手の踏みつけに平伏したあぐら姿が従順。

水本茂美。彼女の「エビ縛り」は、定評あ

るところ、柔らかみのある裸身や変色した手先が印象的。

5 月号

三木・浜田。かって好評を得たSMプレイ。

絹川。鼻孔をふさがれて喘ぐ口へ丸めた布を押込む快よさ。「怨嗟のまなざし」はぐつと妖艶な悪女ぶりで、黒布かゴム布の猿轡が効果的だろう。

大塚。「スローカーブ・ライン」。腰や下腹の厚みに何とも言えぬ親しみがもてる。「水垢り」の古風な荒縄緊縛が案外にスマート。

愛川。「ロープの乳枷」。何気ない表情が乳房自慢を窺わせて面白い。

館典子。洋装と違う味があるが平凡。

梨花。小妖精悠紀子の持味を活かしきっていない憾みが強い。

関谷。タイトルにそぐわない作品だった。

6 月号

絹川。妖艶な悪女に徹すべきではないか。

梨花。「テープとアミ」が変ったアイディ

アだが、その他は役不足。

関谷。「夫人被虐図」には人妻らしい落着きとマゾの恍惚がある。

大塚。「イケニエ」の表情が印象に残る程度。

館。ノーブルな美貌と均斉のとれたヴォリュームを全裸にしていたぶりたい。

三木・浜田。二人の肉体といい、容貌といい、表情といい、ピッタリと呼吸のあったSMプレイ。

水本。悩しく哀愁をたたえた囚われの姿が男心をそそる。極めて女臭いモデルだ。

7 月号

絹川。「諦観と期待」は正に美貌。「手首とくさり」も囚われの嘆きがよく表われている。

梨花。「調理台」はリンチのムードで、彼女のこの種のものでは好演。「鉄枷と鉄鎖」は四這いの女畜ぶりが生々しい。他は平凡。

大塚。「素肌の起伏」外二篇。健康的な肉体美が好ましい、頓に洗練された姿態や厳しい首縄が愉しいムードを醸している。

四方清美。「首枷」は迫力が乏しい。

8 月号

絹川。「革手套」が一応及第で他は平凡。

梨花。猿轡の二葉とも佳作。碁盤責めの表情がやや良くなったし、「第一序曲」も不良少女のような味が面白い。

東浦。「二ツ折の縄目」は淫らな残虐に耐える女の肉体の強情ぶりが愉しい。

大塚。「豊かさの強調」は生々しいアツプ。「蠅蚊責め」は角度の関係で磔柱を背負った女のようにも見える。

桜井。「立木縛り」は抜群のヴォリュームとひなびた持味でやはり傑作といえよう。

9 月号

絹川。「縄による喜び」が彼女らしい情感豊かな作品。他は平凡。

梨花。「浴槽」は些か稚い感じ。「憂囚のまなざし」は、娼婦に売られた娘へのリンチを想わせる。その他は折角の熱演も構図の点で効果半減。

大塚。「捕われの終結」は浴室プレイというところですっきりしている。「調理台」は好演。「脚下の黒髪」も無難な作品。

東浦。引廻しに飲むマゾ女の姿があり、ウエストに締りの乏しいのが彼女らしい。

関谷。あどけない程の若妻ぶりが新鮮。

10 月号

遠藤百合子。被縛志願だけあって、發育しきった23才の女体は量感充分。乳房も大きく腰も逞しい。ポーズに忍従が窺われるが、髪の毛気ないのが不満。

梨花。「顔面に対する汚辱」の虐げられる表情、「青い囚衣」の思い詰めたような表情は流石に美しい。「煙草責め」は恋人同志のプレイの愉しさがある。逆さ吊りは強烈な嗜虐だが、彼女の美貌を活かした整理が欲しい。

絹川。「踏みこむ」の第1葉に屈辱の実感がある。「雁字搦目」はベテランの陶醉媚態が華麗。

大塚。健康的な弾力と喘ぎが好ましい。

愛川。彼女の量感・柔らかみ・哀愁などがよく調和していて、後手の縛しめが首筋の辺に吊り上げられる経過など、いかにも忍従の女ぶりに磨きがかかった感じ。

関谷。人妻の慎ましさとひたむきな被虐願望が如実に示されている。

11 月号

大塚。「荒縄」は素肌に荒縄の感触を楽しむBGの風情で、白の褌が清浄な色気を発散するし、「ゴムの猿轡」は息苦しさの悶えがあつて囚女の哀歎が漂よっている。

絹川。片足吊りの苦悶が残酷。

遠藤。ムクムクと肥えてハチ切れそうな乳、腹、腿が見事だが、髪が粗末で、愛される女としては余りにも野性のままだ。

梨花。「屈従と愉悦」は平凡。

東浦。「ローソク台」が彼女らしい隷従のポーズで馴致された女の哀歎がある。

新人新井マリ子。新鮮で明るい容貌と均斉のとれた肉体が期待を持たせてくれる。

新人五月亜紀子。梨花嬢に似た美女とか。肉体も良さそうだし、適度の媚態と度胸が窺える。梨花嬢を凌ぐかはファイト次第だろう。

12月号

大塚。「黒革フンドシ」は烈しい悦虐ポーズで革褌が面白い。「黒髪のひきまわし」も凌辱的な愉しい作品だが腰巻が悪い。

梨花。高手小手の緊縛と猿轡は、美貌と柔軟な演技力を活かしきった作品といえよう。絹川。脚線美に

定評はあつても四肢だけの被縛フォトでは物足りない。

桜井。「乳房自慢」は凌辱的リンチに曝された善良な女の哀歎があり、嗜虐味を掻立てる乳房の膨らみは第一級品だ。

新人長野良子。ひなびた童顔。ムクムクと脂肪豊かな女体、呆れる程大きく突出た乳房など、特異なモデル。ただ忍従だけでひたむきな意欲がないと桜井嬢ほどにはなれまい。

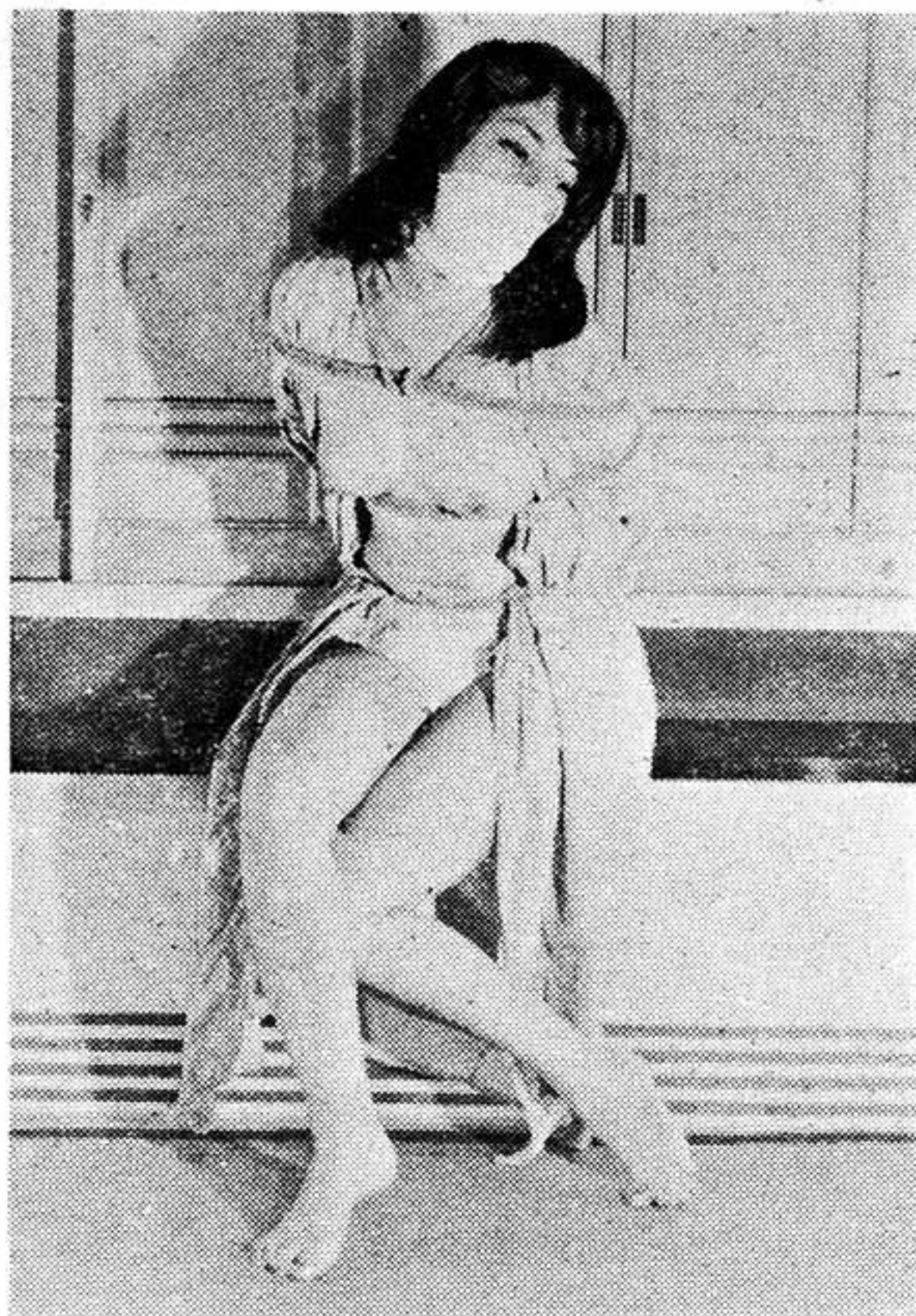
新井。早速本格的猿轡で、厳しく噛ませたところが佳い。明るい容貌で眼許が涼やか。リンチか拷問のポーズだが、胸の膨らみも適度で引締った新鮮な女体だから期待できる。

遠藤。「黒色バンド」は量感が見もの。

昭和38年度のグラビヤは概観したところ低調で、年末に至って登場した新人、遠藤百合子、新井マリ子、五月亜紀子、長野良子が期待を持たせたのが救いだった。旧人達がどれほどの新作を発表しただろうか。これはと思う作品のほとんどは、既にKKの旧号や特集号のグラビアに現われたものと同種の作品だった。その点を度外視して、各モデル別に楽しい作品を挙げてみると、次のようになろう。



関谷富佐子夫人の鼻なぶり



絹川文代の均整のとれた肢態

。愛川悦子

5月号 ロープの乳枷

10月号 縛り過程の分解

。大塚啓子

1月号 女体馬とその調教ぶり

3月号 黒髪の流れと白蛇

4月号 黒髪に泣く緊縛女体

5月号 緊縛のスローカーブ・ライン

水責めと水垢り

下にあえぐ

ゴムの猿轡

12月号 荒縄と黒革フンドシ

。絹川文代

1月号 踏みにじられた落花

2月号 責めに乱れた表情とポーズ

3月号 胴縛りと首縄

ウエスト縛りの連続ポーズ

5月号 猿ぐつわのための鼻なぶり

7月号 柔肌の起伏

全身緊縛の表情

情

豊かさ

の強調

8月号

ぬめ

捕われ

9月号

の終結

10月号

縄目に

あえぐ

美貌の

モデル

11月号

荒縄の

美貌と美しい鼻の翫弄

7月号 諦観とロマンの期待

手首とくさり

8月号 革手套に抱かれて

9月号 縄による弄び

10月号 鼻を足にて踏みにじる

雁字搦目の陶醉境

11月号 片足吊りと吊りの序曲

。桜井葉子

8月号 立木縛りに晒す

12月号 乳房自慢豊満しぼり

。梨花悠紀子

1月号 責め疲れた顔廃美

憂囚の美女鉄鎖にあえぐ

2月号 エビ縛りの連続写真

4月号 苦悶にゆがむ美貌

ムチの下におののく表情

6月号 赤のテープと黒のアミ

7月号 凌辱料理の調理台

鉄枷と鉄鎖

8月号 責めプレイの法悦境地

透明の息苦しさ

9月号 憂囚のまなざし

10月号 顔面に対する汚辱と弄戯

脱がされた青い囚衣

煙草責めの構想

12月号 高手小手、強烈な小手しぼり
猿ぐつわ

。東浦ひかる

2月号 異臭にむせて

縄に奪われた柔肌の自由

4月号 海老責めにあう女体アップ

8月号 ニッ折の縄目

9月号 引廻しのワンカット

11月号 ローソク台となった女体

。関谷富佐子

1月号 苦痛にたえかねた表情

痛烈な一打による全身の表情

3月号 激しい被虐の表情

ムチの雨の下にて

もだえ転がる一瞬の表情

4月号 両手吊りムチ打ちポーズ他

6月号 夫人被虐図

9月号 顔と足の悦虐表情

10月号 ムチ打ちの態勢とその後

。遠藤百合子

10月号 羞らしいの初登場他

11月号 紐にくびれた女体の幻想他

。新井マリ子

12月号 凝視と放心の点景

黒い触手

各モデルについて、新鮮味、迫力、残酷ムード、悦虐美などを検討すると、右の作品数が大巾に整理される。

愛川悦子には旧作を凌ぐ程のものがなく、現実活動していなかったらしいから除外。

大塚啓子は弾力的ヴォリュームが売物だが最近とみに洗練されて来た表情や姿態が愉しく、その面での進境が認められる。

絹川文代に鮮烈な苛責を望むのは無理かも知れない。むしろ妖艶な美貌を活かした悦虐陶醉の表情の熟演を求めるべきだろうか。

桜井葉子の立木縛りや乳房縛りは彼女の良さを充分に擲んでいるが、旧作と同種で、特に挙げるべき新作がない。

梨花悠紀子はトップクラスの活躍をしたようだが、やはり新作は少ない。よく撓う肢体を活かしたアクロ的な嗜虐、吊り願望の忍耐力を買った苛酷な拷問やリンチが愉しいのだが、さらに悦虐性を発揮した恋人同志のプレイムードの明るさも独特のものがある。

東浦ひかるにはスマートさが乏しい。裸身も均齊のとれた肉体というには程遠く、太い

胴や厚い腹部が彼女の特徴でもあろう。そして隷属を歓ぶ容貌が哀愁をたたえて愉しい。

関谷富佐子は人妻らしく安定した下半身を誇っているが、ムチ打ちに恍惚たる表情は流石にマニアらしい。

私なりに選んだベスト12は、次のようなものだった。

エビ縛りの連続写真(梨花) 2月号

黒髪の乱れと白蛇(大塚) 3月号

猿ぐつわのための鼻なぶり(絹川) 5月号

憂囚のまなざし(梨花) 9月号

顔面に対する弄戯と汚辱、煙草責めの構想(梨花) 10月号

ゴムの猿轡(大塚)、ローソク台となった女体(東浦) 11月号

ムチ打ちに喘ぐ若妻(関谷) 1・3・6・

9・10月号

新鮮なヴォリュームの羞らしい(遠藤) 10・

11月号

凝視と放心の新星、黒い触手(新井) 12月号

以上で、私の本誌グラビヤ悦虐フォト、昭和38年度のベスト12の回顧を終る。私なりの迷評を何とぞ寛恕されたい。

代理部分讓品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円

安原さゆり 略号「よみ」	妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子 略号「にあ」	妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子 略号「にこ」	妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子 略号「まさ」	妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子 略号「ぬろ」	妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子 略号「にと」	分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子 略号「にて」	分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

遠藤百合子 略号「ゆは」	全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子 略号「ゆは」	鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺禪縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つつた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

踊り子緊縛 絹川文代三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代一組 略号「りこ」	股間縛法悦境 絹川文代三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代一組 略号「ぬこ」	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子一組 略号「やり」	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「うる」	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「うら」	後手吊り足挙縛り 関谷富佐子一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子一組 略号「せや」	夫人の表情 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「はん」	バンド責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「はこ」	バンド開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美一組 略号「みす」	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美一組 略号「えひ」	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美一組 略号「えひ」	狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」 愛川悦子一組 略号「ねい」
六尺襷開股 細川アヤ子三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子一組 略号「ふは」	変形六尺襷 細川アヤ子三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子一組 略号「ふい」	相撲襷締め込む 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「すい」	黒襷の女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「くま」	黒襷の女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「しろ」	白晒六尺襷 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「しは」	白晒六尺襷 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「しは」	〇フエチ資料の部〇	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子一組 略号「むら」	足挙開股責 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子一組 略号「あけ」	猪吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子一組 略号「いの」	責め衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 大塚啓子一組 略号「せめ」
六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「ろい」	六尺襷の女性像 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子一組 略号「くろ」	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子一組 略号「いろ」	ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 梨花悠紀子一組 略号「こま」	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「ゆす」	月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子一組 略号「すま」	相撲襷着用 大手札十一枚一組 略号「一〇〇円」 大塚啓子一組 略号「すま」	股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「とし」	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「とひ」	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「はと」	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「はそ」	バンド見せ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「はぬ」
白フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子一組 略号「ふん」	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子一組 略号「くふ」	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「こみ」	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「こは」	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「こあ」	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おい」	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おは」	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おか」	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おた」	パリスSSバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おこ」	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おし」	サカエバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる一組 略号「おえ」

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高手小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上ののびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	脐そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しぼり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高手小手(絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ(東浦)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

読者通信



奇ク編集部の皆様毎月貴重な文献誌を世に送っていただき、ありがとうございます。私は石川県に住んでいる二十四才のS型の一青年です。今までS・M趣味者はどうしても変な目で見られがちでしたが現在ではごく普通ではないでしょう。映画にしても全くS・Mブームですね。国際的にS・M趣味者はふえているのではないかと思います。「悪徳の栄え」「サディスト」「悲しい奴」「ショック」「マドモアゼル」の物語など日本でも「独立グラマー部隊」「白昼夢」などS・M映画は花ざかりと言う訳けです。実に楽しい事です。それだけに世論はS・M作品を求めているのでしょうか。これら映画の縛りシーン集を一冊の本として発行して下さい。又石川県又は近隣のM・女性の方私と御交際していただけませんか。そし

て互いに心ゆくまでプレーしましょう。貴女のお望みの責めをして上げます。縛り、ムチ打ち、浣腸、その他いろいろの責めをしましょう。貴女の御便りを御待ちしています。小生車がありますのでどこへでもとんで行きます。M・女性出現を待ちつつ。(石川県鹿島郡SADO生V)

裸になって、浣腸プレイでもすれば、汗がポタポタ落ちる季節となってきました。奇クの浣腸ファンの方々も、益々御盛栄の御様子、大変うれしい限りです。私も浣腸ファンの一人です。いつも奇クを読み、一人で、浣腸プレイを楽しんでおりますが、当然のことながら、最近では、誰か、相手の人がほしくなりました。時々「読者通信」に呼びかけている方がみえます。住所が遠かったり、ついつい返事を出しそなかったり

して、チャンスを得ることが、できませんでした。名古屋にお住いの、浣腸に興味を、お持ちの女の方からのお便りを、お待ちしております。当方二十三才。プレイがだめなら、お話し、お手紙等の交換でもけっこうです。私が浣腸に興味を持ちはじめたのは、十五才くらいの時からですから、もう八年ほど、浣腸のお世話になっているわけです。この間には、自分で考え出したものや、奇クより得た知識などで、いろいろ浣腸をやってきましたが、まだまだといったところ。いろいろ教えていただき、お互に浣腸プレイをすることができたらと考えると、ごくごくしてまいります。私は、自分のこのような性癖が外部に知れるのを、非常に恐れます。ですから、私は、自分の秘密を守ってほしいと思うと同時に、私にお手紙を下さる方の秘密は絶対にお守りいたします。なお、私は、経済的には、まったくの無能者です。もし、手紙を出してみようと思われる方は、この通信がのった奇クの発売日より、十五日以内に次の所に着くようにお手紙下さい。返事は、必ずさしあげます。(名古屋東郵便局留八伊藤善一V)

福岡市の田中弘氏が提供された美佐子夫人の「臨月腹妊婦フォト」を全部注文して、お送り下さったのが早速届きました。六月号の読者通信欄を見て、期待に胸をワクワクさせていたのですが、七月号に広告ののり、直ちに申し込んだわけ。モデルと提供者ご夫妻、および編集部にも厚く感謝する次第です。分譲品(にち)……(に)の十一組、全三十二葉の堂々たる偉容に接して、流石に圧倒される思いです。美しくみごとに孕んで大きく膨れ上った腹部を裸出している臨月の妊婦の自然なポーズの数々が、様々の角度から楽しめます。すばらしいコレクションです。惜しむらくは、分譲品だけとしてでなく、口絵グラビアを飾ることはできないものか、いろいろ制約はありましようが、今後実現してもらいたいと思います。とにかく、今度のは、貴重な傑作がそろっているのに満足しました。とりあえず一言、お礼のことばだけ認めて出します。美佐子夫人に感謝します。(瀬沼四郎)

すっかり御無沙汰致しました。編集部の皆様、女斗美、生首ファ

ンの皆様お元気ですか？ 奇ク七月号はしばらく不作為をかっていたわたくしどもにとってこよいの贈物で、その充実した内容は一週間も楽しい興奮を続けさせてくれました。ことに佐藤様の「妖異女斗美八景」は素晴らしく、かつ毎月連載されることはほんとにうれしいことで、もう今から八月号が待ちどおしくなりません。ただまた欲張ったことを申しますが、こういう読物の挿絵がまだ物足りない気がします。「十三人の女死

刑囚」にしてもそうです。その一方「奇クサロン」の方にあります前川様の「女の首級」などは絵としてとてもよいのですが、こちらには何の説明もないので、また興味が半減します。両方がマッチしたらどんなに素晴らしいことかと思ふのですが、そういう企画を考えていただけませんかでしょうか。かつての奇クに「百合子の冒険」という絵物語があり、ほんとに楽しかったことを覚えています。わたくしもその形式で「女曾我」を

投稿したのですが、これは文も絵もまずく採用されなかったので残念です。そこでたとえば「妖異女斗美八景」などの挿絵を前川様にお願ひしてふんだんに入れていただくというようなことは出来ないのでしょうか？ 奇ク発展のためにも編集部の皆様の英断をお願いするとともに、ファンの皆様もわたくしの意見をどうぞ御支援下さいませ。(東京都八川上米子)

愛読しはじめて、もう三年になります。女性の縛られた姿にあこがれて自分も実地に縛りたいと常に思ふばかり、まだ一度も機会を得ておりません。一人空想したり写真を集めたりするのみです。一口に縛るといってもひどい責め等好みません。最近の奇クのグラビアに道具例えば柱や椅子棒等を使つた縛りが少い様ですがそう言つた縛り等大好きです。あくまで縛られた女性の美を追求したいと思つて居ります。奇ク愛読の方で縛ら

最新版分譲品

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川 文代 略号(らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろめ)

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

新作マゾ・フォト

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まの)

背中に馬乗りになった若い女性の甘美な人間馬の調教ぶり

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まわ)

あお向けになった男の口へ差し込まれる足の指と踵。

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(また)

ふくよかで真白な太股で顔面を挟みつけられるソフト責め。

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まひ)

後手に縛り上げられた男の縄尻は若い女性の手に握られている。

新モデルにて

撮影した分譲品

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まな)

立った女の足の裏の下には、男の顔が踏みにじられていた。

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まは)

ポリウムのある二本の足が男の頸を挟んで肩車に興ずる女性。

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まて)

高手小手に縛られた男を思いのままにいたぶる面白さ。

首を太股に絞めあげる

大手札三枚一組 五〇〇円

略号(まや)

冷ややかに上から見おろされながら太股で首を締められる。

れる事に興味を持っている女性の方、お便り下さい。誠実な文通交際をしたいと思います。僕は二十才の男性です。年令等問わず思い切ったお便りをお待ちします。(北九州市小倉区木町八藤井正志)

過日来、悪書追放運動が姦しいが、若しそれが主張されている如く本当に言論出版の統制や表現の自由の弾圧を意味せずして、真に「児童保護」の目的に在りとするならば、次の事項を提案し度い。

要するに、「悪書」が児童の目に付き難い又は手に入り難い措置を講ずれば足りる。(「絶対に」ということは不可能だろう。禁酒、禁煙その他の凡ゆる事象を見よ)イ、未成年者には販売を禁ずる。ロ、店舗の中に成年コーナーを設ける。この点少しく説明を加えろと、店の奥まった人目に付かぬ所に「悪書」を並べ、「未成年者は御遠慮下さい」と書いて置けば良い。(以上の二点に付ては、場合によっては、条例を以て、規定し罰則を設けることも已むを得ない)ハ、その代り—此処が大事なところであるが—近代文明国家の大原則である「表現の自由」は飽く迄も尊重し、刑法のわいせつに該当する惧れのない限り、表現の自由に対する愚劣な干渉は一切止めて、これを世人の良識と自然の淘汰に俟つ。(出版側も、「乳房や臀部は露出しない」などと、末梢的な馬鹿げた「自粛」は止める)以上のように措置することによっても、多少の弊害は残るだろう。然しそれは、進歩のための「必要悪」であって、表現の自由そのものに対する戦前まがいのおかしな真似をするより、大きな観点、歴史の流れからすれば遙かに

賢明である。この問題は、何時までも愚図々々、モヤモヤさせていないで、この辺でキツパリ決断す可き時機である。(東京八寺井生)

横溝とみ子様私、二十六才の独身男性ですがプレイとしてのマゾヒズムに大変興味を持っています。三年程前、都内のある一流私大を卒業して現在の勤務先は銀座にあります。未だ一度もプレイの経験はございませんが貴女様と紳士的なおつき合いが出来れば一文をしたため次第です。背丈は五尺五寸位ですが体重はほぼ貴女様と同じ位と思います。自慢にはありませんが腕力には全く自信がありません。先日勤め先の女子と腕相撲を冗談まじりに試みたところ負けてしまったのには衆目の手前さすがに恥かしく思いました。併し、現在私の身のまわりの人達、親、兄弟をはじめとして誰も私の性向を知る人はいない筈です。どうしてもプレイをとはいけません。どこかの喫茶店でお話しを交わすだけで結構です。お許し下されば読者欄に御返事下さい。或いはその時、その後の私の行動を御指示下されば幸いです。(東

京八青井只雄

貴誌益々御繁栄の事お喜び申し上げます。貴誌「奇ク」誌旧号は稀少価値から日に高騰し入手は一日と困難になって来ました。誌友の皆さんも非常に御苦心なさっておられる事と思います。そこで私は一つの方法を考えました。貴重な文献として保存なさりたい方は別として、自分の好みの記事だけ読み度い人、自分の好みの物だけスクラップにでも貼りたい人は、相当に不要の部分が出ると思っています。それ等の交換が出来たら、もう古い「奇ク」は読めないとあきらめていた人達にも希望が持てると思います。私の場合複刊一号——複刊五十二号（昭34・12月）まで揃っております。私の好みは浣腸ですので、それ以外の記事なら、どれでも交換に応じられます。是非お便り下さい。（静岡県清水局留置八春野雪男）

七月号は最近になく気に入りました。新宮氏の生首フォト、凄艶そのもので決定版といえるものでしょう。水野氏の生首フォトの表情も絶品です。モデル（夫人？）の良さがこの写真の成功の原因で

しょうが、演技の経験のある方のようですね。「十三人の死刑囚」も完結のようです、長らく御苦労様でした。限定出版を期待しております。「妖異女斗美八景」筆者は同好の士の感じがしますが、小生、アマゾンの女軍を日本に翻案して松本清張ばりの推理女斗小説と思つて腹案を練っていたところで、佐藤氏に先を越されたようです。今後に大いに期待しております。但挿絵にもう一工夫をお願いします。（中屋敷真）

横溝様の文、拝見いたしました。大いに興味を感じ、私でよろしかったら貴女の御希望にそいたと思います。小生四十五キロ足らず、背丈一、五八米ですので、小柄な男です。マゾといつても初歩ですので、貴女の御気に召すか解りませんが一度御会いして御話しをして見たいと思います。御気に召されれば私の全身を捧げてくあります。貴女の都合の良い時、場所を知らせて戴ければ幸いです。私の所は編集部に送って戴ければ転送して貰う様御願ひしてあります。（埼玉八安沢生）

吉村英子様へ。御便り嬉しく拝

見致しました。今頃は淡いブルーの愛用のオシメカバーをピッチリと嵌めて楽しんで居られる事と存じます。オシメの魅力は柔いサッパリした感触、ピッチリした密着感のあるオシメカバー、それに加えて派手さがあつたら一層楽しいものです。現在では表地にヌメヌメした柔いゴム布のオシメカバーは化学繊維の進出に依つて、全く姿を消した事は淋しい限りです。以前はオシメカバーといえば、ゴム布オンリーだったのですから楽しいものでした。私は現在、ニシキゴム（オレンジ総ゴム）。ダンロップゴム（アメ色総ゴム）。ネル地に白ゴム。淡いブルーナイロン地にビニール布。ネル地に白ゴムの巻オシメ（腰巻大）のカバーを持つております。それぞれに使用感が異なり楽しいものです。矢張り最高は総ゴム製のカバーです。体にもピッタリとしてカン腸した後でも汚れる事がなく素晴らしいものです。若しプレーが出来たら、どんなにか楽しい事かと考へるのです。この中の吉村様のお好みのカバーで、昔ながらのなつかしいオシメ柄雪花模様のおシメを丁字型にカバーにセットして、そうしてお好きなカン腸を、イチ

最近撮影（未発表）

新作Mフォト

一、女の尻の下敷

大手札印画紙焼付二枚一組
略号（まぬ） 五〇〇円

二、女の足に踏まれる

大手札印画紙焼付二枚一組
略号（まあ） 五〇〇円

三、女の股責め

大手札印画紙 二枚一組
略号（ませ） 五〇〇円

四、足舐めの奉仕

大手札印画紙 二枚一組
略号（まし） 五〇〇円

以上のマゾフォトは、いずれも分譲用としてではなく、プレイの一部として最近撮影したものの中の一です。Mフォト撮影の再開を望まれる方も多いので、一応打診的に分譲品としました。従つて以上は全部未発表のものです。

ジクの30g入でも「ドナン」を50ccでも、グリセリンの原液をカン腸管でオシメカバーをピッチリと嵌めて見度い。刻々とつのもて来る便意に吉村様はオシメカバー姿で美しく悶える事でしよう。ピッチリ嵌められたオシメカバーのゴムが悶える度にキュウキュウとき

しむ。やがて……。ゴムのオシメカバーは甘酸パイ香りを漂わせ。使い終わった浣腸管は冷たく光っている。嘴管には一、二滴の液が残っている。何という私には楽しくスバラしい光景でしようか。こんな想像をするとベッドで赤ん坊の様に一人に両脚を支えられ大きなオシメをしき込まれて一人が液を一杯に吸引したカン腸管を見せつける様に手にして、「スグに終わりますかネ」といいながら施術された時の事を病室の前の道を楽しく語り合って通り行く若い女性の声を切ない思いで、今このベッドの上では羞恥と苦痛におのっている者もあるのになんと無情なという気持でした。雨降りともなれば大きな派手な柄のオシメが所はばかりに窓際に干されヌメヌメしたゴムのオシメカバーは「のしイカ」の様に干物竿にかけられていた羞恥しい様なくすぐったい様な気持でベッドに呻吟していた時の事がつい昨日の出来事の様によみがえって来ます。今にして思えば楽しい思い出かも知れません。カン腸の多管注入を致す事は望みませんが、私には少量でも強い刺激の方が楽しいのです。「ドナン」は確かに強いですネ。私も

グリセリン程もたえ切れません。然し注入してジーンと熱い様な疼痛感はや楽しいです。こうしたカン腸の持つ挿入、注入、強い腸の刺激、これをたえる気持（排泄抑制感）は魅力的です。そうして汚れや失敗を防ぐためにピッチリと嵌めるオシメとオシメカバー。苦痛と羞恥は、矢張りカン腸とオシメの持つ魅力ではないかと存じます。如何ですか……。グリセリン坐薬は最近殆ど見る事は出来ませんネ、名古屋市内では、どこにあるか残念ながら知りません。不悪らず。でも入手は出来る可能性はあります。出来ましたら又お知らせ致します。何とか吉村様と文通だけでも出来ると楽しいと思います。こんな方法は如何でしょう。地方紙たる中日紙に呼びかけますから、又清水郵便局止にても連絡下さい。そうして楽しく語り合う機会を与えて下さい。キツトスバラしい事と存じます。私はあくまでフェアにて交遊する事を誓ってお便りを心から待っております。（赤井茂）

「今月の新版分譲品」

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号（はす）

鼻責めフアンの大写真。鼻の穴が真上を向くほどおもしろい。奥深くさし込んだり、掃除をした。果ては二本の棒を穴に突っ込んで、鼻の奥深くさし込んだり、掃除をした。鼻の奥深くさし込んだり、掃除をした。鼻の奥深くさし込んだり、掃除をした。

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号（へな）

定評のある素晴しくボリウムの。豊かにふくらんだ腹部がわいた。肉の正面むいて縛られた長野。この肉の正面むいて縛られた長野。この肉の正面むいて縛られた長野。

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号（ちの）

フンドシ一本の真白な裸身を荒む。さらす凄惨なポーズ。傍には血にまみれた脇差が、ころがっている。腹切りに加えて、切腹のあとの絶命屍体のポーズを描いた。

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号（ちた）

色が白で伸びやかな肢体の絹川。代が自ら下腹を小刀によって、きりきりと切った。さばいてゆく様子を血紅を使用して、思いのままする。あえかに表情した切腹姿。

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号（むね）

オムツマニヤの待望。オムツを着るには、きつとマニヤの。この写真には、きつとマニヤの。オムツを着るには、きつとマニヤの。オムツを着るには、きつとマニヤの。

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦 ひとる 略号（つん）

又々、バンドマニヤの方々に。着用する魅力あふれるフォト。に。着る模様に、開股の部分には。よって替わった。当ゴムの部分には。きり焦点をあてました。

マニヤ全裸緊縛

り。いたるところ首の山ではありませんが、欲張って勝手なことをいわせてもらえば、新宮様の生首は、竹に突き刺した形として、血汐がその竹をつたわって流れる様にしてほしかった。獄門の方も唇のはしと斬口に血のりがついていた方が面白いと思います。奇クサロンの方は印刷が不鮮明なのが残念ですが、剣持様の首のころがったところがよくできています。奥様に支払うマネーが心配とのことですが、これは教育次第で逆に奥様から出る様になると思います。水野様の生首をぶら下げたシーンもすばらしく、今度は首なし死体の方も見せていただきたいのですが如何でしょう。前川様の作品は今回は上出来とは言えません。首が小さくてはつきりしないし、血汐も少なすぎます。今まさに首が飛んだ瞬間だとかフォトでは絶対に出来ないシーンを望みます。本文の方でも佐藤様の「女斗美八景」で、首がふたつころがるし「三十九夜」では三十八個の生首が並びます。そのうち信長の侍女皆殺しや荒木一族への死刑。さては尼港事件、通州事件の虐殺など、どなたか書いてくれませんか。親友佐出氏の

「十三人」に加え、私の「映画と処刑シーン」も末席を汚すことができたのは、この上ない喜びで、しかも来月予告によれば「小説と死刑マニヤ」も採用になったようです。これに勢を得て今後も愚文駄作を書きつづけるつもりです。読者通信の増頁も嬉しいことのひとつです。こんなに編集者と読者とが近づいているものは、どんな雑誌にもみられません。奇クサロンと共に永続を望みます。いずれにせよ、値上げしただけのことはありました。今後も定価に恥じないだけのものを望みます。(黒田寿)

花と蛇特集号は羞恥責マニヤの渴をいやすに十分の内容でした。繰り返し拝見しております。口絵写真につきましてちょっと感じました点を申し上げます。浣腸写真いずれもみごとな出来栄ですが欲を申しますと、全裸よりは着衣のまま下半身だけ露出した方が羞恥感が強いと思います。イルリガートル、ガラス製浣腸器、エネマシリンジと散乱しておりますが、これはイルリガートルかエネマシリンジか、どちらか一つに整理した方が、すっきりしないでしょう

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(いな)
特に彼女の希望によって口絵には掲載しませんでした。分譲フオトとして全裸緊縛ポーズをあらたにいます。若々しく伸々とした美しい肢体に蛇のようにまといつい布紐。新しいモデルのフオト一組をコレクションの一端に。

か。そしてその代りに前景に便器でも置いて頂けたら———と思います。なお腰の下にビニールが敷いてありますと、もっと実感が出るのではないのでしょうか。オシメカバーの写真も欲しかったのですが、これはマニヤのわがままでしょう。(吉村英子)

奇クを愛読してから十数年になります。その間、じっとしていた訳ではありません。告白文を載せて頂いたり、読者通信もしたり、又、数々の経験も味う事が出来ましたが、何だか物足りなく一時遠ざかりました。けれど毎月毎月の奇クは、私の心のより所として欠かさず、愛読しております。今度又々、お仲間入りを願う私は、矢張り終生拭い切れない自分の性格に負けたからです。私の宿命として、それに正直になろうと思ったからです。前の名前を使わずに、

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号(くし)

目かくしをされ、全裸の柔肌に厳しく捕縄をかけられた女囚が大刀一閃、むごたらしく斬首されようとする緊迫した場面。

東雪枝としてフレッシュな気持ちでやり直しを願う私の希望を叶えて下さい。私はサジスチンである事をみとめます。又、レスビアン的傾向の強い女である事をみとめます。但し、レスビアンとしての私は、男達に命令する様な、いやらしい下品な事は好みません。只、相手の方をしる事には強い魅力を感じます。ギューギューと、しり上げて責めて、そしてその後は、狂ほしい程に愛撫して上げ度いのです。誰か私とその様なプレイをたのしんで下さる方はいらっしゃいませんか。お待ちします。さて、男の方は、その反対です。奴隷として、犬として馬か豚として、極端のさげすみたのです。私の好みの男はムチ打ち、舌奉仕、しぼり、そして私の大きなお臀の下の小さな便器となつて喜びに、あえぐあさましい豚になり下れる男です。かなり残

忍な行為に（と言っても、不具にする様な事は控えます）たえられ男こそ、私の理想です。絶対服従——これこそ、女王に対する奴隷の信条です。口では忠誠、忍耐を誓い乍ら、意外に弱音を上げる男の多い事に不満を覚えます。私の意にそぐわない様な男は初めから私の前に現われなければいいのにと、常に腹立たしさを感ずるので、自信のある男は、私に呼びかける事を許します。秘密厳守。社会生活には一切ノータッチ。私は約束を大切にしそして守ります。

（東京八東雪枝）

吉村英子さんお手紙有難う。期待に胸躍らせて封を切りましたがご連絡先（局止めでも結構ですけど）の記載がなく少し失望しました。ご信用頂けなければ止むを得ませんけど常に第三者を意識した中途半端なお便りを書くのは心が疲れますし、紙上でご紹介出来ない資料もありますから、できたらこの一方交通から抜け出したいものです。貴女からの意志表示がない限り、文通以外何物も求めないことを誓いますから。お手紙にありましたプレイ本当に素晴らしいですね。でも実際に行ったら、グ

リセリンで、三十分のレコードをもつ貴女には勝てそうもないし、第一恥しい。また、五月号のピンポン球のアイデアも良かった。でも「花と蛇」のSムードは全然共感できませんが貴女も本誌の主流派ですか？ それから貴女のお好きらしいオムツも僕には少し理解し難いところですよ。（誌友に、一人猛烈なオムツマニアがいますけど）終りに貴女にも、そして、これにつき合って頂いた他のマニアの方々にも、興味のあるものをご紹介しましょう。昭和十年英国Helthy-life 社版の「The Constitution」から。これは全編症例も多く、どこも面白いものですが、特に興味深いP.160-168の間をピックアップしましょう。「直腸便秘の処置、直腸便秘はHurst氏の分類で、骨盤部の圧迫感、直腸中の異物感、肛門疼痛、裏急後重を特徴とする。然し便通困難の症候は認められず、直腸又は腔内診で、直腸に糞便のつまっていることが知られる。（中略）肛門坐薬によって毎日便通のつくことが多し。（中略）尚エボナイト製の円錐型が作られている。種々口径の異なったものがありこれを肛門に挿し入れ、機械的反射により便通を

はかるわけである。また人によっては一種の鉗子を推せんしている。これは患者の肛門へ容易に挿入でき、肛門をひろげながら括約筋をマッサージするのである。この型の便秘に対しては浣腸を行えば極めて好ましい結果を得るであろう。（以下長々と浣腸の説明が続きますが長いので略します）」いかがですか。一寸めずらしいでしよう。でも残念乍らこの円錐型や鉗子は日本では発売されていないと思われまふ。（小林薫）

毎号楽しく又大きな期待を持って愛読しております。いろいろと制約の多い中で今日迄嶮しい荆の道を十有余年、一部読者の批判を受けながら貴重な風俗文献誌として良識ある編集に精進されて来られた努力に、一ファンとして感謝し敬意を表します。公開誌である以上、面白くなかったという一部の声は肯定するとしても、長い将来への発展のための良識ある文献誌としてのあり方を考える時、半歩後退する事も仕方ないと私は思います。私自身、昭和二十四、五年頃（現在の会社へ就職する以前からでしたから）から殆んど毎号講読しておりますが、昭和二十

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号（ひと）

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号（ひと）

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になって演ずるそれであるという事は、切腹マニヤの若き女性、例えば信太蓉子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によって裏づけられていきます。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまポーズによって柔肌を白刃によって切りさばいてゆく。

八、九年頃の内容から考えて幾分物足りない感じは否定しません。でも、梨花さん、関谷夫人の健斗には、全く頭が下ります。小生も通信欄に投書される諸兄の様に文才に恵まれておれば、毎号の内容について意見や希望も述べたいの

ですが、活字になると思うと気おくれがしてしまって書けません。マゾ女性の呼びかけにも、イザとなるとナカナカペンが進まず、十年余り愛読していながら何の意見も希望も具申せず申訳けなく思っております。甚だ潜越なお願いで申訳けないのですが六月号誌上の森田峰子さんの呼びかけに、一生一代の勇気を出してペンを取りま

女性禪マニヤ(愛読者)

禪美フオト 分譲

フンドシ姿の魅力

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふの)

フンドシ姿の羞らい

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふへ)

フンドシの前後左右

大手札四枚一組 四〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふな)

フンドシの変った姿

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(ふに)

したがるように筆が進みません。若し通信欄の片隅でも拝借出来ましたら幸いです。それから元来私はマゾ的な性向ではありませんが別紙にも書きました様に「アブ」の世界を理解されない悩みから、グラビアで満たされぬ思いを慰めている中に、自縛に対してもその緊縛感にいつしか興味をひかれ、美しい女性に縛られてみたいという願望を抱く様になりましたが、若しよければ何とか御配慮願えませんかでしょうか。でも、誌上に公開される事は何としてもお許し戴きたく思います。しかし、小生至って短軀にて身長一五五種、体重は反対に六三種と少々肥満型です。(大阪府吹田市八家原生)

私は小さい時から、異性の方がいいじめられたい、ひどい目にあわせられたいという気持を抱いていました。それが年頃のところから次第にひどくなり、私の春のめざめも、お恥しいことながら、男の方から乱暴されるという空想から起ってまいりました。小説や映画でも、ヒロインが悲運に泣くとか、ひどい目にあうとかいった場面が特に目について仕方ありませんでした。私は精神的でも肉体的

でもどちらでもよいのです。縄できつく縛られて痛くされたり、或はムチで叩かれてころげまわるといったことを考えただけでも身体中が熱くなります。私、男の方から口で罵られたり邪慳に扱われたりすること、私にとっては快いのです。学校を出てから、ずっと勤めに出ていますが、平常の私からは誰もこの私の心の中の秘密をかぎとる者はありません。でも、化粧室に一人いるときや、トイレから出てきて誰もいないときなど誰か若い男の人が自分に襲いかかって来ないか、という恐怖と期待が胸をおののかせます。仕事のことで私の席のうしろを男の方が通ったりしたときなども、私はそんな人知れない戦慄を感じます。中学生のとき父をなくし、今は母と二人きりで、父の残したやや大きな家に住み、もう五年も或る商社会社に勤めております。父の退職金や保険金を債券にしているのも月々の生活には、困りませんが、私はやはり多くの人達に混って暮らすスリルや通勤途上の楽しさから勤めをすてきれないでいます。母は、花嫁修業にお花やお茶を習うため、勤めを止めるようすすめますが、私はまだ二、三年はこのま

月経帯(バン)フオト

モデル 大塚 啓子

○ダイアナ・デラックス・バンド(黒色)

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たい)

○ローズ・パリス・ソフト・ネット・バンド

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たね)

○ローズ・パリス・バンド

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たる)

○ローズ・パリス・バンド・ブラウ

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たう)

○着脱・ダイアナ・デラックス・バンド(黒)

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たか)

○鑑賞・ダイアナ・デラックス・バンド(黒)

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(たあ)

ま勤めていたいと思っています。二年前にお昼休みの散歩の序でに寄った書店ではからずも貴誌をみつけ、それ以来、すっかりファンになってしまいました。母は私の生活には干渉しませんし、鍵のかかる私用の部屋がありますので、もう二十何冊からの貴誌が私のマスコットとして机上を飾っております。若し私に恋人ができて、この私の愛読書を見たら、どんなに驚くことでしょうか。或は私に似合わしい人がいつかは現れるでしょうか。アルミサッシの新築ビルの四階で、スチールの机に向って事務をとっている私ですが、心はうす汚い公園のベンチで浮浪者から乱暴されている自分を空想しているのです。最近の小説では「花と蛇」が素晴しかったです。自分がまるで、美津子になった気持ちです。それにグラビアの肌もへこむ位にきつく縄を掛けられた女の人の写真は、身につまされます。やや、やせ気味の梨花さんの身体が縄で一層細くなったように思われる写真なんか、よいと思います。あんなに痛くされたら、どんなにだろうかと想像します。私とでもそんな勇氣はないんですけど、若し縛られて写真をとられたとした

ら、最高じゃないかと考えたりしています。（大阪府大東市八冬木尚子V）

○

皆様お元気ですか？ 先日渋谷竜彦氏の確か芸術生活だったと思いますが、キンゼイ研究所の世界各国からの性風俗資料の中に、奇譚クラブが蒐められている旨読んで大いに感激した次第です。白表紙以前からの愛読者で、昭和27・28年頃の、あの分厚い色刷りの時代や数年前の増大号の旧号を見るたびに、現在の奇クは何だか虐げられているようで残念でなりません。又、最近では女性の責めや浣腸切腹などといった代物が多くてあの嶽収一氏や三根耕二氏などの少年責め、稚児責めの復活が望まれてなりません。先年、男責めの写真頒布は希望者が多いので云々との社告を見た事がありますが、毛深い類人猿だか何だか判らない男責めなど、サッパリ感興が湧きません。世の多くの文学作品に登場する如く眉目秀麗なる美少年を責めてこそ醍醐味もあるうというもの、児童福祉法とやらを気になさるのなら、絹川文代嬢らを男装せしめて、縛ってみたら、又違った味わいも出ることでありましょ

〔最新版分譲品〕

（解説は旧号に出ています。分譲中ですから打ち切りにならないうちに求め下さい。）

乳房しほり

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

鼻責と緊縛

略号

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

木馬責三態

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

椅子責の果

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

血紅切腹

略号

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

双胸の縛り

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

動感海老責

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

色禪開股縛

略号

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

う。男、女のサド・マゾと違って美少年責めには第三の性的なムードが漂うものです。ゼヒ勇氣をもつて試みられんことを希うものです。先年、愚作で尊い誌面を穢したことがあります。又、駄作を試みています。それにロープマジックに些か凝っています。美少年を丸裸の儘ロープでグルグル巻きに縛り上げ、四周を布で覆ってから銃声一発、美少年は美事に縄脱けを果し衣服を纏って客席から現れる、だが、或る時そのショウは失敗に終る、犯人は誰か？ といった風なものです。それから、私のこの嗜虐の開眼の源となった嶽収一先生、三根耕二先生、魔園吉年先生の消息ご存知の方、又、ご本人からいろいろご教示頂ければ慮外の幸せと存ずる次第です。同好の士諸兄姉、前述三先生の交信を切望している次第です。よろしく。(大阪市八佐渡健児)

現れる、だが、或る時そのショウ
は失敗に終る、犯人は誰か？ と
いった風なものです。それから、
私のこの嗜虐の開眼の源となった
嶽収一先生、三根耕二先生、魔園
吉年先生の消息ご存知の方、又、
ご本人からいろいろご教示頂けれ
ば慮外の幸せと存ずる次第です。
同好の士諸兄姉、前述三先生の交
信を切望している次第です。よろ
しく。(大阪市八佐渡健児▽)

種々制約がある中で、毎号定期発行に努力しておられる編集各位に敬意を表します。嵐は必ず過ぎ去ります。その日まで、我々もじっと待ちましよう。たとえ一時内容に迫力がなくても守り立ててゆきましよう。六月号も前川、森田両氏が不参で、いささか淋しい思いをしています。佐出様の「十三人の死刑囚」の美女達の血汐の香でいやされています。次号はい

新宮明夫氏提供

「処刑」と「生首」写真

絞首刑

大手札三枚一組 三〇〇円
略号 (こけ)

磔

大手札三枚一組 三〇〇円
略号 (はみ)

生首の晒

大手札三枚一組 三〇〇円
略号 (さら)

晒台の生首

大手札三枚一組 三〇〇円
略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 三〇〇円
略号 (のき)

よいよ「大血戦」の由、今からその血みどろな無惨美を期待してやみません。スタイルもビキニありふんどしありとの由で胸をふくらませています。私はどちらかといえど日本趣味なので、此の点、佐出様とは異なっています。佐出様の美女の大量殺人ぶりは到底私が及ぶところではなく、その迫力に圧倒されて、自分のイメージがいかに小さなものであるかを思い知らされています。日本風でいえば、「大奥裸女血斗」的なものの方が迫力が強く、私のような単なる娘と芸妓とのふんどし一つで果し合いといったものは、貧弱極まるものといわざるを得ません。それで、いささか私の国粹的な傾向を入れて、日本女性と西洋女の多数が演ずる裸女血斗模様を投稿しておりますが、お気に入れば幸いです。勿論日本娘達はふんどし一つ、それに日本髪姿です。西洋女の方はビキニ又はふんどし姿とっています。そして紅毛碧眼、量感溢るる身体

まされて行きます。そして最後に日本側が勝関をあげるわけです。そして私は「大奥裸女血斗」やその他のふんどし女の血斗模様の絵画化を切望しています。修羅場はすでに裸女達のふんどし一つの屍が累々と横たわり、その屍をふみこえてわたり合う裸女達の姿を描いた無惨絵模様です。同好の方の賛同が多ければ代理部分譲品の中へ是非加えて下さい。(女斗彦)

津田亜紀子様。貴嬢様の御望に御応えして、常に変わらぬ誠意を以って、御奉仕させて頂きたいと心から願っております。奴隷めで御座居ます。女王様が此の奴隷めの現在の社会的生活を乱さずに御飼育下さるので御座いましたならば、貴嬢様の如何様なる御命令でも、たとえそれが如何に苦痛であり耐え難い恥しめ御座いますしても心から喜びに思っています。御仕え致します。貴嬢様の御望みで御座居ます。ならば人間トイレは勿論御望のまま、制服のゴムパンティ着用致し手足も紫色に変る程がん字がらめにくくり上げられ仰向けに床の上に横たえられたまま女王様の御靴で踏みしめられて下さるならば、これに過ぎた喜びは御座います。

ん。又、貴嬢様の為にゴム衣をつけゴムの靴をつけ、女王様のバンドでつくったくつわをつけて馬にもなりましよう。又、手足をくくって天井から吊し靴ばきのままでブランコ遊びなどなさっては如何で御座います。その他御縄で縛って戴いてゴム合羽ですっぽり包んで人間椅子にでも又、女王様の夜のベッドにも御自由に御使用賜れば幸甚に存じます。ゴムの制服ゴムの縛り、ゴムの猿ぐつわでネクタール漬に、水責めに、又ゴムの鞭でと御好きな様に御使用下さい。トイレばかりでなく女王様の生理帯の代りの御用でも御勤め致します。貴女様の御望みの万分の一でも実現出来て御喜び下さるならば、これに過る喜びは御座いません。御親書による御命令を御待ち申し上げております。(名古屋八佐度次郎)

先日久しぶりに六月号拝見致しました。一気に読んでしまいました。が、グラビア読物共何か今一歩という様な気がするの私だけでしょうか。でも、浣腸に関する記事が大分ふえた様ですが、私共ファンにとっては大変うれしい事です。これからもしどし取上げて

下さる様おねがい申し上げます。
私も妻と色々プレイをやってみますが、仲々思うようには行きません。都内にお住いのご夫妻の方と一緒にプレイして下さる方ございましたら、ご連絡下さい。男の方だけでもかまいません。私はS、妻はMです。住所は編集部に連絡して下さい。色々勝手な事ばかり申しましたが、われわれ読者のためにも編集部の方々の健康をおいのり致します。(横浜市八和田生一、和田文子)

○ 昨年の夏結婚して、永年の念願であった女体浣腸の夢を実現することができました。初めのうちは妻が恥かしがって浣腸されるのを嫌い、私が無理やりに浣腸するという状態で、はげしい抵抗には手をやきましたが、それが又、私の楽しみの一つでもありました。ところが、約半年経ったこの頃ではむしろ妻の方が積極的になり、いろいろ新しい器具を準備したり、変ったポーズを考え出すという状態で浣腸のもつ恐るべき魅力には私も驚かすにはいられません。最近では単に浣腸するだけではなく「旅に出た若妻が腹痛をおこし病院で思いがけない浣腸を施こされ

る……」「暴力団に潜入した婦人警官が正体を見破られて浣腸責めの拷問を受ける……」といったようなストーリーを作って二人で熱演(?)しています。妻の希望によつてセルフタイマーを使って写真を取り二人の浣腸アルバムを作っています。最近ではかなり腕が上つて来たといふ自負しています。読者の中で女体浣腸写真をお持ちの方、又新しい浣腸責めのアイデアをお持ちの方、私の写真と交換いたしませんか。(千葉市朝日ヶ丘町八今井敏)

○ 「奇ク」の最近の充実振りはまことに素晴らしいです。『花と蛇』他の一連の作品は、私にとつて夢の様な美しく感じがられます。扱て、私は三十八才になるMとフエチの傾向のある者ですが、過去二年程ある御婦人に奉仕致しておりました。然し半年程前に地方に転居されたため、現在主人となる方がありません。その方に知れると罰を受けねばなりません。これも覚悟で、御同好の方に御呼びかけして仕えさせて頂きたいと思つて投書したわけであり。私は、肉体的な責め(鞭打ち等)よりも精神的な責めを求めています。

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフォートの決定版、未発表の秘蔵写真

A5判感光紙焼付にて分譲していましたが、未だに御注文や照会が参つておりましたので、ここに再び印画紙焼付として再分譲いたします。(内容は以前分譲のものと同じです)

第一集 逆エビ吊り

略号(りつ1)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

第二集 逆胴吊り

略号(りつ2)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

す。女性の前で男性として恥ずかしいことをさせられたり、掃除洗濯等も致した事があります。御主人一人だけでなく、その御友達と御二人の前でさせられた事もありました。私が下着類に対するフェチストであるため、それ等に依る責めを受けた事もありました。誌上では思ふ事が書けません。話だけでもして見ようという方がありましたら、東京神田郵便局止にて御手紙下さい。日時御指定下さい。ば幸いです。勝手ですが、ねつとりました中年の方なら御話も合うと存じます。(東京八北川正一)

○ 七月号一気に拝読しました。最近の数カ月号に比べて一段の充実ぶり感激です。今月は多分にM的のものをのせて頂き、編集部の方に

々の御配慮と御苦労に対し厚くお礼申し上げます。Mものとして、「女子寮の押え込み」「マゾヒスチック画廊」「強精飲食直接採集法」「ラ・ムール・デスクラヴァー」「ジュ」はいずれも興味深く拝見しました。「マゾヒスチック画廊」の春川ナオミ画伯の「巨臀に潰された顔」と「人間トイレ」に対する筆者芳野氏の御感想、全く小生と一致で、非常にうれしく又力強く思いました。「女子寮の押え込み」は女性対女性のプレイだけに少々実感が薄い感があります。が、筆者の「私」が絹子に最後のとどめをされる場面の描写一七二頁「絹子はそういうと……むせかえるような彼女の体臭が、いやという程せまって来ます」には大いにエキサイトさせられました。そ

【代理部新版分譲品一覧】

全裸脚拳 姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ 縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸 縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺褌の変形 姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女 賊 捕 縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女 賊 処 刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛 姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺褌 (正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺褌 (背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女 (正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女 (背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲褌を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

していつもの癖で、この『私』に自分をおきかえ、絹子のパンティ一枚のお尻の下に顔を敷き潰されその重圧に苦しみ若い乙女のお尻と股の強烈な臭気をいやという程嗅がされ、気も遠くなるような自分の姿を想像しひとり悦にいます。それにつけても、この一文の筆者、高木紀久枝様、あなたが絹子になさった「最後のとどめ」なるものを、女性にはなく

て男性にやってみたいとは思われませんか。女性にとって、同性を征服するより、男性の顔をお尻の下に征服する方がずっと快感も強いのではないのでしょうか。もしかええられる機会に恵まれるなら、小生はよろこんで、貴女のお尻の下に敷かれに参ります。貴女の偉大なるお尻の下に顔を敷かれ、息もとまりそうに苦しめられ、いやという程、くさい目に合わされた

い。これが、小生多年の夢なのです。この欄にてのよびかけ頂ければこの上もない幸いです。(尻敷かれ生)

貴社には益々御発展の御事大変嬉しく存じます。陳者悪書追放の何かと問題の多い昨今編集部の皆々様の並々ならぬ御努力の程衷心あつく感謝の次第に御座います。最近知人に勧められて計らずも貴

誌を知り口筆ではいい現せない程毎月末が一日千秋の思いで御座います。貴誌のモデルを御求めになつていただけるのを知りました。就きましては早速申込み致し度く存じております。社会的地位も又能力も持たない私ですが、女装のモデルとして御協力させて頂き度く存じます。唯一見女性的な所があるのみに御座います(年令二十六才)身長(一米六三釐)(体重五

「今月の新版分譲品」

オシメ・フオート

・シリーズ

おしめ着用

連続写真

第一集

前開きゴム製カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円
略号(しま)

第二集

前開き布製防水カバー

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円
略号(しな)

オシメ・マニヤの方々の強い要望によって、ここに大塚啓子嬢を煩して、連続写真を新しく撮影しました。一糸まとわぬ全裸となった彼女が、自らオシメを整え、中腰になって当てつつオシメ・カバーをつけてゆく有様を刻明に捉えました。尚、カバーの間からオシメがはみ出ている状態も、オシメだけ前に出てた状態も、仰向けになってオシメを当てられている状態も加えました。マニヤの方々のお申込みが多いようでしたら、更に御希望のアイデアによって、次々に撮影したいと思ひます。

二疋) (和洋装どちらでも結構です) 右の趣味に対し何の持ち合せもなく又準備も御座いません。全くの素人です、勝手ながらも失礼ですが、右は私があく迄も貴誌に対し御協力御奉仕のみに御座います。御詮衡下さいませ、もし御社の方でモデルに対しても条件とか用意等あればおきかせ下されば大変幸甚に存じます。(大阪市八南部生)

東京近くの或る県の話。その県は何んでも昔、特高の苛烈さと拷問のむごたらしさで全国でも一、二を誇る(?) 札付きの県だったと言う。ところが御時世で特高も無くなり拷問も出来なく無ったがその代りの吐け口と言うわけでもあるまいが、昨今ではその県の児童審議会から貴誌あたりに、頻りに勧告を發して出版物の「肅正」を図っていると言う。私は以上の戦前戦後の二つの事柄が事実かどうかは知らないが、次に、もう少し遠い県で今度の悪書追放のろしをあげた事で有名になった県の話。最近では、その県の床屋さんの組合が宣言を發して、中学生の長髪お断わり、丸刈りにする事になった由。理事長の言によると

原画そのままの鮮烈なニアンス

四馬孝画 「凄絶、妊婦の切腹」

A5判感光紙極鮮明焼付 四枚一組 五〇〇円、略号「せつ4」

「妊婦と切腹」全く濃艶きわまりないエロチシズムと凄絶なサジズムとが、渾然一体となって迫ってくる素晴らしい重量感。原画そのままの迫力が、ぐっと胸にくる得難い傑作。発表以来申込殺到! この機会を逃すと、千載に悔を残します。分譲中どうぞぞー。

「坊主頭なら制帽をかぶり規律も正しくなり非行も少くなるでしょう」との事。まことに有り難き俸せ、恐懼感激の至りに堪えない次第。(危険) 思想を弾圧し、(不良) 出版物を肅正し、悪書を追放し、少年を丸刈りにすれば世の中が良くなるだろう、と言う一貫した権力思想と独善主義―お国ぶり県民気質、地金と言うものは争えないものと感佩する次第です。

(東京八中谷生)

いわゆる的外れの悪書追放とかによって、数々の悪条件の下に於かれながらも刊行を続けておられる編集部の方々に感謝しています。五月号には私の拙い絵を載せていただいて恐縮です。近頃グラビアに「女性切腹」ものが見られなくなり、さし絵にもそれらしい

ものが影をひそめてきたように見られますが、淋しい事です。これは、いわゆる「内容刷新」と関係ある事なのかもしれませんが、どうにもやりきれない事です。マゾやサド傾向のものなら、巷にあふれているので、どこでもお目にかかれるのですが、「切腹」特に「女性の切腹」に関するものは、御誌を除いては他に無いのですから、マニアにとっては、一葉のさし絵でも貴重なものなんです。「切腹」に愛着を持つ人々には、特に恥かしがりやが多いので、余程の人でない限り投稿などしないですが、陰ながら御誌に期待している人々の実数は予想外に多いと思うのです。血紅を使用する事に障りがあるのでしたら、血紅を使用しなくてもよいのです。ぜひグラビアに哀切きわまりない美しい女腹

切の写真をのせて下さい。きっと多くの人々が、それを待ち望んでいるにちがいありません。御賢察をおねがいしたいと思います。
(福島県喜多方市八飯森潔▽)

○ 予約しておきました臨時増刊号「花と蛇」特集号、中旬完成ということでしたので、早くとも十五日頃だと思っておりましたのに、数日も早く手元に届きびっくりしました。私の買い洩して読むことが出来なかった最初の部分から一気に読了、大いに感激しました。殊に多量の口絵と写真を入れて下さったことは嬉しいでした。手にしたときのずしりとした重量感、私の心をとらえて放しませんでした。連載中愛読措くあたわなかつた「花と蛇」が一冊の雑誌が、私の手中にあることは、大切なコレクションとして、いついつまでも私の愛玩物となることでしょう。
(和歌山市八戸田一郎▽)

○ 創刊以来ずっと愛読を続け、予約申込みもしておいた私でしたが、37年6月に休刊の通知を受けたま

ま、廃刊になったものと思い込みあきらめておりました。それが先日、ふと書店で七月号を見つけ、拝見したところ、私の知らない間に満二年間ずっと発行されていることを知り、驚くと共に自分の迂闊さ加減に恥じりました。それにしても、予約購読者には、続刊していること御連絡下さってもいいのではないのでしょうか。既刊号在庫一覧表を見ると、私の買い洩らした37年、38年の雑誌に売切れのものが沢山あることは残念でした。とにかく、在庫している分だけ全部求めたいと思いますので、すぐお送り下さい。尚、今後引続いて毎月お送り下されたく存じます。
(奈良八高円生▽)

○ 「文献」に梨花、東浦、遠藤の皆様のメンスバンド着用写真が掲載されておりましたが、東浦さんの場合、後向きで迫力がなかったのが残念。遠藤さんの場合は黒のアンネパンティだがかんじんの部分がはつきりみえずおしい。遠藤さんのアンネ着用写真は多いようだが、どうもまだすっきりしたのが

次号(九月号)は七月二十五日発売いたします。

みあたらない。顔の表情がはつきりでないようだ。だが、梨花さんのメンスバンド着用の写真は非常にスバラしい。私がみたメンスバンド着用写真の中では最高である。表情といい動きがある姿など感慨無量である。文献特集号のみならずKK誌にもドシドシメスバンド着用写真を発表してくださるようお願いいたします。なおモデルさんには、新井、五月、梨花の皆さまの写真を期待しております。マニヤとして早く一冊のスクラップブックを完成したいと思しますので、どうかお願い致します。なおバンド着用の写真のモデルさんの姿勢ですが参考として次に掲げておきます。一、吊るし上げられて麻のロープで身動きできなく縛っているが自然とメンスバンドの方に目がいくという場面。二、メンスバンドを着用したまま立ち縛り(真正面と下からの二場面)三、黒のアンネパンティを着用したままのひざ立ち縛りは二の場合より少なく……(これは特に五月さんにモデルをお願いしたい。)以上三つの項についてなるべくこれに近いものが一日も早くKK誌に掲載されることを心から待ち望んでおります。(神戸

市葺合区南本町八S・K生▽)

○ 編集部及び読者の皆様御健勝の程御同慶に存じます。私事過去十余年来の「奇ク」愛好者の一人です。ことに、メトミ研究に就いて同志から色々資料を得て心から感謝と賞讃を惜しまいものです、思えば「奇ク」を通じ女斗研究家の京都A氏を知るに及び益々私のメトミへの執着と豊満巨大な女体への憧れは日を追って強くなる一方です。今後もこの道に精進と探究を続けてゆき度いと思つて居ります。古い本誌二十七年八月号に「女体相撲艶笑史」としていささかの拙稿を御披露して以来、二、三の投稿に止りつい現在に至りましたが、突然乍ら本通信の頁をかりて御便り旁々あいさつ代りにペンをとった次第です。今後は全国の同志諸兄との文通を切望して居ります。是非左記へ御便りをよせ下さい御待ちして居ります。(神戸市長田区房王寺町二の九八増田トシロー▽)

○ 締切間際に到着しました多数の読者通信並に縛られ映画速報等誌面の都合により掲載洩れとなりましたことをお断りしておきます。

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」
○自分はこのような人に言えぬ変わった趣向を持っているという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのように奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」
○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちします。御自分の生活のこと、社会一

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

三、体験

般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

「私はこんな変わった体験をしました」
○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄く体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変わった体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。
◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の「特集号」に一括掲載したいと思えます。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。
◎締切日、毎月三十日

△（映画、雑誌）通信△

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。
◎尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思ひ出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の榮☆

一月分（1冊）三〇〇円△送共△
三月分（3冊）九〇〇円△送共△
半年分（6冊）一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

八月号

（第十八巻第九号）
（通刊第一九三号）

昭和三十九年七月二十日 印刷
昭和三十九年八月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月二日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。